
装着変身ブラッディクロス！

内海むま

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

装着変身ブラッディクロス！

【Nコード】

N6592U

【作者名】

内海むま

【あらすじ】

妖怪、魔物、悪鬼。その中でも理性と知性を備えた怪物たちを妖魔と呼ぶ。

そしてこの魑魅魍魎はびこる世界に、人と妖魔との調和を図るべく作られた街がある。人工的に作られた島、天壤島第五スフィア市。だがこの街に今、大きな危機が迫っていた。

気に入らない悪党をぶっ飛ばし、ついでに街やら人やら妖魔やらその他もろもろ守るため。特撮好きの兄を持った吸血鬼の女子高生は、今日も変身する。

プロローグ

ぐるぐるぐる。

白い糸が何重にも絡まってゆく。

ぐるぐるぐるぐるぐるぐる。

一匹の蜘蛛が、網にかかった獲物に糸をぐるぐると巻きつけている。

獲物は体を必死によじらせ逃れようと抵抗するが、毒にやられ弱った体で、逃げられないようにする為のこの糸を前にして、解放などされるはずもない。

ただ空しく絡めとられてゆく。

小さな女の子が夜に一人で出歩くのは危ない、というのは万国共通のことだ。

たとえば治安がいいことに定評があるようなこの国でも変わりはない。

ある雨の日の夜。

6歳になったばかりのその少女は、両親も寝静まった頃に家を出た。

お気に入りの傘を持って、大好きな黄色の長靴を履いて。

ちょっとした好奇心の芽生えか。

魔が差したのだと言ってもいい。

彼女は両親から、夜は危ないと教えられてきた。

それにもかかわらず、すぐその自動販売機に行くだけだから、きつと大丈夫、と。

何の根拠もない自信と共に、幼い冒険心を発揮してしまったのである。

雨は小降りで、今にも止みそうだった。

どれだけその端にあらうと、ここは、かつては治安大国とも呼ばれた日本。

よほど治安の悪い地域でもない限り、ほんの少しの外出程度なら、彼女はちよつとスリルを感じるだけで、無事に帰ることができただろう。

そして、冒険心が満たされたことへの幸福感と達成感を得て、外出に気づいた両親にこっぴどく叱られ、ちよつぱり後悔する。

そんな幼き日の、青春の一ページとして刻まれるべき出来事になるはずだった。

だが、そうはならなかった。

非常に残念なことに、偶然の神様は最悪なタイミングを心得ているのだから。

自販機で無事にジュースを買った少女は高揚感を覚えながらふと考えた。

考えてしまった。

このまままっすぐ帰ってもつまらないから、ほんの少し遠回りをしよう、と。

一つの欲が簡単に満たされたことで、さらなる欲が生まれたのである。

遠回りと言っても、本当に、ほんの少しだけのつもりだった。

危ない目になんか合うはずないと、軽い気持ちで、幼い考えで、タカをくくって、少女は歩きだした。

新たな欲を満たしながら、彼女はさらなる、不思議な高揚感に包まれる。

良い匂いがした。雨のにおいとは別の。

その匂いがする方へ、彼女は歩きだした。

今の自分なら何でもできそうだ。

そんな錯覚さえ覚えて。

自信が甘い匂いに誘われてふらふらと飛んできた蝶であることも知らずに。

雨はやんでいた。

彼女は傘を閉じ、狭い裏路地へと入った。

長靴がぴちゃぴちゃと水たまりを撥ねる音が心地いい。

あちこちに蜘蛛の巣が張ってあったが、今の彼女には気にならなかった。

蜘蛛なんかこわくない、そう思いながら、閉じた傘を剣のように振り回し、通るのに邪魔なクモの巣を次々壊す。

それがどんな悲劇につながるとも知らずに。

もしここで、お気に入りの傘が汚れるのが嫌だという、至極当然ともいえるような思いが抱けていたら、彼女が迎える運命は、また違ったものになっていただろう。

しかし、そうはならなかった。

ならなかったからこそ、蜘蛛はその腕に獲物を抱いているのだ。

「くふ、ふふふふ」

糸に巻かれ、毒に回られ、うすれゆく意識の中、気づけば蜘蛛の顔が目の前にあった。

恐ろしい八つの目と、おぞましい牙。

そして漆黒の闇を思わせる黒い髪。

裏路地の中。

ひととき大きな巣を壊そうとした瞬間、その巣を構成していた糸が、お気に入りのお気に入りの傘に絡み付いた。

本来、この街に住んでいる人間ならば、その瞬間に気づくべきだった。

しかし、蜘蛛の発した甘い匂いがそうさせたのか、一種の陶醉状態に置かれていた少女にはその危機感が足りていなかったのだ。

お気に入りのお気に入りの傘を取り返そうと両手で持って振りほどこうとするも、糸はどんどん巻きついてくるばかり。

傘から腕に糸が達したところで、誰かの気配を感じ、振り返った。セーラー服を着た長髪の少女が、彼女のすぐ後ろにいた。

助けを求めようと口を開くと、相手の少女は目を全て開き、二やりと笑みを浮かべた。

八つの目。口元からのぞく二本の牙。

小さな少女は相手が人間ではないことを悟った。

恐怖で動けない少女が、悲鳴を上げる前に、セーラー服の少女はその牙で小さな少女の首筋に噛みついた。

噛んで少し間を置き、牙を離し、彼女は獲物を巻き続けた。

久しぶりの獲物だ。

しかも肉のやわらかそうな少女であった。

逃げられないよう慎重に、毒と糸で確実に動きを止めた後で、家に帰ってゆっくり、生きたまま味わおうと心に決めた。

こんな御馳走、この街では今度いつありつけるか解ったものではないのだ。

「……て……」

ふと、獲物が蚊の鳴くような声を出していることに気づいた。

毒で殺してしまわないように、と少なめに打ちこんだせいか、まだ意識があるようだ。

蜘蛛は笑みを浮かべつつ、顔を近づけ、獲物の最後の声を楽しむことにした。

「たす……けて……」

虫の息で必死に絞り出したような言葉。

それを聞いて、蜘蛛の大きな口がいびつに、かつ楽しそうに歪む。彼女の体に云いようもない快感が駆け抜けた。

圧倒的弱者が、必死の思いで繰り出した最後の抵抗。嗜虐心が、たまらなくそそられる。

——嗚呼、今ここで食べてしまいたい！意識があるまま、自分が死んでゆくを感じさせて、狂うことも許さず、ゆっくり、ゆっくりとその体を啜りたい。

——いったいどんな顔をして食べられてくれるんだろう！どんな味がするんだろう！

「——わかった、今助ける」

衝撃で、光悦に浸っていた彼女の時間が一瞬だけ止まる。。
自らの欲望を遮る声が、確かに、はっきりと聞こえた。

雲に隠れていた月が顔を出し、裏路地を照らす。

蜘蛛の少女は八つの目を凝らした。

前方、声の主。路地の出口から紅いシルエットが歩いてくる。

偶然の神様は、最高のタイミングをも心得ているのだ。

最悪と最高は紙一重。誰かにとっては最悪でも、他の誰かにとっては最高の機会となりうる。

「名往中学二年、鬼雲絵里華だな。現行犯だ、あんたを封印する」

そう言って、声の主は一気に駆けだした。

——なんで、名前を!?

化け蜘蛛の少女、鬼雲は突然のことに戸惑いながらも獲物を左腕に抱える。

「……封印? なんなのよ、お前は!」

そう言って、右手を前に突き出し粘性の糸を向かってくる影に何本も飛ばす。

左腕には獲物を抱えたまま、手の人差し指を立て、背後、裏路地を抜けた先、道路を挟んだ向かいにあるマンションに向けて別の糸を飛ばす。

ただ逃げるため、ではない。

名前が知られている。顔も見られた。

このまま逃走を図っても無駄なことはわかっている。

問題なのは場所だ、この場で迎え撃ったとして、相手に仲間がいれば挟撃にあうかもしれない。

誘い込む必要がある。もっと広い場所、自分の領域へ――。

「何って？」

飛んでくる糸をものともせず、影は走りながら右こぶしに力をこめている。

――速い。

鬼雲は焦る。

糸で絡め取って動きを鈍らせる筈が、まるで通用していない。

「この街の」

鬼雲は左手から伸ばしマンションの壁面にくっつけた糸を、勢いよく戻し、飛ぶ。

とにかく相手に距離を詰められる訳にはいかない。

接近戦は、獲物を抱えている身ではどう考えても不利だからだ。だが影はさらに加速し、跳躍し、瞬時に迫いすがる。

その次の瞬間には、鬼雲絵里華の顔面には強烈な右フックが叩き込まれていた。

「正義のヒーローよ」

そう言っただけで、その紅いヒーローは、空中で抱きとめた糸に巻かれた少女を両の手に、着地した。

鬼雲絵里華の姿は消え失せ、代わりに赤い十字架が、カチャリと音を立てて地面に落ちた。

第一話 人と妖魔の学び舎は今日も平和。

「ねえ、聞いた？ 昨日も出たんだって」

朝登校してくるなり、自分の席へ鞆を置きもせず、に駆けてきた幼馴染の佐野美穂子は、少々興奮気味気味にそう告げた。

「……何が？」

少年、黒田修二は目を瞬かせながら答える。

「だから、ヒーローよ！ 悪の妖怪と戦うヒーロー！」

バシンバシンと、美穂子は修二の机に両手を何度も振り下した。

「あ！聞いた、聞いたよ。なんか人を食おうとしてた馬鹿を捕まえたんだよね？」

修二ではなくその隣の席から、顔を水につけながら喋っているような、ブクブクとした音響の入り混じった、若干聞き取り辛い声が聞こえてくる。

「そう！ そうなのよバブルズ君！ 人知れず戦う謎のヒーロー、かっこいいよね！」

美穂子は満面の笑みを浮かべ、今度はバブルズの机をバシバシと叩いた。

その度に、彼の表皮がゆらゆら揺れた。

彼らのクラスメイト、バブリー・バブルズは、一目でそうだとわ

かるくらいに人間ではない。

その体は人間の姿を模^{かたど}ってはいるものの、構成しているのはゲル状、水色の物体で、顔にはコミカルな丸っこい目と口しかない。

誰がどう見たって化け物だが、その漫画的、記号的な表情は、見る人を和ませる力があるのか、修二も美穂子も、入学式で最初に会ったときは驚いたが、今ではもう慣れっこだった。

種族はスライム。

本来は低級の魔物のはずだが、一体何がどうなったのか、人並みの知能と自我を持っている。

理由は本人にもわからないらしい。

ある意味、奇跡のような存在であった。

元がスライムであるため、性別は存在しないが、男の恰好をするのが好きならしく、制服として紺のブレザーとスラックスを纏っている。

ゲル状の体の上に服というのが、何ともシュールで、初対面相手には笑いをよく誘った。

「でも警察と協力してるんだろ？ やっぱり警察官のパワードスーツかなんかじゃないの？」

美穂子の興奮に、冷静に水を差す修二。

「もー！ またそうやって夢のないこと言うー！！」

美穂子是不満げに頬を膨らませ、修二の机を今度は片手で握りこぶしを作ってガシガシと叩いた。

「だって謎のヒーローよりそう考えた方が現実的じゃないか。それに人間が妖魔を圧倒できる力を手に入れられるようになったんなら、

その方が夢があると思わないか？」

「思わないもん！ 修二ったら夢のわからない男！！」

「でも、本当に警官だったら公表するんじゃないかなあ？」

ブクブク、と美穂子だけでなくバブルズまでもが修二に反論する。

「『超優秀な装甲服があるから警官の数は少なくなっても質は落ちてませんよ安心して下さい』的な、アピールをしようんだ」

「思うに、今は実験段階なんじゃないかな？ そのうち警察から発表あると思うよ」

「ただの実験でそう何度も妖魔と戦闘させるのかなあ？ ヒーローが現れたのって、結構前だよな」

「たった二、三週間前だぜ？ 十分あり得る期間だと思うけど……」

「うーん、そうかなあ」

バブルズは困ったような表情を記号的に浮かべて、その両腕を組んだ。

「もーいいよバブルズ君。こんな夢のない男！ いつかピンチになった時ヒーローが助けに来なくても知らないからね！」

言いながら、美穂子は首を伸ばしてバブルズの後ろの席へ向けて声をかけた。

「ねー、霧江ちゃんもそう思うわよねー！」

なぜ美穂子が、普段会話もしないその少女に声をかけたのかと言えば、たまたま席が近かったというだけの理由だろうか。

今朝、誰よりも早く学校に登校し、かと思えば机に突っ伏して寝始めた少女がいた。

名前は、鬼灯霧江。

バブルズのすぐ後ろの席で眠っていた彼女は、ムクリとその顔をあげる。

「……んー？」

その少女、席は近いが、修二とも普段滅多に会話をしない。

長い黒髪が特徴的な彼女は、クラスの中でも特に謎の多い少女だった。

というのも、よく消えるからだ。

授業中、ふと斜め後ろを見ると、いつの間にか席についていたはずの彼女がいなくなっている、かと思えば、いつの間にか戻ってきていて席についているということがよくある。

それは授業中に限らず、たまにクラスメイトが彼女を遊びに誘うことがあるのだが、そういう時でもよく消えるらしい。

一度だけ理由を聞いてみたことがあったが、彼女は曖昧な笑顔を返すだけで一切答えてはくれなかった。

「ってうわっ！ 大丈夫！？」

慌てて、美穂子は霧江の側に駆け寄った。

修二とバブルズが振り返ると、彼女の机と顔はなぜか血まみれになっている。

「……ああ、ごめん。棺桶以外で寝ると時々こうなるのよ……」

「た、大変ね吸血鬼って……」

血の原因は血涙らしく、彼女の両目から両頬にかけて血の筋が出来ている。

霧江はハンカチを探しているのか、眠たそうな目をしながら、ブ

レザールのポケットに手を突っ込んでまさぐっている。

「……あれ、忘れたかな」

と、彼女は首をかしげながら、それでも眠たそうな目で、ちょっと困ったような声をあげた。

「鬼灯さん、俺の使いなよ」

修二はポケットからハンカチを出し、手を伸ばして霧江に差し出した。

「……いいの？ 相当汚れると思うけど……」

受け取らず、首をかしげる霧江。

そう言えば血って取れにくいよな、という考えが頭をよぎった修二だったが、たいして大事なものでもないし、男が一度出したものをひっこめるわけにはいかない、と、席を立て強引に霧江に受け取らせた。

「あ、ありがとう……」

霧江は目をぱちくりとさせながら、そのハンカチでゆっくりと顔を拭き始めた。

「うわー、夢のない男がなんかいいことしてるわー」

「……悪かったな」

呆れ顔で言う美穂子に、修二はむっとして自分の席に戻る。

「あー、もう冗談だって。怒らないでよ」

「どうせ俺は夢のない男だよ……」

慌てて修二のもとに駆け寄る美穂子と、むくれる修二。

そうこうしているうちに、担任の教諭が教室の扉を開けた。

「おーし、席につけー、HR始めるぞー」

担任の声に、クラス内、思い思いの場所にいた生徒たちが自分の席に戻る。

このクラスの生徒たちは、半分は人間だが、もう半分はそうではない生き物だった。

バブルズのような見た目からしてあからさまな者は少ないにせよ、それぞれ猫のような耳がついていたり、角が生えていたり、目が一つしかなかったり、明らかに人間ではない生徒が大勢いた。

『白黒はつきりさせるな。両方持て!』

それが、この太極館学院のスローガンである。

ここはこの第五スフィア内に存在する、人妖共学校の中でも、得に妖魔の多い学校だった。

第二話 街の守人は夜を駆ける。

「……えっなにこれ」

目を覚ました修二が開口一番口にしたのはそんな言葉だった。

「……うごけないし」

見下ろすと、つま先の五メートルほど下に地面がある。

慌てて、修二はキョロキョロ首を動かし、自分の状況を確認した。

彼は真夜中の公園で、背の高い金属の柱に縛り付けられていた。

「おいおいおい、なんだよ！どうなってやがる！」

寝ぼけていた頭が冴え、自分の置かれた状況の異常さを理解し、

修二は必死に身をよじる。

しかし、駄目だった。

きつく縛られているため、ちよっと体を動かしたただけではどうにもならない。

いったい何でこうなったんだっけ、と修二は眠ってしまう前の記憶を必死に呼び覚ます。

（ええと確か……今日は部活で遅くなって、近道に路地を通って行ったら、変なおっさんに……）

「君、いい体しとるのお」

（そうそう、そう言われて呼び止められて……）

「って、ええっ!？」

目を見開く修二。

その視線の先には、奇妙な老人がいた。

白衣を着たその老人、頭は禿げ、両側面にわさわさした玉のような白髪が固まっている。

鼻は赤く、顔の輪郭はナスのようで、浮かべるその表情は下卑た笑い。

「ヒヒヒヒヒ」

その老人は、杖のようなものを持ち、修二を縛っている柱の周囲に、何か模様のようなものを書きはじめた。

「おい爺さん！何する気だ！俺を離せ！」

「ヒヒ、駄目じゃよ。お前さんはこれからイケニエになるんじゃない」

「生け贄だって……！？」

修二は眉を顰め、出来あがってゆく凶形を見る。

修二はその意味するところに、すぐさま気がついた。

「……！召喚陣か」

「おおー、優秀な学生じゃのー。その通り、これは魔法陣じゃよ。お前さんにはちよつとわしの実験の手伝いをしてもらおうと思っ
のー」

「ふざけんな離せ！条例違反じゃねえかそれ！何が悲しくて化け物の生け贄にされなきゃならねえんだ！」

このイカレた老人がやろうとしているのは召喚術だ。

修二は描かれた魔法陣からそう判断した。

召喚術とは精霊や幻獣を呼び出し、使役する術のことで、その代

償として召喚対象の好物を生け贄に捧げなければならない。

人間を生贄にしなければならぬ召喚獣は『禁種』と呼ばれ、この街ではその召喚は禁止されているはずだった。

暴れるように、激しく身をよじる修二。

しかし、やはり、全く身動きが取れない。

「無駄じゃよ。それに召喚されてすぐ食われる訳じゃない『禁種』でもないしの」

「なんだって？」

「言っただじやろう、実験じゃと」

そのうち、老人はすっかり陣を書き終えてしまっていた。

「さーて、それじゃ、実験を開始しようかの」

老人が杖を振りあげる。

修二は目をつむった。

今朝美穂子に言われた『いつかピンチになった時ヒーローが助けに来なくても知らないからね!』

という言葉が、頭の中で反響する。

(く……頼む!誰か……!)

必死に目を閉じ、修二は心の中で叫ぶように祈った。

(誰か……助けてくれ!!)

「わかった。今助ける」

突然の声に、修二は薄目を開ける。

「……来よったか」

老人は静かな、それでいて嬉しそうな声をあげた。

暗がりから、真っ赤な影がひとつ、歩いてくる。

それは、真っ赤なボディースーツに身を包んだ人間のようなだった。

全身にびったり張り付いたようなそのスーツは、装甲のついた頭、手足、胸部以外のラインを際立たせ、その影が少女だということを窺わせる。

フルフェイスタイプの下半分を切り取り、蝙蝠の羽をデフォルメしたような飾りが耳か角のように生えている、妙なデザインのヘルメット。

二つのふくらみを覆うのは、フェンシングの女性用チェストプロテクターのような、乳房の形に合わせて打ち出された金属製の胸当て。

両腕には左右対称の、真黒な籠手。

東洋的でも西洋的でもないそれは丸みを帯びたシャープなデザインで、右籠手の甲には白い十字がが嵌め込まれ、左籠手の甲には同じ位置に同じ形の窪みがある。

脚甲も籠手と同じような材質で作られていて、不思議と継ぎ目らしきものが見えず、一見すると革のロングブーツのようだ。

（まさか……あれが？）

修二は目を見開いた。

警察の特殊装甲には、どう見たって見えない。

何より、見ただけで少女であると判断できるその華奢な体躯は、仮に警察の人間だったとして、特殊装甲の装着者なんかには、まず選ばれないだろう。

「来たなブラッドガール！」

老人が、酷く嬉しそうな調子で、声を張り上げた。

「ドクター・エッグプラント！脱獄したばっかのくせにもう犯罪に走るなんて、随分ふざけた真似してくるじゃない」

怒気をはらんだその声は、少女だとは思えないほどに力強い。

声だけではない。堂々としたその足取り、風格。

警察がもつ厳格さとは、違う。

そう、それはまさに、正義のヒーローのような――。

「フン、ワシはのう……小娘。このワシが鬼灯のクソガキよりも優れていることを証明する、ただそのためだけ！」

エッグプラントは、杖を振り下し、術を起動させる。

「――！」

「それだけが今の望みなんじゃよ……！」

術式が、召喚陣が、真っ赤な光に輝く。

その光が自分を飲み込んでゆくのを感じながら、修二はその意識を手放した。



「装甲幻獣！^{アーマード}『ミノタウルス』！！」

咆哮。

修二が叫ぶ。

『装甲幻獣』
アーマード

装着者は非常に強力な力を得ることが出来る半面、自らの命を削ることになり、また強い意識を常に保っておかない限り、銀の柱に融合した幻獣に意識を乗っ取られ、暴走する危険を秘めている代物。

ただの学生であった黒田修二に、強い意識を常に保っておくなど出来るはずもなく、彼は既にミノタウルスに体に乗っ取られてしまっていた。

「さあやれ！ミノタウルス！奴を叩きつぶすのじゃ！」

「世話の焼ける爺さんね……正面からカチ会わないとわからないっての？」

ブラッドガールはその口元に笑みを浮かべた。

「いいわ。叩きつぶしてあげる」

姿勢を低く、一瞬だけ溜めて、引き絞られた弓のように、地面を滑るように、ブラッドガールは駆ける。

その速度は、凄まじく、10メートルはあったはずの距離が、あっという間もなく無になる。

一方で、ミノタウルスは大地に根を張るようにどっしりと構え、その右手を引き、向かってくるブラッドガールに向け正面から打ち込んだ。

激突する、両者の拳。

衝撃が周囲に走る。

「——っ！」

拳を打ち合わせたまま、立ち止まる両者。

ブラッドガールが歯を食いしほる。

自身のスピードを乗せたその一撃で、なお互角。

ならば威力が相殺され、鏢迫り合いになったこの状況。

押し負けるのはどちらか、明白。

「おおおおおおっ！」

彼女は叫ぶ。

叫んで、左拳を、そのミノタウルの巨大な右拳に打ち込む。

そうすることで隙を作り、鏢迫り合いになったこの状況を打破しようとしたのだ。

しかし、そうしてしまったことで、同じように左拳を振るったミノタウルの、その攻撃に対処が間に合わなかった。

「——あっ！！！」

ブラッドガールの、その小さな体躯が、赤いその拳に打ちすえられ、宙を舞う。

彼女は投げられたおもちゃのように、公園の地面を跳ね、転がった。

「プハハハハ！他愛もない！」

歯をむき出しにして笑うエッグプラント。

ブラッドガールは血の混じった唾液を吐き捨て、す、と立ちあが

る。

「なるほど、パワーは上等なようね……」

そのヘルメット、目を覆い隠すバイザーに、大きなヒビが入っていた。

大きく深呼吸し、再びミノタウルスを見据える。

その体に、打撃によるダメージは感じられなかった。

「なら……スピードで攪乱するまで！」

再び駆けだすブラッドガール。

今度は正面から打ち合わず、左側面に回り込む。

振り向くミノタウルス。しかし、彼女は既にその背後に回り込んでいる。

振り返りながら、ミノタウルスは腕を振りあげる。

しかし、その軌道には既に彼女の姿はない。

その後もブラッドガールはミノタウルスの上下左右前後あらゆる方面へ回り込み、攪乱する。

やがて、追い切れなくなったミノタウルスの足がもつれ、バランスを崩す。

「貰った！」

その顔面に、ブラッドガールは正拳突きを叩きこんだ。

しかし。

ギョロリと、その目が彼女を見据えた。

「――！」

ミノタウルスは踏みとどまったのだ。
その金属質の体に、生半可な威力の拳は通用しない。

その虚を突かれ、ブラッドガールの体は、ミノタウルスの巨大な右手に掴まれる。

「……………っ！ぐ……………！」

彼女の体を握りつぶさんと、ミノタウルスは力を込めた。
苦痛に、声を漏らすブラッドガール。

「フハハハハ！…！どうやらワシの勝ちのようじゃの！降参せいブラッドガール、貴様が死ねないのは知つとる。それともこのまま締め続けられて苦痛を味わいたいか？ん？」

再び歯をむき出しにして、狂ったように笑うエッグプラント。
しかし、一方のブラッドガールは歯を食いしばって、一言。

「――次は、汎用性よ」

《B u r n i n g f o r m》

ミノタウルスの握った手の内側より響く、曇ったような電子合成音声。

異変は、そのすぐ後に起きた。

「な、なんじゃとー！？」

博士の笑みが、焦りに変わる。
ごうごうと音を立て、ミノタウルスの手が燃え上がったのだ。

「グアアアアアッ！」

叫びと同時に、ブラッドガールの戒めが解かれる。

呻きながら必死に右手を地面にすりつけ、火を消そうとしている
ミノタウルスに向けて、

ブラッドガールはその両腕から巨大な炎を発生させ、放ち、その
巨体を炙った。

「いくら頑丈でも、これには耐えられないわよね？」

いつの間にか、左籠手の窪みに嵌め込まれていたその赤い十字架
を外し、ブラッドガールはまた別の十字架をセットする。

《Snow Lady form》

電子音の発声と共に、そのスーツのカラーが、赤から白へと変化
した。

彼女はその業火に身を焼かれ続けているミノタウルスに向かって、
右拳を握りしめる。

拳の周囲に、強力な冷気が纏わりついた。

「馬鹿な！そんな機能が！」

顎を落として驚愕するエッグプラント。

「や、やめろ！取り込んだ少年まで死ぬぞ！？」

エッグプラントは声を張り上げるが、彼女は無視して、駆ける。

「ちょっと痛いけど、我慢してね、黒田修二君！」

極限まで熱されたその巨体に、絶対零度の一撃を叩きこんだ。

「グ……オ……グオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！」

粉々に碎ける巨体。

それは、彼女の右籠手に嵌め込まれた白い十字架へ吸い込まれる。
やがて、白い十字架が赤く染まると、それは籠手から外れ、地面へ落ちた。

そして彼女は、吸いこまれなかった最後の一片、その少年の体を、優しく抱きとめた。



「……？」

修二は薄目を開ける。

なんだか、全身が痛い。

妙な夢を見ていたような気がした。

「起きた？」

やさしい声がかかる。

どこかで聞いたような声だった。

声がした方へ、顔を向ける。

そして、一瞬だけ、その顔を見て、

驚愕の表情を浮かべると、彼は再び意識を手放した。



翌朝、修二は病院のベッドで目を覚ました。

警察病院のようで、話を聞くと、何らかの事件に巻き込まれ怪我を負ったらしかった。

警察の人が話を聞きに来たが、彼は昨夜のことはほとんど覚えてはいなかった。

回復魔法がかけられ、怪我は一つも残っていなかったが、大事を取って今日一日は入院することになった。

「ふう……」

警察や看護婦が出てゆき、ようやく落ち着いて彼がベッドに身沈めると、ふと枕に何か違和感があった。

めくってみると、そこには綺麗に折りたたまれた、新品のハンカチが挟まっていた。

「これって……」

修二は息を漏らす。

それは昨日、彼が鬼灯霧江に貸したものと同じデザインだった。まるで新品のようにキレイになっているそれを手に取ると、中に

手紙が挟まっているのに気づいた。

そこには、こう書かれていた。

『修二君へ。ハンカチの借り、返したわよ。』

P. S. 昨日のことはこの新しいハンカチが口止め料ってことで
鬼灯霧江』

「あ……！」

思わず声を上げてしまう修二。

昨日の夜。

あの時、彼が見たもの。

この街のヒーローの、素顔。

それは、やさしくて強く、そして謎の多いあのクラスメイトだったのだ。

第三話 妹は棺桶で寝て、兄はコートで飛ぶ。

数日前。

「……遅いなあ、あいつ」

三月三十一日。

天壤島空港。

ターミナル1F、国内線到着ロビー。

黒いコートを着込み、ちよっとくたびれたような顔をした白髪の青年が、壁に背を預け、携帯で時間を確認している。

その青年、鬼灯零次は妹を待っていた。

予定ならばもう二本も前の便で到着しているはずが、待ち惚けを食っている。

連絡を取ろうにも携帯の電源を切っているようで、電話にもメールにもずっと反応がないのだ。

「まさか墜落した、なんてこたあないよな」

彼は周囲を見回す。

のんびりと飛行機を待っている親子連れ、ベンチで眠りこけている初老の男、談笑している女子学生、忙しそうなビジネスマン、もっと忙しそうな添乗員や空港の職員etc...いつも通りの空港だ。

何か大事あれば、もっと慌ただしいだろう。

「まったく、何やってんだか……」

初日からこれでは先が思いやられるな、と彼は思った。
妹と言っても、年が十年も離れている。彼にとっては娘同然だった。

それも、とびつきり手のかかる娘だ。

(今日は妹を^{アイツ}連れて人と会う約束もあるってのに……)

零次は再び携帯を確認する。

時間は十二時半。

約束の時間までにはあまり時間がない。

久しぶりに会うのだから飯でもおごってやろうという彼の計画は、既に消滅していた。

荷ほどきの手伝いもしてやろうと思っていたが、春休みとはいえ、生憎そこまで暇ではないのだ。

突然、ぶるる、と、メールの着信に携帯が震える。

送信者は鬼灯霧江。

彼の妹だった。

ようやく連絡が入ったことに安堵し、彼は届いたメールを開く。

「……あのドアホ……」

そして深くため息をつくのであった。



白髪青年、零次はタクシーの運転手に金を払い、降りた。

第三区、10番地、太極館学園女子寮。

太極館学園は島にある中ではレベルが高めの人妖共学校だ。そこに、彼の妹が入学する予定になっている。

彼は寮監に事情を話し、合鍵を貸してもらった。

そして今年度の新入生用のフロアとなる三階へ足を運んだ。
301号室。

二人部屋が基本のこの寮では数少ない個室である。

個室は成績優秀者か、特別な事情を持った物が入寮を許可される。
当然、他の部屋よりも料金が高い。

鍵を開け、中に入ると大量の段ボール箱が並べられていた。
妹が第三スフィアから送ってきた荷物だ。

零次は、目的の物を部屋の中央に見つけた。

人ひとりがすっぽり入ってしまいそうな細長い大きな木の箱だ。

緩衝材やガムテープやらで嚴重に梱包されている。

零次が素手でテープをびりびりと乱暴に破いてゆくと、箱の全貌
があらわになった。

それは棺桶だった。

大きな十字架の描かれた、西洋風の棺桶。

零次が包装をぐしゃぐしゃと丸めてゴミ箱に捨てると、その棺桶
の蓋がひとりでに開いた。

「ああー、よかった。一時はどうなるかと思った」

「お前なあ、ふつうに密航だぞ、これ」

中から出てきたのは、白髪の零次とは対照的な、長い黒髪の少女
だった。

顔立ちは端正だが目が少しツリ眼気味。

女子高校生の平均的な身長、スタイル。

ちよつとさびしめな胸。

「仕方ないじゃない。寝てたら勝手に業者が運んじやったんだから

……」

少女、鬼灯霧江は欠伸をしながら癖のついた髪をぱりぱりと掻く。じっとしていた苦痛からか、うーんと伸びをしたり、腕を軽く回したりして体中の関節を鳴らし始めた。

「伯父さんも伯父さんだ。こんなことがあったら連絡の一つでもくれりゃいいのに」

「ああ、伯父さんには私が黙っててって電話で言ったのよ。こっちのほうが面白そうだからって」

「てめえ確信犯（誤用）じゃねえか」

「まあまあ」

概要はこうである。

叔父の家に住んでいた霧江は、引っ越しの前日、夜中までかかった荷造りをようやく終えて、棺桶の中でぐっすりと眠りこけていたのだが、翌日来た業者に中に入っていることを気づかれないまま梱包され、そのまま荷物として運ばれてしまったのだった。

集荷が終わった後でそれに気づいた叔父は霧江に連絡したが、霧江は状況を面白がって叔父を口止めた。

霧江も霧江だが素直に従う叔父も叔父である。

「で、いざ到着したら思ったより梱包が嚴重で出られなかった、と」「力任せにぶち破ってもよかったんだけど、棺桶壊したくなかったからね」

「アホ」

「まあまあ。ほら、誰かに会いに行く約束してるんでしょ？早く行かなくていいの？」

「何言っただ、ここでは入島審査があるの忘れたのかよ。そっち優先だ。とっとと空港行くぞ」

「あ、そうだっけ。ごめん忘れてた。やっべ、強制送還ある？」
「かもな」

零次ははーっと大きくため息をつき、部屋の外へ向かった。

産業革命期。

『魔法』が『技術』として、表舞台に顔を出しはじめたのは、丁度その頃だった。

ある国である魔術師が、魔法を使用した技術を産業に使用し始めたことを皮切りに、魔法技術は世界に浸透。

その存在は当然の物とみなされるようになり、時代が進むにつれ、全世界における魔法使い人口は急速に増加していった。

だが、それに伴いある問題が発生した。

近年、魔法使いの増加に比例するように、妖怪や魔物といった、魔法生物も増加を始めたのである。

魔法生物、特に捕食種は、魔法使いの肉をよく好んだ。

そのため、魔法使いの住む街が魔法生物による襲撃を受け、壊滅するという事件が世界中で起るようになったのである。

魔法生物増加の直接的な原因は不明で、暫定的な解決を余儀なくされた各国政府は一計を案じた。

産業の要となっている魔法使いたちを切り捨ててはいいかなかったのだ。

そして生まれたのが、この『スフィア』という計画都市である。

『スフィア』は魔法生物の侵入を防ぐ強力な球状の結界で常に覆われている、魔法使いのための都市である。

ここ、天壤島もその一つ。

正式名称『東京都天壤島第五スフィア市』

この街は、名の通り日本で五番目に作られたスフィアである。

東京湾沖、伊豆諸島と小笠原諸島の間に作られた、佐渡島ほどの面積を持つ巨大な人工島の上に建設されている。

そしてここは、他のスフィアとはまた別の目的をもって作られた都市でもある。



「ええと、鬼灯霧江さん……種族は吸血鬼、妖力ランクはB……ですね？」

ふたたび天壤島空港。

ターミナル1F、国内線到着ロビー。

ブースのように仕切られたカウンターで、頭髮のちょっとさびしい中年の男性職員相手に手続きを行っている霧江を、零次はその後ろにあるベンチに座って眺めていた。

「変わってねえな……」

どこにでもありそうな無地のTシャツとその辺に転がってそうなジーンズという実にやる気のないファッション。

妹に会ったのは実に二年ぶりだが、色気がない所というか、ファッションなんていう単語とはおおよそ縁遠そうな所がある。

この辺は全く変わっていない。

「まあ、仕方ねえよな……」

吸血鬼。

職員の男が言ったように、妹は人間ではない。

もう10年も前、あの忌まわしい事件から、ずっと。

そしてその間、彼女は人間社会の中で不当な扱いを受け続けてきた。

天壤島、第五スフィア市が作られたもう一つの目的。

これもまた、魔法使いの増加、そして魔法生物の増加と深く関わっている。

魔法生物の中でも、特に妖怪や魔族などと呼称される種の中には、人間と同等かそれ以上の知能を有し、確固たる意志と自我を持っている存在もいる。

人間はそれらを総称して『妖魔』と呼んでいる。

この島が作られたもう一つの目的は、その妖魔との共存をはかるためだ。

人間ではない妖魔には人権がない。

たとえ人間と同じような能力を持っていたとしても、それが認められていない限り共存することなど不可能だ。

しかし、妖魔に人間と全く同じ権利を認めたところで共存が可能になるということでもない。

妖魔は人間より、物理的にも魔力的にも強い力を持っている。

そして、中には人間を捕食するような種も存在する。

よって、共存のためにはお互いが違う存在であることを前提とし、その中で権利と制約のバランスを取る必要があるのだ。

つまりこの島は、そのための実験都市なのである。

「はい結構です。ではこの書類を持って市役所に行ってください」

中年職員はそう言って、判子を押した書類を霧江に手渡した。

島の事情もあって、ここでは入国審査ならぬ入島審査がある。
特に、妖魔が市民権を得たいのならばここをパスして通らないことには始まらない。

霧江が今受け取ったのは、住民票発行に必要な入島証明書である。
どうやら審査は無事パスしたらしい。

彼女が気付いたかは定かではないが、入島審査官は誰もが幻術、
偽証魔術、催眠術等のプロフェッショナルである。

少しでも何かを誤魔化すそぶりを見せれば即強制送還もありうる
のだ。

もつとも、やましいことはほとんどないのであまり気にするよう
なことでもない。

その様子を見て、零次は席を立つ。

ここまでだいぶ時間を食ってしまった。

約束の時間まではもう僅かだ。

「よし、次だ。さっさと行くぞ霧江」

はやくこい、と手を軽く振って妹を呼び寄せ、空港の出口へ向か
う零次。

「あれ？タクシー乗り場はこっちのが近いんじゃない？」

と、タクシー乗り場を示す看板を指差す霧江。

だが零次は「いいから来い」とだけ言って、さっさと出口へ歩い
て行ってしまった。

霧江は首をかしげるが、考えても仕方がないのでその後へ続くこ
とにして、

「え？ちょ……なに？」

そして出口を出たとたん、荷物でも担ぐかのように兄の肩に担がれてしまった。

「遅くなったからな。時間には間に合わせにや……」

彼がそう言うと、着こんでいた長いコートが、はたはたと、風もないのにはためき出した。

「詠唱省略——飛行術式起動」

否、風はあった。

そのコートの内部、強い風が渦を巻くようにして。

「最高速度で行く。書類を落とすな」

「ちょ、待つ待つ待つ——」

あわてた霧江の抗議と抵抗は完全に無視され、彼らは跳んだ。いや、飛んだ。

周りの客を吹き飛ばしてしまいかねない強風とともに。

向かった先は島の中心部にある市役所。



島の中心。

そこには島のどこにいても見えるような果てしなく高い巨大な塔が建てられている。

『スフィアタワー』と呼ばれるそこは、計画都市スフィアの要。

頂上に結界の維持、管理施設があり、他にも市役所などの主要施設が集中している。

その塔の周囲に広がっているのは自然公園だ。

周りに誰もいないのを確認し、零次は降り立った。
衝撃、轟音、爆風。

それは着地と言うより着弾に近い。

ともすればテロとも取られかねない行為だが、今回に限ってそれはなかった。

事前に通知しておいたのだ。

休日にはたくさんの人や妖魔が集まるこの公園で、都合よく無人の広い場所が確保されていたのもそのためである。

「鬼灯様ですね、お待ちしておりました」

零次の着弾地点に、スーツ姿の女性が近づいてくる。

「すみません。遅くなっちゃったみたいで」

零次は荷物を、というか霧江を肩から降ろしつつ、目の前の女性に軽く頭を下げる。

「いえ、時間ぴったりですが……その、大丈夫ですか？」

そう言って、スーツ姿の女性は頭から降ろされたままぐったりして動かない霧江を心配そうに覗き込んだ。

対して零次は心配ないですよ、というような軽い笑みを浮かべた。

「どうせすぐ起きますから……あ、少し下がった方がいいかも」

「は、はあ……」

言われて彼女が一步下がると、

「フライアアアアップ！」

霧江は飛び上るように起き上がり、同時に強烈なアッパーカットを放った。

零次は予測していたように、軽いステップを踏んででひらりと身をかわす。

霧江は半分涙目になりながら、拳を握り兄をキッと睨みつけた。

「このバカ兄！何すんのよいきなり！」

「お前がアホなこととして遅くなったからだろうが」

「だからってこんな目に合わせるんじゃないわよ！よ何あの後ろ向きに走るジェットコースター以上の何かは！このロリコン！」

「おいロリコンは関係ねえだろ！」

言い合いながら、霧江は何度もその拳を突き出したり、後ろ回し蹴り繰り出したり、飛び蹴りしたりしてして兄を攻撃。対する零次はそれを二本の腕だけで手際良く捌いて見せる。

「あの、お二方……もうお時間が」

「「あ、すみません」」

恐る恐るスーツの女性が声をかけると、二人はピタリと静止し、同時に同じセリフを言い放った。

そして一時休戦だ、と拳をコツンと軽く打ち合わせ、先導する彼女についてくる。

もしかしたらこの兄妹不仲なのか、と一瞬疑ったスーツ姿の女性は、そんな彼女を見て軽く胸をなでおろし、二人を塔の中へ導くのだった。



塔の内部、一階から六階までは市役所になっている。

三人は市民窓口課や衛生課や福祉医療課を横目に、一番奥にある『関係者以外利用禁止』と書かれたエレベーターに乗り込んだ。

「先に入島証明書をお預かりしておきますね」

エレベーターの扉が閉まると、スーツの女性は霧江に向き直って言った。

「あ、はい……って、ここで？」

「ええ。必要な手続きはこちらで済ませておきますので」

「ああ、そっか。おねーさん市役所の人か」

そう言って、霧江はスーツの女性に書類を手渡した。

「はい、確かに……って」

「あー」

兄に言われた通り、霧江は書類を飛ばさないように必死に掴んではいた。

しかし、若干必死すぎたらしく、大切な書類がぐっちゃぐちゃである。

「……申し訳ない。急ぎすぎたようで」

零次がやつちまった、と右手で顔を覆う。

「再発行した方がいいですかね？」

「あ、いえ……大丈夫です。こちらでなんとかしておきますので」

「いいの？よかったあ……」

ふーっと、一息つく霧江。

そうこうしているうちに、エレベーターは目的の階に到着した。
スフィアタワー6階、市役所部分の最上階である。

「ねえ兄貴。こんなところで誰に会うのよ」

「お前、ここまで来たら大体予想つくだろうよ」

妹の質問に嘆息する零次。

「いやいやいや、そりゃだいたいは予想できるけど、なんで私なんかが、島に来てそうそうそんな人に会うの？」

「言ったらう。お前には仕事を頼みたいって」

「仕事って……まさかこの先にいる人から？」

三人の目前。長い廊下と、幾つもの部屋。

目指すのは一番奥の一室だ。

スーツの女性がドアをノックし、「お客様をお連れしました」と声をかける。

「通してくれたまえっ！！」

と、中から威勢のいい野太い男性の声が大きく聞こえてきた。

「お入りください」

女性がドアを開く。

それはこの街、第五スフィア市の市長室の扉だ。

第四話 市長はテンションが高い。

「ウウウエエルカアアアム!!!!!!!!!!!!!! ようこそ鬼灯零次教授！そして鬼灯霧江クウン！」

市長室に入った二人を出迎えたのは、赤いド派手なスーツに身を包んだ、やたらテンションが高く、野太い声、オールバックの髪、そして口髭が素敵なナイスミドルだった。

面喰らっている霧江の真横で、「遅くなって申し訳ないです」と、慣れているのか冷静に言葉を返す零次。

「いやあ、構いませんとも！さあさあ、そこに掛けてください。神無月クン、彼らにお茶を用意するのだッ！」

「かしこまりました」

と、彼らを引率してきたスーツの女性が答える。

どうやらこの市長の秘書らしい。

市長はデスクの前にある応接用の豪華な椅子とテーブルに二人を先に座らせ、自分はその対面に座った。

「さて教授。確認ですが、妹さんにはまだ何も話してはいないですかっ!?!」

市長はキリリとした笑みを浮かべながら零次に問う。

「ええ。とりあえず仕事をしてもらうことだけは話しましたが」

「うむっ！ありがとうございます！これだけはどうしても私の口から言いたかったですからな！」

うんうんと頷く市長。
とにかく声がでかった。

「さて……鬼灯霧江クン!!!!」
「は、はいィ!?」

急に席から立ち上がり、霧江に向かって右手の人差し指をビシッと突き出す市長。

色々と面食らって呆然としていた霧江は、急に名前を大声で呼ばれ体がビクウ!と反応する。

「君を呼んだのは他でもない!君にはこの街の正義を守るヒーローになってほしいのだよ!!!!」

「……………は?」

突拍子もない言葉に、思わず鳩が豆鉄砲を食ったような顔になってしまう霧江。

(今なんて言った?正義のヒーロー?私が?ってかヒロインじゃないの?っていやいや……)

市長から仕事の話をされると聞いた時は何を頼まれるのかと思っただが、まさかそんな言葉が飛び出してくるなどとは夢にも思わなかった霧江。

彼女が目をぱちくりさせていると、市長は「フムン」と顎鬚を軽く撫でた。

「んん?わかりにくかったかな?
つまり、君にはこの街にとっての、たとえばゴッサムのバ〇トだとか、風都のダ〇ルのような、そんな存在になってほしいのだ!」

「あ、の……いきなりすぎて話が見えてこないっていうか、どういうこと？ ナニ？ なんで私？」

「よろしい、説明が必要だろう！ 神無月クン！！」

今しがたテーブルにお茶を並べ終えた神無月秘書に、市長は新たな指示を飛ばす。

「こちらをご覧ください」と、神無月は市長のデスクの上に用意してあったファイルを霧江の前に置いた。

開かれたファイル、その中で彼女の眼にまず飛び込んできたのは『第五スフィア市の過去五年間における犯罪件数』と書かれた右肩上がりの棒グラフだった。

年数は2006年から去年、2010年までの5年。

これによるとこの街の犯罪件数は、2006年、2007年はそれなりの件数しかないが、その次の年、グラフで言うところちょうど中央、2008年は前年の倍の高さがあり、以降2009年、2010年と急激に増加しているのがわかる。

「今、この街は未曾有の危機に瀕している！」

市長は立ったまま話を続ける。

声のトーンが先ほどよりも下がったのは、深刻な話故だからだろうか。

あくまで若干、だが。

「グラフを見れば一目瞭然だが、街の犯罪件数は爆発的な増加傾向にあるのだ！ 理由は様々ある。

この街が出来て20余年！ 町の環境も、街の外の環境も年を経るにつれ変わった！

だが三年前のあの変化は致命的だった！！」

市長はデスクの周りをぐるぐると回りながら語る。

彼が話しているのは、2008年に起こった政権交代のことだろう。

日本では、長きに渡りリベラルで革新的だった民権党が政権を支配してきたのだが、ここにきて保守党が逆転し、政治の方針が大きく転換したのである。

「民権党が政権を握っていた時代は犯罪件数は少なかった。どうしてかわかるかな!？」

霧江の正面で止まり、再びビシィ!と人差し指を突き付ける市長。

「え、えーと……その時は政治がよかったから……ですか？」

「ううむ、惜しい。政治の方向性が今と違うのは確かだが、一概に、今の政治が悪くなったとは言えないのだ」

市長は再びぐるぐると、今度はテーブルの周りを回り始める。

「この保守的な国で民権党が権力を保っていたのは奇跡に近かった。それまではじっくりと慎重に、保守派を懐柔しつつ政策を進めていた彼らだが、4年前党首が変わってから急激な変化を求め始めた。故に、国民の支持を失い、あつという間に保守党が逆転、政権を獲得してしまった。彼らが悪いという訳ではない。

だが、保守党が行った転換の中でこの街にとって最悪なものが一つだけある!」

市長のセリフに合わせるように、神無月が霧江の前の資料をめくる。

そこには新聞記事の切り抜きがコピーされていた。小さな記事だ。見出しは『妖魔公務員締め出し』と書かれていた。

「彼らは妖魔が公職に就くことを禁じてしまった！妖魔の公務員登用はこの島では例外的に認められてきたものだったのだが！政府が！人間以外の公務員を認めなくなってしまったのだ！」

市長は一息つき、椅子に座って茶を一杯飲んだ。

「つまり、この街の妖魔がたくさん失業した……ってことですよね？……警察官を含めて」
「その通り！！！」

市長は満足したように頷きつつ、霧江をビッシイと指差す。
またビクッと背筋を震わせる霧江。

「私は政府に、『せめて警察官だけでも認めて欲しい』と訴えた。だが、認められなかった！」

その記事の小ささを見たまえ！そこからも島外の国民の関心の低さがうかがえるだろうッ！

そしてその結果が犯罪件数の増加だ！今まで妖魔の取り締まりは妖魔に任せることができた！

しかし、今！妖魔を取り締まるのも人間を取り締まるのも人間の役目となってしまった！！

それでは力が足りないというのに！！！」

市長は再びガバツと立ち上がるが、かぶりを振ったかと思うと、今度はすぐに座りなおし、お茶をもう一杯啜る。

「このまま犯罪件数が増加を続けばどうなるか……。これは私個人の考えなのだが、保守党の連中は、民権党の忘れ形見であるこの島を取り潰す気なのかもしれない……」

市長の声のトーンがかつてないほどに下がった。
今の今まで光り輝いてさえ見えたナイスミドルの顔に影がさす。
しかしそれが爆発の前の溜めであると感じ、霧江は少しだけ身を
引いた。

「だアがしかアし!!!!!!!!!!!!!! この私の眼の黒いうちは!!!!!!!!!!
絶対にさせん!!!!!!!!!!!!!!」

椅子を後ろに吹き飛ばすほどの勢いで、市長は三度立ち上がる。
かつてないほどにテンションをあげて。
びりびり、と霧江の鼓膜や部屋の窓ガラスが振動する。

「霧江クン!!!!!!!!!!!!!! 私はこの街の未来を!!!!!!!!!!!!!! 君に預け
たいッ!!!!!!!!!!!!!!」

がちちりと、正面から両手で霧江の肩を捕まえる。
強い笑みをたたえたその顔。
霧江はただ、圧倒されるばかりだ。

「え、と、つまり……正義のヒーローっていうのは……私が治安維
持をする、ってことですか？」

「まあさあにその通オオオオオオオリ!!!!!!!!!!!!!!」

至近距離での大声に、霧江は思わず目をつぶる。
これだけ近いと唾がかかりそうなものだが、彼女の顔には一滴も
飛んでこなかった。

どうも大声を出すのが得意らしいが、流石に鼓膜がしびれそうだ
った。

「ま、待ってください……できませんよそんな……確かに吸血鬼で、日の光も平気なデイ・ウォーカーですけど……そこまで強くないですし」

「ふむ」

首を振って反論する霧江。

市長はそっと彼女の肩から手を離す。

「君は、SSSランクの最強クラスの妖魔だと聞いているが？」
「え……？」

霧江は面食らって、パチパチと眼を瞬かせながら兄の方を見る。
兄は彼女の視線から逃れるため思いっきり顔を逸らした。

「ちょっと、なんでバレてんの！？ 兄貴！ ちょっと、おい！！」

零次のコートを掴み、ゆさゆさと揺さぶる。

「……すまん」

顔をそらしたまま小さく謝る零次。

霧江が慌てているのは、この島の既定のためだ。

妖魔はその妖力によって最下位のFランクから最上位のSSSランクに階級づけされ、現状、治安維持の観点からSランク以上の妖魔の入島を禁止している。

最も、そういった上位ランクの妖魔がわざわざ人間のコミュニティなどに入りたがることはまずないのだが、しかし何事にも例外はつきものである。

たとえば、妖魔として大成する才能を秘めた人間が妖魔に転化してしまった場合や、ただの人間だったにもかかわらず強力な妖魔の

力を受け継いでしまった場合など。

だが彼女はある秘密の方法で、こっそり自身のランクをBにまで下げ、これをクリアしたのである。

「君には選択の自由がある」

市長は両腕を組み、霧江を真っ直ぐ見据えつつ、言う。

「この話を受けてくれれば、君をこの街のいち市民として受け入れよう。」

もちろん危険な仕事だ。それなりの手当は出す！

しかし断った場合、残念ながら、君を受け入れるわけにはいいかない。

規定に従い、島外退去を命じることになるだろう！」

「そんな！そんなの、選択の余地ないじゃないですか！」

「ならば他の選択肢を選ぶかね？運動を起こし、法律を変えさせるか、革命を起こしこの島の主にでもなるか……。」

何を選んでも君の自由だ！どれも嘘についてこそこそ隠れるよりはいい生き方だと思うがね？」

霧江の抗議、反論に、市長は毅然とした態度を崩さなかった。

「霧江、俺も強制はしないが、悪い話じゃない。そうだろ？お前に力を戻してやることもできる」

零次は霧江に向き直って言った。

霧江には彼の眼がどこかしら、期待で輝いているように見えた。

ああ、そういうことかと霧江は嘆息した。

全く困った兄だ。しかし、確かに悪い話ではない。

市長の言う通り、こんなところまで来て隠れてこそこそすること

もない。島に入るために無理やり削った力を取り戻せて、犯罪者相手に暴れることもできて、それでお金ももらえる。

考えれば悪い話ではない。

もともと仕事は引き受けるつもりだったのだし、断る理由も特に見当たらない。

「……ふう」

霧江は大きく深呼吸をして、一言。

「わかりました。やります」

その言葉に、市長は満面の笑みを浮かべ、両手で霧江の右手を取り、ぶんぶんと上下に振った。

「ブラアアアアボオオオオオオウ！！この街の新しい秩序！誕生の瞬間だ！！」

第五話 研究室はアットホーム。

国立天壤島魔導大学。

スフィアタワーのすぐ北の地域に広大なキャンパスを構えたここは、第五スフィア市内にある三つの大学のうち、唯一の国公立、そして最も高ランクな大学である。

キャンパス内、最も南側にある建物が魔法工学部棟。

春休み中のため、人の出入りがほとんどないそこに零次と霧江の兄妹の姿があった。

「ここが兄貴の働いてる大学かー」

「おうよ。前のところよりいいだろー」

教授、と市長がそう呼んでいたように、零次はこの大学で魔法工学の講師として教鞭をとっている。

正確には教授ではなく准教授でなのだが。

ともかく二年前から兄は本土の第三スフィアにある別の魔法大学からここに転職し、働いてきた。

その目的の一つは、妹である霧江をこの街に住まわせても問題ないかどうかどうかを見極めるためだ。

「さて、こっちだ」

綺麗なガラスの自動ドアをくぐり、二人は棟内へ。

入ってすぐのエレベーターに乗り込み、零次は『B2』のボタンを押す。

ドアが閉まると、霧江はふうとため息をついた。

（駄目だ、どうも緊張するなあ）

大学内で兄の隣に並ぶと、兄弟ではなくただの教師と生徒になったような錯覚に陥るのだ。

10年以上も年が離れているのだから、周りから見れば当然の感覚だろう。

でも自分はいくまで妹のはずだ。

霧江は思った。

職場での兄は普段と比べて纏う空気が様変わりするのだ。

昔、零次が他の大学で働いていた時、その公開講義を見に行ったことがあった。

その時の彼は、まるで普段とは別人のように、他人を教え導く人間独特の厳格な雰囲気纏っていた。

彼の前で私語をしてはならない。話を聞き漏らしてはならない。

身内にもこんな感覚を抱かせるのは、兄が有能な人間であることの証明なのかもしれない。

誇りに思う反面、どこか寂しさも覚えた。

それ以来、彼女は兄と一緒にその仕事場へ行くことはなくなっていた。

では、今日はなぜ来たのか。

「ついたぞ、ここだ」

地下二階。

廊下の一番奥の部屋、第二実験室。

そこには地下であることを感じさせない明るさがあり、部屋の中にある棚にはいろいろな工具や器具——きわめて一般的なものから、何に使うのかまるで想像もつかないものまで——が綺麗に整頓されている。

部屋の中央には円形のテーブルがあり、そこには白衣を着た学生

らしき5、6人の集団が座って話をしていた。

霧江たちが入ってくるのを見ると、学生の一人が「お、先生きたぞ」と声を挙げた。

「俺の研究室の学生たちだ。右から瀬川、林家、東、戸塚、桜庭、氏家」

彼らは席を立ち、霧江たちのもとへ駆け寄ってきた。

「先生！この子が妹さんですか？」

「ああ、そうだ桜庭」

「かわいいっ！持って帰っていい！？」

白衣を着たポニーテールの女子高生、桜庭は突然霧江に抱きついてそう言い放つ。

「……え？ちょっ痛い痛い痛い！」

霧江は引きはがそうとするも、桜庭はさらにきつく抱きしめてきた。

その様子に、零次はニヤリと笑う。

「桜庭は鬼の血を引いてるからな。多分腕力は今のお前より強いぞ」

「ちょ、解説はいいから離させろー！」

「あ、ごめんごめん」

ぱ、っと手を離す桜庭。

解放された霧江はへなっと力なく座り込んでしまった。

「さて」

と、零次は改めて、生徒たちに向き直る。

「みんな、今日は春休みなのにわざわざありがとう。瀬川、このコート役に立ったよ。ありがとう」

「いえいえ。みんな今日を楽しみにしてたんですよ。ようやく僕らの研究が日の目を見る第一歩ですからねそれで、どうでした？使ってみた感想」

「うーん、飛んでる間は気持ちよくていいんだが、やっぱり着地が危なかったのかな。そこをもうちょっとどうにかするともっと良くなるよ」

そう言って、零次はコートを脱いでいちばん右の男子学生に手渡す。

あれは彼が造ったものだったのか、と、霧江は顔をあげ、その威力を思い出し、微妙な表情で彼を見た。

あらゆる景色が後ろ向きに超高速で流れてゆく光景を、彼にもぜひ見せてやりたい。

「具体的には、もっと衝撃波の範囲を絞る感じで。やっぱり周りに被害が出すぎるのはまずいからな。」

威力を調整できるように出来るなら一番いいんだろうが……」

「威力の調整ですか……ウウム、今後の課題ですね」

前言撤回。

諸悪の根源は兄貴でした。

「さて、じゃ、改めて紹介しよう。妹の霧江だ」

零次は霧江を立ち上がらせると、その背中をぽんぽんと叩く。

そしてかつてないほどの明るい笑みを浮かべた。

「今日は本当にありがとうみんな。さあ、実験を始めようか」



5分後、先程まで綺麗に片付いていた部屋は雑然としていた。

中央にあったテーブルは奥へと押しやられ、学生たちはどこからか運び込んできたカメラやサーモ等色々なセンサーが付いた何かを測定するためのものらしい機材をいそいそとセットしている。

「さて、まずはこれをお前に返そう」

零次は真赤なクリスタルで造った様な、綺麗な十字架を霧江に手渡した。

これこそが、霧江が自身の妖力ランクを偽装するために使用した技術。

封印十字『ブラッディクロス』

これは十字架状に加工した『魔血石』と呼ばれる特殊な鉱石に封印術式が刻まれたもので、妖魔が己の血液をこの十字に捧げ、刻まれた封印魔術を起動することで、妖力の大半をこの十字架に封印することができるという代物なのだ。

零次がこの大学にきた目的のもう一つが、この封印十字の技術研究を進めることにあった。

「ん。でもこれ、どうやって力を戻すの？」

霧江は十字架を光にかざす。

彼女が自身の力を封印したのは零次がこの大学に来るよりもっと以前。

4年前、別の大学で助教授としてこの魔法技術を研究し、理論を確立した直後のことだ。

自ら実験台になると志願したのを覚えている。

だが、今見るとその時との違いが一つ。これを使用したときには刻まれていた封印術式が消えている。

「いや、ありのままの力を戻すのは市長に止められててな。今は出来ないように加工している」

「え？じゃあどうすんのよ」

霧江は首をかしげる。

街の治安維持に協力しろと言われても、私ひとりで、と言うのなら力を戻さないことには始まらないだろう。

「だから、言われたろ？ヒーローになるんだ、って」

「先生えー」

紹介された学生の一人、林家と呼ばれた少女が、銀色のトランクを持ってやってきた。

「おお、ありがとう林家。さて霧江、力の解放には、これを使うんだ」

零次はトランクを床に置き、開く。

そこに入っていたのは銃身が異様に太い奇妙な形をした銃と、ホルスターのついたベルトだった。

彼はそこから銃を手に取り、霧江に手渡した。

見た目に反してかなり軽い。

最も吸血鬼の霧江はどれほど重くとも大抵のものは持ち上げられるが、それを抜きにしても、とても銃とは思えない軽さがあった。

よく見ると、銃身が太いわけではない。
銃身の周りにカバーのようなものがついているのだ。

「それは『クロス・ガン』そいつの銃口にブラッディクロスをセットしてカバーをスライドするんだ」
「ん……こう？」

霧江は十字架をクロスガンの銃口に差し込み、銃身のカバーを前方にスライドさせた。
セットした十字架はカバーの下に隠れるような形になる。

《S t a n d b y》

「うわ、なんか喋った」

「その電子音声が出ればセット完了だ。よし、林家、下がるぞ」

そう言って、零次と林家は三步ほど霧江から離れる。
そして零次はほかの五人の学生の方へ顔を向けた。

「機材の準備は？」

「完了してます」

「OK、霧江。そいつを真上に向けて撃ってみろ」
「……こう？」

霧江は競争のスタートの合図のように、クロス・ガンの銃口を真上へ向けた。

そして上を見つつ、引き金を引く。
パン、と乾いた音。

銃口から何かが打ち出される。赤い水の塊のようなそれは、霧江の真上で一瞬のうちに丸い膜のようなものを形成した。
かと思うと、それは霧江めがけて落下してくる。

「わ、何これ、ちょっと!」

「こら、動くんじゃない。モニター、どうだ?」

零次の後ろで、観測機材のモニターと霧江の様子を交互に見比べていた氏家が答える。

「異状なし。順調です」

そうこうしているうちに、赤い膜は霧江の体にどんどん纏わりつき、最後にはその体、首から下を真っ赤なボディスーツとなって包み込んだ。

「おお、なんだコレ、すごいピチピチね……」

霧江は自らの体を見下ろす。

全身に薄くまとわりついたスーツは、その体のラインを際立たせている。

局部のラインこそ前張りでもしてあるかのように隠れてはいるものの、浮き出たヘソや尻のラインがなんとも扇情的だった。

「よし、成功だ!」

「「「「「やったああ!」「」「」「」」」」

戸惑う彼女を尻目に、零次の声に学生たちは諸手を挙げ歓声を上げる。

一人恥ずかしい格好をしている横で抱き合ったり握手したりする彼らを見て、霧江はなんとも複雑な表情を浮かべた。

「おい、ちゃんと説明してよ」

「おお、すまんすまん」

零次が再び霧江のそばへ寄る。

「そいつはブラッディクロスだ」

「……ん？さっきの十字架がこれに変わったってこと？」

霧江はもう一度視線を落とし、スーツを眺める。

この赤色は、先ほどの十字架とまったく同じ色をしていた。

「そう。さっきのクロス・ガンはブラッディクロス（Cross）をブラッディクロス（Cloth）へ変化させるアイテムだ。シャレが効いてるだろう」

「……え、なにして」

「……コホン、ともかく、それを身に纏うことで、以前の大体六割程度の妖力や身体能力を取り戻せる。ちょっと動いてみる」
「ん」

ヒュッヒュッヒュッと、風を切る音が三度。

霧江が虚空に向けて軽くジャブを三発撃った音だが、学生たちには彼女が何をしたのかわからなかった。

鬼の血を引いているはずの桜庭でさえ目を点にしている。
やがてモニターを見ていた一人が声を上げた。

「パンチだ、パンチ撃ったんだよ今」

「すごい、マジかよ。モーション全然見えなかったぞ」

学生たちはモニターの前にわらわらと集まってゆく。

「ふふん」

その様子に気を良くしたのか、霧江は二連発後ろ回し蹴りを繰り出したり、四回転宙返りをしたりと軽業師のように動き回って見せた。

そのたびに学生たちから歓声上がる。

「おーいいわこれ、体超軽い。今なら何でもできそう」
「そうだろうそうだろう」

腕を組んで満足げにうんうん頷く零次に、霧江は顔面パンチを叩き込んだ。

「げふっ」

鼻血を吹きつつ、背中から大の字に倒れる零次。

「おおお、本物だ。兄貴に捌かれないなんて」

霧江は目を輝かせ、自分の手を見つめる。

「キャー教授がー！」

「すげえ！あの教授に一発入れたぞ！」

「ヤダ私鼻字吹いて倒れる教授見るの初めて」

「おっしゃ成功だ！」

学生たちは霧江のもとに集まり、彼女を取り囲んだ。

そして戸惑う彼女を持ち上げ、気絶したまま起き上がらない零次をほったらかして胴上げを始めた。

「」「」「わーっしょい！わーっしょい！」「」「」

「ははは、なんだこれ」

宙を舞いながら、霧江は兄のもとへこれだけエキセントリックな学生たちが集まったことに感心していた。

類は友を呼ぶというが、生徒も呼ぶらしい。



「いや、いい一発だった」

学生たちは霧江を胴上げから解放した後、すぐに零次の介抱に向かった。

今彼は学生の一人が持ってきた椅子に座って、両方の鼻の穴にティッシュを詰めている。

「そのスーツは、あくまでも基礎だ。今はオミットしてあるが、本来は要所に戦闘用の装甲がつく。顔も隠れるようになってる」

「顔隠して戦うの？」

「ヒーローってのは、そういうもんだよ」

零次のかわりに答えたのは、あの空飛ぶコートを作った瀬川という青年だ。

その返答に、霧江は趣味まで兄と共通した連中が集まっていることを感じ取らずにはいられなかった。

そうだ。兄は昔から特撮物が、特にヒーローものが好きだった。そもそもこのヒーロー計画を市長に提案したのは兄貴自身なのだろう。

（私が嫌がらないのを解って、そういう風に仕向けたんでしょね。まったく、なんて奴よ）

「でもスーツの出がここなんだし、なんかすぐバレそうじゃない」

そう言ったのは林家だった。

（おお、ちょっとはまともそうな人がいた！）

と霧江が思ったのもつかの間。

「その時はその時だ」

「はい」

「ええ」

「ですね」

「うーん、それもそうですね」

と、頷く学生たちにつられてか、林家まで納得してしまった。
彼らに一抹の不安を覚えずにはいられない霧江だった。
その時、モニターを担当していた氏家が疑問の声を上げた。

「そう言えば、名前はとうするんです？ヒーローの名前」

「名前か……」

零次が顎に手を当てる。

「そう言えば、考えてなかったな」

「はいはいはいはい！」

六人中二人しかいない女子の一人。桜庭が勢いよく手を挙げた。

「霧江ちゃんだからキリエ○イドで」

「お前それ怪獣の名前じゃねえか！却下却下！もっとこう、かつこ

よく、レッド・サンとかどうだろう」

「赤いけど吸血鬼に太陽関係ダメだろ」

「じゃあブラッディローズは？」

「安直すぎない？」

「じゃあお前何か案出せよー」

「お前もなー」

桜庭の次に発言したの瀬川、それを否定する東、次の案を出す戸塚、それに異議を出す林家、その次が氏家で、最後がまた瀬川の発言である。

こうして学生達によるヒーローの名前についての議論が始まった。

「……この島の住人は基本当事者の意志を無視するスタンスなの？」

「自分から発言しないと流されてくってことさ。はい、俺はレッドフレアがいい！」

無然とする霧江に、笑いながら答える零次。

そして彼も議論に飛び込んでいった。

その様子を見て、霧江はふう、とため息をつく。

どうやら、兄はだいぶ変わっていたようだ。

今の彼からは、昔のような厳格な教師独特の雰囲気をあまり感じない。講義と実習との差異のせいだろうか。

それともあの時の感じは単に自分の錯覚だったのか。

それ定かではないが、こんな雰囲気なら兄の職場も好きになれそうな気がした。

「なるほどね……ちょっと、それくらい私に決めさせなさいよ！」

こうして、兄妹と学生たちの議論に火が付き、それは結局その日の深夜まで続いた。

第六話 変身するのは初めて。

翌日。

零次と霧江の兄妹は再びスフィアタワー内の市役所を訪れていた。

「そーいやお前、結局あれから名前考えたのか？」

神無月に連れられ、職員用エレベーターに乗り込んだところで、零次が思い出したように口を開く。

「いや、全然。昨日は帰ってすぐ寝ちゃったもの」

「早目に考えろよ。名無しのヒーローじゃ格好つかないからな」

昨日は結局夜遅くまで議論に決着はつかず、結局霧江が自分で考えるということで落ち着いたのだ。

「うーん、そーいやさ、どうしてもヒーローじゃないとだめだったわけ？」

「ん？」

「いやほら、警察やめた妖魔集めて自警団みたいなのが作ったらよかったんじゃないのかな？ って」

昨日の話を聞いた時は納得してしまったが、時間がたってから冷静に考えてみたところ、ようは公務員でなければいいだけの話で、警察に協力するような組織でもないのではないか、という疑問が生まれたのだった。

「元警察の妖魔が立ち上げた警備会社とかはあるけどな。街の治安とはまた別問題だ」

「そうなの？」

「警備会社は依頼がないと動かないだろ。無償で市民を守ったりはしない。」

そういうことが出来るのは税金から安定した収入を貰ってる警察官だけだ。

考えても見ろ、そういう自警団があったところで誰が給料を払うんだ？」

「市長……とか？給料じゃなくて治安維持に協力してくれた報酬とかそういう形でもなんとかなりそうなものだけだ」

「そういう報酬だけでそれほど稼げると思うか？」

妖魔は気まぐれな連中だが、少ない報酬で市民のために奉仕しますーなんて奇特な奴居やしない」

「ああ、そっか。」

私みたいな女子高生一人にとっては大金でも、何人もの大人が遊んで暮らすには全然足りないわけだ。世知辛いなあ」

「世の中そういうもんだよ」

エレベーターは六階に到着し、神無月が2人を先導して歩く。

向かう先は市長室ではなく、プレートに小会議室と書かれた部屋だった。



「ウェルカム！零次教授！霧江クン！！」

市長は会議室の奥、窓際で、両手を大仰に広げて二人を出迎えた。その近く、窓側の長机に今日はもう一人。小太りの中年男が座っていた。

彼は二人が入ってくるのを見ると立ち上がり、一礼した。

「紹介しよう。彼は天壤警察署、刑事課の松井刑事だ！」

「松井です。どうも」

「鬼灯零次です」

「妹の霧江です」

刑事と兄妹は互いに歩み寄り、固く握手を交わす。

「さて、今日呼び出したのは他でもない！霧江くん！君のヒーロー適性を見るテストの説明をさせてもらおう」

市長のその言葉に、霧江は眉をひそめる。

「ちょっと、待ってくださいよ。ヒーローになれって言ってきたのはそっちでしょう？それなのに試験なんか受けさせる気ですか？」

「ウム！当然の反論だと思う！その反応は正しい！」

市長は堂々と言ったのける。

「しかし、街の治安はヒーローだけで守るものではない、ということとは理解しておいてほしいのだ！実は警察内部で、君の実力を疑問視する声がある。

『試験』というのは、君の実力を見せつけ、彼らを黙らせるために形式的に行うものだと考えてもらっていい！」

市長は声のトーンを落として続ける。

「ここだけの話だが、別に失敗しても君を追い出すつもりはない。逆境を跳ね返してこそそのヒーローだからね。落ちた評価はあとから回復すればいい。

最も、ここでビシッと合格しておいたほうが後々楽になるがね！」

「……まあ、そういうことなら」

しぶしぶながら納得する霧江を見て、「よろしい!!」と市長は再び声のトーンを上げた。

「では、松居刑事！早速二人に説明を!!」

「はい。じゃあ、ちょっとこれを見てくださいかね」

そう言って、松居刑事はカバンの中から紙の束を取り出し、テーブルの上に置いた。

「SL-7号事件……?」

資料の表紙、そのタイトルを、霧江が不思議そうに読み上げる。

「はい。警察では、事件を記号化して分類してるんで。メディアじゃあ『吸血鬼事件』と呼ばれとります」

「吸血鬼事件か。それって、ここ二週間で起こってるおかしい事件のことですよ」

零次は資料の表紙をパラりと捲って言う。

一枚目には最初の被害者や現場の写真、現場の状況を細かく書いた文章が載っていた。

「ええ、それですA型の女性ばかりを狙った犯行で、今のところ死者は一人も出とらんのですが、署ではかなり、重要視とります。というのも……」

松居刑事は零次達に見せるように資料をペラペラと次々めくる。

「これまで6件の事件が同様の手口で行われとるんで、同一犯だと

思われるんですが、犯人は自分につながる証拠を一つも残しとらないのです」

これまで被害にあったのは、いずれも一人暮らしの女性。眠っている間に襲われ、朝起きた時首筋に残っている傷に気づき、自分が被害にあったことを知るのだという。

「窓を割った形跡どころか、侵入した形跡もない。残ってるのは首の傷だけ。

という、極めて鮮やかといいますか、ここまで華麗にできるのは本当に吸血鬼以外にないと思うんですが、

島に住民に登録している吸血鬼、全員にアリバイがある上、傷口がどの吸血鬼の歯型とも一致せんのです」

「じゃあまあさか、島の外部からの侵入者……」

「どうかなあ……」

零次の考えをを、霧江は疑問視する。

彼女は資料を手にとってペラペラとめくりはじめた。

「そもそも普通の吸血鬼はわざわざこんな海のと真ん中の島に来たりはしない。単独では海を渡れないんだし、蝙蝠かなんかに変身するか、誰かに運んでもらうかしかない。

例えば荷物にまぎれて密航、なんて手があるかもしれないけど、姿見のまま紛れるのならどうしても棺桶でないとだめ。

そんなの吸血鬼の来航予定がないと確実に怪しまれるし、もし変身して飛んできたんだとしたら、

こんな程度の被害で済むわけがないわ。大量に魔力を回復する必要があるもの。

変身した上で密航って線もない。どっちにしたってもっとたくさん血を飲んでないとおかしい」

吸血鬼が流れる水を渡れない、というのは有名な話だろう。

例えば吸血鬼の中でも強力な魔力を持つ高位の存在であろうと、この海のご真ん中の島に入るにはそれなりの代償を支払わなければならない。

あるいは、と霧江は心の中で呟く。

（私くらい特別な存在ならできるかもしれないけどね……）
「なるほど」

松居刑事が感心したように頷いた。

「流石はご自身が吸血鬼なだけのことがありますな。我々は外部からの侵入のセンが濃厚と思って捜査しとったんですが……。」

しかし、だとしたら誰が？」

「考えられるとすれば、島にいる誰かが、こっそり島の人間を転化させて、

そいつが事件を起こしてるって場合だけど……これもちよつとすりくりこないなあ」

霧江は腕を組んで唸る。

「というと？」

「素人にしちゃ、ちょっと手口が鮮やかすぎるじゃないですか。

最も、その親元がしっかり育てて教え込んでるっていうのなら別なんですけど……」

「フム、とりあえずその線で洗いなおしてみるのも面白そうですね。つと、試験の話でしたな。

我々はこの事件をあと一週間以内に解決しなければならぬ、と考へとるんです」

「一週間……？ ああ、満月ですね」

会議室の壁にかかっているカレンダーに目を向けて、霧江は納得した。

その大きなカレンダーには月齢と月の満ち欠けも描かれている。

一週間後、ちょうど、霧江の入学式の前日にあたる日。

その日の夜はちょうど満月だ。

「もし、この犯人が次の満月に向けて少しずつ力をため込んでいるのだとしたら……」

その日、何かドえらいことをしでかす可能性がある。我々はそう踏んどります」

満月の夜。

それは吸血鬼をはじめとする闇夜に生きる妖魔の、その魔力が最高に高まる時だ。

この事件の犯人が吸血鬼だとしたら、少しずつ力を蓄え、そして自身の魔力も最高に高まった時、いったい何をするのか。

少なくとも、まったくロクなことにならないということだけは確かだということは、霧江にもはっきり感じられた。

松居刑事は、真っ直ぐに霧江を見据える。

「ともかく、あなたの協力を得てこの事件が解決できれば、実力を疑問視している連中も認めざるを得んでしょう。

私個人としては、試験うんぬんは関係なく、吸血鬼の専門家ともいえるあなたに協力していただきたいのですが……」

「警察の人たちもなかなか難儀ですね」

そう言って、霧江はふ、と笑う。

そんな厄介そうな事件、試験なんて言わずに、そうやって素直に

頼んでくれれば喜んで協力するのに。

「勿論、強力しますよ松居刑事。同じ吸血鬼としてもそんなやつ放っておけないですし」

そう言っ、霧江は自身の右手を松井刑事に差し出した。

「いやア、ありがとうございます」

霧江と松居刑事は再び固い握手を交わす。

ここに、一つの契約が成立した。

この契約が彼らの、いや、鬼灯霧江の運命をおおきく揺さぶる出来事に繋がるなどということは、霧江も零次も松居刑事も市長も神無月秘書も、この部屋にいる誰もが、今は全く知る由もないことであつた。



市役所を出た零次、霧江、松井刑事の三人は、スフィアタワーの南にある繁華街にやってきていた。

昼も近かったので、松井刑事の「せっかくだし飯でも食いに行きませんか」という誘いに乗ったのである。

「しかし、女子高生一人に二人のおっさん……なんだかシャレにならない組み合わせな気がするなア」

ぼそり、とつぶやく零次。

小声だったが、松井刑事はしっかり聞こえていたようで、「鬼灯教授、まだ二十代でしょう？」とつつこまれてしまった。

「四捨五入したら三十ですよ……あゝ俺ももう三十路なんだなあ……いい加減落ち着かんと。」

松井刑事、奥さんは？」

「女房と、娘が一人、息子が二人おりますが、仕事が忙しくてあまり構ってやれないんですわ。」

いつ見捨てられるかヒヤヒヤしとりますよ」

「メールでもしたら？」

と、中年二人の会話に割り込む霧江。

いつの間にか、彼女は松居刑事に対して敬語を使わなくなっていた。

「メール、ですか？そういうのはどうも苦手で」

「最近のはどれも簡単よ。会って話せなくてもそれで会話をつないでいけばいいじゃない。」

とにかくどっかで繋がってたら簡単に切れちゃうことはないと思うわよ」

「成程。そういうもんですか」

「そういうもんよ、あ、それから女の子ってどうしてもお父さんが嫌いになっちゃう時期があるから、

娘さんがそうなくても、そんなに気にやんじゃだめよ。一時的な病気みたいなもんだから」

「フム、最近の女子高生はイロイロ知ってるんですなあ」

「子供だから子供の気持ちかわかるだけよ。ね、兄貴」

「な、なんだよ……」

じとーつとした目で、霧江は零次を見つめる。

何かやましいところがあるのか、零次は霧江から思いつきり目を逸らしながら答えた。

「いやあー別にいい。私は兄貴がこの二年間ずっとメールの返信を
しななしかしてくれなかったのとか、
そっちからメールをよこしたことがほとんどないこととか、電話
なんかただの一回もなかったとか。
本当にぜんっぜん気にしてないからね」

どう考えても気にしまくってるじゃねえかというツツコミを思い
っきり飲み下しつつ。

零次は顔を逸らしたまま「ソウデスカ」と片言気味に低いトーン
で答えた。

「いや、だって……忙しかったんだよ。許してくれよ……」

零次の言葉に、霧江はふいつ、とそっぽを向いた。

「ねー、松居刑事。いったんメールを始めたらこういうことにだけ
はならないように気をつけてね。大事よー家族の絆は」

「わかりました。肝に銘じときます」

他愛もない(?) 会話をしながら繁華街を歩く三人。

そうこうしているうちに、松居刑事のいきつけだというラーメン
屋がすぐそこにまで見えてきた。

「ねえねえ、あそこ?」

霧江が『名菜軒』と書かれた看板を指差した。

「ええ。そういえば今更な質問なんです、吸血鬼ってラーメン食
えるんですっけ?」

「大丈夫よ、栄養にはならないけど味はわかるから」

「おい、二人とも」

ふと、零次が立ち止まり、ラーメン屋とは全く別の方向に視線を向けていた。

「ん？どったの兄貴」

霧江が引き返し、兄の横に並ぶ。

「あの店、なんかおかしくねえか」

零次が指差した先、道路を挟んで向こう側。

そこには中華料理屋があった。しかし、確かに何か。

店の中の様子が、どうもおかしい。

松居刑事もそちらに視線を向ける。

その直後、パリン、と店のガラスが割れ、大きな袋を抱えた男が窓から飛び出し、そして

ドォン！

という爆音。

そして衝撃。

その店が内部から爆破されたのだ。

松居はとっさに両腕で自らの顔をかばう。

「事件だ……白昼堂々なんてヤツ」

零次は眩き、逃げた犯人の背中を目で追っていた。

二人とは対照的に、霧江は全く怯まずにすぐさまその店に向かっ

て走り出す。

道路をひとつ飛びで越え、ドアを強引に開き店の中をうかがう。客が大勢いたのだろう。何人もの人々が、その呻き、苦しんでいた。

店の中、犯人が割った窓以外に壊れた場所はない。被害者たちの服も焼け焦げたりはせず、ほとんど綺麗な状態。焼けているのは、被害者たちの体だけだ。

――対生体爆破！

霧江はここで何が使われたのかを瞬間的に察した。

破壊対象を有機物に限定することによって、破片などによる二次被害を抑えることができる魔法だ。

逆に言えば、肉体だけを徹底的に破壊する残酷な魔術でもある。

ふと、奥から声が聞こえてきた。

「……あさん！おかあさん！」

子供だ。小さな少年が一人、店の奥で、服を着た真っ黒な塊を揺さぶっている。

対生体爆破は魔力による防壁さえ展開出来れば簡単に防ぐことが出来る。

しかし、咄嗟に起動しなければならなくなると、並の魔術師なら、せいせい一人ぶんくらいしか守れる範囲は稼げないだろう。

つまり、少年の母親は、とっさにわが子ををかばったのだ。自分を、顧みずに。

ギリ、と霧江は歯を食いしばる。

（こんな光景、二度と見たくないと思っていたのに――！）

店の前で立ち尽くす霧江のもとへ、零次が駆けてくる。

「……犯人は？」

振り返らないまま、霧江が問う。

「蟲をつけた。これを使え」

そう言って、零次は霧江に小さな補聴器のようなものを手渡した。

「わかった」

それ以上、兄妹に言葉はいらなかった。

霧江は補聴器を右の耳にはめた後、右手で腰のベルト、ホルスタ
ーからクロス・ガンを引き出す。

左手をポケットに突っ込み、その中のブラッディクロスを握った。
その後でようやく来た松居刑事に「この人たちをお願いします」
とだけ言って、霧江はクロス・ガンにブラッディクロスを差し込み、
カバーをスライドした。

《Standby》

そして、彼女は銃口を真上に向ける。

「変……身ッ……！」

第七話 戦う理由は軽くていい。

「――体が軽い」

ありきたりな形容だ。

しかしこれが一番的を得ている表現だろう。

鎧を着た筈なのに、鎧を脱いだような軽さ、奇妙な感覚にとらわれつつ鬼灯霧江はそう思った。

彼女は疾走していた。

道路のど真ん中を、バイクに乗るでもなく、自分の足で、車よりも速く、ただ走っていた。

そうして感じる、自らの肉体で風を切り裂いてゆく爽快感。

「――は、ははっ！」

力を封印して数年、久しぶりに得る感覚。

こうして走っていると、力を取り戻したという実感が、より湧いてくる。

それはかつて彼女が持っていた力に比べればまだ弱いものだったが、これで十分だと思えた。

――そうとも、このくらいの速さが、自分には合っている。

『――いい、俺は――』

ふと、霧江が先程右耳に取り付けた、補聴器のような小型の装置から声が聞こえてくる。

それは零次が『蟲』と呼ぶ、追跡用のマジックアイテム。

どういう理屈が働いているのか、霧江はよく知らないのだが、ど

うも相手の『心の声』を聞いて追跡する代物だという。
霧江が足を速めるにつれ、声はだんだんと大きくなっていった。



計画都市であるスフィアは、どの国のものであろうと綺麗に区画整理されている。

特にこの第五スフィアは、基礎である土地自体が人工的な島であるため、世界で最も美しく整理された街であると言われている。

真円形のこの島は、その中心にあるスフィアタワーから半径2km以内を第零区として定め、その周囲を均等に12の区に分割。

最も北にある区を第十二区とし、第一区から第十二区が時計周りになるように配置されている。

ゆえに、たとえば道に迷って自分がどの区にいるか解らなくなっても、方角さえわかればスフィアタワーの位置関係から自分がどの区にいるのかだいたい把握することができるのである。

逆に言えば、自分がどの区にいるかを把握しておくことで、タワーだけを指標にして方角を知ることができる、ということでもある。

男は走っていた。

タワーを背に、車に乗って。兎に角南へ南へと、必死になって走っていた。

ああ、やった。ついにやってしまった。

あの忌々しい客と店長をこなみじんにふつとばしてやった。

いや、冷静になって考えると客までやったのはやりすぎだったかもしれない。

いや、違う違う。これは天誅なのだ。

あいつらはいつも自分のことを神か何かだと勘違いして、ずっと俺を奴隷扱いしてきたんだ。

そうだ、悪くない。俺は悪くない。

それに、悪いのは店長だ。

そうだ、あのガンコおやじが一番悪い。

あの頭の固いオヤジが金さえ貸してくれていたら俺は客までふっ飛ばさずに済んだんだ。

全部あいつのせいだ。

妖怪だか何だか知れないがいつも威張り腐りやがって！てめえの傲慢さを思い知らせてやったんだ！ザマアミロ！

それに、俺は大切な家族を守るために金がどうしても必要だったんだ。

これは悪いことに使うんじゃない。いいことに使うんだ。
だから俺は悪くない。悪くないんだ！

「いいや、悪いね」

女の声。

（――なんだ？幻聴か？）

男が思った瞬間、ぐるん、と彼の視界が回った。

ズガン！と、爆音が響く。

男の車はまるで大きな手につかまれて投げ飛ばされたかのように、空中で何度も回転し、屋根から地面に落ちた。

（クソッ、なんだ！何が起きた！？）

エアバックの圧力を体前面に感じる。

あんなクラッシュで生きていたのは奇跡に近いのだろうか。

(いや、そんなことはどうでもいい！金！金を早く届けなければならぬ！というのに！)

男は店の売り上げが詰まった袋を抱えた。

幸いにして、ドアは壊れてどこかに吹き飛んでいる。
出るのには好都合だ。

這いずりながら車から脱出する男。

その右手を、紅い脚甲が踏み砕いた。

「ぐあああああああッ！！！！？」

たまらず、悲鳴を上げる男。

彼は反射的に首を振り上げる。

その足の主を、自分に苦痛を与える敵を確かめるため。

そこには、冗談のような格好をした女が立っていた。

その女は全身を真っ赤なスーツに身を包み。

妙なヘルメットをかぶって、男を見下ろしていた。

カラー付きのアイシールドに隠れたその表情はわからない。

しかし、背筋も凍りつくような敵意を感じた。

女は足を男の右手から離すと、身をかがめ、男の顔面を、その紅い籠手で掴む。

そのまま男の体を引き摺り出し、投げ捨てた。
はずみで袋は破れ、札があたりに散らばる。

「あ、金……かね……」

男はうつ伏せに倒れたまま、左手と、指のひしゃげた右手で、散

らばった札をかき集める。

「呆れた。そんなにそれが大事……?」

嘲りを孕んだ声。男は動きを止めて、改めて女を見た。

真っ赤なボディースーツに身を包んだ女。

ヘルメットはフルフェイスタイプの下半分を切り取ったようなデザインで、隠した顔の中で口元だけが見えている。

目は色つきのシールドで覆われ、ヘルメットの上部には蝙蝠の羽をデフォルメしたようなデザインの飾りが、角か、あるいはケモノ耳娘の耳のように生えている。

一目見たただけで女だとわかったのはその胸部から。

二つのふくらみを覆う胸当ては弓道部のそれとよく似ていて、全身真赤な中でそことヘルメットのシールドだけが真っ黒だった。

両腕には左右対称の籠手。

東洋的でも西洋的でもないそれは丸みを帯びたシャープなデザインで、どこか未来的なものを感じさせる。

脚甲も籠手と同じような材質で作られていて、不思議と継ぎ目らしきものが見えず、一見すると革のロングブーツのようだ。

「なんなんだ……おまえは！一体ッ！何者なんだ!？」

「何者……ねえ」

女は答えに窮した。

そういえば名前はまだ決めていなかった。

鬼灯霧江、と答えてもよかったが、一応本名は伏せるように言われているのだし、何と答えようか。

「とりあえず、正義の味方？」

「ふざけるな!!」

男はくしゃくしゃに丸めた札を霧江に向けて投げる。
何の抵抗だと、さらに呆れそうになった霧江は、その表面に男の血で小さな魔法陣が描かれていることに気付いた。

轟く爆音。

その一万円札の玉が霧江の体に当たった瞬間、それは炎を吹き上げて爆発する。

金をかき集めたのは、男が金の亡者だからではない。
術式を起動するための道具が必要だったからだ。
対生体爆破。

肉体だけを徹底的に破壊する恐るべき魔法。

これをあの至近距離で食らえばひとたまりもない。

「なるほど。確かに恐るべき魔法ね。でも」

爆煙が晴れ、男は己が目を疑う。

妙な格好の女は、あの一撃を受けて全くの無傷だったからだ。

「それでは私は倒せない」

「うおおおおお!!」

次々と丸めた札束を投げる男。

炸裂する轟音と炎。

しかし、霧江はそよ風の中を歩くように一歩ずつゆっくりと男に歩み寄る。

「魔法陣高速描画、か。そんなスキルを持っていないがら……」

霧江は再び男の前で屈みこむと、右手を振るい、払いのけるように男の顔面を殴った。

再び、地面の上をごろごろと転がる男。

「言い分があるなら聞くわよ」

霧江は立って男に向き直り、両手の指をパキパキと鳴らした。

「お、おれは……俺はッ！」

ボロ雑巾のような体のどこにそんな気力が残っているのか。
男はなおも立ち上がろうとする。

「金が必要なんだ！……娘の、治療費の……ためにッ！」

まだ手に握っていた金に、再び自らの血液で魔法陣を描く。

魔法陣高速描画、魔法陣のイメージを指先の動きに同調させ、瞬間的に描く技術。

呪文を唱えるよりも圧倒的に早く、かつ正確に魔術を起動できる希少なスキルだった。

しかし霧江は、今度はそれを許さなかった。

足もとに転がる小さなアスファルトの破片を蹴りとばす。

それは弾丸のような勢いを持って、男の左手を打ち抜いた。

「ガアアアアアアアッ！！！！！！」

両の手を潰され、苦痛に悶える男。

霧江はふう、とため息を一つついた。

「誰かを守るためなら、邪魔なものはなんでも壊していいっての？
そんなザマでよく自分が悪党じゃないなんて言えたものね」

正確には、男はそんなことを口にはしていない。

逃げている間、頭の中で必死に繰り返していたことだ。

己の行動を正当化するために。

自分自身に納得させるために。

それを何故目の前の女が知っているのか。

零次が放った『蟲』と呼ばれる追跡用のマジックアイテムの賜物だが、彼はそんなことなど知る由もない。

しかし、男は言葉を返さずにはいられなかった。

「貴、様こそ……！どこが、正義の味方だ……ッ！」

「悪をぶっ飛ばすのは正義の仕事でしょうが。」

私はお前みたいなムカツクそ野郎をとにかくぶん殴りたい。そんなだけよ。

ヒーローを引き受けた理由も、私が戦う理由も」

そう言って、霧江はまた男のそばに歩み寄る。

「悪事の理由なんてどうでもいい。その影で泣いてる人が私の目に入ってくるのが許せない。」

もし次があるなら、今度は私の見えないところでうまくやってちようだい」

男が何か反論しようと口をあけたところで、霧江はその頭をサッカーボールのようにぽーんと蹴り飛ばした。



警察と、零次が到着したのは、それからすぐのことだ。

男は拘束され、回復魔法をかけられ、連行されていった。

魔法による医療技術が発展しているため、それがただの怪我であれば、死にさえしなければ大抵は回復出来る。

男はすぐに事情聴取やらなんやらで絞られるだろうが、霧江にはもはやどうでもいいことだった。それよりもずっと大事なことがあるのだ。

霧江は零次と松居刑事の姿を見つけると、歩きながらクロス・ガンの銃口を自分に向ける。

引き金を引くと、武装やスーツが赤い光の粒子のようなものに分解され、その銃口に吸い込まれていった。

粒子は銃口にブラッディクロスを形成し、霧江がそれを抜き取ると、スライドされていたカバーが自動的に元の位置に戻った。

「兄貴、店の人たちは？」

「幸いなことに、死者ゼロだそうだ」

「ゼロ？あの子のお母さんも？」

自分の息子をかばった彼女、あの人はどうなったのか。

それだけが、霧江にとってなによりも気がかりなことだった。

「ああ、なんとか、大丈夫だった。治療が早かったおかげでどうか、な。松居刑事のおかげだ」

「松居刑事の？」

霧江は驚いて、刑事の方を向いた。

「ええ、こう見えて医療魔術は得意なんで」

後頭部に手をやり、松居刑事は照れ臭そうに笑う。

「そっか、よかった」

はーっと、霧江は胸に手をあて、安堵のため息をつく。

「俺もよかったよ」

と、零次が腕を組んで頷く。

「あのドシリアスな状況で、お前が自分から『変身！』っていいながら変身してくれて……」

俺ちよっと……っていかすごい、こう……なんというか感動したわ」

「それ、この状況で言うこと？まったく、馬鹿兄貴は……」

そう言って、霧江はがっくりと項垂れた。

そんな彼女を見てニヤケ笑いを浮かべながら、零次は彼女に問う。

「それで、どうだった？ヒーロー初出動の感想は？」

「……感想ねえ、感想だったって、相手は人間だったし、楽勝以外の何物でもないわよ。」

もうちよっと苦戦したかったくらいだわ」

霧江は肩をすくめて先ほどの戦いを思い出す。

手など抜かず、最初の一撃で瞬殺してしまってもよかった。だが一つだけ、引き伸ばしてよかったと思えることがあった。

「そうだ、兄貴。一個だけお願いがあるんだけど」

「お願い？ご褒美でも欲しいのか？」

零次は冗談っぽく聞き返すが、霧江は「ああ、そんなところよ」と真面目なトーンで答える。

「ちょっと一人、助けたい女の子がいるのよ」



天壤島署は、スフィアタワーから東に百メートルほど歩いたところにある。

事情聴取は、男が冷静になるのを待って、その次の日から始まった。

担当したのは偶然現場に居合わせた刑事、松居孝太郎。

男は、松居刑事にその胸の内を明かした。それまでずっと、店のオーナーに不当な扱いを受け続けてきたこと。

クレームを言うてくる客が多く、そのクレーム処理すべてを彼が受け持たされたこと。

そうしてずっとストレスをため込み続けてきたこと。

そして娘が魔術だけではどうにもならないような重病にかかり、その手術には大金が必要であるということ。

その金をオーナーに給料から前借を頼んだが、断られてしまったこと。

そのことでカツとなり、金庫から店の売り上げ強引に奪って魔法まで使ってしまったこと。

男はすべてを白状し、言った。

「お願いです刑事さん！俺はどんな罰でもうけますから娘は！娘だけ、どうかッ！」

男は神に祈るように、松居刑事に懇願する。松居刑事は少し困っ

たような顔を浮かべて答える。

「そいつは、俺の仕事じゃないからねえ」
「そんな……」

男は肩を落とし、がつくり項垂れる。

「しかし、実は一人ものすごいお人よしがいてねえ」
「……え」

顔を上げ、男は松居刑事の顔を見据える。

「あんたの娘さん、手術は明後日だそうだ。成功するといいな」
「……っ！……！」

松居刑事の言葉に、男の顔はくしゃくしゃに歪み、その眼尻には涙が浮かんだ。

「……だ、誰なんです？ その、そのお人よし……というのは」
「さあねえ」

男の方へは振り向かず、松居刑事は取り調べ室の窓際に立った。
そうして、窓から外を眺めて、ぽつりと一言。

「この街の、正義の味方さん、だそうだよ」

第七話 戦う理由は軽くていい。(後書き)

いかん、メインキャラが今のところ主人公（霧江）以外ほとんどオッサンだ。

圧倒的な華不足ッ！

でも安心してください！女の子は後からいっぱい出てきます！（出てくる予定です！）

っていうか読み返したら誤字脱字の多いこと。登場人物の名前間違えまくってるってこういうことやねん
ややこしくて申し訳ありませんでした……

第八話 始まりの鐘は鳴る。

爆破事件の夜、霧江は夜の街を一人歩いていた。

ヒーローとしての活動は、報告書という形で警察と市長に届け出る事になっていく。

当然、今日の分も報告書を作る必要があったが、それはすべて兄に丸投げしてきたところである。

女の子が夜出歩くのは危ない、というのは万国共通の常識だが、それはあくまで人間に限ってのこと。

人と妖の暮らすこの街では、その常識も外とは違う。

勿論人間の女の子が出歩けば危ないことに変わりはないが、人間でなければ安全なのだ。

妖魔はその多くが日の光を嫌う。

吸血鬼のように、そもそも日の下に出ること自体が直接命にかかわる種こそ少ないまでも、やはり彼らが活動する時間帯と言えば夜が主だ。

そのため、この街では昼と夜とで全く違う表情を見ることができ

る。

霧江が今歩いているのは寮の近くにある商店街だ。

薄暗い闇に覆われ、それでいて活気に満ち溢れている。

勿論、歓楽街でもないただの商店街である。

人間だけの世界ならとても考えられない光景だ。

霧江は昼間に行った第零区の繁華街を思い出す。

そことの違いは、規模と、明るさと、すれ違う住民の種族だけだった。

霧江の女子寮と、彼女が通うことになる高校、そしてこの商店街が存在するのは、スフィアタワーのある第零区の真東、第三区にある。

実験都市らしく、この島ではそれぞれの区でその住民の種類に違

いを持たせている。

第一区、第四区、第七区、第十区には人間だけが住み、第二区、第五区、第八区、第十一区は妖魔だけが住む。

そして第零区と、そこに東西南北に接する区、第三区、第六区、第九区、第十二区には人間と妖魔が混住しているのだ。

今第零区のあの繁華街に行けば、ここ以上に活気に満ち溢れているだろう。

そしてその中心となっているのはこのことと同じく妖魔だ。

昼間はほとんど人間しか見かけなかったが、今は人間を見つける方が難しそうなぐらいたくさんの妖魔が歩いている。

この街は、成立した当初から失敗すると言われ続けてきた。

そもそも妖魔が人間と共に暮らしたがるはずなどない、共存などできるはずがない、税金の無駄遣いだ、と。

しかし、そんなものは人間の勝手な思い込みだった。

確かに当初は妖魔の入居などほとんどなかった。

あっても、それは転化してしまったことで人間社会での居場所を失った哀れな元人間ばかりだった。

しかし、成立から五年もすると、妖魔達はこの島の人口（という言い方は適切ではないのかもしれないが）の半数を占めるようになっていた。

その理由について、人間の学者たちは様々な考えを述べているが、妖魔である霧江から見て、それらはどれも的外れなものばかりだった。

理由などたった一つしかない。彼らはこの街を楽しんでいるのだ。

人間は『妖魔』という言葉で一括りにしているが、本来はそれぞれが全く別の種族。

自分と同じ種族でコミュニティを作ることがあっても、別種と関

わり合うことはほとんどない。

あっても獲物や領地の奪い合いで戦う程度。

それ故に、人間だけではなく他の様々な種族と平和的に交流する事の出来るこの街は、妖魔にとっては刺激的で、魅力的な街なのだ。

「さて、と。こんなもんかな」

霧江は大きなビニール袋を左手から下げ、露店で買った人工血液入りのアイスクャンデーを咥えながら、上機嫌で帰路についていた。商店街に出た目的は三つ。

学校に必要な物資、例えばペンやノート、それからカバンにつけるキーホルダーや新しいストラップを買うため。

そして引越し早々ばたばたして、なかなか出来なかった街の散策のため。

最後に、例の吸血鬼事件のパトロールのため。

最後の一つは完全なるおまけである。

いや、それどころか事件は、資料によれば人間だけが住む区でしか――今のところは、だが――起っていないので、ほとんどパトロールの意味をなしていない。

最も、それは彼女が事件に対して不真面目に取り組んでいることを意味するわけではない。

彼女は色々と不真面目な女であるが、一度やると引き受けたことは最後まで貫き通す意地は持っている。

アイスを食べ終わる頃には、霧江は寮にたどりついていてた。

天壤学院の女子寮は7階建て。

一階には玄関ホールその他、食堂と、大浴場、寮監室、談話室等があり、学生の住居は二階から。

今年は二階と三階が新入生用のフロアである。

同様に四階と五階が二年用、六階七階が三年用となっている。

人間と妖魔が混住する第三学区の性質上、この寮にも人間と妖魔の生徒がおおよそ半数ずつ。

三、五、七階が妖魔向けフロアで、二、四、六階が人間向けフロア。

階層が分けられているのはその活動時間の違いによるもので、昼間に活動する妖魔が人間向けフロアに住んでいたりと、昼間は働きに出て夜学部に通っている人間が妖魔用フロアに住んでいたりと、別段明確に分けられているわけではない。

上下の防音は完璧なようで、たとえば夜中に上の階があーだとか、昼間に下の階がこーだとかいう苦情はほとんどないらしい。

霧江は玄関ゲートをくぐらずに、上を向いてひよい、と跳躍。

明かりの点いている階と点いていない階を交互に眺めて、しゅたっ、と屋上に着地する。

屋上は常に解放されていて、ベンチやら観葉植物やらが置いてあるが、幸いなことに今は誰もいない。霧江はベンチに座って、袋の中から紅い液体の詰まったビニールパックを取り出した。

吸血鬼をはじめとする、人間の血液をどうしても摂取しなければならぬ種族用に支給されている血液パックである。

それにストローを差し込んで中身を吸いながら、霧江は空に浮かぶ月を見上げた。

上弦の月。

来週の今頃には、天気が良ければ綺麗な満月が見られるだろう。

警察はその前に吸血鬼事件を解決したがっているが、霧江にとってはその日こそが正念場のような予感がした。

吸血鬼にとってはこんな輸血パックなんかよりも直接人間から吸った方が、よほど効率よく魔力を回復、補充できる。

しかし、この街でそれは違法行為だ。

法を犯して魔力をため込み、それを何に使うのか。大いに興味がある。

彼女が『同じ吸血鬼として放っておけない』と言ったのはそのことだ。

もちろんロクでもないことをしでかすに決まっているのだし、被害が出られると後味が悪いので見つけ次第ぶっ飛ばす気はマンマンなのだが、その前にその行為について直接聞きたいと霧江は思っていた。

それには警察が捕まえるより早く犯人と接触しなくてはならないだろう。

その為にどうすべきか。人間の魔術師には真似できないようなやり方でやる他はない。

ふと、霧江の前に一匹の黒い蝶がひらひらと舞い飛んできた。

「……かかったか」

霧江はパックに残った血液を一気に飲み干し、クロス・ガンに手を掛けた。



犯人を見つけるために霧江がまずやったこと。

それは、町中に『眼』をばら撒くことだった。

もちろん、彼女自身の目ではないことは言うまでもない。

人工島と言えど、この島には多くの虫が住みついている。

彼女はその中に、自身の使い魔を何匹も紛れ込ませたのだ。

証拠を一切残さないような犯人だ。

直接出向いては、相手の警戒を誘ってしまうかもしれない。

そこで、彼女は網を張ることにした。相手が次の事件を起こすのを待ってそこを押さえる。

その分被害は増えるだろうが、悪いのは犯人だ。

気にする必要など全くない、というのが彼女の考え方だった。

そうして、彼女は彼女自身が思っていたよりも早く犯人の動きをとらえた。

場所は第四区、すぐ隣の区だ。

すぐに変身し、彼女は他のマンションの屋上へ跳んだ。

そうして建物の屋上から屋上へ次々跳躍し、現場へと向かう。

現場には、すぐにたどり着いた。

霧江の前方、500メートル先。

彼女は使い魔の目を通して、あるマンションの一室、その窓から黒い影が忍び込むを見た。

頭からフードをすっぽり被ったその影が今、現場のマンションの屋上にいる。こちらにはまだ気づいていないらしい。

霧江は二つ手前の建物の屋上に身を隠した。

さて、どうするか。

このまま一気に攻めてもいいが、何か様子がおかしい。

相手は屋上の上でじっとしたまま、案山子のように動かない。

まるで相手の時間だけがびったりと止まっているかのような奇妙な雰囲気。

とにかく、生氣らしきものが全く感じられなかった。

そのまま観察を続けると、相手の足もとにめがけて何か小さなものが転がってゆくのが見える。

それが何なのかはここからははっきりしないが、相手はそれを見ていたかのように急に身をかがめ、その何かを拾い上げた。

そしてその直後、影は夜の闇の中に急速に飛び立っていった。

「あ……ッ！」

逃がすものか、霧江は慌てて駆け出す。

一気に跳躍し、影の背に追いつがる。
至近距離まで近づいても、相手は前を向いたまま飛び続けた。
その背に、霧江は自身の左拳を叩き込む。

「……え？」

だが、目いっぱい力を込めたその一撃が決まることはなかった。
相手の背を打ちぬいたはずのその拳は、しかし布の感触以外を感じ取れなかった。

相手には体がないのだ。

そしてその一瞬、影は首だけを動かし、振り向いた。

霧江はその顔をはっきりと見る。

それは男か女かもわからない、中世的な顔立ち。

だが生氣はなく、作り物のような質感。

その眼はまるでガラス細工のようで、こちらを振り向きはしたものの、まるで視線が合っているように感じない。

相手はまるで虚空を見ているようだ。

（――人形！）

霧江はそう直感した。

犯人は人形ドールマスター使い、本体は別にいる。

その顔面を掴もうとして、彼女は手を伸ばす。その刹那。

「……………ッ！……！！！！」

一閃。

背後から、光の槍が霧江の腹を貫いた。

「――!!!!!!」

勢いを失い、落下する霧江。

だがその途中で体勢を立て直し、その回復能力で傷を瞬時に治す。着地し、首を振り上げるが、人形はもう影も形もなかった。

いや、もはや人形などどうでもいい。

霧江はすぐさま背後を振り向き、探る。この周囲に潜伏させた使い魔を総動員するが、駄目だ。見つからない。

「なんてこと……!!」

霧江は自分に起きたことが信じられなかった。敵に背後を取られたことももちろんそうだが、自身を撃った術式の起動にすら気付けなかった。

変身前の力が落ちている状態ならいざ知らず、このスーツによって力を取り戻し、感覚も普段の数倍にまで研ぎ澄まされているはずのこの状態で。

「私を不意打ちできるやつがいるなんてね……」

ゴン、と霧江は真横にあったコンクリートの塀を殴りつける。

殴った部分からひびが入り、そこを中心に2メートル四方が粉々に碎け散った。

「面白くなってきたじゃない」

その口元に、凶暴な笑みが宿る。

かくして、霧江と、謎の人形遣いとの長い一週間は幕を開けた。

第八話 始まりの鐘は鳴る。(後書き)

プロローグとか最初の方の酷過ぎる登場人物の名前ミスとかいろいろ修正します。

しょっぱなから漢字間違えてたり初期設定のをそのまま使ったり、ひどいよね。ごめんなさい。

第九話 一人では寂しくても。

「なるほど、人形使いですか……」

「そう。島の吸血鬼で該当するやつがいれば教えて欲しいんだけど……」

「残念ながら。私は全員に会って得意魔術まではだいたい把握してるんですが、人形を使うようなのは一人も……」

「そっかあ」

ふう、と霧江は残念そうに息を吐く。

翌日の朝。

第零区、天壤島魔導学院大学付属病院。

その待合室に霧江と松居刑事の姿があった。

「人形使いから吸血鬼に転化したものがないかどうか、洗って見る必要がありますかな」

「そうね。で、さ、刑事さんにお問い合わせがあるんだけど……」

「何です？」

「怪しそうなやつがいたら一番に私に教えて欲しいのよ。」

昨日実際に戦ったわけだし、会えば本当にそいつかどうかだいたいわかるからさ」

実際は、会っても本当にそいつかどうかは分からないだろう。

昨夜は直接戦ったわけではないのだし、顔はもちろん姿はおろか、その魔力さえ掴めなかったのだから。

しかし、昨日の借りを返すためにも、どうしても警察が捕まえるより先に自分が接触する必要があるのだ。

「ほら、アレよ。『面取り』ってやつ」

「もしかして『面通し』ですか？」

面通しとは、面割りとも言い、事件の関係者に容疑者を見せて犯人かどうかを確かめることである。

「そう、それぞれ！」

「まア、それならこっちからお願いしたいところですよ。」

あなたを病院送りにするほどの奴ですからね。下手に接触して暴れられちゃ敵いませんや」

言って松居刑事は冗談ぽく笑う。

対して霧江は頬に空気をため、むっとした表情を浮かべて両腕を組んだ。

「別に病院なんて来る必要全然なかったのよ。でも兄貴が行け行け行け行けうっさいから……」

昨夜の戦闘のことを兄に知らせると、腹に刺さった槍の魔術が、もし毒素を体内に残留させるタイプだと厄介だから病院に行って検査してもらえ、と言ってきた。

霧江自身は自分の体に何も異常を感じなかったので大丈夫だと答えたが、いいから行けと同じことを何度も繰り返してきた。

ついさっきも、『ちゃんと病院に行ったか？』とメールが入ったばかりである。

うざいので携帯の電源は切っておいた。

「良いお兄さんじゃないですか。ちゃんと妹のことを心配できて」「どうだか。こんな時だけよ」

霧江はふん、と鼻息を鳴らす。

その零次といえば、どうしても外せない用事があるからと、今日は自分の大学の研究室に籠り切りだ。

「男はそういうもんです。不器用なんですよ」

「不器用ねえ……まあ、心配してくれんのはいいんだけどさ」

彼女は思う。

だいたい勝手なのだ兄貴は。

こんなちよっとした怪我で心配するくらいなら最初からヒーローなんてやらせなければいいのに。

これまでだってそうだった、私のことを優先しすぎて何度も彼女にフラれたり、かと思えばこの島での研究に没頭してロクに連絡もくれなかったり。

もしかしたら私が兄に感謝しすぎないようにそうやってバランスを取っているのかもしれない、とも思わなくはない。

実際、あれは良い兄だ。彼がいなければ今の私は生きてすらいなかったかもしれないのだし。

しかし、だとしたら、本当に不器用な男だ。

霧江はもう一度、ふう、とため息をつく。

思考を切り替えよう、いつまでもこんなこと考えても仕方がない。その時、看護婦が霧江の名前を呼んだ。

「ああ、行かなきゃ。それじゃ松居刑事、また連絡ください」

「おっと、ではそろそろ署の方へ戻りますわ。今日は昨日の爆破事件の奴の取り調べもしなきゃならないんですよ」

「ああ、あいつね」

「しかし、よく助ける気になりましたな」

「そりゃ、娘さんの方は悪党じゃないもの。助けるわよ」

霧江はそれがさも当然のこのように言っただけ。

「流石、街のヒーローですな。ではまた」

それで話を切り上げると、二人は立ち上がり、別々の方へ歩きだした。



「あーあ、お昼どうしようかな」

検査を終え、病院の周りをブラブラとろつく霧江。

結局彼女の体には何の異常もなかったようだが、検査にやたらと時間がかかって結局もう昼すぎである。

「ま、別に食べなくてもいいんだけどさ」

吸血鬼にとって、血を飲む以外の食事行為はほとんど意味をなさない。

せいぜい味を楽しむ程度であり、食べたところで栄養にもならないし腹が満ちるわけでもない。

しかし人間から転化した霧江にとって、人間らしい食事は完全に習慣化されており、吸血鬼になってからも一度も欠かしたことはなかった。

無駄だと思いつつもやめられないのは元人間の悲しい性か。

ひょっとしたら人間のように振る舞うことで人間性を保つ、という彼女の中に残った人間らしい部分の最後の抵抗なのかもしれない。だとしたら、それはまだ残しておくべきだろうと思う。

少なくともこの街にいる間には必要なことかもしれない。

人と妖の街に人間性を持った妖魔とは、なんともぴったりじゃない。

いか。

そうなる、何としても昼飯にありつく必要があった。

「兄貴にでもタカるか……いや、でもなあ……」

そういえば今日は一日中研究室に籠るようなことを言っていたよ
うな気がする。

邪魔してやるのも悪くはないが、今日は何となく気が引けた。

「かと言って一人で食べるのも味気ない……」

そこで、はっと気づく。

「あれ私……一人か兄貴とか……二択しかないじゃん……」



島に越してからまだ三日しかたっていない上、そのほとんどでバ
タバタしていたので当然のことかもしれないが、霧江には今、友達
が一人もいなかった。

（ど、どうしよう……）

今、霧江は女子寮に戻ってきていた。

そして一階にある食堂……の自動ドアの前の柱に、こっそり身を
隠し、中の様子をうかがっていた。

流石に、昼過ぎだけあってそれほど込んではいない。
が、それでも人は多い。

（とりあえず中に入って……注文して、それで……）

それでどうするとか。
霧江は逡巡する。

（だ、誰かが話しかけてくるのを、待つ？）

ごくり、と息をのんだ。

彼女にしてはひどく受け身な構え方である。

というのも、実は彼女は――

（っていうか友達って、どうやって作るんだっけ！？）

そう。

実は霧江には、彼女にとって友達と呼べるような存在が、今まで一人もいなかったのである。

いや、少なくとも10年前まではいたはずだった。

彼女がまだ人間だったころなら。しかし今はや彼らは……。

（くっ……この私が怖気づくなんて……！だめよ霧江。

この街のヒーローになろうって者が、友達の一人も作れないでどうするの……！

行け！行くのよ！そして話しかけられるのを待つんじゃないで、自分から！こう、自分からガーっと！）

ぐ、と両の拳を握り、大きく深呼吸一回。

かつてない戦いに身を投じる決意を固めた霧江は、いざ、と柱の陰から最初の一步を踏み出そうとして、

「入らないの？」

「……………ッ！！！！！！」

背後から聞こえてきた、そのたった一言に、自らの意思を粉々に碎かれてしまった。

「……あ、えと」

恐る恐る振り返る霧江。

そこに立っていたのは、彼女より少し背の高い少女。

いつも通りのやる気のないシャツとジーンズの霧江と違い、学校の制服である紺のブレザーを見事に着こなしている。

ウェーブかった髪は濃い茶色で、顔立ちは大人びていて、霧江が『私より数段上の美人だあッ!』と心の中で思わず白旗を降ってしまうほどの美人さん。

出るところは出て、締まるところは締まっていて、それでいていやらしくない完璧なボディ。

やさしい声と、聖母のような微笑み。

完全敗北。無条件降伏。霧江は女としてのプライドをかなぐり捨てて心の中で土下座してしまった。

なんですかこれ。

どうしてこんな完璧超人的な人がいきなり話しかけてくるんですか何の試練ですか神様。

いやいや何言ってるんだ私は妖魔、吸血鬼。神の敵たる悪魔。

そうだ、こいつは悪魔の私に友など作らせまいと神が嫌がらせに送ってきたその手先に違いない。

きっと正体はミカエルか何かだ!おのれ神め!

だがしかし!この私に対して四大天使の中からミカエルを選んだことについては認めざるを得ないぜ!よくわかってんじやねえか!完敗だよ畜生!ファッキンジーザスクライストオ!!

「ねえ、あなたもしかして……」

少女は霧江の顔をまじまじと見る。

やめろ！そんな綺麗な瞳で私のことを見るんじゃないミカエル！
視線だけで浄化されちゃうだろ！

あ、いやすみません本当にやめてもらえますかって……らめええ
え浄化されちゃうううう！

「しつれエしますウ！」

と声を上げらせつつ霧江はその少女の横を急いで通り過ぎ、そのまま加速して階段を上り、一気に三階の自室へと転がり込み、部屋の真ん中に置いてあった棺桶にガンガンと何度も頭を打ち付けた。

（うおおおおお何やってんだ私ィィ！！）

26回ほど頭を打ったところで気が少し静まる霧江。

その顔はもはや耳まで真っ赤である。

せっかく友達を作るチャンスだったかもしれないのに、こちらから棒に振ってしまった。

（いや、いいのよあれは……そう、ミカエルなんだから……って、
そうじゃないだろ私！）

霧江は数回深呼吸し、なんとか落ち着きを取り戻す。

彼女はさっきの出来事が自分で信じられなかった。

まさか自分があるそこまで脆いとは思わなかったからだ。

思えば、吸血鬼になってからの10年間、まともに人と向き合って話したことがあっただろうか。

いや、あったのは間違いないことだ。

しかし……。

10年前、両親も家も失った霧江達兄妹は叔父夫婦の家に転がり込んだ。

そこで彼女は、自身が人間でなくなったことを自覚する。

来年から学校に通うことを楽しみにしていた彼女を待っていたのは『教育を受ける権利』の剥奪という現実。

叔父夫婦の家の近所の子供達からも白い目で見られ、友達もできず、家の中に引き籠ったまま兄や叔父夫婦とだけ話し、この第五スフィアから発行されている妖魔向けの通信講座を受け続けた日々。もちろん、叔父や叔母や兄としか関わってこなかった訳ではない。暮らしている間色々な人と会ったが、その時は常に叔父や叔母、そして兄が一緒だった。

ここにきてようやく、自分が兄達にどれだけ助けられてきたのかを自覚する。

（も、もう兄貴のことおちよくれない……！）

この街に来了後だって、人と会うのはいつも兄と一緒にだった。

あるいは、一人の時でもそれは客と店の人という立場であったり、ヒーローと悪人という立場であったり。

今朝、松居刑事と二人でも平気だったのは、彼とは兄を通じて既に仲良くなっていた間柄だったから。

さらに思う。

この学校を受験したのは、唯一通信での受験が可能だったからではなかったか。

棺桶で密航してきたのは本当に偶然か？深層心理では飛行機の中で誰かに話しかけられるのが怖かったからじゃあ……？

友達を作るということは、誰かのおまけではなく、客でもヒーローでもなく、鬼灯霧江という一つの存在として、別のもう一つ存在

と関係を結ぶこと。

それは、彼女にとっては全く初めてのことだった。

(やばい……)

霧江は左手で口元を覆う。

(私、学校とかやっていけないの……?)

その時、ドアをコンコンとノックする音が部屋に響いた。

「は、はい!？」

しまった。ガンガンやりすぎて苦情でも入ったのかもしれない。

寮監か？それとも隣の部屋の誰かか？

とにかく返事をした以上、出ないわけにはいかない。

しかし出ても大丈夫なのか？ちゃんと対応できるのか？いや、大丈夫。

苦情なら霧江としてではなくこの部屋の住人として対応できるはず。

大丈夫、いける。私を信じろ！

おそろおそろ、霧江はドアを開ける。

私はこの部屋の住人私はこの部屋の住人。

さあ何でも来いと、ドアを開けきった、その先には――。

「こんにちは、鬼灯さん」

さっきの完璧超人的な美少女が立っていた。



「で、で……出たなミカエル!!」

がばっ、と霧江は咄嗟に両手に握りこぶしを作り、ボクサーのよう
に構えを取った。

「え? カエル……?」

しまった。と霧江はさらに焦る。

(うおおホント何やってんだ私ッ!)

さっきまで食堂の前にいたはずのこの少女が騒音のクレームをつ
けに来るはずもない。

つまり追いかけていたのだ。

なんという不覚。

(どうしよう、どうれば……)

「あの、鬼灯霧江さんですよね? 私、松居頼子って言います。あな
たと同じ新入生の」

ミカエル……いや、松居頼子と名乗った少女はにこりと笑みを浮
かべた。

(……マツイ? マツイってどっかで聞いたような。そうかアレだ、
聖なる呪文的な……)

霧江は混乱している。

「ええと実は父からあなたのことを聞いて……」

（チチ？おっぱい？たしかに私よりあんたのほうがおっぱいおっきいけど！）

「あ、私の父、松居孝太郎って言って、刑事なんですけど……」

（ケイジ？そうかニコラス的な！かっこいいよね！）

「ってあれ……？」

霧江は目をぱちくりさせて少女を見る。

刑事。父。松居。

（そういえば娘さんが一人いるって……）

「ええええええええ！松居刑事の娘エえええええええ！？」

いきなりの大声に驚いたのか、少女は一瞬眼をぱちくりさせるが、再びにっこりとほほ笑みを浮かべて、

「はい」

とにこやかに答えた。

第十話 ヒーローには相棒がいる。

「わぁーっ！霧江さんの部屋って個室なんですね！」

松居刑事の娘、頼子は霧江の部屋の中をきょろきょろと見回す。
まだ荷ほどきもろくに終わっていないので、霧江にしてみればかなり恥ずかしいのだが、頼子は気にしていないようだ。

はしゃぐ頼子。

対して霧江は内心落ち着かない。

「あ、棺桶。これでいつも寝てるんですね？」

頼子は部屋の真ん中にある棺桶を見つけると、その前で膝立ちになった。

「あの、触ってもいいですか」

霧江に視線を向け、ニコツと笑って首をかしげる。

「え？あ、うん……」

霧江が答えると、頼子は眼を輝かせて棺桶の感触を確かめたり、蓋を開いたりした。

「すごい……ほんとうにただの棺桶だわ。寝苦しかったりしないんですか？」

「い、いや別に……」

本来なら、棺桶は吸血鬼にとっての最後の領地となる場所、絶対

不可侵の領域。

心を許した相手ならともかく、初対面の人間に触らせるなどありえないことだった。

（あ、あの笑顔でお願いされたら断れない……！）

魅力チャーム魔術でもかけられたのかとも思ったが違う。

これは天性のものだ。友達がいらない霧江が、彼女に対してどう対応すればいいか困っているというのもあるが、その邪気のない愛らしい笑顔を前に心の袋を結んでおく紐が緩まない者はそうそういないだろう。

ようはそのくらいかわいい娘なのだ。

これがあの松居刑事の娘だというのが霧江の混乱を加速させている。

（遺伝子って不思議！）

と霧江は思う。

（いや、もしかしたらあの刑事、若いころはものすごいイケメンだったのかも）

「私、父からあなたのことを聞いていたんです。外からこの島の高校に入学してくるコがいるって、メールで」

いつの間にか棺桶の蓋はきれいに閉められ、頼子は霧江に真っ直ぐに向き直っていた。

松居刑事、どうやら昨日の霧江のアドバイスをすぐに実践したようである。

「それで、もしかしたらと思って、この学園の新入生の名簿を見せてもらったんですが、そこにそのコの名前があって、さっきに父にメールで確認したら間違いないって言われて。

フフ、父ったらあなたと私が同じ高校に通うってこと、知らなかったみたいで。

それなら仲良くしてやってくれって」

霧江それを聞いて、思う。

そうか、この娘は神ではなく松居刑事が送り込んできたのか。いや待て、実は松居刑事の正体は神だったのか！

霧江の脳内に仏の格好をした松居刑事の図が浮かんた。何故か神ではなく仏である。

そうか、そうだったのか。ふふふ、いいだろう松居神。

私はあなたのためなら喜んでサタンの敵となろうじゃないか！さあかかってこいサタン！貴様の魂を完全にこの世から消し去ってやる！

色々とアレな考えを浮かべる霧江をよそに、頼子は彼女の目の前に立つ。

「それと、どうしてもお礼がしたかったんです。

あの父がメールなんてしてくれたの初めてだから……あなたのおかげなんですよね？」

言って、霧江の右手をそのすべすべした感触のする両手で取る頼子。

「い、いや……私はただアドバイスをしただけだし……そんなお礼なんて……」

輝くような視線を送ってくる彼女に、霧江は少しだけ頬を染め、うつむくように視線を逸らす。

「私はそのアドバイスのお礼がしたいんです。だから……」

そう言って、霧江の手を握ったまま自分の胸元へ引き寄せる。

「私を、あなたの相棒^{パートナー}にしてください!」

「……………はあ?」

瞬間、あらゆる感情が渦巻いていた霧江の思考は完全に停止した。

「え、あの……相棒って?」

眼を点にし、霧江は問い返す。

「あなたのことは、父から全部聞いています」

全部^{全部}ということは、勿論……。

「バットにはロビン、シャツハにはオウル、天の道を往く人には戦いの神!」

ヒーローには、やっぱりパートナーが、その孤独を和らげる相棒が必要ですね!」

「え、待ってヒーローって……」

「はい！あなたですよ？昨日の中華料理店爆破事件を解決したのは！」

解決というよりは、犯人をボコボコにただけなのだが。

「これからこの街のヒーローとして活躍するんですよ！」

（あ、あのオッサン……！）

一応、刑事にはヒーローの正体については伏せるという方針を伝えてあるはずなのだが、どうやら今度会った時はしっかり問い詰める必要があるそうだ。

「私、ずっと憧れていたんです！ヒーローを助け、一緒に戦う相棒という立場に！」

（こ、こいつまさか兄貴たちと同じ人種……！）

天は二物を与えず、なんてものは嘘っぱちだ。

しかし余計な一物を与えることで帳消しにすることはある。ようだ。

「そ、それってお礼って言うかあなたの願望よね……？」

「……」

霧江が絞り出した反論に、彼女は「えへっ」と舌を出して笑った。

（こ、こいつ……最初からそれが目的で……！）

「でもでも、きつとお役に立ちますよ！損はさせません！」

戦闘はそれほどですけど補助や回復魔術は得意なんです！あと、父が刑事だから警察の情報なんかも入ってきますよ！」

「い、いや回復は自力で出来るし、警察の情報は刑事に直接聞くし！」

っというか危ないわよ！犯罪者に狙われたりするかもしれないし！」

「勿論覚悟の上です！もともと刑事の娘ですし、私自身警察志望なんです！それに……」

頼子は未だ霧江の手を握ったまま。

膝立ちになり、上目遣いで彼女の手をさらに引き、視線を合わせる。

「それに……私、霧江さんみたいなカッコイイ女の子と友達になりたいんです！」

懇願するような眼で霧江を見つめる頼子。

彼女の言葉は霧江の全身に電流を走らせた。

「と、とも……！」

（友達——ッ！）

その単語が、全身を駆け巡った。

それは彼女が今欲しがっているもの。

吸血鬼に転化して10年、一度も出来なかったもの。

「カカカカ、かつこよくなんかないわよ私は！ちんちくりんだし！」

今まで以上に狼狽する霧江。

「そんなことないですよ！霧江さんはすごくカッコいいです！」

父から聞きました、あの爆破事件の犯人の娘さんを、市長から報酬を前借りして助けたんですね？

わたし、そういうこと出来る人こそ本物のヒーローだと思うんで

す！

だからお願いします！私と友達になってください！」

霧江にはもはや、抵抗する余地が残されていなかった。
この様子を誰かが見れば間違いなくこう言うだろう。

『まるで悪い女に騙される男のようだ』

と。



再び食堂。霧江と頼子の二人は遅めの昼食をとっていた。

食堂内には最大5人がけの丸いテーブルがたくさん並べられており、左側には厨房。右側の壁際にはカウンター席が並べられている。昼過ぎだが、お茶を飲みつつ雑談にふけている女生徒は多い。

二人はカウンター席に隣同士で座っていた。

トレーに乗っているのはどちらもクリームシチューとクロワッサン二つ。

これは霧江が頼子と同じものを注文したことによる。

この10年間で初めての友達。

友達と一緒に食事をするなんていうのも初めてで、霧江の心はまだドギマギしていた。

「おいしいですね、霧江さん」

「そ、そうね」

霧江の心を知ってか知らずか、にこりと笑いかけてくる頼子。

(うう、くっ……かわいい！こんなかわいい子が私の友達なんて！)

まるで初めて彼女が出来た中学生のようである。

「ねえ霧江さん。私霧江さんのこともっと知りたいです。霧江さんのこと教えてください」

「え？私のことって言われても……」

霧江は言葉に詰まる。

こう言う時は何を話せばいいんだろう。

「なんでもいいんですよ？たとえば……そうですね、霧江さんはどうしてヒーローになろうと思ったんですか？」

「思ったっていうか、成り行きたいっていうか……特に理由はないんだけど、

まあでも悪いやつは嫌いだったし、別にいいかなって」

「成程、霧江さんは『誰かを助けたい』ではなく『悪いやつが許せない』と考えているタイプのヒーローなんですね」

頼子は感心したように頷く。

「あー、誰かを助けたいから、って答えた方が良かったかしら」

「いえいえ。私は生身の霧江さんのことが知りたいんです。

そんな飾る必要なんてないんですよ。それにそっちのほうがカッコいいと思います。ダークヒーローっぽくて」

「ダ、ダークなんだ私……」

「いいじゃないですか。私もどちらかと言えばそっちの方が好きですし」

「……いいのかな？」

「いいんですよ。それで、ヒーローになったのは市長さんからのご

依頼があつたんですよ」

「そういうことになってるけど」

霧江はカチャ、と音を立ててスプーンを置く。

「たぶん、提案したのは兄貴ね」

「お兄さん、ですか？」

「そう、諸々の事情があつてね……」

霧江のいう事情。

主に、彼女の妖魔ランク偽装の発覚によるものだ。

兄が自らバラしたのか、誰かがかぎつけてきたのが市長の耳に入つたのかは定かではないが（おそらく前者だろうと霧江は思うが）、それを見逃す代わりに、兄とその生徒たちが開発した技術とともに霧江は街の秩序を守るための新たなシステムとして組み込まれてしまったのだ。

「お兄さんと二人でこの島に来たんですよ？他のご家族は？」

『ご両親は』と聞かないあたり、松居刑事から親のことについては聞いているのだろうか。

「叔父と叔母が、関西の第3スフィアにいるわ。」

兄は忙しかったから、魔法も、実技はほとんど叔父と叔母に教えてもらった。

二人には子供がいなかったから、実の子みたいに可愛がってくれたわ」

思えば、兄だけではなく彼らにもよく助けられた。

今夜電話でもしてみよう、と霧江は二人の顔を思い浮かべながら

決意した。

「そうですか。いい叔父様と叔母様なのですね。私の叔母様ときたら、やれうちの子はどうだのと、私の弟たちと自分の子供をことあるごとに比べたがるので困ってしまいます」

そう言った頼子は、少しむっとしたような表情を浮かべている。

「誰だって自分のトコの子はかわいいものよ」

「それはわかります。でも、だからってああも必死に比較したがることもないと思うんですよ……」

頼子はふう、と一息つく。

「……すいません。あの叔母のことになるとつい熱くなってしまってます……」

「それくらい弟さんが大事なのよ、あなたも」

「それは、だって家族ですもの。……こほん、私のことより、今は霧江さんの話です。」

吸血鬼なんですよね？ やっぱり十字架やニンニクは苦手なんですか？ 日光は平気みたいですけど……」

「デイ・ウォーカーだからね。十字架も別に平気。」

ただ、ニンニクは前間違えて食ったら死ぬほど吐きそうになった」

「そうなんですか。じゃあニンニク入りの料理は厳禁ですね」

「そうね。だから外食する時はなるべくニンニク入れないようにしてもらってる」

「なるほど……他に大変なこととかって何かありますか？」

「そうねえ……特に不便はないかなあ。ああ、そうそう。」

前のスフィアだと鏡に映らなかったんだけど、ここのは何かしてあるのか、普通に映ってびっくりしたわ」

「ええと、確かこの島の鏡は特殊な魔術でコーティングされているとか。」

鏡に映ることが弱点になっている妖魔でも平気なまでにはなっているようですよ」

へえ、と霧江は感心したように頷く。

「そうなんだ。自分の姿は使い魔の目を通して見えたりするから今までも不便はなかったんだけど、新鮮でよかったわ」

「やっぱり女の子たるもの、朝は鏡の前で準備したいですものね」
「ああ、うん。そうね……」

と、霧江は頼子から少し眼を逸らす。

実は今まで自分の容姿に気を使ったことなどなかったので、ちょっと理解できなかったりする。

「では逆に吸血鬼で便利だと思ったことは？」

「色々あるわよ。人間より強かったり速かったり。

一番便利って思ったのは夜真っ暗でも電気なしで本読めることかな」

「ああ、いいですねそれ。夜目がきくってすごく便利そうです」
「でしょう？」

笑みを浮かべる霧江。

流石に会話を続けているうち心の緊張も解けてきたようである。

「ねえ、なんだか私の話ばかり聞かせて申し訳ないわ。頼子さんの話もしてよ」

「あっ、だめですよ霧江さん」

そう言って頼子は霧江の頬を人差し指でぷにと突つつく。

「私のことは『頼子』ってよんでください」

その言葉に目を丸くする霧江。

「……え？呼び捨てで、いいの？」

「勿論ですよー、友達じゃないですか」

頼子は一っこりと笑ったまま答える。

「ほらほら、呼んでみてくださいよ」

笑顔のまま霧江に促す頼子。

霧江はたじろぎ、思わず左右を確認してしまう。

当然左右に誰かがいるはずもなく、観念して頼子に向き直り、こほん、と咳をひとつついて、

「……よ」

「『よ？』」

「……………より、こ」

と、顔を真っ赤にし、視線をそらしながら、彼女の名前を口にしたら。

「ふふ、ふふふふふ」

とても嬉しそうに、笑いながら霧江の頬を突つつきまくる頼子。

「霧江さんかわいいー」

「か、かわ……可愛くないわよ私は！っていうか頼子は私のことさ
んづけなの！？」

真っ赤なまま抗議する霧江。

「それはそれ、これはこれ。とにかく霧江さんは私のことを呼び捨てにしないでだめなんです」

「な、なんで！？」

「さく何ででしょう？」

ふふふ、と、今度はいたずらっぽい笑みを浮かべる頼子。

「……だって、霧江さんは私の――」

そこまで行ったところで、頼子は口元をパッと覆った。

「……え？」

「なんでもないです！」

と、誤魔化すように両手をぱたぱたと振る頼子。

「ねえ、それよりも――」

その後も霧江は散々質問責めにあい、頼子が何を言おうとしたのか問いただすどころか彼女自身の話を聞くことも、彼女に呼び捨てにされることも出来ないまま終わるのであった。

第十一話 はじめての〇〇。

その日、私は友達と一緒に、私のお家でかくれんぼをしていました。

お母さんの部屋のクローゼットに隠れていた私は、いつの間にかその中で、つつい眠ってしまいました。

私が眼をさますと、クローゼットの中はすごく熱くなっていて、私はたくさん汗をかいていました。

おまけに、外からびちゃり、ぐちゃりとなんだか嫌な音が聞こえてきます。

恐る恐るクローゼットの扉を開けると、お母さんの部屋のあちこちに火がいつぱいついていて、それから友達と、知らない女の人がいきました。

ともだちは床にうつ伏せに倒れていて、知らない女の方はそれに覆いかぶさっていました。

ともだちの左手はちぎれて転がっていました。それがあつたはずの場所からは血がだらだらと流れていて、女の方はそれをぴちゃぴちゃ舐めていました。

私がびっくりしていると、女の方は友達の血を舐めるのをやめて、顔をあげました。

それから私を見て、口の周りが真っ赤になっているその顔で、に

たっと笑いました。



「――！！！」

霧江は、がばっと身を起こした。

部屋の時計を確認する。時間は午前二時半。

「……ゆめ、か」

ふう、とため息をつく。

「ああ、ふた閉め忘れちゃったから……」

棺桶の蓋は開けっぱなしだった。

吸血鬼にとって、故郷の土で育った木で作られたこの棺桶はとても重要なものだ。

最後の領地。絶対不可侵の領域。

それは故郷の香りに包まれて、安らかな眠りにつくためのもの。

右手で顔を拭うと、血の混じった涙で真っ赤に染まった。

洗面所に行き、水で顔と手を洗う。

鏡で、顔に汚れが残っていないかどうかを確認する。

こうしてみると、鏡も悪くない。

その明確な理由なんて浮かばなかったし、実際は使い魔で見た方が細かい部分まで見ることができるので効率がいいのだが、とにかくそう感じた。

「……」

何年振りだろう。あの時の夢なんて見たのは。

10年前の、悪夢のような現実。

当時は……いや、今でもだが……全ての魔法使いがスフィアで暮らしているわけではなかった。

人里離れた山奥で、自らの力で魔物を撃退しながら自然とともにひっそり暮らしていた魔法使いのコミュニティというのもあったのだ。

霧江たち兄妹が住んでいた、星影村もその一つ。

しかしその村は、もう地図にはない。

10年前、吸血鬼の群れがその村を襲った。

襲撃と、その鎮圧作戦によって、200人ほどいた村人はほとんどが死に絶え、その村で生き残ったのは兄妹を含めて5人にも満たなかった。

『星影村事件』と呼ばれたこの事件は、魔法使いのスフィアへの移住をさらに加速させた。

今では結界に守られていない魔法使いのコミュニティは、もうほとんどない。

「よりこ……」

ふと、口にするのは今日出来たばかりの友達の名前。

友達が出来たせいだろうか。

あんな夢が、よりによってあんな場面が再生されてしまったのは。

「……でも、きっとそれだけじゃない」

頼子。

実は最初にその名前を口に出したとき、心にほんの少しだけ違和感が生まれた。

まるで靴の中に小石が入り込んだかのような、小さな違和感。その正体は何なのか考えてみたが、答えは出ない。

「……気にしすぎ、よね。きっと」

彼女はそれを忘れようとして、それでも、違和感は消えてはくれなかった。

しかし、その時。

その違和感を心の片隅に追いやってしまう出来事が彼女に訪れる。

黒いローブ、表情のない顔、ガラスの瞳。

「――まさか、昨日の今日で!？」

それは、彼女が街に放っていた使い魔のうち一匹の、その眼前に現れた。

「――!」

直後、目に小さな痛みが走るとともに、その使い魔の視界が消えうせる。

(潰されたか)

こちらの手の内はもうバレているようだ。急ぐ必要がある。

テーブルの上に置いておいたクロス・ガンと、棺桶の中に一緒に入れておいたブラッディクロスを手に、霧江は部屋の窓を開ける。

《standby》

「変身!」

紅いスーツを身に纏い、霧江は夜の闇へと飛び出した。



「いた！」

第四区。

昨日と全く同じ場所にそいつはいた。

昨日と同じフードをかぶったまま、人形はマンションの屋上に立っている。

「あからさまね……」

霧江もまた、昨日と同じ場所から様子をうかがっていた。

昨日と同じように、何かを待っているのか静かにじっとしている人形。

罨だ、と霧江は直感した。

しかし周囲には今のところ、その人形を操っているような人形師の気配はない。

このままじっとしていても逃げられるだけだろう。ならば……。

「行くしかない！」

人形めがけて跳躍する霧江。

しかし、彼女は人形など見ていなかった。

自身の感覚器官すべてを動員し、周囲の警戒に全力を注ぐ。

昨日は不意を打たれたが、今日はそうはいかない。

なんとしても反撃の糸口をつかむ。

そのためには、あの光の槍を、いや、あれでなくともいい。

とにかく人形師本体からの攻撃がどこから飛んでくるのかを確実に見極める必要がある。

しかし、彼女のその思惑を、一筋の閃光がかき消した。

（——ッ、正面!?!）

直立していた人形、そのフードの隙間から、昨日とおなじ光の槍が放たれる。

霧江は即座に反応し、光の槍を寸前で受け止め、そのまま握りつぶす。

だが、

「——!!しまっ」

槍は一本だけではなかった。

正面から放たれたものから0.5秒ほど遅れて、周囲の建物の屋上や壁面から、計八本の槍が同時に放たれ、彼女の全身に突き刺さった。

（……っ……くそ、設置型か）

正面、人形のローブの隙間から、記号の集まりのようなものが光っているのが見える。

魔法陣だ。光の槍は誰かが放ったものではない。

あらかじめ術式を起動させた魔法陣を配置しておく設置型のトラップ魔術。

誰かが近づく、仕掛けた術者が合図する等、何らかのトリガーがあれば即座に攻撃が放たれる。

これでは相手の気配も読めないし、発動の瞬間を感知することも難しい。

霧江は左胸に突き刺さった光の槍を血まみれの手で掴む。

――左胸。

彼女の心臓をその一本が胸当てごと貫通していた。

光の槍がかき消え、霧江はその場に崩れ落ちる。

変身が解除され、スーツは十字架に形を変えてクロス・ガンの銃口に収まる。

訪れる静寂。

正面の人形はまだ立っただままだ。

動きがあったのは、それから三分後。

黒いフード付きのローブに身を包んだ一つの影が、その屋上にふわりと降り立った。

その影は一步一步、ゆっくりと歩いて、倒れている霧江に近づく。

そして、体を曲げ、霧江の顔を覗き込む。

そして、その体に触れようとしたその瞬間。

「……………チェック」

その胸に、クロス・ガンの銃口が突き立てられた。

一瞬のためらいもなく引き金を引く霧江。

赤い膜が、影の動きを封じる。

霧江は立ち上がるその勢いのまま、膜の中心めがけて右の拳を突き立てた。

赤い膜はそこから霧江の全身を覆い、再びスーツと装甲を形成する。

一方、殴られたその影は、とっさに構えたのか腕を体の前で交差し、防御の体制を取っていた。

それでも元の位置からは十数メートル後退している。

屋上の床に深く刻まれた太い二本の線がその威力を物語っていた。

「甘かったわね、私は不死身なのよ」

そう言って、右手を軽く振ってみせる霧江。
確かに心臓を打ち抜かれたはずのその体には、傷など一つも残っていないかった。

いかに不死者であろうと、頭や心臓を破壊されれば死ぬ。
しかし何事にも、例外は存在するものである。
それを見て、影は踵を返し、跳躍する。

「ハッ、逃がさないわよ!!」

霧江は駆け出し、その背を追った。

夜の闇の空を跳ぶ黒と赤の影。

あの人形のように飛行は出来ないのか、影は霧江と同じように屋上から屋上への跳躍を繰り返す。

（っし、私の方が速い!）

もう相手との距離はほとんどゼロに近づいてきた。
その背中まで、あともう少し。霧江は手を伸ばす。
しかし、彼女はその背を掴むことが出来ない。

「なっ……!」

霧江の手がそのロープを掴む寸前、影は跳躍した。
次のビルではなく、下へ。

落下する影。霧江も飛ぶが、距離が少し離れてしまった。
影がふわりと着地し、その衝撃を一切感じさせないまま駆け出す。
一瞬遅れて霧江も着地。

衝撃と轟音。落下の反動でその差がさらに開く。

「くっそ、待て！」

逃げる影と、追う霧江。

影は路地を出て、大通りへ。

流石に車も人の気配もそこにはない。

大通りに面している店も、今はシャッターが降りている。

しかし、前方に夜の闇の中で異彩を放つ光が見えた。

（あれは……コンビニ？）

霧江がその認識した瞬間のこと。

影は速度を落とさないまま、あの光の槍を10本、ファンネルのようにその周囲に展開する。

（――ッ！？まさか）

そのうち5本が、背後の霧江めがけて飛んでくる。

反射的にその全てをたたき落とすが、しかしそれが悪かった。

しまった、と彼女自身も思う。ここで攻撃を食らっても、ダメー
ジなど気にせず加速しておけば、次の攻撃にもなんらかの対処が
出来たはずなのだ。

「やめろ！！」

叫んでも、もう遅い。

残りの五本の槍は、既に、前方のコンビニに向けて打ち出されて
いた。

響くのはガラスの割れる音と、誰かの悲鳴。

影はそのまま上空へ。

夜の闇に向かって大きく跳躍した。

「く、そ……畜生！」

霧江にはその後を追うことも出来た。

元々悪が許せなくて戦っている彼女である。

人助けより悪党退治が彼女にとっては優先されるべきことだった。現に、昨日は一人被害にあうのを見過ごして罨を張った。

ここでも目の前の出来事を放っておいて、追跡を優先したって彼女の主義には反しない筈だった。

頼子だって、彼女のことをダークヒーローと評した。

そのスタイルを貫くならそうしたって許されるはずだ。

だが、彼女が悪を許せないのは、悪によって罪もない人が犠牲となるのが許せないからだ。

昨日は、犯人が今まで一人も殺害していないから、今回もないだろう、という打算があった。

それに犯人とどうしても接触したいと考えていたこともある。だから犯人を警戒させて犯行を行わせないという手段は取らなかった。

だが今は違う。

放っておけば誰かが死ぬかもしれない。そういう状況だった。

一瞬のためらいの後、霧江は変身を解く。

今、実際に目の前で起こっていることを見過ごすことは出来なかった。彼女には。

自分は本物のダークヒーローにはなれないな、そう思いながら、コンビニの中へ入る。

入口付近のガラスは粉々に砕け、店内の棚も衝撃で倒れ、商品が散乱している。

幸いなことに、客は一人もいなかったようだ。

しかし、たった一人だけ。

レジのカウンターの前に、このコンビニの制服を着た少年が一人、仰向けになって倒れていた。

「おい———っ」

霧江は彼に駆け寄り、声をかけようとするが、その姿に言葉を詰まらせる。

彼の右胸。肺の部分に、大きな穴があいていた。

（だめだ。これでは助からない！）

霧江は自分を回復することができても、他人を回復させる魔術は習得していなかった。

この傷では、人を呼ぶ時間もないだろう。もう駄目だ、と霧江は歯噛みする。

その時、血まみれの手が霧江の手を掴んだ。

「……！」

こひゅー、こひゅーという、空気の漏れる音がハッキリ聞こえる耳障りな呼吸音。

霧江は少年の顔を見る。血まみれの顔。その眼は、霧江に必死に訴えかけてきた。

たすけて、たすけてくれと、彼の眼が、懇願するような視線を向ける。

「——ッ」

その時、霧江の脳裏に、この少年を助けるたった一つの方法が浮かんだ。

この場で出来る唯一の手段にして、それは決して許されることのない行為だった。

だが、このまま見殺しにするのかと、霧江の中の別の霧江が叫ぶ。しかしそれだけは絶対にやってはだめだと、別の霧江が声を荒げる。

葛藤のうちにも、時間は過ぎる。

少年の手から力が抜け、落ちる。

呼吸音も小さくなってゆき、もはや一刻の猶予もない。

「――クソっ、もうどうにでもなれ、よ！」

言って、霧江は少年の喉元に噛みついた。

瞬間、夢の中に出てきたあの女の気味の悪い笑みが浮かぶ。

そのイメージを気力で振り払い、霧江は少年を飲みつくした。

第十二話 吸血鬼はお好きですか。

夢を見た。

とてもいやな夢だった。

夢の中で、僕は殺された。

わけも分からず、突然、何の前触れもなく。

僕の胸に大きな穴があいて、そこからどんどん血があふれてゆく。

痛かった。苦しかった。怖かった。

そんな僕を、誰かが抱きしめてくれた。

その人は「もう大丈夫」と僕に言ってくれた。

その人は温かくて、とてもやさしい声だった。

痛いのはなくなった。苦しいのもなくなった。怖いのもなくなった。

そして――

朝。目を覚ますと視線の先には知らない天井があった。

「あ……れ？」

少年は眼をこすってみる。

その天井は、いつものワンルームアパートの汚い天井ではなかった。

清潔な白と、明るい電灯。

その明るさには温かい生活感があり、ここが病院のような施設でなく、人の住居だということはある。

天井から視線を落とす。部屋には段ボールがたくさん置いてあった。

そして自分が寝ているのはベッドでも布団でもないことに気づく。それは座布団だった。

背中の違和感からすぐに把握する。

床に座布団が三つほど並べられていて、その上に寝かせられている。

お腹の上に掛けられているのは、毛布ではなくただのタオルだ。

「……起きた？」

少年は寝転がったまま、声がした方に視線を向けた。

天井を見て、そこからさらに首を上へ。

枕元。

頭の先に椅子が置いてあって、そこにジーンズとシャツを着た、長い黒髪の女の子が座って、少年を見下ろしていた。

それが、鬼灯霧江と志木恭也との、最初の出会いだった。



「名前は？」

「志木恭也です」

「年齢は？」

「……えーと、15歳……です」

「ん？ そんな年齢でコンビニの深夜バイトに入ってたのか」

「一人暮らしで仕送りもないので家計が厳しくて……店長にお願いしたんです」

午前八時。

太極館学園女子寮、301号室。

本来は男子禁制のはずのこの女子寮。

しかし今は三人もの男がこの部屋に集まっていた。

当然人数分のイスはなく、この部屋にはベッドもないので三人は床に座布団を敷いて座っている。

「なるほどね。まあ、それはいいとして……出身地は？」

「一応、この島です」

先ほどから質問をしているのは、この部屋の主である鬼灯霧江の兄、鬼灯零時。

「ふむ……じゃ、棺桶は街路樹なんか切り倒してつくらせりや何とかなるかな……」

松居刑事、こう言う理由でそういう許可って取れるモンですかね？

「事情が事情ですし、取れんことはないと思いますが」

今の零次の質問に答えたのは、もう一人の男。

天壤署の刑事、松居孝太郎。

「え、と棺桶、ですか？ 何のために？」

「寢床として、だよ。吸血鬼は棺桶で寝るものだからな。それで、君。ご両親は？」

「いえ……僕は孤児で、天涯孤独です」

そして、先ほどから零次の質問に答え続けている少年。

志木恭也と名乗ったこの少年こそ、つい数時間前、謎の人形師によって致命傷を負い、霧江によって血を吸われたあのコンビニの店員であった。

彼が眼を覚ましたのは今から三十分前。

霧江は彼に、彼が殺されかけたことと吸血鬼になったことを簡単に説明し、そのあと彼が眼を覚ましたことを携帯で兄に連絡した。

零次達がやってきたのはつい十分前だ。

「あの、僕は一体どうなるんでしょうか……？」

少年は不安げな顔で零次に問う。

「君は純然たる被害者だ。君自身の生活はとりあえずは保障されるようにはなってる。

もちろん、今まで通りとはいかないが、ね。それより……」

零次は宥めるように恭也にそう言うと、その後ろでイスに座って腕を組んでいる霧江の方を向き、深刻そうな表情を浮かべた。

「問題はお前だ、このバカ。よりによってなんてことしやがるんだ」
「だって、仕方ないでしょう？ 見殺しにすりゃよかったの？」

零次とは視線を合わせず、むすっとした表情を浮かべたまま霧江は答える。

「だからってお前なあ。吸血鬼がみだりに人間を転化させんのはたとえこの街でだって犯罪なんだよ。」

つか回復魔術くらいなんで習得しておかなかったんだよ。人助けするたびに吸血鬼増やすつもりか？」

「覚えてなかったものは仕方ないでしょう！？これからは、気をつけるわよ！」

「……ったく」

零次は大きくため息をつき、目頭を押さえた。

「まあ、繁殖行為として、ってことなら認められてないことはないが、それにも条件はある」

吸血鬼には、一般的な生殖機能はない。

彼らは人間に対して吸血を行い、吸った血に自身の血を少量混ぜ、再びその肉体に還すことによって対象を同族に転化させる。

この転化繁殖は非常に強力な繁殖方法で、彼らがその気になればあっという間にその数を増やし、最終的にはすべての人間を吸血鬼にしてしまえる可能性すら秘めている。

このため、この第五スフィア市でもこの転化繁殖をおこなう種には、条例によって繁殖行為に関して大きな制限が設けられているのだ。

「まずは『子』から見て二世代前の吸血鬼がまだ生きている場合は原則禁止。

……まあ、これはクリアできてるからいいとして、次に相手との合意であることを証明し、

転化させる前に役所にあらかじめ届け出をしておく必要がある。」

「そそそ、それじゃもう遅いんじゃない……」

恭也は顔を真っ青にしている。

口調もかなり慌てている様子だった。

「落ち着け……市長が知り合いだから、何とかしてもらおう」

堂々と不正を行うというセリフを言い放つ零時に、松居刑事は肩をすくめて苦笑する。

しかし何も聞かなかったかのように、一言も口出しすることなく話を続けさせた。

「それから『親元』は『子』が吸血鬼としての能力を覚醒させ、それが自己管理できるレベルに達するまで指導と保護、観察を行う義務を負う」

「わかってるわよ。そのくらいやるって」

霧江が無然として答える。

彼女の態度は、あくまでも善意のはずの行動が条例違反で、島外退去の危機に瀕しているというこの状況に、なんとなく納得できないものがあつたからだ。

勿論彼女はこうなることは予想していたし、後悔もないわけではないのだが……。

「お前ね。人助けで吸血鬼化を認める前例を作って、

他の吸血鬼も『人助けだから』とか言いだしてどんどん人間を転化させていったらどうなると思う」

「だーからわかってるっての。いいから、続けて」

霧江は心を見抜かれたかのような零次の言葉にさらにムツとし、視線を合わせないまま兄に続きを促す。

零次はもう一度ため息をついて話を続けた。

「それから、この島にいる限り、『子』を作れるのは一人までだ」

「……！」

その言葉に、霧江はようやく零次達の方へ視線を向けた。

正確には、志木恭也という少年の背中へ、その視線を突き刺した。

どこにでも転がっていきそうな普通の少年だ。

身長も普通、体系も普通で顔も普通。

こんな少年が自分にとって初めての相手で、そして唯一の相手になってしまったわけだ。

心境としては複雑もいい所であつたが、しかし、もう背に腹はかえられない。

彼はもう自分の血族にして眷族。

ならばせめて、立派な吸血鬼として育ててやるしかあるまい。

「……そう言うわけだから……あんた、恭也っていったっけ？ 両親いないなら丁度いいでしょう。

私が今日からあんたのママってことで」

「え、マ、ママって!？」

恭也は慌てて霧江の方へ振り向く。

「君、僕と同じ年だろう!？」

「親元を『君』よばわにするんじゃないわよ。私のことは霧江様と呼びなさい」

「わかりました霧江様……ってあれ!？」

驚愕の表情を浮かべて口元を手で押さえる恭也。

目の前の少女をそんな風に呼ぶつもりはなかったのに、体が勝手に反応してそう呼んでしまったのだ。

その様子を見て、霧江はニヤリと笑う。

「自分が『どう』なったのか、少しは理解できた？」

今のあんたは私の『子』であり『従僕』なの。私の言うことには一切逆らえないからそのつもりで」

「おいこら霧江。いきなり自分の子を脅す奴があるか」

「……ったく。いちいちうっさいのよ兄貴は」

再び兄から視線を逸らす霧江。

「うっさいじゃねえよ。親としての責任能力なしと判断されりやどうなるかわかるだろうが」

「わーかってるわよ！要はこいつを立派な吸血鬼に育てりゃいいんでしょ。」

大丈夫だから任せてくれりゃいいの！」

「大丈夫に見えないから心配してるんだよ」

「信用ないわね！何よ。こいつ助けるって決めたときからそんなくらい覚悟してましたっての！」

恭也の困惑をよそに口論になる零次、霧江兄妹。

それを見かねて、松居刑事は二人の間に割り込む。

「まあまあまあまあ。二人ともここはおさえて。」

とにかく、志木クン。これからいろいろと大変だろうが、警察としても君のサポートはさせてもらうから安心して……」

「ちょっと待ったアー！！」

誰かの大声と、ドーンという部屋のドアが強引に開かれる音。

「何だ？」

零次が声をあげ、全員の視線が部屋の入口に集中する。
そこに立っていたのは……。

「よ、頼子!？」

霧江が驚愕の声を上げる。

部屋の中に飛び込んできた頼子は霧江のもとへ一直線に走ってきた。

頼子は眼尻に涙を浮かべながら訴える。

「どういことですか霧江さん! 私というものがあらこんな、こんな男に純潔を捧げてしまうなんて!!」

「じゅ、純潔って……」

「こんな男……」

当惑する霧江と、がっくり項垂れる恭也。

「おい頼子、ややこしくなるから出てくるんじゃない!」

と、松居刑事が頼子の腕を掴んで引きとめる。

しかしその手はすぐ振りほどかれた。

「お父様は黙っててください! いいですかその殿方!

霧江さんは私の生涯のパートナーなんです! あなたなんかに渡すもんですか!!」

そういつて、恭也に人差し指を突き付けつつ声を張り上げる頼子。

「ちょっと頼子、なんかパートナーの意味変わってない?」

「おい霧江……この娘は……っていかお前この娘とそういう関係

だったのか……」

目を点にする霧江と、眼を細めて霧江と頼子の顔をまじまじと見比べる零次。

「だから違うって！頼子はただの友達で……」

「ただの！？……そんな、霧江さん……私のことは遊びだったんですか……？」

霧江のつつさの弁解。

その言葉にショックを受け、頼子はその場にベタンと座り込んでしまう。

「……霧江ちゃん、すこし話を聞こうか」

神妙な顔で霧江の肩に手を置く松居刑事。

「松居刑事まで！？だから誤解！誤解なんですよ！」

「霧江お前……最低だな……」

この島では数少ないまともな人だと思っていた松居刑事にまで裏切られ、さらに狼狽する霧江。

零次は顔を右手で覆って天を仰いだ。

「なんだかよくわかりませんが……女の子を泣かせるのはよくないと思いますよ」

とどめに、恭也からの追撃が入った。

「だあああからッ！！違うってのにこのバカ共が！！」

たまらず、どなり声を上げる霧江。

その時だった。

「すみません、うるさいですよ」

周囲を凍らせるかの如く冷たい気を帯びた声が部屋の中に響いた。
開けっぱなしの扉の前。

そこにはメガネをかけた、スーツ姿の壮年の女性。

この天井学園女子寮。『鬼女』と恐れられる、寮監・柳原梅子だった。

「「「「ごめんなさい」「」「」」」

と声を合わせて頭を下げる霧江以下五名。

梅子寮監は零次、松居刑事、恭也と順番に視線を送って、

「その御三方。保護者と言っても特別な理由がない限りこの寮は男子禁制のはずなのですが」

と背筋も凍りそうなトーンで告げる。

「い、いや……実は妹のことで重大な問題がですね……」

思わず、反論してしまう零次。しかし。

「でしたら！他でやればよろしいでしょうッ！」

と一喝されてしまった。その剣幕に再び、三人は深々と頭を下げ

る。

「「おっしゃる通りです」」

こうして色々と有耶無耶のまま、零次、松居刑事、恭也の三人は部屋を追い出され、霧江は部屋でまだ泣き続けている頼子を一人で説得することになってしまったのだった。



同日。午後一時。

「そう言うわけで、これからしばらく私はいつのことを『教育』しなきゃならなかったから……」

そう言って、霧江は恭也の肩をポンポンと叩く。

霧江、頼子、恭也の三人は、女子寮の近くにある喫茶店のオープンテラスの丸いテーブルに座っていた。

結局、頼子の説得にはかなりの時間を要してしまった。

その間、零次は恭也と今後の相談をし、妖魔化したことで人間用居住区にいられなくなった恭也は、零次の家に転がり込むことになった。引越後は後日、日を改めて行うことになる。

零時は恭也に吸血鬼としての能力を制御する方法を、まずは基本だけでも、出来るだけ早急に『親』である霧江から習っておかなければ日常生活に支障をきたすという旨を伝え、この喫茶店で霧江と待ち合わせさせたのだった。

余談だが、恭也もまた日光が致命的とまらないデイ・ウォーカーであり、霧江は自身の血統の優秀さに感心していた。

「そう、だったのですか……うう、だったらどうして昨日私を連れ

て行ってくれなかったんですか! ? 回復魔術は得意だと言いましたのに……」

そう言って、またもや涙ぐむ頼子。

「いや、だって、相手はかなり危ないやつなのよ! ……そんなやつに友達の頼子を傷つけられたくなかったし」

後半部分は霧江にしては珍しくつぶやくような小さな声だったが、頼子はしっかりと聞き逃さずにいた。

彼女はその言葉に歓喜の表情を浮かべたが、直後、首をぶんぶん振って、力強く言う。

「霧江さん……お気持ちは嬉しいのですが、私は霧江さんのパートナーなんです。

ですからそんな危険など恐ろしくありません!」

「いや、そう言われても……」

「……わかりました。確かに、私は自分の実力を一度もお見せしていませんし。

霧江さんが私を信用できないのも無理はありません」

不安げな表情を浮かべる霧江に、頼子はしかし一步も譲らない。

「では私がその殿方よりも強いことが証明できればどうです?」

そう言いながら頼子は立ち上がり恭也の顔に向けて人差し指をピシッと指した。

「彼も吸血鬼。それもディ・ウォーカーなのでしょう? 生まれたてとはいえ、強力な妖魔に変わりはないはず」

「ま、まってよ頼子。こいつはまだ自分の力の制御もきかないのよ？
下手を打ってあなたを怪我させたりしたら――」

「その時は、わたしはあなたの相棒の座を諦めるだけです。」

こんな殿方に傷を負わせられるようでは霧江さんの相棒など務まりませんから」

「……なんかさつきから酷い言われようだ……」

恭也がつぶやくが、頼子は彼の方を一切見ずに話を進めた。

「勿論、霧江さんが彼のサポートについても構いません。私はその上で無傷で勝って見せますし」

そう語る彼女の様子からは、とてもハツタリとは思えない強い意志を感じる。

霧江は、しかしその条件で恭也が負けることはまずないだろうと思った。

頼子はただの人間だ。生まれたばかりとはいえ、自身の血族である恭也がキズ一つつけられずに敗北する姿など想像だにできなかったからだ。

ともかく、それで彼女が諦めてくれるのならば、そう悪い話でもないと言えと霧江は考えた。

正直なことを言えば彼女にかすり傷一つつけたくもなかったのだが、背に腹は代えられない。

もっと危ない目に合うよりはマシだ。

「……わかった。そこまで言うなら試してみるわ。私が恭也のサポートにつく。」

それで、あなたにかすり傷一つでもついたらそんな危ない真似は二度とやめてもらうからね」

「はい！」

と、頼子は今日初めての満面の笑みを浮かべる。

「なんか、僕のあずかり知らぬところで結構大事なことが決まったような気がするんですが」

一方で、恭也は陰鬱な表情を浮かべている。それを見て、霧江はやれやれと肩をすくめた。

「あなたの訓練にもなるわ。まずは腕力の制御から始めてもらう。
それから私のことは主と呼ぶこと^{マスター}」

「ま、マスター……ですか」

「そう。様つけて呼ぶのは嫌なんでしょう？ だったらそう呼びなさい。いいわね？」

「は、はい」

恭也が答えると、霧江は「よろしい」と言ってその頭をポンポンと軽く撫でた。

その様子を見て、頼子の表情が凍りつく。

「……絶対に、負けませんからね」

痛いほど突き刺さる視線。

今の自分が何に巻き込まれ、どういう状況に置かれているのかをまだ完全に把握できていない恭也だったが、とりあえず今、この少女によってさらにトンでもないことに巻き込まれたのだということはいしっかりと理解できたのだった。

第十三話　かくしてトリオは結成される。

「やあ。ひさしぶり」

「あら、お兄さん」

女子寮の門の前。

頼子は零次が腕を組んで塀に背を預けているのを見つけた。彼に向きあい、立ち止まる頼子。

「その様子だと、お兄さんはちゃんと私のこと覚えてくれていたんですね」

「忘れるもんかよ。だって君は……」

何かを言いかけて、ふう、と零次は軽く息を吐いて口をつぐむ。

「……その君が、まさか生きていて、松居刑事の娘になっているなんて思わなかった」

「ここにいれば、いつか再会できると思ってましたから」

ふふふ、と笑みを浮かべる頼子。

彼女は笑顔の効力を熟知しているのか、ほんとうによく笑う。

しかしこんな妖艶さを含めた笑みは、今まで誰にも見せたことはなかった。

義父にも、家族にも、霧江にも。

零次は組んでいた腕を解き、一歩前へ出る。

「……あまり妹に妙なちょっかいを出さないでくれるか？ アレは今、大事な時期なんだ」

「いやだ、と言ったら？」

「力づくは嫌いなんだ」

それを聞いて、頼子の笑みが嘲笑的なものに変わる。

「あなたが？冗談でしょう？知ってますよ、霧江さんの知らないあなたの本性」

言外に、それを妹にばらすぞ、と言っているようだった。

「……」

押し黙る零次。

頼子はクスリと笑って、女子寮の中に向かって歩き出す。

「待て。目的は何だ？」

振り返って、彼女の背中に声をかける零次。

頼子は立ち止り、零次の方へは振り向かないまま、

「そんなもの10年前からずっと一つしかありませんよ」

とつぶやいて、歩くのを再開し、女子寮の中へと消えていった。

「……虫が多いな、この島は」

零次は自分の周りを飛び回っていた小さな羽虫を右手だけで握りつぶした。



「吸血鬼になった、って言われても。なんだか実感がわかないんですよね」

「そりゃそうでしょう。いくらデイ・ウォーカーでも、生まれたてのあんたが太陽の下で満足に力を発揮できるもんですか」

「つまり太陽が隠れたら、もっと吸血鬼っぽくなると？」

「その通り」

太極館学園女子寮の裏には公園がある。

そこまで規模は大きくないが、桜の木が多く植えられており、この時期になると花見の客も多い。

最も、霧江達の立っている公園の中心部には桜はなく噴水とベンチがあるくらいで、ここだけは人もまばらだった。

「お待ちせしましたー」

そう言って、頼子が四角い学生カバンと、布に包まれた細長い何かを持って駆けてくる。

恭也との模擬戦が決まると、準備がある、と言って頼子だけ寮に戻ったのだった。

「ではさっそく」

頼子はカバンを開いた。その中にはクリアファイルが幾つも入っている。

そのうちの一つを抜き取り、挟まれていた何枚ものルーズリーフを取り出した。

「それは？」

「結界ですよ」

霧江がきくと、頼子はルーズリーフをバサ、と投げ捨てる。
宙を舞った紙が、空中で一瞬静止する。

かと思うと今度はまっすぐに飛び、三人の周囲を円を描くように取り囲んで地面に落ちた。

見ると紙には一枚一枚曲線と何らかの呪文が描かれていて、全ての紙で円を描くことで一つの魔法陣として完成するようになってい

る。
こうして、半径8メートルほどの円形の結界が完成した。
部外者を巻き込まないようにするためのものだろう。
外と中を物理的、魔術的に遮断するタイプのものだった。

「こうしないと危ないですからね」

鞆を結界の端の方へ移動させると、今度は細長い棒状のものを巻いた布を取り払う。

中に入っていたのは、60センチ足らずの小太刀だった。

「そ、それって……!」

それを見た恭也が驚嘆の声を上げる。

「もしかして君は、三中の『絶対防御』じゃあ……?」

「あら、よくご存じですわね」

布を右腕にくるくる巻きつつ、頼子は微笑む。

「なによその厨二な二つ名」

霧江は眉をひそめて、ジト目で恭也を見た。

「知らないんですかマスター！一昨年の第五スフィア市中学対抗魔法術大会！」

「知らないわよ。私島に来てからまだ数日しか経ってないもの」

「相手の攻撃を一発も受けることなく、かつ相手に一発も食らわせることもなく、

相手のすべての魔法をその小太刀で捌いて魔力切れを起こさせることで大会を勝ち進み、

一度も苦戦することなく優勝し、ついたあだ名が『絶対防御』

……彼女の戦いぶりはこの島ではもう伝説級ですよ」

「へえ……人は見かけによらないわね」

霧江は頼子の顔をまじまじと見る。

それに気付いた頼子は、視線を合わせてにっこりとほほ笑んだ。

「……」

頬を少し染め、ポリポリと頭をかく霧江。

「何照れてんです？」

「……うっさい。さっさと始めるわよ。……っと、その前に」

ずずず、と、霧江の髪から何やら黒いもやのようなものが発生し、それが周囲を包みこむ。すると、あっという間に結界の内側だけ夜のように薄暗くなった。

「これで夜とほとんど同じ力が出せるようになったわ。ちょっと軽く動いてみなさい」

「え？……こう、ですか？」

そう言って、恭也は拳を突き出してみたり、軽く跳んだりしてみ

せた。

「おお、なんかかつてないほど体が軽い」

恭也は目を輝かせて自分の手のひらを見て、次に体を見下ろした。

「月が出てればもっと違うんだけど……まあ流石にそこまでは再現できないわ。」

さて、悪いけど頼子、このままやらせてもらおうわよ」
「ええ。構いませんよ」

そう言って、頼子は小太刀を抜き、鞘を捨てる。
左手一本で持った小太刀を下段に、体の右側を見せないように横向きになって構える。

「さあ、どこからでもどうぞ」
「よし……」

この体なら、あの絶対防御にも勝てるかもしれない。
恭也は胸を躍らせて、頼子に向き直った。

「ま、あまり長くやっても何だし、制限時間をつけるわよ」

霧江は携帯を出し、ストップウォッチのアプリを起動する。

「時間はきっかり5分、それまでに頼子が体に少しでもダメージを受ければ恭也の勝ち。5分間逃げ切れれば頼子の勝ちってことで」

「あら、たった5分なんて、お優しいですわ霧江さん」

頼子は左手の構えは崩さず、右手で自身の頬に触れる。

「ふふ……もう決まったようなものですわね」

「あんなこと言ってますよ」

ちらり、と霧江を振り返る恭也。

「……まあ、本当にできれば認めざるを得ないわね……」

正直に言うと、この時点で霧江は完全に両者の実力差を見誤っていた。

『絶対防御』松居頼子。彼女が中学対抗魔法武芸大会で優勝した、その意味を。

せいぜい普通よりちょっと強い魔術師程度、だと誤解していた。しかし、それに関して彼女は責められるべきではないだろう。

何せ日が浅い。この島に来て、彼女はそこに住む人間たちがどういう人間たちなのか、知らなすぎたのだ。

しかし、そこに気づけるだけの余地はあったといえなかった。

先日の爆破犯人が、他のスフィアではなかない『魔法陣高速描画』というスキルの持ち主だったこと。

しかし彼は特別有能だったわけではない。

どこにでもいる普通の魔術師だった。

少なくとも、この島では。

「言っとくけど、頼子を力いっぱい殴ったりしたら3回くらい殺すからね。」

羽でなでるようにソフトにやるのよ。ソフトに」

だからこそ、こんな言葉が出てくるのだろう。

「……霧江さん。やさしいのはいいんですが、そろそろプライドが

傷つきそうです」

「……まあ、マスターがそういうんならそうしますけど、知りませんよ俺。どうなっても」

少し困ったような笑みを見せる頼子と、そんな頼子を見据えたまま視線をそらさない恭也。

それはまるで、少しでも目をそれせばやられるとでも言っているようだった。

「……まあ、いいわ。とにかく、はじめ！」

腑に落ちないまま、携帯のストップウォッチのスイッチを入れる霧江。

こうして、戦いの火ぶたは切って落とされた。

合図とともに、恭也は駆ける。

数メートルの距離はその脚力により一瞬で詰められ、しかし彼は正面からはうち合わない。

自身の軌道を右へ逸らす。

面白い体だ、彼は自身の肉体の変化について素直に感心する。

今なら普通の人間では絶対に出来ないような動きも簡単に出来るはずだ。

そう思った。

頼子は恭也に体の左側面を見せる格好を取っている。

恭也が右に回ったということは、その背中を狙いに行ったということの意味する。

彼は頼子の背中に向け、言われたとおり軽く、拳を突き出す。

恭也の動きが瞬速なら、頼子の動きは神速だった。

突き出された拳に、頼子は流れるような動作で小太刀の柄の先を合わせる。

「――！」

恭也はその場で左右の拳を交互に突き出し、連打。

頼子はそのすべてに左手一本で対応する。

さんざん刀の柄を殴らされた恭也は一步下がり、仕切り直すために距離をとる。

その一瞬。

ばさ、と頼子が先ほど右手に巻いていた布を、恭也の顔に被せるように振るった。

そのままワントempoも置かずに左手を真っ直ぐに突き出す。

恭也は慌てて背後に跳躍した。

「……なんてこった、一昨年見た時と戦い方が違う！」

着地した恭也。

すぐさまボクシングのように構えを取る。

その頬には、赤い血が一筋。

一方の頼子も、布に刺さった刀を抜き、再び恭也に体の左側を向ける構えを取る。

今度は、布を腕に巻かずに垂れ下げたままだ。

「私が去年、大会に出なかった理由、わかりますか？」

「……」

恭也は静かに首を振る。

「一昨年は完成した『守りの剣』を試すために大会に出ました。

しかし去年の大会には、この『攻めの剣』の完成が間に合わなかったのです。

中途半端な状態では対戦相手の方に失礼でしたので、残念ですが参加は見送りました。

……この技を試合で受けたのは、あなたが初めてです」

「そりゃ、光栄ですね」

「これでもう守備一辺倒な『絶対防御』の二つ名は返上ですよ」

頼子は恭也に向けて初めての笑みを、力強い笑みを言わせて言う。それは弱者に相対した、絶対的強者の笑み。

「……！ッ、マスター！さっきの命令を撤回してください！このままでは俺の方が5分持ちません！」

「あ、うん……撤回する」

霧江は面食らって呆然としていた。

いくら恭也が生まれたての力の弱い吸血鬼だったとしても、それでも吸血鬼である。

しかも条件はほとんど夜と同じ。

その彼に対して、あんな華奢な頼子が圧倒するレベルの身体能力を発揮するなどとは、夢にも思わなかったからだ。

もちろん、自身の身体能力を魔術によって強化しているというのはあるだろう。

しかしあの左腕の動きはいくらなんでも異常だった。

（頼子って、実は人間じゃないんじゃないか……？）

そう霧江に思わせるほど、尋常ではないスピードを発揮していたのだ。

具体的に言うなら、霧江自身の拳速に匹敵するレベルの速さだった。

（これで本気は出せる……それでも、あれに対応できるかどうか……）

恭也は先ほどの攻防を振り返る。布で刃の軌道を隠しての刺突攻撃。

この島の学生なら——最近外部から来たものの以外は——だれもが知る『絶対防御』の、誰も知らない恐るべき攻撃。

果たして身体能力だけでどこまでカバーしきれるか……。

恭也はゴクリと息を飲む。

（よし、この手でいくか）

恭也は右足で、その地面を思いっきり抉り蹴った。

吸血鬼の脚力により、弾丸のような速度で砂つぶてが飛ぶ。

頼子は回転するような動作とともに右腕を振るった。

布がぶわりと広がり、頼子を覆い隠す。

おそらく布も何か魔術的なものが施されているのだろう。

先ほどよりも明らかに大きくなっており、そして砂のつぶての衝撃をもともしない。

恭也はすでに、再び距離を詰めるために駆けだしていた。

今なら、向こうもこちらの動きは見えないはずだ。

右か左、どちらから攻めるか……。

（いや、直進だ！）

頼子は一度も背を見せずに右手の布を前へ振った。

布を掴んでいる位置からもわかるが、今は右側面を前にしているはずだ。

つまり左に回れば、それは彼女の背後を取ることになる。

しかし、あの絶対防御がこの姿勢で背中をガラ空きにするはずが

ない。かと言って、右に言って正面に出るのは愚の骨頂。

ここは直進し、あの突きと刺し違える覚悟で一発当てるしかない。恭也はそう判断し、布の正面から中心に向け真っ直ぐに左の拳を突き出す。

しかし、横薙ぎの風がその思惑を切り裂いた。

（——ッ、斬撃！？）

恭也の拳が真っ二つに斬り裂かれる。

攻撃は突きだけではなかった。

なびく布がこんなにもすんなり刃を通してくるとは恭也も思わなかったのだ。

一瞬ひるんだ恭也の体に、頼子はその布を叩きつけるように振るう。

「ぐ……っ」

衝撃で完全に攻撃のリズムを乱された恭也は再び距離を取り。

左の拳と頬の傷を再生する。

頼子もまた距離を取り、構えを取り直した。

「どうします？まだやりますか？」

そう言って、再び強者の笑みを浮かべる頼子。

「……いや」

零次は構えを解いた。

「どうやら今の俺じゃ、あなたの足もとにも届きそうにありません」

たった二回の攻防。

制限時間五分の試合で、まだ30秒も経っていない。

それでも、恭也が実力の差を自覚するのには十分だった。

自分でも未知数の力を、全力で行使したにもかかわらず、相手の、その影すら掴める気がしなかったからだ。

「それで、いいですかマスター？」

「ああ……まあ、頼子がめっちゃ強いのは解ったし、べつに構わないんだけどさ……」

霧江は頭をポリポリと掻いている。

「簡単にあきらめすぎというか……もうちょっと魔法とか使ってもいいんじゃない？」

と、なぜか恐る恐ると言った様子で問う霧江。

「魔法ですか……」

恭也は首をぶんぶんと振って言う。

「一昨年の彼女の大会を見た者なら、彼女に魔法なんて使おうとは思いませんよ」

「ん……そう」

だからこそ、彼は直接攻撃で攻めたのだ。

使ったらどうなるか、その結果を恭也は既に知っている。

そんな恭也の表情から、霧江にも大体の見当はついたようで、彼女は納得していた。

頼子もすでに構えを解いていて、地面に捨てた鞘を拾い上げている。

「つていうか頼子、あなた戦闘は得意じゃないとか言ってたわけ？」

「それは、霧江さんには流石に勝てませんもの」

そう言って、笑顔で小太刀を鞘におさめ、布を巻く頼子。

「さ、霧江さん。改めてよろしく願いますね」

にぱーっと、彼女は底抜けに明るい笑みを浮かべた。
その笑顔に、霧江は気の抜けたような笑いで答える。

「……ま、仕方ないか。約束だしね。三人でヒーロー活動ってのも悪くはないかも」

「「え？」」

霧江の『三人』という言葉に、同時に声を上げる頼子と恭也。

「霧江さん、もしかしてこの殿方も……？」

冷や汗を浮かべつつ、恭也の方を指差して、固くなった笑顔で頼子が問う。

「そりゃ、まあ『教育』するには実戦が一番手っ取り早いし、最初っからそのつもりだったんだけど……」

「……ッ！」

頼子は眼尻に涙を浮かべつつ、恭也へ向き直った。

そして右手の人差し指をまっすぐに突き出し、声を張り上げる。

「私が二号ライダーですからねッ!？」

「ええっ!?!……いやそれより、ヒーロー活動って……?」

霧江のヒーロー活動については聞かされていなかったで、完全になんのか解っておらず戸惑う恭也。

「うるさいですわ!三号ライダー!これからあなたのことは三号と呼びますッ!」

「な、何すかそのあだ名!?!……もしかして、パートナーっていうのはそういうヒーロー的な意味だったんですか?」

「他に何か!?!」

「え? いや……だってなんか最初っから二人の間には……なんというか百合っけというか」

「んなわけあるか!」

霧江は叫んで、恭也の頭めがけてその辺に転がっていた石を投げた。

石は彼のこめかみにクリーンヒットし、垂直に跳ね上がる。

衝撃で倒れる恭也。

人間なら危ないが、吸血鬼なので命に別条とかそういう問題はなかったが、ツツコミにしては過剰な痛みが彼の頭に響いた。

かくして、この街で一番奇妙なトリオが結成された。

日は高く、街の風は静か。

しかし遠くの空に迫る暗雲に、この時の彼らは、まだ気がついていなかった。

第十三話　かくしてトリオは結成される。（後書き）

書き溜めが尽きたので、これから更新頻度落ちます。
ごめんなさい。

第十四話 立ち込めるは暗雲。

「ああ、せっかくの門出の日にこんな雨なんて……」

「そうねー、嫌んなっちゃう」

「なんか先行き不安ですね」

だれかの家のリビングルーム。

テーブルを囲み、窓の外を見ながら各々嘆きの甲を上げる、頼子、霧江、恭也の三人。

名前の並びは発言の順である。

「そう言えば吸血鬼って、どこまでの流水なら大丈夫なんですか？」

と、頼子の素朴な疑問の声。

霧江はそれに答える。

「その辺は個人差よ。」

私は海とか河を泳いだり渡れたりしないだけで基本平気だけど、雨に打たれただけでアウトっていう吸血鬼もいたり。

流石に水流なんか全然平気なんてやつはいないけどね」

「なるほど……では三号は？」

「私の血統だし、耐性も同じくらいなんじゃないかな。日の光も平気みたいだし」

「なるほど。流石は霧江さんの血ですね」

頼子のいう三号、とは先ほど頼子が恭也につけたばかりのあだ名である。

日本のとある特撮番組シリーズのファンの間では、物語の途中から出てきて主人公と協力するようになる新ヒーローをシリーズ初代

のそれにあやかっただけ『二号』と呼んでいる。

さらに複数のヒーローが登場する場合は、その後に登場する味方を三号、四号とする場合があったり、なかったりする。

頼子がこんなあだ名をつけたのは、自身が霧江の相棒、即ち『二号』になりたいという願望が、霧江の眷族となった恭也の登場により危うくなった為、恭也と自身との序列をはっきりさせるためである。

（そんなの気にしなくてもいいのにな）

と恭也は思う。

元々霧江のヒーロー活動のことなど知らなかったし、それを手伝えられるのも自身の吸血鬼としての『教育』のためだという。

つまりその『教育』が終わってしまったらもう自分が手伝う義理もないのだ。

言ってみればそれまでの辛抱なのである。

だというのになぜ彼女は自分のことを毛嫌いのするのか。

（マスターは否定してたけど、やっぱり頼子さんってそっち系の人じゃないのか？）

と、恭也は頼子の顔をまじまじと見る。

霧江と話している彼女の顔は何よりも輝いて見えた。

（……第五スフィア成立以来の天才と言われてる、あの『絶対防衛』だし、何かアヴノーマルな性癖があってもおかしくはないよな）

ならそっとしておくのが一番だろう。

妙な嫉妬をされないように、二人から少し離れて後ろからついてゆけばいい。

確かに霧江に瀕死のところを助けてもらって感謝はしている。
だがそこから恋愛感情が生まれたかと言えばそうでもない。

何せ出会ってからまだ一日も経っていないのだし、しかも扱いは霧江の『子』だ。

彼女が『親』だというのはなら家族愛は生まれても男女間の愛情など芽生えるわけがない。

（あれ、でもじゃあもしかして頼子さんが『子』になりたかったんじゃないあ……？）

転化繁殖を取る吸血鬼にそもそも結婚云々という概念はない。

まず性欲自体が希薄だ。

人間になりたてなら結婚願望の名残なんてものもあるかもしれないが、10年も吸血鬼であった霧江なら言わずもがな。

なればこそ、同性愛者には都合が良いのかもしれない。

転化は性を問わないのだし、考えてみれば眷族は『子』でありながら『伴侶』であるとも言えないこともない。

（じゃあ、もしかして僕を亡きものにして新しい『子』になろう、とか考えてたりするんじゃないだろうな……？ いや、そこまでは考えすぎか）

「……どうしました、三号？」

びく、と恭也の全身が一瞬痙攣する。

いつの間にか頼子が不思議そうな顔で目を合わせてきていた。

「もしかして私に対してなにかいかがわしい妄想を？ いやらしい殿方ですわ」

「なー！違いますよ、ちょっと考え事をしていただけですって！」

「どーですかねー。ねえ、霧江さん。殿方はみんな獣ですわよ」

「吸血鬼になるとだんだん性欲とか希薄になってくから、今のうち
だけでもね」

「あら、そうなんですか!？」

頼子は驚いて口元を覆う。

そうして霧江に向けていた視線を恭也に戻し、今度は体ごと彼に
向き直るように座りなおした。

「……そういうことなら今は我慢して差し上げましょう。ただし妄
想だけですわよ」

そう言って、ジト目になる頼子。

「だから! しませんて! してませんでしたって!」

あわてて反論する恭也。

「あら、ではもう枯れているんですか?」

「だーっ! そういうことでもねえからっ!」

恭也は叫びながら、椅子から立ち上がる。

その様子を見て、頼子はクスクス笑っていた。

「……ふふ、冗談ですわよ。三号ったら本気にしちゃって」

そう言ってほほ笑む頼子。

(……なんだ、普通に笑ってくれるじゃないか)

頼子の笑みに、どこかほっとする恭也。

もしかしたらそれほど嫌われているわけでもないのかもしれない。
だとしたら彼女ともうまくやっていけるだろう、そう思った。

……この時は。

「……楽しそうですね御三方」

零次が、トレーの上に麦茶の入ったグラスを四つ乗せて台所から出てきた。

「で、何でわざわざ俺の家に……？」

そう、ここは第三区のとあるマンションの一部屋、即ち鬼灯零次の住居である。

そのリビングで彼女らは談笑していた。

「だって雨だし」

と、霧江が答える。

「それにわたしたちの部屋じゃあ三号入れないじゃないですか」

今朝零次達が寮監に追い出されたことを思い浮かべながら、頼子が続く。

「そうそう。つーかこんな立派な家あるんなら私別に寮入らなくてもよかったじゃない」

と、ふたたび霧江。

零次の部屋は3LDK。一人暮らしには贅沢な広さがあった。

「……こっちにもいろいろ事情があるんだよ」

言いながら、零次は三人の前になかば投げやりに麦茶入りのグラスを置く。

「恭也は住ませるのに私を住ませられない事情で何よ」

「志木君を住ませるのはあくまで当面の住居が決まるまで、だ。

つかお前高校卒業したら彼と一緒に住んでもらうからな」

「ええっ!？」

真っ先に反応したのは霧江でも恭也でもなく頼子だった。

「どど、どうして霧江さんがこの三号と一緒に住まなきゃならないんですか!？」

半泣きで恭也を指さしながら声を荒げる頼子。

「そりゃ親子だし……つか三号？」

「じゃ、じゃあ私も一緒に住みます!」

彼女の発言に、飲んでいた麦茶を思わず噴き出しそうになる恭也。

「なんでそうなるんですか!」

「お黙りなさい!三号だって女の子多いほうが嬉しいでしょうッ!」

「いやそういう問題じゃなくて!」

「私は別にかまわないけどねー」

一人冷静な、というより気にしていないふうな、っていうかむしろ嬉しそうな霧江。

「ほら霧江さんだってこう言っていますし！3人で暮らせる家を探すですよ三号！」

「勘弁してくださいよ収入も無いのに」

「え、コンビニのバイトは？」

と、思い出したように霧江が言う。

「流石にクビですよ。第四区では妖魔の労働も規制されていますから」

答える恭也。実験都市らしく、人間のみの居住区でも妖魔を雇える区とそうでない区に分けられ、観察が行われているのだった。

「ま、バイトも合わせてしばらくはここに住みながら探すと良い。おれも手伝う」

言いながら、零次は自分の分のグラスをテーブルに置く。いつの間にか中身は飲み干してしまったようだ。

「ありがとうございます」

「ああ、そうだ志木君。きみに貸す部屋のこととちよつと話が……こっちへ来てくれるか」

零次はそう言うと、リビングを離れ廊下へ向かった。席を立ち、言われるがままついてゆく恭也。

「さて、テレビでも見ましょうか」

霧江は零次に断りも無く、テレビのリモコンを手取る。

「この時間帯面白いのやってますか？」

と、頼子。

「んー、ニュースばっかねえ……ってうわ、何この連続通り魔事件でついに死者って……」

「ああ、『切り裂き魔』ですか。確か長くて黒い髪の女の子ばかりが狙われたっていう……」

「うへえ……街中で突然首が飛んだって何よ。洒落になんないわねえ」

霧江は苦々しげに麦茶をすすった。

「警察が人間だけになってからは大体こんなもんですよこの街。だからヒーローがいるんです」

「治安悪いんだなーやっぱし」

彼女らの声を少し遠くに聞きつつ、恭也は零次に連れられて、あの部屋に入る。

零次の住むマンションの部屋の間取りは、まず玄関、廊下があり、廊下の一番手前には左右にそれぞれ六帖の洋間に続く扉があり、それらは現在、それぞれ左の部屋が書斎、右の部屋が物置になっている。

その奥にいくと、右には洗面所、風呂とトイレ、左にはキッチンがあり、廊下の一番奥に10帖のリビング、リビングの隣には8帖の和室、という構成になっている。

二人が入ったのは現在物置になっている部屋だ。

物置、といってもきちんと整頓されていて、恭也は何に使うのか

分からないものが多々あるのが気になったが、ひと一人が寝れるスペースは、というか恭也用の棺桶を置くスペースが、十分にあった。

「ここなんだがね」

「ああ、いいじゃないですか。なんか色々と変なものが見えますけど」

「ま、ここを貸すにあたって君に一つお願いがあるんだわ」
「なんです？」

「……松居頼子から眼を離すな」

「……え？」

思わず聞き返す恭也。

振り返って、零次の顔を直視する。

冗談を言ったわけではないようで、彼の顔は何処か思いつめたような、真剣そのものな表情をしていた。

「一緒に居る間、彼女の動向に気を配り、何か妙な動きがあれば知らせてほしい」

「妙なって……？」

「例えば、誰かに危害を加えようとしたり……」

「そんなことを彼女が？」

恭也は、頼子の笑顔を思い出す。

少なくとも自分に対しては多少なりとも良くない感情を抱いていることは確かだ。

しかし、あんな風に笑う少女が、自ら誰かを傷つけるような行動をするだろうか？

彼にはとても信じられなかった。

「……とにかく、頼んだぞ。一緒に居る間だけでいいんだ」

そう言って、零次は恭也の肩をポンポンと叩くと、彼を残してリビングへ戻って行ってしまった。

恭也はただ呆然とその場に立ち尽くす。

頼子ともうまくやっていけそうな気がした矢先のことだった。

どうやら、彼女にしろ、その依頼をしてきた零次にしろ、一筋縄ではないようだ。



翌日。

「あ、これなんてどうです？ 劇場版なのでさっくり観れますよ」

「さて頼子。それならこっちにすべきだ」

「確かにそちらも面白いですけど、テレビ版とばっちり繋がっちゃってますし最初に見るにしては難易度高いですよ」

「じゃあテレビ版一卷から借りよう。そうすべきだ」

「えー。だってせっかく劇場版はパレル設定なのが多いんですから、入門用にはまずそういうのから入るべきですって」

「それも悪くないんだが、やっぱり最初はひとつのシリーズに集中してだな」

第三区、大通りにあるレンタルビデオチェーン店。

『旧作・準新作半額キャンペーン中』というのぼりが並べられたその店のキッズコーナーで、零次と頼子がそれぞれ映像ソフトを片手に話し合っている。

「お兄さんがそのシリーズ好きなのはわかりますけども、霧江さんにはもっと初心者向けをですね」

「いやいや、初心者だからこそ、こうガツンと来るものがないんだよ」

「ガツンと来すぎですよそのシリーズは。やはり王道から入るのが一番ですって」

「確かにそうかもしれないけどさ……」

いい年こいた大人と女子高生が子供向けコーナーで、子供向けテレビ番組について熱く語り合っているという異様な光景を前に、霧江は微妙な恥ずかしさを覚えて、恭也を引っ張りつつこっそりと数歩下がって、気付かれないように階段を上がった。

この店は小さめのビルの中の一階と二階をそのスペースとして、一階に音楽ソフトや、アニメ等のキッズ向け作品。二階で映画、ドラマ等の映像作品を展開している。

「あー、もう。なにやってんのあの二人ってば……」

「マスターが突然『私もヒーローもの観ようかしら』なんてことを言うからですよ」

「……私も言うんじゃないかと思ったと思ってるよ」

零次と頼子には共通の趣味がある。

言うまでもなく、特撮ヒーローものだ。

霧江は頼子に初めて出会った時から気づいていたことだが、二人がお互いにそうであると知ったのは、つい数時間前のことだった。

何の気なしに言い放った霧江のその言葉に、二人が反応し、意気投合して『じゃあ早速何か借りて観よう』と零次が言い放ったのが事の起り。

この後恭也の家から、彼の荷物を零次の家に運ぶ予定があるので、そのついでにここに立ち寄ったわけだが、いざキッズコーナーを前にして、二人は霧江に最初に見せるのはどれからがいいかで議論を始めてしまった。

『どれを見せるか』ではなく『どれから始めるか』という議論の内容が、すでに霧江の後悔の念を増大させていた。

最終的にはこの店にあるヒーローものの全部を見せられるに違いない。

そう思っ、霧江は小さくため息をついた。

「どうせ半額セール中だし、なんか清涼剤代わりに映画でも借りよう」

二階の映画、ドラマコーナー。

平日のためか、人はまばらだ。

ほかの客は霧江たちと同じくらいの子高生や、海外ドラマを選んでいる年配の女性ぐらいだった。

「マスターってどういう映画が好きなんです？」

「アクション系かな。B級で、頭空っぽにして見れるのがいい……けどなあ」

下に繋がる階段を見て、霧江はまた、ため息をついた。

「アクションだと食傷気味になりそうだわ。あんたは、どういうのが好き？」

「え、僕ですか？ 映画はあんまり見ないんで……」

「そっか。じゃあ適当に見て回りましょうか」

そう言っ、二人はぶらぶらと店の中を歩き始めた。

当然、商品の陳列棚はジャンルごとに細かく分けられている。

二人は洋画コーナーから、SF、ヒューマン、海外ドラマと見て回って歩いたが、いいものは見つからず、次へ、また次へのコーナーへと足を運んだ。

「あれっ、マスター、ラブストーリーとかは興味ないんですか？」

霧江が洋画ラブストーリーのコーナーの前を目もくれずに通り過ぎたのを見て、恭也は声を上げた。

「んー？恋愛ものはねえ……よくわかんないのよ」

そう言っ、霧江は頭をぽりぽりと掻いた。

「なんていうか、男を好きになる感覚がわっかんないって言うか……そのくらい希薄になるのよ。吸血鬼になっちゃうと」

なにが、とは、言わなかった。

これからゆっくりと喪失してゆくであろう恭也を氣遣って、言えなかったのかも知れない。

過去にテレビで放映された恋愛ものの映画を見たことがあるが、まるで感情移入できなかったのを覚えている。

というより、恋愛そのものが理解できないのだ。

吸血鬼は生殖方法がそもそも人間と違う。

彼らにとつては、男女間の愛よりも、子や同胞に向ける愛のほうが重要で、特に小さな子供のころから——二次性徴を迎え？性？に目覚める前から——そういう種族だった彼女にとつては、それは開花する前に萎んでしまった感情だった。

「……恭也は、誰か好きになったことある？」

「僕も、実はないんですよ。それよりも家族のほうが大事でした」

はにかむ恭也に、霧江は「そっか」と小さく笑いかけた。

それなら彼が、自身の恋愛感情の喪失に、思い悩むことはないかもしれない。

もつとも、自分が当初から持ち得なかったものである。

それを失ったことに対しどんな感想を抱くか、そんなことは想像がつかない。

そこが悩みどころだった。

吸血鬼になるということは、能力や肉体が変わるだけではない。

心のあり方も、人間であったところから徐々に変化してゆく。

問題なのは？徐々に？という点だ。

肉体のように一気に変容すれば何も心配する必要もないのだろうが、そうではない。

心のあり方は、きっと体のあり方に依存するのだ、と霧江は思う。肉体が変化し、その変化に心のほうが少しずつ追いつこうとするのだ。

その変化に対する戸惑いや苦悩、そのケアも、親である霧江の役割であった。

「それより、家族って？確かあんたも親がいなかったわよね」

「ええ。捨て子だったの……昔は孤児院にいたんです。そこに一人だけ、家族と呼べる人がいました」

「捨て子……そっか……ごめん」

思わず、顔を伏せる霧江。

両親がいないのは彼女も同じだったが、死なれたのと捨てられたのでは、残った傷は大違いなはずだ。

「いいですよ。俺ももう、いないものと思ってます。それに、珍しくないですよ、捨て子なんてこの島では」

「……！そうなの？」

「ええ。私もそうでしたから」

と、二人の後ろから、その会話にいつの間にか頼子が割り込んできていた。

「うわ、と……びっくりした。頼子、どういふことよ」

「この島では人間と妖魔のハーフが生まれるんですけど、育て方が難しくてよく捨てられちゃうんです。そういう子のために公共の孤児院がいくつもあるんですよ」

「そうなんだ……っていうことは松井刑事は……」

「はい、義理のお父様です」

その言葉に、霧江は驚きながら納得もしていた。

最初に会ったときから、二人の顔は似ても似つかないと思っていたからだ。

「まあ、でも？人間の捨て子？は珍しいんですけどね」と、恭也が言う。

「そうですね。周りがハーフばかりで、孤児院にいたころは怖くて仕方ありませんでしたよ。自分が一番弱い立場でしたから」

「僕も……そうですね。あの人がいなかったら今頃……」

昔を懐かしむような、恭也と頼子。

彼らの話に、霧江は微かなシンパシーを覚える。

周りが人と妖魔のハーフで、その中で自分だけ純粋な人間だった恭也と頼子。

周りが純粋な人間で、自分だけが妖魔だった霧江。

兄や家族に守られてきた霧江。

松井刑事にもらわれた頼子。

恭也も、唯一家族と呼べる存在に救われたと言う。

「なんか、似てるわね。三人とも……」

そう言って、霧江は小さく笑った。

「そうですね……」

「傷でもなめあいますか」

答えるように笑みを浮かべる頼子と、冗談めかして言う恭也。彼らと出会ったは、決して偶然ではないはずだ。

霧江は、そう思った。

「そういえば、頼子。決まったの？」

気づいて、霧江は声を上げる。

先ほどまで頼子は零次とどの映像ソフトを借りるか議論していたはずだが、決着は着いたのだろうか。

「はい。もうバッチリですよ。今お兄さんがお会計に並んでいます」

頼子はニコニコと子供のような笑みを浮かべながら答えた。

それがあまりにも嬉しそうだったので、霧江もつられて笑顔になる。

「霧江さんは、ほかに何か見たいものありました？」

「ううん、何か見ようと思ったけど、やっぱりいいわ」

霧江は首をふって答えた。

友達と共通の話題で語り合えるようになるのは嬉しいことだ。

人間と吸血鬼でも、それは変わらなかった。

霧江は、他の映画を借りるのはとりあえずやめにすることを決めた。

間に無駄な映画を挟むより一気に見てしまったほうがいいだろう。他の映画を見るよりも、彼女達との会話に費やしたほうが有意義に時間を使えるに違いない。

恋愛が出来ないからこそ、友人と家族は何よりも大事にしなければならぬ。

それに、と霧江は思った。

（それに、同じ境遇を抱えた私達なら、いつか本当の家族みたいになれるかもしれないし……）

彼女は、彼女だけは心からそう思っていた。

彼女を取り巻く友人達の、本当の思惑も知らずに。

第十五話 決戦は空中で。

霧江、頼子、恭也、零次の4人は第四区の住宅街に沿った大通りを歩いていた。

零次の左手には映像ソフトが15本も入った袋が提げられている。結局、議論に決着はつかずに、特撮もの一シリーズ丸ごと、劇場版がいくつかをまとめて借りたらしい。

半額とあわせて十本以上で十泊レンタルのキャンペーンもやっていたことに気づいたらしく、とりあえずたくさん借りることで妥協したようだ。

どんな妥協だよ、と思いつつ霧江は歩く。
昨日の雨は嘘のように晴れていた。

恭也が先導し、その隣に霧江。後から頼子と零次が後に続いている。

恭也がアパートに残してきた荷物を、とりあえず必要な分だけ零次の家に運び込むため、3人ともついてきたのだった。

「……って言っても、大したものはないんで一人でも大丈夫なんですが」

「いいじゃない。将来一緒に住むとなればあんたの部屋選びのセンスも見ておきたいし」

と霧江。

「って、ただの激安おんぼろアパートですよ？」

言いながら、背後をちらりと見やる恭也。

昨日零次に言われたことがどうしても気になり、二人の様子を確

認する。

別段何かを警戒しているふうでもない零次と、ニコニコしながらついてくる頼子。

この二人の間にいったい何があるのか、先ほどのレンタルビデオ店でのやりとりといい、今の彼には想像もつかなかった。

仲が悪いようには、とても見えなかったからだ。

「いいじゃない。それでも参考にやなるわ」

「そうですか？」

答えながら、前を向きなおす恭也。

零次が頼子のそばに居る今、自分か彼女の動向に注意する必要があるはずだ。

談笑しながら歩いてゆく四人。

その彼らに、鋭い視線を向ける影があった。

「長い……黒髪の女……」

ぎらり、と銀色の刃は鈍く光る。

「……？」

真っ先に気づいたのは、頼子だった。

彼女は立ち止まり、背後を振り返る。

「どうした？」

数歩遅れて零次も立ち止まり、振り返って頼子の隣へ。

「いえ、今何か……」

「なになに？」

「どうしたんです？」

続いて霧江、恭也もその足を止める。

次の瞬間。

「「「危ない！」」」

同時に叫んだのは、霧江、頼子、零次の三人。

頼子と零次は道をあけるように左右へ跳び、霧江は一人それに気付かなかった恭也を道路側へ付き飛ばし、その反動を利用して自身も反対側へ跳躍。

その瞬間、突風が四人の間を突き抜けるように吹いた。

「……ッ！」

歩道に、鮮血が飛び散る。

恭也を突き飛ばした霧江の左腕が、肘のあたりから切断され、宙を舞っていた。

「マスター!？」

腕がゴトリと落ち、恭也が叫んだ。

「騒ぐな！」

傷の断面を落ちた左腕に向ける霧江。

血液がまるで鎖のようにつながり、落ちた腕はロケットパンチを

引き戻すようにあるべき場所へ戻る。

「あ、そっか大丈夫なのか」

ほっと胸をなでおろす恭也。

「落ち着いてる場合でもないけどね……もっかいくるわよ！伏せて！」

霧江の声に、あわてて頭を両手で覆いながら、地面に伏せる恭也。
霧江は地面に根を張るようにどっしりと構える。

再び突風。

同時、霧江は何かを掴むようにその右腕を振るう。

轟、という音と、再び鮮血。

霧江の右腕に、鋭い刃物を通したような真っ直ぐな傷がつく。

「くそっ！」

振り返る霧江。相手の影は、もはや遥か先だ。

「なんです、今の！」

恭也が身を起こす。

「多分、『切り裂き魔』よ！昨日のニュースに出てた」

霧江が、自身の傷を再生させながら、握っていた右手をぱ、と開く。

その中には茶色い毛が三本ほど掴まれていた。

「これで、なんとか追えない？」

「任せてください！」

と、頼子がカバンから例のルーズリーフ入りのクリアファイルを取り出す。

その中の一枚を取り出し、頼子は霧江の手から毛の一本をつまみ取ると、髪を地面に置き、その上に茶色い毛を乗せた。

「追跡術式、起動！」

紙には時計の文字盤のようなものが大きく描かれている。

頼子がその上で手を翳すと、その毛が浮き上がり、丸い小さな球体になった。

球体は一度『4』の数字の上に移動すると、そのまま少しずつ真中へ移動を始めた。

「……！なるほど、その時計はこの島ってわけか」

その紙の上の図は、時計の文字盤がこの島全体を表し、小さな球体に変化した毛の持ち主を表している。

頼子の説明を待たずに、いち早く気づいた零次は納得したように頷くと、霧江の方へ顔を向けた。

「霧江！」

「わかってる」

言われる前に、霧江はクロス・ガンを引き出し、すでにブラッディクロスのセットを済ませていた。

《Standby》

「変身！」

空中に向け、引き金を引く。
全身に纏わりつく赤い膜が、霧江をヒーローに変える。

「よし、眷族ならテレパシーが使えるな……志木君！やつの位置を霧江に中継してくれ。

頼子は術式の維持を頼む」

「は、はい」

「了解しました！」

恭也は緊張気味に、頼子は微笑みを浮かべながら答える。

「でもどうやって追う？むちゃくちゃ速いわよ相手」

「ああ。こいつを使え」

そう言って、恭也は、ポケットから小さな電卓のような装置を取り出し、霧江に手渡す。

「……？なにこれ」

一見横長の電卓のようだが、それにしては妙に分厚く、裏にはベルトに固定するためのクリップが。

表には3×3列に並んだ数字キーと、その右側になぜかEnterキーが付いている。

「それは『アイテムボックス』……そいつで5、1、0でエンターだ」

「こっう？」

言われた通り、数字を押し、エンター。

すると装置の側面から何筋もの黄色い光のラインが走り、霧江の全身に絡みつくように走る。

「おお、これって……」

光はすぐに形を成し、それが収まると、霧江の体は真黒なコートに包まれていた。

「あ、アレかよ！……でもこれなら追いつけるわね」

島に來た初日、高速で逆さまに流れてゆく景色で霧江に軽いトラウマを植え付けた、あのアイテムである。

「それと、9、6、3だ」
「ん」

今度は9、6、3でエンターを押す。

白い光のラインが、右の籠手に纏わりつく。

光が消えると、右籠手の甲の部分に、白い十字架が埋め込まれるように装着されていた。

「これは？」

「殺人級の犯罪を犯した妖魔——警察はヴィランと呼んでる——を拘束するためのモンだ。体力を削った後、そいつで思いっきり殴れ」
「おっし！」

霧江は『アイテムボックス』をコートの内、腰に巻いたベルトの左側に、クリップを挟んで固定する。クロス・ガンのホルスターと丁度反対側になる位置だ。

ガチリ、と霧江は両手のこぶしを打ち合わせる。
コート内部、強い風が渦を巻いた。

「飛行術式起動、最高速度……行くわよ切り裂き魔！」

残った零次たちを吹き飛ばしかなないほどの轟風と共に、以前より数段出力アップした『空飛ぶコート』を纏った霧江は、大空へ飛び立った。



第四区上空、200メートル。

島の中央、スフィアタワーに向かって、霧江はまっすぐに飛ぶ。

魔力を込めれば込めるほど早く飛べる『空飛ぶコート』

以前のものより出力は上がっており、加えて吸血鬼であり魔力の容量が大きい霧江が全力で魔力を注ぎ込んでいるため、最初に零次に担がれて跳んだ時よりも数十倍のスピードを発揮していた。

「ねえ、勢いで思いっきり吹っ飛んで来ちゃったけど、さっきので頼子の術式飛ばされたりしてない？」

そのスピードの中、全く噛まずにしゃべる霧江。

『とりあえず、大丈夫みたいです』

霧江の脳内に直接恭也の声が響く。

彼らのように、『親』、『子』の関係にはなくとも、同じ血を分けた『血族』であれば、吸血鬼同士は離れていても会話が可能だ。
今回はその有効的な活用法といえるだろう。

「そう。で、このまま真っ直ぐでいいの？」

『はい。高度もそのままです』

頼子の追跡術式の図面上、離れた位置にある黄色と赤の球が、同じ高さで浮きながらその中心まで移動していた。

赤いほうが少しだけ早く、どんどん距離を詰めてゆくのが良く見える。

彼女の追跡術式の強みは、三次元的に相手を追跡できることにあった。

「とりあえず道路の上で、つてのはアレなので何処かに移動したいんですが」

地上。

頼子はその術式が描かれているルーズリーフを、まるで料理を乗せるトレーのように両手で水平になるよう持ち、周囲をキョロキョロ見回していた。

「それならさっきテラス席のある喫茶店があったぞ」

と、もと来た道を指さす零次。

「こちらは今から喫茶店に移動します」

『楽しそうだなオイ』

報告する恭也、怒ったような声で答える霧江。

「……ま、いいんだけどね」

再び空中。

間もなく第零区との境界に突入する。

『しかし相手も相当早いですねコレ……』

「問題ないわ。もう見えてる」

その距離はまだ一キロほど離れているが、霧江の視界には既に相手の姿が映っていた。

といっても、はっきりは見えない。

唯一つ、長く茶色い尾のようなものを引いていることだけは確認できた。

「まだこっちには気づいてないわね。このまま一気に捕まえてやるわ」

そう言って猛禽のように狙いを定める霧江。

ぐ、と丈の合っていないコートの袖の中で、その右腕を握りしめる。

そうやってじりじりと間を詰めてゆく。

相手との距離はあと200メートルにまで迫っていた。

その時、

「――！気付かれ……え？」

一瞬。

前方から視線を感じたかと思うと、相手の影はそのまま直角に左に折れ、そのまま横にまっすぐ飛んで行った。

（曲がりやがった！）

逃がすまい、と霧江も急いでその方向を転換しようとする。
しかし……

「あ、あれ？ ちよちよちよ……！」

曲がれない。

霧江はそのまま無駄に数百メートル真っ直ぐ飛んでしまう。

「ちよっと！ 曲がれないんだけどこれ！」

霧江はコートに通した魔力を切り、強引に風の噴射を停止させて減速。急いで方向を変え、相手が逃げた方へ向って再び風の噴射を再開した。

『……《仕様だ》だそうです』

テレパシーで兄の伝言を伝える恭也。

「おーけー、死ねつつつといて」

追跡再開。

（速度はこっちが上だけど、小回りは圧倒的にあっちじゃない！）

霧江はすぐに追いつくことができたが、相手のスピードを全く落とさない急カーブに対応しきれず、また離されてしまう。

その繰り返しで、相手との距離がだんだんと離れていくようだっ

た。

『頼子さんの術式の持続可能時間はあと5分です。逃げ切られるとやばいですよ』

恭也の声は焦りを帯びていた。

「わかってるわよ！」

声を荒げる霧江。

ともかく、5分以内に何とかするしかない。

「こうなったら一か八か……！」

再び相手に接近する霧江。

今度は左に折れる。

「うおおお！痛ってえええええええええ！」

常人なら体が真つ二つになりそうな勢いで、霧江は体を思い切り曲げる。

そのまま強引に戻し、方向転換。

「つしやあ！」

ヘルメットのシールドの下で涙目になっている霧江。

「だ、大丈夫ですか？」

「不死者でよかったって今ものすごい思う」

痛みはあっても肉体的ダメージはすぐに回復できるため、実質無傷。

急カーブに対応してきたことに焦ったのか、相手はその視線を再び霧江に送った。

直後、急降下。

恭也の『あっ!』という声が頭に響く。

「問題ないわよ!」

影を追って、霧江も急降下する。

『ちょ、ちょっと! 乗っちゃだめですよマスター!』

曲がれた、とはいえそのカーブはスムーズとはいえず、膨れが大きい。

もし地上スレスレで急上昇なんてされた日には霧江と地面のランデヴーは必至だ。

そして予想通り、相手は地面すれすれで方向を変え、急上昇。

「甘いんだよ!」

待ってました、とばかりに、衝突寸前、風の噴射を切ると同時に右の拳を地面に向けて打ち付ける霧江。

轟音と衝撃が周囲を襲い、地面に巨大なクレーターができる。

反動で浮き上がった霧江は、空中で強引に姿勢を変え、コートに再び魔力を流し、追跡を再開する。

『ひ、人がいたらどうするんですか……』

恐怖と焦りと安堵の入り混じった声で恭也がつぶやくのが聞こえ

てくる。

「そんなときは別の手で行ったわよ」

答えながら、この分ならすぐに追いつける、と思った霧江。
しかし相手は予想外の動きに出る。

「――！！」

相手は再び方向変換。

しかし上下左右そのどれでもない。

（向・か・つ・て・く・る・！）

相手は180度方向転換。

霧江に向けて、真っ直ぐに突っ込んできた。

（そ・っ・ち・が・そ・の・気・な・ら・――・！）

応じるように、右手の指をパキパキ鳴らしながら、直進する霧江。

『マスター！』

恭也が叫ぶ。その瞬間、交錯。

「……っ！」

真正面からのぶつかり合い、という霧江の思惑は外れた。

相手は激突の寸前、その線をずらし、霧江の真横をすり抜ける。
同時に、その長い尾で巻きつけるように霧江の全身を撫でた。

切断される『空飛ぶコート』

しかし、やられっぱなしで終わる霧江ではない。

「!!!!」

霧江はここで初めて相手の姿をはっきりと見る。

女だ。童顔で、茶色く、縮れた髪。

体は小さく、白いワンピースに身を包んでいる。

ここまでなら普通の人間と大差ない。

彼女の最大の特徴は、その長い尾だった。

茶色い毛におおわれ、下向きの銀色の刃が一体化しているその尾を、霧江はその右手でしっかりと掴んでいた。

「せっかくだし、このまま地上まで一緒にしようじゃない!」

ヘルメットの下に浮かぶ邪悪な笑み。

霧江は握る力を強くし、背筋に寒気を走らせ対応が遅れた少女と共に、自由落下した。

「……よし、俺は落下地点に向かう。志木君は警察へ通報。頼子はちよつと休め」

「わかりましたー」

追跡術式を切り、だーっと、だらけた様子でテラス席のテーブルに突っ伏す頼子。

魔力も体力も似たようなもので、長い間魔法を使いつぱなしにするということは、長距離走と同じようにかなりの疲労感を与える。

「じゃあ俺は、店の人に電話を借りてきます」

と、席を立つ恭也。

「なんだ、携帯持っていないのか君。いいよ、おれのをさえ」

言って、零次は自分の携帯をテーブルに置いた。

「あと、霧江にひとつ伝言を頼む」

「伝言？」

「ああ、アイテムボックスに――」

零次は伝言の内容を恭也に伝え、「じゃ、後は任せたぞ」と言
って零次はその場から走り去った。

「……マスター、大丈夫でしょうか」

言いながら、携帯を操作する恭也。

「大丈夫ですよー、なんたって霧江さんですし。
私たちはできる限りやっただからです、後は安心して待つてれば
いいんです」

頼子は顔をあげて、にっこりとほほ笑んだ。

衝撃音。

二人が落下したのは、第零区南東部。

ビジネス街中央の、小さな公園だった。

もともとは小さな噴水があった場所には、今はクレーターが出来
ている。

クレーターの中央に、変身したままの霧江と相手の少女は倒れていた。

空中でどちらも相手を下敷きにしようともみ合っているうち、結局二人ともまったく同時に地面に激突してしまったのである。

こうなると、先に立ち上がるのはその生命力、回復力から必然的に霧江ということになった。

「……はぁー、流石に、体中痛いわ」

霧江は立ち上がり、右肩をぐるぐる回しはじめた。

『無事ですか？ マスター』

恭也の声。

心配してくれているらしい。

全く、不死身だと何度言えばわかるのか。

そう思いつつも、霧江の口元は緩んでしまう。

「ええ、とりあえずはね」

『それなら良かった……それで、零次さんからの伝言で、《アイテムボックスに0、0、0と入力しろ》とのことです』

「000?」

言われた通り、霧江はベルトにつけたまま、左手でアイテムボックスのキーをたたく。

すると、ヘルメットのシールド内側、視界の邪魔にならないよう左下の方に、『顔認識システムオン』と表示された。

『それで、顔を見ただけで市役所にある登録データと照合できるようです。オフにしたいときはもう一度同じ番号を入力、だそうです』

「へえ……」

相手の少女を見下ろし、顔を確認する。

すると顔の周辺にカーソルが表示され、左下の文字が『照合中……』に変わった。

そのまましばらくすると、それが『検索終了』に変化し、シールドの左半分に少女のものらしいデータが表示された。

「平坂中学一年……伊達マカ……妖魔ランクC、種族は『鎌鼬』……と」

他にもいろいろ表示されていたが、霧江には特に必要にないことだった。種族さえ分かれば十分だ。

「ずいぶんハデなカマイタチだったわね……」

霧江は表示を消すと、改めてその姿をまじまじと見る。どうやら気絶しているようで、ピクリとも動かない。

「……死んでないわよね？流石に……」

そのまま身をかがめ、右手でその少女の肩に触れようとして、

「！」

ガガガ、と三発。

その右籠手に衝撃が走った。

衝に目を離れた一瞬の隙に、少女の姿は消えていた。

「クソっ！」

思った以上に、敵の体は頑丈だったらしい。

と霧江は苦虫を噛み潰す。

実は、霧江は知る由もないことだが、地面に激突する瞬間少女は自身の長い尾をスプリングのようにぐるぐる巻きにし、それを使って衝撃を和らげていたのだった。

しかし、どうやら彼女は逃げたわけではないらしい。

カンカンカン、と、霧江の左籠手、右脚甲、ヘルメット後頭部に衝撃。

数秒遅れて、今度は装甲のない左太もも、右肩、背中に裂傷が走る。

「……！」

「アハハ」

まだ幼さの残る笑い声。

「痛かった……すっごく痛かったわよ……！もう許さない、絶対に許さないから！」

鎌鼬の少女の声が、霧江の周囲からこだまするように響いてくる。

「殺してやる！黒髪の女……！殺してやる……！」

「……ッ！」

霧江の傷はすぐに再生するが、再生したそばから再び切られてゆく。

鎌鼬の少女は霧江の周囲を回るように飛び、すれ違いざまに切り刻んでゆくのだ。

それも、ものすごいスピードで。

時たま装甲をかすめてゆくのは精度の悪さゆえか。

しかし次第に再生が間に合わなくなってゆく。

霧江はなんとか捕まえようと手を振るうが、しかし掴めない。知覚が出来ていないわけではない。

動きが複雑すぎて追いつけないのだ。

飛びまわる蚊を素手で対処することを想像するとわかりやすいかもしれない。

掴んだ、と思って手を見てもそこに死骸はなく、顔を上げると全く違う場所を悠々と飛びまわっているアレと同じである。

もつとも、厄介さと危険度は蚊の数万倍だが。

「ふ、くふ。遅い遅い遅いおそーい」

（くそ、このままじゃジリ貧だ）

再生が間に合わなくなってきたといっても、まだまだ命の危険にはほど遠い。

しかしこのまま好き放題切られてやるのも面白くなかった。とにかく痛いのだ。

何か捕まえてやる方法はないか、と考える。

先程表示されたデータを思い返してみると、一つあることを思い出した。

（……そういや、まだガキだよなこいつ……だったら、安い挑発でも簡単に乗るかも）

「おい、伊達」

霧江が名前を呼ぶと、ぴたり、と攻撃の手が止む。

「……なによ」

「なんでそんなに黒髪が嫌いなわけ？」

「……」

しばらくの沈黙の後、攻撃が再開される。

「——っ！」

攻撃は先ほどよりも勢いを増し、霧江の赤いスーツに赤い血がにじむ。

「嫌い……嫌い！キライ！キライ！キライ！」

私の、私のレンちゃんをとったあの女！日本の女は黒髪って、バカみたい！大っきらい！」

「レン、ちゃん？」

ふたたび、攻撃の手が止まる。

「私のカレよ！」

「——」

ガクー、と、霧江は思わずすっ転びそうになった。

（な、そんな理由で通り魔殺人って！一昔前ののキレやすい若者か！）

なんつうガキだ、と自身と3年しか変わらない少女に対し内心あきれ果てる霧江。

「まあ、いいわ」

霧江はこのスキに、とヘルメットをはずし、投げ捨てる。

ふあさ、と、彼女の黒く艶のある髪が広がる。

「――！」

「そんなに憎いならチマチマした攻撃せずに、一気にスパ―っとやったらどうなのよ」

「殺す――！コロスコロスコロスコロス！」

フ、と。

その瞬間少女の気配が消える。
だが殺気は十分に残っていた。

（うわ、ホントにすげー簡単に乗った）

と、さらにあきれる霧江。

迫りくるは、鎌鼬の少女、その最大の一撃。

その速度に、音も衝撃も付いてこない。

全てはとどめの後に起きる現象。

何人たりと止めることのできない、超神速の斬撃。

それは、あつと言う間も与えずにその長い黒髪ごと霧江の首を跳ね飛ばす。

――はず、だった。

「残念。私の髪は特別製よ」

「う……そだッ！」

たとえ鋼鉄だろうが難なく切り裂くはずの彼女の斬撃。

しかし、それはいとも簡単に止められた。

切り裂く鎌へと形を変えた少女の両腕は、今霧江の髪によって絡め取られている。

霧江は彼女の最強の一撃を、その髪で止めたのだ。

いくら早かろうと、どこから来るか見当が付いていれば、吸血鬼の反射神経をもってすれば捕まえられる。

それが腕や足ではなく、彼女の意のまま、その思考の通り、微塵のラグもなく自由自在に動かせる髪なら尚のこと。

斬撃を止めれば、衝撃は力づくでどうにでもなるのだ。

吸血鬼にとって腕や足が発揮するのが最強のパワーなら、髪が持っているのは最高の器用さだった。

「ようやくあなたを捕まえられたわ」

霧江の髪は少女の腕から肩へ、胴へ、鋼の硬度を持って全身に絡みつく。

「うらやましいでしょう？ 便利よこの髪」

「ぐううううううう!!」

少女はギリギリギリと歯ぎしりする。

「死ね！ 死ね！ 死ね！ シネシネシネシネ！」

『殺す』から『死ね』に変化したことを鼻で笑う霧江。
言葉の変化は心境の変化。

彼女はすでに敗北を、心の中で認めている。

その心はもう折れた。

あとは、片付けるだけだ。

ブン、と頭を頷くようにに降る。

少女はさらに長く伸びる霧江の髪に縛られたまま、勢いよく空中に打ち上げられた。

真上に来たところで、霧江は勢いよく髪を引き戻す。同時に、右こぶしを突き上げ、少女の鳩尾に、突き刺すように撃った。

「――――あゝあゝあああああああああああ
あああああ――！」

その瞬間、少女の体が変化する。

彼女は叫びながら、溶けるように、霧江の右籠手に埋め込まれた
白い十字架に吸い込まれていった。

白い十字架が真っ赤に染まると、少女の体は跡形もなく消滅し、
十字架がカランと音を立てて地面に落ちた。

第十六話 思いはそれぞれに。

「……また随分派手にやったなあ」

戦闘が終わるころを見計らっていたのか、霧江が変身を解いたと同時に、零次が呆れ顔を浮かべながら歩いてくる。

置いてきたのか、レンタル屋の袋はその手になかった。

彼の視線は公園の中心となっている小さな噴水があった場所に注がれているが、被害はそれだけではない。

戦闘による緊張状態が解け、改めて周囲を見回す余裕が生まれてきた霧江の目に飛び込んできたのは、切断されたベンチや倒れた木々。

ビジネス街の中心でオアシス的な役割を果たしてきたこの小さな公園の、変わり果てた姿だった。

流星に表情を凍りつかせてしまう霧江。

「いやいや、私じゃないのよ？こいつ！ほとんどこいつのせい！」

と言って、地面に落ちていた十字架を拾い上げる。

その真っ赤な十字架を改めて見ると、霧江が自身の妖力を封印したブラッディクロスと殆ど同じものだということが分かる。

唯一の違いは、赤色が若干くすんで見えるということくらいか。

「っていうか兄貴、これって本体ごと封印できたの？」

「ああ、そいつは量産品だからな。むしろ本体ごとでないと封印できない。」

俺としては失敗作なんだが……それでも使い道はあるもんだ」

言いながら、霧江から鎌鼬の少女のブラッディクロスを受け取る

零次。

「へえ……？生きてんの？」

「そりゃ、ただの封印だし、ちゃんと生きてるよ。」

しかるべきツールに繋がれば意思疎通もできる」

「何それすげえ！……もしかしてそのまま取り調べとかやんの？」

「ああ、裁判もな」

ふえー、と、霧江は関心半分呆れ半分といった声を上げる。

思ったよりもこの兄は、島にとって重要な人間になっているようだ。

そうこうしているうちに、公園の回りにパトカーが数台集まって来ていた。

サイレンはなく、現場に駆け付けたというよりは事後処理に現れたという感じだ。

「さあて、今日はこのまま警察、だな。志木君には悪いが、荷物運びは彼と頼子に任せよう」

「えー、私も警察行かなきゃダメ？」

「だめ。だってお前報告書書かないだろ？」

悪党相手だって適当に暴れるだけなら犯罪者と変わんねーぞ。ちよっと話ししてもらっただけだから」

零次は霧江に背を向け、片手で十字架をポケットに仕舞いながらその逆の手で、ほら行くぞ、とでも言うように合図を出す。

「ちえ……案外めんどくさいんだなーヒーローってのも」

その後に、渋々といった様子で霧江は続くのだった。



二人は警察署から迎えに来たという男に、ノーマルのパトカーではなく上にパトライトを乗せた黒い車に乗せられる。

男は松居刑事の部下で、風森と名乗った。なざもり

連続切り裂き魔事件の担当捜査官らしい。

「いやー、助かりました。捜査が進展せずについて死者まで出しちゃったもので、実はヒヤヒヤしていたんです」

風森刑事は二十代後半……零次と同じくらいの年齢で、やせ形。頬がこけていて、黒のセミロング……というよりただ散髪に行っていないだけのボサボサな髪型をしていた。

彼は車を運転しながら後ろの席の霧江たちに話しかける。

「でもコレでとりあえずボクの首は飛ばすに済みそうです……っと、すみません。今のはナシで」

被害者の首が跳ね飛ばされたことにかけて彼なりのジョークだったが、流石に不謹慎すぎると気付いたのかあわてて取り消す。

「しかし、怖いですね。まだ13歳の女の子なんでしょう？

しかも原因がただの痴情のもつれていうのは……」

「例の改革で、妖魔の教員もいなくなりましたからね」

ふう、と零次はため息をひとつつく。

「なるほど。人間じゃ妖魔の子を指導しきれなかった、というのはあるかもしれないですね。

公職が人間だけじゃやっぱり限界が来る。

いくらヒーロー計画を立ち上げたところでこのままじゃこんな犯罪はいくらでも起っちゃいます——って、す、すみません」

話している相手がそのヒーロー本人と計画者だということに気づいて、慌てる風森刑事。

「いや、その通りですよ。結局根本的なところをなんとかしないと、俺たちがやってるのは街の延命措置でしかないんだ」

彼の意見はこの計画に関わる人間誰もが抱いている感想だった。

「私としてはやるのがなくなるのはつまらないけど、流石にただ道を歩いてるだけで殺人級の凶悪犯罪に、こんな短期間で何度も出くわすって現状は勘弁してほしいわ」

「そう言えば、この間の爆破事件の犯人を捕まえたのもあなたでしたっけ」

霧江の嘆きに、風森刑事が答える。

「確かに治安の悪い街ですけど、そんなに短い期間で何度も大事件に巻き込まれるのは珍しい……災難でしたねえ」

「あれ？ そうなの？」

霧江は目を丸くした。

「私はなんかコレがこの街のデフォなのかと思ってた」
「あはは、流石にそんなわけありませんよ」

笑い飛ばす風森刑事。
腐っても日本。

確かに治安が悪い街だが、そこまで無法地帯でもないのだ。

「ヒーローだからな。探偵が行くところ事件が起きるように、ヒーローも行く先々で事件に巻き込まれるもんだ」

「うげー、超嫌なんですけど」

うんうんと頷く零次。

対して霧江はガクンと項垂れた。

「……ま、三回目があれば注意した方がいいな」
「え？」

零次のセリフに、霧江は顔を上げる。

「偶然が3回も続くことは滅多にない。となれば、どっかに必然性があるかもしれないってことさ」

「つまり……どうということよ？」

と霧江は首をかしげる。

「誰かがお前の回りで事件を起してる……かもしれない」

「……だとしたら一番該当しそうなのはヒーロー計画の当事者の兄貴なんだけど。」

私に事件を解決させまくることでヒーローの必要性に説得力を持たせる、的な感じで」

霧江は目を細めて零次に冷たい視線を送る。

「いやいやいや！そこまではやらんて！つか、まだ三回目起きてないだろ！？」

「起きなかつたらむしろ兄貴の仕業説が濃厚になるわね」

「今のセリフで起きても結局俺のせいフラグ立ったじゃねえか」

「そういうことなら、逮捕は俺と松居刑事に任せてくださいよ」

と、風森刑事。

「おまっ！」

「あっははは！ノリ良いわね風森刑事」

笑う風森と霧江。

無然とした態度をとりながらも苦笑を浮かべてしまう零次。

三人を乗せた車は、間もなく天壤所に辿りつく。



「……マスター、今日はこのまま報告やら何やらで警察だそうですよ」

「あらら。仕方ありませんね」

一方そのころ恭也と頼子。

二人はまだ喫茶店のテラス席に座ったままだった。

頼子はもう回復したようで、姿勢を正してコーヒーを啜っている。

テーブルの上には零次が置いて行った、中身がパンパンに詰まったレンタル屋の袋。

「このまま三号と二人つきりでいても仕方ありません。私帰りますね」

と、さらりと言ったのける頼子。

「まあ、俺はそれでもいいんですが」

どうせ運ぶ私物の量はたかが知れている。
もともと四人で来る必要はどこにもなく、自分一人いれば十分なのだ。

ただし、零次の家の合いカギをまだ持っていないので、彼を待つために時間を潰さなくてはならないが。

「……冗談ですよ、三号一人をほったらかしにしてたら霧江さんの心象を悪くするじゃないですか」

その嫌がらせのようなあだ名では心象悪くしないのかよというツッコミを飲み込みつつ（実際悪くしている様子はないし）恭也は「そうですか」とだけ答えた。

「……」

恭也のその返しに、むっとする頼子。

「三号、たとえ同期が不純であれ、私のような容姿端麗な女子と二人きりで過ごせるんですから。

もう少し嬉しそうな顔をしたらどうなんです？ 本当にもう枯れてしまってますか？」

「まだ枯れてませんって！……自分で容姿のことを言いますか。否定はしませんけど」

ふう、と一息ついて、彼は先ほど注文した紅茶に口をつける。

「……どうせ自分のことを見てくれないのなら、期待するだけ無駄でしょう」

「そこまで霧江さんばかり見てるつもりもないんですけどね……私は」

頼子はコーヒークップをソーサーに置く。

「まあ何と言いますか、私と霧江さんの間には生まれながらの運命とか宿命めいたものがあるんですよ」

「ヒーローの相棒として、ですか？」

「それもありますけどね」

と、頼子は笑みを浮かべる。

どこか、自嘲じみた笑みだと恭也は思った。

「どちらかといえば、呪いに近いかもしれませんね……」

「呪い？」

呟くような頼子の声を、恭也は聞き逃さなかった。

「……なんでもありませんよ」

言って、頼子は首をゆっくりと横に振る。

「さて、折角ですし、ここでお昼も食べていきますか」

「そう……ですね」

恭也は頼子の今のセリフについて追及したかったが、やめた。

それは今の頼子がかつてないほどの影を背負っていたように見えただからであり、追求すればきっと、彼女の心を抉ってしまうことにもなりかねないとも思ったからだ。

やはり、恭也には頼子が悪い人間には思えなかった。

確かに何かしらの闇を抱えている様子は窺えるが、自分から他人を傷つけにいくような人間ではない。そう思えたからだ。

恭也は状況に流されやすい節があり、周りからは自分の意見を持たない人間のように思われることもしばしばだが、しかし、人を見る目だけは持っているつもりだった。

ただ、目を離すなどというのは零次が部屋に住ませる条件でもあるわけだし、可能な限りはそうするつもりだった。

そこに警戒心や敵意が介在しなければ、その行為の意味も変わってくるが、それでもいいだろう。と彼は思っていた。

そんな彼らの肌に、冷たい風が吹きつけた。

「ちょっと肌寒いですね」

恭也がつぶやく。

もう四月だというのに、春の温かみは感じられない。

「昨日雨が降った後ですものね。何か温かいものにしましょうか」

そう言って、頼子はメニューを開いた。



「それで、例の吸血鬼事件の方はどうなってます？何か掴めましたか？」

「ゼーんぜん。昨日は影も形も見せなかったし」

刑事の問いに、霧江が答える。

『切り裂き魔』捕縛に関する報告を行った後、霧江たちは警察署内にある休憩所に座りながら、松居刑事と話をしていた。時計はもう午後4時を回っている。

「一昨日は向こうから接触してきたような感じだったから……今日明日あたりまた来るかも、と思ってんだけど」

「ふうむ……。しかし何なんでしょうね、ヤツが向こうから霧江さんに接触した理由」

「単純に目障りな私を始末したかったからじゃない？ 殺す気満々だったみたいだし」

言って、霧江は自身の左胸のあたりを撫でた。

吸血鬼であっても、心臓を射抜かれれば普通は死ぬ。

その急所を狙ったということは、明確な殺意があったからだ、と霧江は解釈していた。

「じゃあ、普通の方法では殺せないとわかった今、ヤツはどうするんでしょう」

「……私を殺す方法を探ってるか、私の『眼』を逃れる方法を探ってるか。後者だと厄介よね」

「警察の方では何か掴んでないんですか？」

と零次。

「恥ずかしながら全く。三日前から被害も無いですし……まあ、自分の首筋の傷に気付かない間抜けな被害者だったらわかりませんが」

松居刑事は頭を掻きながら答えた。

「まあ、まだ今日入れて五日もあるし、最悪満月の日に直接叩きつぶすってのもアリでしょう」

と霧江が言った。

「事件を察知しつつ未然に防げなかった警察の評判はガタ落ちしますかね」

苦笑いを浮かべる松居刑事だが、このまま何の手がかりもなければそうするしかないだろう、とも考えていた。

そうするなら警察として、霧江を支援する体制を早いうちに整えておかねばならないだろう、とも。

「では、今日のところはこのくらいで。お疲れ様でした」

言って、イスから立ち上がる松居刑事。
その背中を、零次が呼び止めた。

「そうだ、松居刑事。少し話したいことがあるんですが……」
「何です？」

「ここじゃあちよつと……霧江、お前先に帰っててくれ」
「ん？まあ、いいけど」

不思議そうな顔をしつつも頷く霧江に、零次は自分の家の鍵を渡す。

「志木君に渡しておいてくれ。家に入れなくて困ってる頃だろう。ついでに荷物のこととかも謝っといてくれ」

「了解」

答えて、霧江はカギを受け取る。

「じゃ、またねー松居刑事ー」

と手を振り、霧江は一人でスタスタと歩いて行った。

「それで、話とは？」

霧江が立ち去るのを見送ると、松居刑事は零次に向き直る。

しかし零次は黙ったままだった。吸血鬼の聴覚、その鋭さを彼はよく知っているのだ。

霧江が警察署を出てゆくのを、休憩所の窓から確認すると、零次は話を始めた。

「……実は、刑事の娘さんについての話なんですが」
「頼子の？」

と、すこし驚いたような表情を浮かべる松居刑事。
しかしもっと驚くことになるだろうな、と零次は思った。

「ええ。彼女は実は――」

第十七話 真夜中は秘密の時間。

「……………」

深夜。

午前三時。

恭也は零次の家の物置で目を覚ました。

「……………なんか、ひどい夢を見たような……………」

上半身を起こす。

先程まで何か夢を見ていた気がするが、はっきりとは思い出せなかった。

たぶん、昔の夢だったと思う。自分にとっての悪夢は、いつも昔の夢だったから。

夜になると、自分がもう人間ではないことをはっきり自覚することが出来る。最もわかりやすいのが、その視界に生じた変化。

真っ暗な闇の中なのに、昼間以上にはっきり物が見え、色の違いもよくわかる。

恭也は自身の体に視線を落とした。

寝巻きは、汗でびっしょり濡れている。

「……………ってうわ！なんだこれ！」

顔を拭くと、涙の交じった血で真っ赤に塗れていた。

急いで起き上がり、洗面所へ向かい、顔を洗う。

そうしているうち、彼は吸血鬼が棺桶で寝る理由を、なんとなく察した。

不死者であり、死ぬことのない吸血鬼は、棺桶という死の象徴に自ら入ることで、仮の死を得ることができるのだ。

故郷の土で育った棺桶の中で仮の死を得て、そうして何物にも邪魔されることのない安らかな時間を手に入れる。

邪魔、というのは外から入ってくるものでは必ずしもない。

それは自分のうちからも現れる。

おのれを苛む過去、つらい記憶。

起きている間は無敵の強さを持った妖魔でも、寝ている間はそういうものに敏感になり、弱くなる。

だから、彼らは昼間に眠るのだ。

己が強くなれる時、最大限強くあるために。己が弱くなる時、誰にも邪魔されず安らかであるために。

ガチャリ

「……？」

玄関から音。

鍵をあける音がする。

顔をタオルで拭き、洗面所から顔だけ出して玄関を窺う。

ゆっくり開くドア。

泥棒か？という疑いは、すぐにかき消された。

入ってきたのは、この部屋の主だったからだ。

「零次さん？なにしてたんです、こんな時間に」

俯きながら入ってきた零次は、その声に驚き、顔を上げる。

確か彼は、自分が寝ようとした時は家にいたはずだった。

「なんだ、志木君こそこんな時間まで起きてたのか？」

「ちょっと、眠れなくて」

「……そうか。棺桶はもうすぐ届く。今のうちだから我慢してくれ」
「あ、はい。どうも」

「……風呂に入りたいんだ。洗面所にもう用はないか？」

「ええ、いいですよ。どうぞ」

零次は家の鍵を閉め、靴を脱ぐと早足で洗面所へ向かった。

そこから出る恭也とすれ違うと、「じゃあ、おやすみ」と言って、洗面所と廊下を仕切っているアコーディオンカーテンを閉める。

（あれ……？）

恭也は顔をしかめる。

零次とすれ違ったとき、吸血鬼の嗅覚はそれを逃がさなかった。

（血の、におい……？）

彼はかすかに漂わせていた。

自分が死にかけた時、さんざん嗅いだあの鉄くさいにおい。
今となっては、唯一の食事のにおい。

（零次さん、一体何を――？）



「まさか、兄貴黒幕説が信憑性を帯びてくるなんてね……！」

翌朝。

恭也が昨日の出来事を霧江に話すと、霧江の口からはそんな言葉が飛び出してきた。

「なんですかその説……」

場所は、一昨日恭也と頼子が決闘を行った、女子寮裏の公園。
霧江と恭也は噴水の周りにあるベンチに腰かけていた。

「私の周りで連続で事件が起きまくるから、兄貴がヒーローの必要性を訴えるために、

わざと私に犯罪者をけしかけてるんじゃないかって、昨日刑事さんと冗談を言ってたのよ」

「でも、冗談なんでしょう？」

「万が一、ってことも有り得るじゃない。

夜中に血のおい漂わせて帰ってきたなんて、喧嘩して帰ってきた不良少年じゃないんだから……絶対何かあるわよ」

「飲み屋で絡まれて、ってセンなら中年でもあり得ますよ」

「無いわね。兄貴酒飲めないもの」

言って、霧江は恭也と視線を合わせた。

いつになく真剣な顔だ。

「ね、他に何か無い？ 兄貴の怪しい言動とか……」

「そんなの……」

ない、と言おうとして、恭也の声が詰まる。

一つ、思い当たるフシがあったからだ。

それを言おうかどうか恭也は迷った。

何しろ、この人の親友のことだ。

彼女の親友と兄とが、何らかのこじれた関係にある。

それを伝えていいかどうか。迷って、そして結局、彼は言うことにした。

「実は――」

恭也は霧江に話す。

零次が頼子に対して何らかの疑いを持っており、自分に頼子を見張るよう伝えたことを。

「……なんでそこで頼子なのよ」

そう言って、霧江は口を真一文字に結ぶ。

「俺にもわかりません。あの二人、何かあるんですか？」

「私の知る限りでは、前からの知り合いってんじゃないかなったはずだけど……」

考え込むように、霧江は頭を抱える。

しかし考えて答えの出るような問題ではなかった。

「……それとなく聞いてみましょうか。兄貴に」

霧江は神妙な面持ちで顔を上げ、ベンチから立ち上がった。

「マスター？どこへ？」

「大学よ。兄貴の職場」

そう言って、彼女は空を見上げる。

晴れた空を見て、嫌な天気だ、と霧江はひとりごちた。



「失礼しまー……ってあれ？ いねえや」

国立天壤島魔導大学。

魔法工学部棟5階。

鬼灯零次の研究室。

霧江はドアをノックし、開けて、顔だけで中を覗き込む。
明かりがついているが、中には誰もいなかった。

「じゃあ、中で待たせてもらいますか」

と、霧江は勝手に中に入ってしまった。

「うわ、なんかちっちゃいクモがいる」

「ちょ、ちよっと！ いいんですか？ 勝手に入っちゃって」

「どうせすぐ戻ってくるでしょ」

中に入って、周囲を見回す。

中は書類やら何やらで散らかっていて、デスクと、本棚が幾つも置いてあった。

本棚には魔法工学の歴史について著された書物や、何かの図面を綴じたファイルが数多く並べられている。

「……？ なんじゃこれ」

霧江は、部屋の隅に無造作に転がっていた何かを拾い上げた。
短い取っ手の先に、50センチほどの長い紐が何本も付いている。
掃除に使うハタキか何かかと思って紐に触れてみると、一本一本が細長いゴム紐だった。

「それ、ムチですよ多分」
「ムチ？これが？」

霧江は軽くブン、と振るってみた。
無数のゴム紐が、しなやかに撓る。
はて、ムチといえどもっと長くて太いものだと思っていたが、これでは大したダメージを見込めそうにない。

「ヒーロー用の新しいアイテムとか？……それっ！」
「ぎゃっ！」

今度は恭也に向けて軽く振るってみる霧江。
恭也の肩に当たると、バチーンと良い音が鳴った。

「ちょ！何するんですか！？」
「いや、なんか手に馴染むなと思って。ていっていつっ！！」

バチーンバチーン

「痛い地味に痛い！」

肩をかばって腕でガードするが、腕の方がむしろ痛かった。

「ちょ、霧江さんやめてくださいマジで！」
「ふっふっふー！ここがええのんかー？」

何か妙なスイッチが入ったらしく、霧江はムチをブンブンと振る
い続けた。

その時……。

「失礼しまーす」

と、ノックの音と同時に、部屋の扉が開けられた。

「おらもつと叩いてやろうかァー!？」

「マスターっ! ちょ、ま、誰か! 誰か来たから!」

「え?」

本当に気付いていなかったのか、はっとして、振り返る霧江。

部屋の入り口で、一人の少女が顔を真っ赤にして口元を押さえて立っていた。

髪は赤く、ふわふわロング。

明るい緑の瞳のその少女は童顔で、背が低く中学生くらいに見える。

何よりも特徴的だったのが二つ、一つ目は髪の間から覗いている耳が、人間のものではなく猫の耳だということ。

そして、前からは見ただけでは分かりにくい、尻尾が生えていることだった。

「わ、わー……」

少女は二人の様子をまじまじと見ていた。

「あ、ち、違うのよこれは!」

はっとして、ムチを背中に隠す霧江。

何が違うというのか。ぶっちゃけもう遅すぎる行動である。

「あ、あの。もしかして教授の妹さん、ですか?」

「え、そ、そうだけど……あなたは?」

「あ、わ、私は鬼灯教授の生徒で、羽月真琴っています、はじめまして」

姿勢を正し、しかし顔を赤くたまま少女は名乗る。

見た目はどう見ても中学生くらいだが、どうやら実際の年齢は高かったらしい。

子供にヤバイ所を見られたと思った霧江は少しだけほっとした。

「は、はじめまして。えっと、私が妹の霧江で、こっちが眷族の恭也」

「どうも、はじめまして」

と恭也は軽く頭を下げる。

「あ、はい。それで、えっと……教授はどちらに？」

恐る恐るといった様子で、真琴が問う。

「さ、さあ？今はいないみたいだけど……」

「そう、ですか……」

しゅん、と真琴は残念そうな顔を浮かべた。

猫耳の先がちよつと垂れている。

「いやでも、鍵開いてたから、すぐに戻ってくると思うわよ。中で待ってたら？」

「え？でも……」

「いいからいいから。私たちもう帰るし」

そう言って、そそくさと入口に向かって歩き出す霧江。

「え？ちょっとマスター！」

恭也は慌ててその背を追う。

「それじゃあね、羽月さん！」

そういつて、部屋から出てゆくと霧江は一目散に逃げ出した。

「ちょ、何しに來たんですかマスター！」

恭也は慌ててその後を追いかけた。

キャンパスからものすごい勢いで出て、門を出た先、塀に背を向け座り込んだ霧江は左手で頭を抱えた。

「ああー恥ずかしかったー」

それから数秒遅れて、恭也が駆けてくる。

「……どうします、マスター？」

立ち止まって、キャンパスを振り返る恭也。

「今日は、やめよう……」

そう言つて、霧江ははーっとため息をついた。

「あれだ、實際聞いてみて違ったらアレだし、兄貴が實際に何かやった時アレしよう」

「どれですか」

「……とりあえず今夜、兄貴がまた夜中にこっそり出かけたら私にテレパシー送ってよ。使い魔使って追いかけるからさ」

「わかりました……って、マスター！」

「なに？」

突然の恭也の大声に、霧江は驚いて顔を上げる。

「そ、それ、持ってきてちゃってます」

と、恭也が指さしたその先。

「あ」

霧江の右手には、まだ例のムチが握られていた。



深夜一時。

帰って早々寝たふりをしていた恭也が、もう本当に寝そうになっていたその時、玄関の扉をこっそりとあける音が聞こえてきた。

（……！マスター！聞こえますか？）

『聞こえてるわ。どうしたの？』

女子寮に居る霧江も、まだ起きていたようで、返事はすぐに帰ってきた。

（今、出て行きました）

『了解、使い魔で追跡するわ。あんたは待機してて』

(はい)

テレパシーを終えると、恭也は起き上がり、部屋を出てリビングへ。

寝転がったままだと眠ってしまいそうなので、そこでイスに座って待機することにした。

そうして、待つこと30分。

『いいわ、出てきて。兄貴の大学の校門前で落ち合いましょう』

零次さんの大学？と、恭也は疑問に思ったが、とにかく行ってみないことには始まらない、と部屋を出た。

「来たわね」

恭也が辿りつくと、すでに腕を組んで立っている霧江の姿があった。

「兄貴、自分の研究室に入ったわ」

「え？じゃあ、普通に仕事なんじゃないですか？」

「いいえ」

霧江は横に首を振った。

「今日の昼の会った子と一緒に入ってたのよ」

「え、それってあの猫耳の？」

恭也は昼間に零次の研究室で出会ったあの赤い髪の少女を思い出す。

「そう。こんな夜中に生徒と二人で学校なんて絶対に何かあるわ。それにあの子。私を一目見ただけで妹と分かってたでしょ？ほかの学生かもしれない、泥棒かもしれないのに一発で当たった。」

つまり知ってたのよ私の顔を」

「写真を見たとかいろいろあると思いますが……」

「……とにかく、カーテンが閉められてて使い魔じゃ中の様子が見えない……直接乗り込むわよ」

そう意気込む霧江の手に、例のムチが握られていた。

「マスター、それって……？」

「ああ。ついでに返しとこうと思って」

「……」

ホントに疑ってたのか？というツツコミを飲み込む恭也だった。

魔法工学部棟5階。

零次の部屋に近づくと、何かを叩くような音と、女の子の苦しそうなうめき声が聞こえてきた。

「まさか、兄貴、本当に——！？」

「……ッ！そういうば兄貴が好みそうな外見だったわね、合法ロリっぽくて」

口を閉じて眉を顰め、険しい表情を浮かべる霧江。

一方恭也は引き攣ったような顔をしていた。

「マスター、俺なんかオチが見えちゃったんで帰っていいですか？」

「何いってんの」

霧江はクロス・ガンにブラッディクロスをセットしていた。

「私が突入する。バックアップよろしくね」

「あの……」

「行くわよ！」

と、恭也の制止は間に合わず、霧江は零次の研究室のドアを蹴破った。

そこには……。

「いやあゝっ、先生痛い！お尻腫れちゃううゝ！」

「そんなこと言って、本当はここが気持ちいいんだろう？」

「ううゝやだやだゝ先生の意地悪うゝ」

デスクの上であられもない恰好で四つん這いになっている真琴と、その尻に向かって例のムチと同じものを振りおろす零次の姿。

流石にスパンキングプレイは予想外でした。b y 恭也

「……」

「はっ!？」

凍りついた霧江と、ようやく侵入者に気付き、デスクの後ろに隠れる真琴と、慌ててムチを背中に隠す零次。

くしくも昼間の妹と同じ反応である。

「お、おまえら何やってんだこんなところで！」

先生それこっちのセリフです。と心の中で呟く恭也。

一方の霧江は、クロス・ガンの銃口を上に向け、引き金を引いた。

「……変身」

「ちょ、マスター？」

「……恭也、こいつらは敵だ！この私が倒す！！」

言って、本気で臨戦態勢をとる霧江。

「うわー！まて、まて霧江！」

慌てて右手を前に突き出す零次。

「黙れっ！お前は兄貴じゃない！兄貴の皮をかぶった変態め！ぶっ殺してやる！！」

「わー！マスターストップストロープ！！」

慌てた恭也は背後から霧江を羽交い絞めにする。

「うるさい！こんな変態ここで殺さないと駄目だああああああ
！！！！！！」

「のわああああああああ！！！！！！」

こうして、この日の夜は、零次が今まで一度も霧江に見せたことなかったその性癖をさらすことになってしまうある意味特別な一夜となった。

あらぶる霧江を何とかなだめるのに、三人がかりで一時間も費やしたのであったとき。



「……それで、あんたたちはいつからこんな関係が続けてるって？」

一時間後。

研究室の床に正座させられている零次と真琴——ちなみに、ちゃんと服は着なおしている。

二人を見下ろすように霧江がその前に立ち、腕を組んでいる。

恭也はと言えば、部屋の入口の方で座って彼らを眺めていた。

「だいたい一年半……この大学に転職して半年くらい経った頃からです」

霧江の尋問に答える恭也。

流石に敬語である。

「はーん。読めたわよ。つまり、兄貴ひとりでこの島に居た二年間、

私にメールを殆どよこさなかったのは、仕事が忙しかったからじゃなくて、生徒との不純な淫行に耽っていたせいかな!！」

「い、いや——決してそんなことはだな」

両手を前で大げさに振り、否定の動作をとる零次。

勇気を振り絞って真琴が口を開く。

「あの、私が大学を卒業したら結婚するつもりで、決して不純な——」

「ああん？」

「ヒッ！」

霧江のひと睨みに顔を真っ青にし、押し黙る真琴。
彼女を庇う様に零次が言葉を引き継ぐ。

「ええとつまり、結婚を前提にお付き合いをさせていただいてる訳
でして、はい」

「はあ、結婚前提なら真夜中の大学で生徒と教師でSMプレイをし
てもいいと」

「いや、そういう訳じゃないんですが……」

要約すると、それまでは零次の自宅でゴニョゴニョしていたのが、
恭也を住ませることになったために出来なくなり、女子寮である真
琴の部屋にゆくわけにもいかず、かといってホテル代もなかったの
で、恭也が零次の家に住むようになってからは毎晩ここに来ていた
らしい。

「発情期のサルか!？」

憤る霧江と、苦笑を浮かべる恭也。

「あれ、じゃあ昨日零次さんから血のにおいがしたのって……」

「あ、それは……」

俯いて、顔を真っ赤にする真琴。

「私、昨日まで生理だったので……」

「……………ドン引きだよ!!!!!!」

真夜中の静かなキャンパスに、霧江の絶叫が響いた。



「もう！本っ当に信じらんない！！二度と兄貴なんて呼ばん！！」

帰り道。

後片付けをするという零次たちを残し、二人で夜道を歩く霧江と恭也。

「まあまあまあ。人の性癖はそれぞれですし」

まだ怒りの収まりきらない霧江と、それをなだめる恭也。

「性癖云々より！私が許せないのは彼女居るのを黙ってたことよ！紹介くらいしろよあのアホ兄が！」

「大学生とはいえ教師と生徒ですし、おおっぴらには出来なかったんでしょう」

「かもしれないけど、私にくらい話てもいいじゃん……」

言って、霧江は軽く溜息を吐きながら、つまらなそうに俯く。

吸血鬼になると恋愛感情は希薄になるが、その分血族や眷族への家族愛は強まる。

霧江にとって零次は、最も近い肉親であり、その家族愛を一番に向けている存在だった。

だからこそ、彼女は彼の不器用さに誰よりも腹を立てているのだ。そのことに、恭也はしょうがないな、と苦笑を浮かべる。

少し時間がたてば、ちゃんと仲直りできるだろう。

「ああもう！ムカツク！こんなもののどこがいいのよ！！」

と、霧江は結局返すのを忘れたSM用ムチを恭也に振るった。

「痛ってえ！」

背中にクリーンヒットするムチ。

「あのバカ！あのバカ！兄バカ！」

「痛い痛い痛い！！」

三連発。

逃げるように霧江から離れる恭也。

「もう！何すんですかマスター！」

「うるさい！」

追いかけて、もう一度ムチを振るう霧江。

「ぎゃん！」

（あれ……？）

ムチに目を落とし、首をかしげる霧江。

「もう！酷いですよマスター！」

「……それっ」

再び振るわれるムチ。

「く、そう何度も！」

避ける恭也。

空を切るムチ。

霧江は恭也を真っ直ぐに見つめる。

「恭也、命令よ……『避けるな』」
「ちよっ!!」

何度も恭也をそのムチでしばく霧江。
涙目になる恭也。

(……あ、これ、楽しいかも)

叩くことが、ではない。

叩いたことで恭也が見せるその反応が、とても面白い。
そう感じられるのだ。

鬼灯霧江が新しい性癖に目覚めた瞬間だった。

第十七話 真夜中は秘密の時間。(後書き)

病氣回でござる。

第十八話 流れるは不穏の空気。

結局、零次と頼子の関係を問いただすことは出来ずに、吸血鬼事件のリミットまであと三日となった。

鬼灯霧江は焦っていた。恭也を眷族にしてからというもの、吸血鬼に関する何の情報も入ってこない。その上、ついに三回目まで起きてしまったからだ。

「あの程度の雑魚、霧江さんが相手するまでも有りません。ここは私にお任せを」

そう言って、頼子は小太刀を抜き、あの左側面を相手に向ける独特の構えをとった。

昨夜の一件から、零次と口を利きなくなった霧江は、零次と頼子の関係を頼子に聞いてみることにした。

その為に今朝、彼女を近所の商店街へ散歩に誘ったのだ。そしてその道中、聞こえてきた悲鳴。二人が駆け付けると、ひっそりたる現場に遭遇したのだった。

（……一応軽犯罪だし、これが三回目とは……でも歩いてるだけで事件に巻き込まれたのはそうだし、ああもう！）

先日の零次の言葉は、彼の予想以上に霧江の中で響いているようだった。

それは霧江自身が、何かと事件に巻き込まれるのは何か裏があるからだ、というのを、本能的に感じ取っていたからに他ならない。

ひったくり犯を追いかけ、裏路地の袋小路に追い込んだ霧江と頼子。

頼子は霧江よりも二、三步ほど前に出て、犯人と対峙している。犯人は、またも少女だった。

既にスーツを装着変身していた霧江は、アイテムボックスのキーを叩き、顔認証システムを起動する。

小学生くらいに見える小さな体と顔立ち。

背丈と同じくらいの高さの真っ白な長髪。

小さなケモノ耳が髪の間隙からちょこんと顔を出したその少女は、真っ赤なワンピースに身を包んでいる。

第十二区、英稜高校二年、根津日子。

種族は火鼠の血を引いた半人半妖。

見た目と年齢のつりあわない少女によく出会うなど、霧江は昨日会った兄の生徒の顔を思い出す。思い出したくない光景まで思い出しそうに、ブンブンと首を横に振った。

「頼子、そいつは半妖……火鼠よ。気をつけて！」

「ありがとうございます、霧江さん！」

霧江の言葉に、頼子は笑みをたたえる。

対して火鼠の少女は歯を食いしばって二人を睨みつけていた。

「なんなのよあんたら……！ 燃えろッ！ この……！」

少女の白い髪が真っ赤に燃えあがる。

少女がそれに右手を翳すと、その手が燃え上がり、燃え移った炎が、バスケットボール大の火球に形を変えた。

少女は頼子に向け、その火球を放つ。

その一瞬、霧江は目を丸くした。

「な……!」

少女の表情も驚愕に変わる。

それは一瞬だった。

ざん、という音と共に、火球は頼子の左後方へ逸れた。

少女はそれを知覚できなかっただろうが、霧江にははっきりと見えていた。

(これが、『絶対防御』の戦い方……)

恭也との戦いでは見せなかった、『守りの剣』。

その一瞬、飛来する火球に、頼子はその小太刀で斬りつける。

すると、火球がまるで引きつけられるかのように小太刀に吸いついたのだ。

そのまま刀を振るうと、その刃に押しつけられるかのように、火球は刀を振った先、後方へ薙ぎ払われる。

「くっ――!」

火鼠の少女、その二撃目。

それは頼子を丸ごと包み込んでしまえるような、先ほどとは段違いの大きさの火炎。

しかし、頼子はまったく同じ動作で振り払う。

火炎は、刀に吸いつく過程でその規模を縮小され、また後方へ流れる。

彼女の持つ小太刀。

退魔刀『月影』

ひとたび刃を抜けば、その刀身の周囲に、魔力や妖力を吸いつける力場を発生させるその小太刀。

通常ならば、相手の魔法を無意味に引き寄せてしまい、それを持つ手に負う必要のなかった傷を作ってしまったいかねない災厄を呼ぶ刀。その真価は、彼女の技と合わさることで初めて発揮される。

三撃目。

ソフトボール大の火球、その数十五。

それぞれが複雑な軌道で放たれ、頼子の周囲、全方位から襲いかかる。

しかし、彼女の剣技はそれをも意に介さない。

神速の太刀筋。

捌かれる全ての火球。

その体捌き、そして何よりも、神の如きスピードを発揮するのはその左腕。

霧江は、彼女に対し恭也が魔法を一切使おうとしなかった意味が、今ならとても良く理解できた。

全ての攻撃が無意味に終わり、啞然とする少女。

頼子はその隙を見逃さない。

右腕に巻いていた布が宙を舞い、少女に覆いかぶさる。

同時、一閃。すれ違いざま、布の上から横なぎに振るわれる刃。

布がかぶさったまま、火鼠の少女は崩れ落ちる。

「我流退魔剣奥義・退炎ノ太刀」

頼子は呟いて、血を払う様に刀を振るう。

不思議なことに血液は一滴も付いていない。それなのにこの動作をとったのは、斬撃の瞬間、刀が吸いつけた相手の妖力を払うため。

そう、この小太刀の本来の用途は、こうして斬った相手の魔力、妖力を吸いつけて奪うことにあるのだ。

『月影』は攻撃のために作られた剣。

それが彼女の手に渡ることによって、絶対防御の盾ともなる。

「終わりましたよ」

そう言って、頼子にはこやかに霧江を振り返った。



その後は、例によって警察で報告。

軽犯罪であったためか、昼過ぎには二人とも解放された。

折角だから食事をして帰ろう、と。

松居刑事と最初に会った日に行きそびれた、例のラーメン屋へ。

二人がけの席に向かい合って座り、霧江は塩、頼子は醤油をそれぞれ注文した。

「お父様の行きつけの店、一度行ってみたかったですよね」

そう言って、頼子は醤油ラーメンを美味しそうにする。

なんとも、満足げな表情だった。

霧江は箸を止め、ぼうつとして頼子の顔を見ていた。

兄と頼子の間にどういう因縁があるのか、その質問をするつもりで今日は出てきたのに、その幸せそうな笑顔を消したくないと、そう思ってしまった、なかなか切り出せない。

「……？霧江さん、どうしましたか？」

頼子は霧江を見て、ちょこん、と首をかしげた。

「あ、その……」

なんだろう、霧江は少し気恥ずかしくなった。

まるで、自分から聞くのが怖いから頼子に道を作ってもらおうよう仕向けたみたいで、自分が情けなくなった。

だから、ここで意を決さなくては、さらに恥をかくことになるだろう。

そう思って、口を開いた。

「……頼子ってさ、兄貴のことどう思ってる？」

「お兄さんのこと、ですか？」

しかし、ためらいの感情がまだ残っていたため、言葉は別のニュアンスで伝わってしまう。

「かっこいいと思いますよ。私には少し年上すぎるのでそういう気は起きませんが」

そう言って、はにかむ頼子。

慌てて、霧江は首を振る。

「違うの、そういうことじゃあなくてね……」

あるいは、ここが分水嶺だったのかもしれない。

「兄貴がさ……恭也に頼子のこと見張れていたみたいで……」

それで、頼子は兄貴と何かトラブルとか昔あったのかなって……」

言って、霧江はすぐに後悔した。

頼子の顔から、その笑顔がどんどん消えていったからだ。

「あ、ご、ごめんやっぱり今のナシ！冗談だから、忘れ——」

「霧江さんは」

慌てて、取り消そうとする霧江の言葉を、頼子はゆっくりと遮った。

その顔は、霧江が今まで見たことのないような、自嘲じみた笑みを浮かべていた。

「霧江さんと私が、実は10年前にもう会って言って言ったら、どうします？」

「――え？」

その瞬間、霧江の思考が停止する。

10年前。

吸血鬼になる前。

それはどう回想してもあの日の、あの忌まわしい記憶に繋がる、思い出したくない思い出。

彼女は、彼女にとっては、ずっと封印していた日々のこと。

開けたくない扉のノブを、自分の意思に反して、その手が掴んだ。店の中を、小さな羽虫が飛んでいる。

「あったこと、あるの？」

数秒の間を置き、霧江がようやく言葉を絞り出した。

扉を開けようとするのを、必死に抵抗している自分がいる。

その言葉に、頼子が頷くか頷かないかの、その瞬間。

ピリリリリリリリリリ！

「――！」

着信が鳴る。

霧江の携帯だった。

「ご、ごめん！」

こんな時に、と霧江は電話をとる。

着信は、零次からのものだ。

一番かかってきてほしくないタイミングで、今最もしゃべりたくない人間からの電話。

霧江の指は自然に電源ボタンへ伸びていた。

「ごめんね頼子。それで――」

ピリリリリリリリリ！

再び着信。

勿論同じ相手からである。

「……もう！何よ！」

乱暴に通話ボタンを押し、耳に押し当てる霧江。

『霧江、大変だ！』

零次の声。

切羽詰まっている様子だ。

一度切ったことを咎めもしなかった。

非常時らしいので、とりあえずこのタイミングでかけてきたことと、昨夜のことを一時的に水に流す霧江。

「なに、どうかした？」

『実はな……驚くなよ？例の通り魔が捕まった』

「……はあ？」

『だから？切り裂き魔？だよ。そいつが捕まったんだ』

「何いってんの。切り裂き魔なら私が捕まえたんじゃない。鎌鼬の女の子でしょ？」

『だから、そうじゃないんだよ。切り裂き魔の正体は亡霊剣士^{ソードファントム}だった。

鎌鼬じゃない。そいつの剣と、被害者の傷の切り口が一致した』

霧江は首をかしげた。零次の言っていることが、全く理解できない。

『つまり、ああ、とにかくすぐ警察署へ戻ってこい！いいか、今すぐだぞ！！』

その言葉を最後に、電話は一方的に切られた。

「なんなのよ、もう……！」

「……事件ですか？」

と、頼子が問う。

「どうもそうみたいだけど……」

「でしたら、速く行ってください。ここの支払いは私がしておきますから」

「でも……」

「霧江さん」

名前を呼んで、頼子は優しく微笑んだ。

「ごめん。ありがとう」

霧江は頷いて、入口の前で一度だけ頼子を振り返り、店を出た。



『だから！私は通り魔なんかじゃないんだって！おねえちゃんを襲ったり、公園を壊した時は、

自分でも何やってんのか本当にわけわかんなくなってる……ねえ！そのことは謝るから！

お願いだからここから出してよーっ！』

天壤署内、取調室。

その机の上に、スピーカーに繋がれた四角い台座が置いてあった。台座には、赤い十字架――ブラッディクロスがはめ込まれている。スピーカーから聞こえてくるのは、通り魔事件の容疑者として逮捕された、あの少女の声だ。

その証言を聞いていたのは、霧江、零次、風森刑事の三人。

「……つまり、どういうこと？」

一番前で聴いていた霧江が、零次に向かって振り返る。

「ようするに、この子は切り裂き魔じゃなかったってことさ」

「といっても、霧江さんを襲ったり公園を破壊したのは事実なので、誤認逮捕という訳じゃあないですね」

零次が答え、風森刑事が引き継ぐ。

「じゃあ、問題ないんじゃないの？」

と首をかしげる霧江。

「バカ、大アリだ。なんでお前がこの子に襲われたと思う？」

零次が台座のブラッディクロスに目をやりながら言う。

「なんで、って……」

「実はこの娘、捕まえてから今日までずっと錯乱状態だったんです。さっきになってようやく落ち着いて会話できるようになったんですが……。」

精神鑑定の結果、どうやら幻覚系の魔術による一種の催眠状態にあったらしいんです」

風森刑事は調査書を片手に語った。

「！それって……」

「ああ。少なくともお前が、この切り裂き魔事件に巻き込まれたのは偶然じゃない、ってことだ。」

彼女はお前に差し向けられたんだよ。お前の命を狙ってる誰かにな」

「一体誰が……？」

零次の言葉に、思考を巡らせる霧江。

島に来たばかりの霧江が狙われる理由。

考えられるとすれば、ヒーローに恨みを持った人間、つまり彼女が解決した事件の関係者。

そして、あの夜素顔を見られた、あの吸血鬼。

「それは今から調査する。お前が今日までかわった事件について洗いなおす。悪いが、今日は帰れないと思え」

零次の言葉に、霧江は「そんなあ……」と俯いた。

ラーメン屋に残してきた頼子のことが気がかりだった。



霧江はあの後、頼子に今日は帰れないからお金は今度返す、とメールを送った。

最初の爆破事件から、今日のひたくり事件まで、霧江がこれまで関わってきた事件の再調査を行ったが、結局、その進展は得られなかった。

にもかかわらず、霧江が女子寮に戻れた頃には、もう朝の四時を回っていた。

「……はあ、ねむ」

ようやく解放された霧江は、部屋に戻ると着替えもせずにすぐに棺桶に入り、ふたを閉めて泥のように眠った。

吸血鬼事件、解決のタイムリミットまで、あと二日。

第十九話 闇は牙をむく。(前書き)

※ここを先に読んじゃうと多分面白くなくなると思うので、出来れば始めから読んでほしいです。

第十九話 闇は牙をむく。

「……たいしたもんだわ」

女子寮裏の公園。

頼子が張った結界の中で、霧江はぼそりと感想を漏らした。

「なにがです？」

声に、恭也が首だけで振り返る。

その前では、頼子が小太刀を鞘に納めているところだった。

ヒーロー認定試験の期限も近く、例の人形師との戦いに向けて少しでも戦力を補強したかった霧江だが、恭也の実力に若干の不安があった。

そのため頼子に頼んで、トリオを結成した日と同じように模擬戦をしてもらっていたのだ。

頼子を読んだのは、その後で例の話の続きをするつもりもあったからだ。

吸血鬼の能力——特に筋力や妖術など攻撃にかかわる面を鍛えるには、模擬戦は中々有効な手段だ。

正確には、鍛えるというより人間から変化した肉体にいか慣れるか、つまり自分に何が出来るかを自覚してゆく、ということなのだが。

「なんていうか、もともと才能みたいなものがあっただけでしょうね。最初に頼子と試合したときから思ってたけど、なりたての癖に吸血鬼の力にかなり適応できてるわ」

「これでもいいいっぱいいいいなんですけどね……相変わらず頼子さ

んには勝てる気がしないし」

「そうでもないわ。最初の時は頼子の強さばかりに眼が行っちゃったけど、あんたも十二分に化け物染みてる。ま、さすが私の血統、ってところかしら」

フフン、と霧江はうれしそうに鼻を鳴らした。

「確かに、生まれたての吸血鬼にしては異常な強さですね三号は。だんだんと攻撃を読まれ始めてますし、うかうかしてるとすぐに一本くらい取られてしまいそうです」

私も鍛えなおさないといけませんね、と頼子は小太刀を布で包みながらそう言った。

頼子は二年前の中学対抗武術大会の優勝者だ。

かつてこの島の中学生の中では一番強かった、そんな風に言ってしまうと凄みも何もないが、この島の学生には妖魔や半妖もいることを考えれば、だいたいその強さの想像は出来るだろうか。

もともとこの島の魔法使いは誰も彼も、他のスフィアのそれと比べて、戦闘能力が非常に高い。

競争相手に妖魔の存在があるためだ。

脅威としての妖魔に対し、集団的に行動し自分たちの身を守っている外の魔法使いたちと、隣人としての妖魔に対し、一対一で向き合っているこの島の魔法使いでは、その？力？に対する認識が根本的に違う。

外の世界、他のスフィアならば、攻撃の手段としての魔法には、自分たちの身を守るためのもの、外敵を駆逐するためのもの、そういう意味合いが強い。

そのため、餅は餅屋として、各スフィアには外敵に対処するための軍隊、対妖魔部隊が存在する。

戦いに参加するものと、しないものとの立場が、明確に区別されているのだ。

しかしここでの魔法は、人間と比較して強大な力を持った妖魔に対し、彼らを隣人として共存するため、自分たちを、強引に相手のいる領域にまで出来るだけ近づくための手段だ。

妖魔は強く、人間は弱い。

しかしこの島に、妖魔と人間がともに暮らしている限り、ただ弱いままではいけない。

例えば、銃が合法的な国で近所に住む人々が皆銃を持っていたら、自分も持たざるを得なくなる。持たねば安心して眠れないだろう。

金がなく、安物で粗悪な銃しか買えないとしても、だ。

それが人間というもの。

それと同じだ。

ここで枕を高くして眠りたければ、より強い力を持っていなければならぬ。

ここは、そういう場所なのだ。

霧江にも、だんだんとそれが解って来たところだった。

そして頼子は、その中でもさらに研ぎ澄まされた刃を持っている。語弊を生じるかもしれないが、先ほどの例えで言うなら、隣人たちがしょぼくれた拳銃しか買えなかった中で、立派な散弾銃を買うことが出来たようなものだ。

その散弾銃に、恭也は追いつき始めている。

最初からよい銃を持っていたが、それをどんどんグレードアップさせているような感じだ。

と言うより、その銃を使いこなしていると言った方が、彼の力の性質を現す表現としては適切だろうか。

彼はより強力なバズーカ砲を最初から所持していた。

初めての戦闘では使いこなせなかったその扱いに、徐々に慣れ

始めているのだ。

「ま、とにかく……この分なら今夜、一緒に連れてっても問題なさそうね」

「今夜、何かあるんですか？」

と、頼子は首をかしげた。

「ちょっとね。とにかく空けといて」



パラパラと弱い雨の降る夜。

雨雲が、空の丸い月を覆い隠していた。

まだ真円ではなく、完全な満月までは、あと一日猶予がある。

明日の夜になれば、例の吸血鬼は何か行動を起こすはずだ。

「満月は明日……その吸血鬼が、何か行動を起こす前に止める最後のチャンスかもしれないのか……」

「となれば、何としても今夜中に、せめて犯人の正体だけでも掴んでおきたいですね」

場所は女子寮の屋上

恭也と頼子はやる気満々のようだ。

「……少なくともあいつが、私の命を狙っていることは確かみたいだし、今出歩けば、何かのアクションがあるかもしれないわ。」

二人とも、絶対に私のそばから離れちゃだめよ？特に恭也、あんたは一回殺されてんだからね」

「あの時とは違いますよ。今日会ったら殺された恨み、晴らしてや

ります」

そう言って、胸を叩く恭也。

「もう一回殺されるフラグですわね、わかります」

と、頼子はクスクスと笑った。

「何をー」と、反論しかけた恭也の顔面に軽くアイアンクローをかまして黙らせ、霧江は言葉を紡ぐ。

「とにかく、相手はこれまでで一番危険な奴よ。十分に警戒するのと。いいわね」

「はい」

「ふわい」

頼子と恭也がほぼ同時に答えるのを確認すると、恭也の顔面から手を離し、霧江はホルスターからクロス・ガンを引き抜く。

いつも通りの手順で変身を完了させると、三つの影は夜の街へ飛び出していった。



「先生、調整が終わりましたよ」

そう言って、大きめのPDA持った羽月真琴は、零次の研究室の扉を叩いた。

「おう、マコ、ご苦労さん」

『マコ』、とは零次が真琴^{マコト}からとった愛称である。彼は扉を開け、

生徒であり恋人でもある少女を部屋の中に招き入れた。

彼女との始まりは一年半前。

大学の後期で、夜間学部も受け持つことになった時のことだった。昼間の学部ではそれなりに人気の集まった零次の授業だったが、妖魔が主な生徒である夜間は性質が違うのかほとんど人気が出ず、受講しにきた学生は一人、また一人と消えていった。

その時、最後まで残っていたのが羽月真琴だった。

彼女はいつも零次の授業を、一番前の席で目を輝かせながら聞いていた。

後ろの席にもう誰もいないことにも気付かないほど、自分の授業に夢中になってくれていた彼女。

その姿に、ひどく感激したのが最初だったと思う。

ひとり嬉し泣きの涙を流していた零次と、どうして彼が泣いているのか分からず狼狽していた彼女。

その後も彼女は零次の授業に一番前の席で陣取って、気づけば、一緒にすごすようになっていた。

だから、彼女はまだ生徒だった。恋人であると同時に、彼女にとってかけがえのない生徒だった。

「それじゃ、早速試してみるか」

「はい」

と、真琴はPDAを零次に差し出す。

正確にはただのPDAではなく、彼女の開発した『魔力逆探知システム』が組み込まれた代物だった。

まだ実験段階のもので、自分は信用しているが、確実な信憑性があるわけでもない。

なので零次は警察には話さずに独自に調査を行うつもりでいた。

零次はデスクから小さな金庫を取り出し、開ける。

「それは……？」

その側にぴったりと寄って、金庫の中をのぞく真琴。中にはビニール袋が入っていた。

「警察から預かった、今朝発見されたばかりの証拠品だ。例の、霧江が鎌鼬と戦った公園に落ちていたものだよ」

吸血鬼事件に関連した事件として、霧江のかかわった事件に関する徹底的な再調査が行われた。

これは、その際に新たに発見されたものだった。

「そのビニール袋が、ですか。中に何が？」

「よく目を凝らすと見えるよ。ほら」

そう言って、零次はビニールを真琴の顔に近づける。

「……糸、ですか？」

「そう。糸だ。それも、人形を操るために使われるものだそうだ」

「――！それって」

「そう。よくわかったな、えらいぞ」

と、零次は真琴の頭を撫でてやる。

「つまり、こいつはこの街を騒がす吸血鬼に繋がる可能性がある、ってことだ。マコ、君がやってみろ」

「は、はい。わかりました」

事の重大性を感じたのか、真琴は緊張した面持ちで、零次から証

抛品を受け取ると、PDAを起動し、スキャナーにその糸の残留魔力を読み込ませた。



第四区。

霧江が二回、あの吸血鬼との戦いを行った場所。

あのマンシヨンの屋上。

三人はビルの上を飛び次いで、ここまでたどり着いた。

パラパラと降っていた雨は、もう止んでいた。

といっても、頼子はそんな八艘飛び連発なんていう芸当など出来ないのです、彼女の体は恭也が抱えていた。

霧江でなく恭也なのは、万一のために霧江をフリーにしておく必要があったからだ。

それは理解しているが、頼子は不満そうだった。

マンシヨンの屋上で、恭也は頼子を下した。

「全く、生まれて初めてのお姫様だっこれが三号なんて……大事なものを奪われた気分ですわ」

「文句があるんなら自分で飛んでくださいよ。ほら、霧江さんに空飛ぶコートでも借りたらいじゃないですか」

「あ、あれは……ちよっと」

と、顔を伏せる頼子。

当然だろう、あんなものを好き好んで使うのは兄貴とその生徒くらいなものだ。それに、

「アレ、まだ修理中なのよ」

「そうなんですか……」

鎌鼬の空中戦で切り裂かれたあのコートは、まだ修理が終わっていない。

開発者の瀬川君が泣きながら徹夜で頑張っている、と零次から聞いていた。

霧江の言葉に、ほっとする頼子。

結局、あの後霧江は頼子と二人きりで話をする機会を作れなかった。

恭也が珍しく、たまには三人でアイスでも食いませんか、と誘ってきたためだ。

蹴ってもよかったが、先に頼子が賛同してしまったため、そうするわけにもいかず、昨日の昼間の話は、有耶無耶になったままだ。

この後、何もなければ、恭也を帰した後で話をしよう。霧江はそう考えていた。

その時、恭也が「あっ」と声を上げた。

「どうしたの、恭也」

「ほら、アレ！見てくださいよ！！」

そう言って、恭也は下の街、大通りに面した向こう側を指さす。

「?どれです?」

首をかしげる頼子。

当然ながら、人間の視界しか持たない彼女には見えていない。

「だから、アレアレ!」

必死に指さす恭也。

その先に霧江は視線を向けた。
大通りの向こう側は、一軒家も多い住宅街。その、裏路地。

「なっ！」

声を上げる霧江。

彼女の目に飛び込んできたのは、小さな女の子を糸で絡め取っている妖魔の姿だった。

「ヴィランだ！こんな時に……二人とも、ここで待ってるのよ！速攻で片付けてくるわ！」

そう言って、霧江は一直線で飛びだした。

それは、緊急時の判断としては間違っていないはずだった。
霧江の出す最高速度には、二人ともついてこれないからだ。
しかし、霧江は後に、ここに恭也と頼子、二人を残してきたことを、後悔することになる。

霧江は飛び降り、一気に駆けた。
現場まで、あと数十メートルと迫った時。研ぎ澄まされた霧江の聴覚は、確かにその声を聞いた

「……て……」

弱弱しい声だった。

それでも必死に、その少女は生きようと、最後の抵抗を続けている。

「たす……けて……」

「――わかった、今助ける」

だから、辿りついたとき、自然とそう答えていた。
雲に隠れていた月が顔を出し、裏路地を照らす。

目の前には、白い繭のようなものを抱えている、八つの目をもった少女。

偶然の神様は、最高のタイミングをも心得ているのだ。

最悪と最高は紙一重。誰かにとっては最悪でも、他の誰かにとっては最高の機会となりうる。

霧江は、アイテムボックスを片手で叩く。

ゆっくりしている時間はない。速攻で片付けなくては。

000と、963。照合システム、オン。

ブラッディクロス・ブランク、オン。

顔を照合し、個人データへアクセスがなされる。

「名往中学二年、鬼雲絵里華だな。現行犯だ、あんたを封印する」

そう言って、霧江は一気に駆けだした。

化け蜘蛛の少女、鬼雲は突然のことに戸惑いながらも獲物を左腕に抱える。

「……封印？ なんなのよ、お前は！」

そう言って、右手を前に突き出し蜘蛛の糸を飛ばしてくる。

鬱陶しい、と霧江はスピードを緩めないまま左手で飛んでくる糸を薙ぎ払う。

相手は左手に繭を抱えたまま、人差し指を立て、背後、裏路地を抜けた先、道路を挟んだ向かいにある背の低いマンションに向けて

別の糸を飛ばす。

「何って？」

霧江は走りながら右こぶしに力をこめた。

「この街の」

マンションの壁面にくっつけた糸を、勢いよく戻し、飛んで逃げようとする鬼雲。

逃がすか、と霧江は跳躍し、瞬時に追いつき、その顔面に強烈な右フックを叩き込んだ。

「正義のヒーローよ」

そう言い切って、繭を――糸に巻かれた少女を抱え、着地。

鬼蜘蛛の少女は肉体ごと封印され、そのブラッディクロスがカチヤリと地面に落ちた。



霧江が飛び出していった、その直後のことであつた。

「三号！」

頼子が叫ぶ。

霧江の背中を見守っていた恭也が、顔を上げた。

「――な！」

黒いフードを被った影が、空高くから二人の影を見下ろしていた。恭也には、暗闇でもその顔がはっきりと見えた。

金髪で、碧眼。ぱっと見ただけではどちらかわからない中世的な顔立ち。

ただし、作り物のように動きのない顔で、瞳はガラスのようだった。

「人形だ！」

恭也が叫んだと同時に、その影は数を増やす。

周囲に隠れ潜んでいたのか、同じ大きさの人形、合計8体。二人を取り囲む。

「こりゃ、まずいかもですね……」

額に汗を浮かべ、じりじりと下がる恭也。

「やるしか、ないでしょう。せめて霧江さんが戻ってくるまで持たせますよ」

対して頼子は、既に臨戦態勢を整えていた。

「三号、背中は預けますよ」

そういつて、背中あわせになる二人。

「……しかたない、やるしかないですもんね」

周囲に円を描くように並び、その円を縮めるように同時ににじり寄る人形たち。

彼らの戦いは、静かに始まった。



零次と真琴もまた、第四区を歩いていた。

霧江たちとは離れた場所、学生寮の多い地域だ。

「本当にこっちなのか？」

一度言っただことのある喫茶店を横目に、零次は真琴に問う。

「はい、そのはず……です」

さすがに怖いのか、声が震えている。

失敗したな、と零次は思った。彼女は置いてくるべきだったかもしれない。

彼女の持つPDAに表示された地図は、この先の小さな建物を示していた。



霧江は鬼蜘蛛の少女を倒した後、襲われた少女を絡め取っていた糸を剥がし始めた。

糸は予想以上に頑丈で、霧江は悪戦苦闘する。

「こんの……！」

あまり時間をかけていられない。

速く二人のところへ戻らなくては。

そんな焦りが、しかし逆にその手を遅らせる。

簡単には剥がれてくれないようだ。

やっとのことで、少女の頭に巻かれていた糸を剥がし終える。
その、矢先のことだった。

「マ、スター……」

「恭也!？」

その裏路地に、全身傷だらけの恭也が歩いてきたのだ。
恭也は裏路地の入口に、数歩入ったところで倒れた。
水溜りから血と雨水とが混ざったしぶきが飛ぶ。

「ちょっと、どうしたの？」

霧江は少女を地面に横たえると、恭也のもとへ駆けつけた。

「恭也! 何があったの!？ 誰にやられたの？ 恭也!! 恭也ってば!
!」

名前を呼びながら、霧江は変身を解き、片膝について彼の体の様子を見る。

うつ伏せになっている彼を、ゆっくり動かして仰向けに。
彼の腹には、大きな刀傷があった。

「これって……ねえ、回復は？ 再生できない」

「う……く……」

声をかけてみても、恭也はうめき声を上げるだけだった。
魔力を失っているのか、傷は再生しない。

「くそっ！しっかり！」

霧江は自身の右手、親指の腹を噛み切ると、恭也の口に押し当てる。

とにかく、傷を再生させなければ。

「飲んで！速く！」

まずは自身の血液を与え、魔力の回復を促す。

恭也は霧江の指を軽く咥え、その血液を舐めとるように吸い始めた。

その様子に一息つき、改めて恭也の体の傷に目を落とす。

刀傷に加えて、魔力の喪失。この症状、以前何処かで見たことはなかったか……。



「そうだ、三号」

背中あわせになった二人、戦闘が始まる直前、頼子は右の肘で恭也の背中を打った。

突き飛ばされる恭也。

彼が驚愕と共に振り返ると、その白刃は、彼に向けて振るわれた。恭也は驚愕の表情を浮かべながら、崩れ落ちる。



「……まさか」

その傷を作れる人物に思い当たり、しかし信じられずに首を振る

霧江。

そんなはずはない。

確かに彼女は、恭也のことを好いてはいない。

だが、嫌ってもいなかったはずだ。

それに、彼女は私の友達だ。

友達で、相棒で、そんな彼女がこんなことをするわけがない。

だが、思い出せ。と自分の中で別の自分が叫ぶ。

彼女は、十年前に霧江と会っていた、そう言った。

それは、いつだった？

あのときでは、無かったか。

あの悪夢の日。

二度と思い出したくない光景。

封印した記憶の扉を、開こうとして――

はっと、気付く。

「……恭也？ ちょっと飲みすぎじゃない、ねえ？」

彼の傷は、もう治っているようだった。

「霧江さん……」

恭也は、まだ苦しそうに声を上げた。

「犯人が、吸血鬼事件の犯人が分かりました……」

かすれるような声で、恭也は口を開く。



「まさか、こんなことが……」

魔力逆探知システムは、彼が最も愛している生徒の作った最高傑作だ。

その出来を疑いたくはなかった。

しかし、彼は目の前の光景を信じることもできなかった。

辿りついた先には、ボロボロのアパート。

システムが示しているのは、その一室。

その部屋の表札に書かれた名前は――

「……っ！」

しかし、本当にそうなら、全ての辻褄が合う。

あの日以来、吸血鬼が現れなかったことも、あの日、霧江が鎌鼬に襲われたことも。

一本の筋で通る。

零次はカギを壊し、強引に室内に押し入る。

一緒に入った真琴が、その光景に悲鳴を上げた。

部屋中に、所狭しと並べられた、大小様々な人形。人形。人形。

女が大半だが、男の姿もある。

どちらの性かわからないものもある。

文字通り、部屋を埋め尽くしていた。

真っ暗な室内で、それは何よりもおぞましい光景だった。

「マコ、警察に連絡を……」

零次は一度呼吸を挟む。

首を振り、意を決したように、もう一度口を開き、言葉を紡ぐ。

「吸血鬼事件の、犯人は――」



頼子が振るった白刃は、真横から恭也に向けて放たれていた白い光の槍を受け、流す。

驚いて、腰を抜かし尻もちをつく恭也。

「真横にも気をつけませんとね」

笑って、頼子は恭也が立ち上がるのを確認すると再び背を向けた。

「……いや、やっぱり後ろにも気をつけないと駄目だな」

「――え？」

その言葉に、振り向いた瞬間。

頼子は悟った。

（まさか、犯人は――）



「犯人が、吸血鬼事件の犯人が分かりました……犯人は――」

かすれるような声で、恭也は口を開く。

「待って、よく聞こえないわ」

霧江は恭也の口に耳を近づける。

「いいですか……？ 犯人は――」

「……え？」

首筋に、鋭い痛みが走った。

そのままがば、と、抱きしめられるように、その体は抑え込まれる。

「……あ」

全てを悟った時には、もう遅かった。

彼女の血は抜かれ、世界は反転した。

「犯人は――」

月が、満月に少し足りない月が、霧江を見下ろしていた。

「――僕ですよ」

それは、暗い闇の底から響いてくるような、声だった。

第十九話 闇は牙をむく。(後書き)

どうしてもここまで書きたかったので一気に更新しちゃいました。
さーて、これからどうなるのかなー？

お気に入り登録、ちよつとずつですが、してくれてる方が増えてる
ようで嬉しい限り。

拙い作品ですが楽しんでいただけたのなら幸いです。ありがとうございます！
そして、ありがとうございます！

第二十話 不死者は王の力を求める。

『おかけになった電話は、電波の届か——』

零次は一度切り、かけなおす。
流れたのは同様のメッセージ。

「くそっ」

霧江と連絡が取れないことに、零次の胸が騒ぐ。とても嫌な予感がした。

彼は携帯をポケットに押し込むと、真琴に向き直る。

「マコ、警察が来るまでここを動くんじゃないぞ」

「えっ、ここじゃなきゃ駄目ですか……？」

そう言っ、ちよつと涙目になる真琴。

その猫耳がしなっ、と垂れている。

流石に、こんなにも人形がうじゃうじゃしている薄気味悪い部屋に女の子一人置いておくのは可哀想かもしれないが、そうも言っていられない。

「別に外でもいい。寒くないならね。とにかく誰か来るまで動くんじゃない。いいね？」

「は、はい……」

「いい子だ」

そう言っ、零次は持っていた鞆から、あの『空飛ぶコート』を取り出した。

出てくる直前、瀬川が修理が終わったと言って持ってきたものだ。零次は真琴の頭をやさしく撫でたあと、「それじゃ行ってくる」と言って、外へと飛び出していった。

[illegible]

あっ はっ はっ はは はは はは はは はは はは はは はは はは はは
は！！！！！！
はは はは はは うア アア アア アア アア アッ ハハ ハハ ハハ ハハ
ハハ アッ ハア アア !!!!!!!」

「うまうまいった！うまうまいったうまうまいった！……これ、全てが手に入る！！俺がほしいものは、全部！！！」

……いや、最初の目的自体は、違っていた。

だが自分の運命は此処に、今のこの瞬間のためにあったのだと、志木恭也は確信する。

恭也には、その生涯をかけてでも成し遂げたいと思っていたある目的がある。

人間の血が必要だった。

だが、ただの人間だった彼に、血液を合法的に手に入れる手段はなかった。

最初は自分の血液だけを使っていたが、そんなものに足りなくなる。

他人の血が、どうしても必要だった。

そこで、少しでも警察の目を欺くため、吸血鬼がやったように偽装することにしたのだ。

用意した人形は二体。

等身大で、中身は張りぼてに近いが格好だけは立派に、それらしく装った人形と、実際に家に侵入して、血液を回収するための小型の人形。

小型の人形を操作し、換気扇や郵便受けから室内に侵入させて吸血。

人形の体にはあらかじめ催眠魔術の魔法陣を描いておき、途中で目を覚まされても、すぐに眠りに落とせるようにしておく。

勿論、牙の痕を残しておくことは忘れない。

その間、大きいほうの人形はスケープゴートとして犯行現場の近くの空を適当に飛ばしておく。

こうすることで、あたかも謎の吸血鬼が血を吸ってまわっているという状況を、彼は演出したのだ。

そうして、順調に血液を集めているうち、ある転機が訪れた。

本物の吸血鬼が、彼の前に姿を現したのだ。

それは、霧江が最初に人形と戦った夜のことではなく、その数時間前。

それを見たのは、本当に偶然だった。料理屋を爆破し、金を奪って逃げた男を、華麗に、かつ鮮やかに、圧倒的な力で打ち倒すその姿を見た。

何よりも、どんな傷を受けても瞬時に治ってしまうその回復力とそれを可能にするほどの魔力に、彼は心惹かれた。

そしてその日の夜、一度目の接触。

これは、実は予想外だった。犯行現場を徘徊しているのが人形であることがバレてしまい、焦って、あわてて彼女を撃った。

あらかじめ、何かあった時のために仕込んでおいた、攻撃用魔法陣を体を書いておいた人形が役に立った。

幸いにも奇襲は成功し、人形は逃がせたものの、犯人が人形師であることがバレたことで、警察につきとめられるのは時間の問題だと思った。

だからこそ、その次の日、新たな計画を実行した。

もう一体、スケープゴートとしての人形を作り、それに真犯人らしい演技をさせる。

そうした上で、自分を襲うことにしたのだ。

その場面で霧江をどう呼び出すか悩んだが、悩んでいる彼の前を、この島では見たこともない種類の蝶が一匹飛んでいた。

彼は直感で、その蝶を人形に叩きつぶさせた。勘は、見事に的中した。

だが霧江を、屋上に設置していた魔法陣の光の槍で撃った時、心臓を貫いてしまった時は本当に焦った。

焦って、うっかり人形を接近させすぎてしまう。

しかし、どうやら霧江は死なず、人形だということにも気付かなかったようだ。

彼女の生存を確認し、チェイスの末、計画を実行した。

ブラフは、それに命をかけてこそ、相手を騙せるもの。

恭也は、本気で自分を殺しにかかった。

勿論、生き残る算段はしていた。

即死しないように狙いを調整し、彼女の眼の前で撃った。

本当に苦しかったし、本気で死にそうだったから、疑われることなく、恭也は霧江に助けられた。

ここで、またひとつ幸運。

霧江は、回復魔法を使えなかったのだ。

彼女は彼を助けるために、彼を転化させるしかなかった。

こうして、偶然にも心惹かれた吸血鬼の力を手に入れることが出来た。

人間よりも強大な力と、強大な魔力。

しかし、まだ彼の望みを叶えるには、力が足りなかった。

もっと強大な魔力が必要だった。

その為に、彼はまた新たに計画した。

霧江の不意を打ち、血液を奪い、さらに強大な力を得るための計画を。

まずやったのは、情報の収集と、手駒の確保。

彼は霧江の真似をし、数多くの昆虫を使い魔として使役した。

霧江は見た目にこだわってか、もともと島にはいなかったような種類の黒い蝶ばかりを選んで使い魔にしていたのに対し、恭也は何でも使った。

ゴキブリ、蜘蛛、人家に容易に侵入でき、かつ、そこにいてもおかしいとは思われない虫を。

そうして、あらゆる情報を収集した。

彼が特に使えると注目していたのは、下記の五つ。

一つ目、最近長い黒髪の少女に幼馴染の彼氏を取られたという鎌鼬の少女がいたこと。

二つ目、人間の味に興味を持っていた鬼蜘蛛の少女がいたこと。

三つ目、お金に困っていた火鼠と人間のハーフがいたこと。

四つ目、通り魔の正体をつかんだこと。

五つ目、零次が毎晩女子生徒と淫行に耽っていたこと。

恭也はまず、三人の少女たちに接触し、暗示をかけた。

霧江は決して使わなかったものだが、吸血鬼の目には、異性を惑わす力が宿っている。

それを駆使し、二体の妖魔と一体の半妖という強力な手駒を確保した。

ところが最初の一体は、予想よりも早く使うことになってしまった。

恭也の荷物を運ぶのを、みんなで手伝うと言ってきたからだ。

あの家を、誰かに見られる訳にはいかなかった。

家にたどり着く直前、鎌鼬の少女を通り魔に見立てて、霧江を襲わせた。

これがうまくいって、結局三人に家の中を見られることはなかった。

貴重な手駒を一つ減らした恭也は、今度は残り二つの情報を活用し、霧江に心理的な隙を作らせる計画を立てる。

零次と頼子の関係に着目し、そこから霧江と頼子の関係を、一瞬でもいいから崩せないかと思案した。

ここでも、恭也はうまくやった。

実は、零次が松居刑事に頼子の正体について話した日の夜、零次による『頼子を見張れ』という依頼は撤回されていたのだ。

それを霧江に気取らせないため、恭也はさらに危うい立ち回りを演じなければならなかった。

霧江が零次に頼子との関係を問いただそうとした日の昼間、霧江が訪れる直前に、大学の事務員に暗示をかけ、零次を呼びださせて

いた。

ここで、小さな人形をこっそり操ってSM用のムチを床に転がして、霧江が零次に対し幻滅するよう仕向けていた。

予想外なことに彼女はそれの用途を知らなかったのだが、説明する前に真琴が現れ、部屋を出ざるを得なくなったお陰で、霧江は改めて、夜中に零次が何をやっているかを押さえることにし、ものの見事に淫行の現場を目撃。

零次に幻滅し、話を聞く気も失せた彼女は、零次ではなく頼子に関係を聞く決心をつける。

その次の日に、鎌鼬の少女にかけた暗示を解き、同時に警察に向け、通り魔の正体に関する匿名のタレコミを行った。

霧江を襲った通り魔は偽物で、何物かに仕組まれたものだったという事実により、彼女が関わった他の事件にも関連性があるかどうか再捜査される。

霧江はその間警察の捜査に協力させられ、頼子や零次に話を窺うどころではなくなるだろう。

本来の目的は、二人きりで話をするタイミングをなくし、疑問を解消できない霧江の心の中に靄もやを作っておくことにあった。

二人が出掛けた直後に警察に呼び出されるように、かなり早いタイミングで通報したのだが、警察が動くのは思ったよりも遅く、恭也はヒヤリとした。

その間彼らがいつ話をし始めるかわからなかったので、時間稼ぎにもう一つの手駒を投入。

火鼠の半妖を操り事件を起こさせる。

結果、かなり際どかったが、どうにかうまいタイミングで霧江は呼び出しを受け、靄もやどころか、彼女と頼子の間にほんの少しの溝を作ることに成功したのだった。

電話やメールのことは警戒していなかった。

そんな大事な話を簡単に済ませるような性格でも、そうしなければならぬ状況になるほど追いつめたわけでもないからだ。

あとは簡単だった。

その後も霧江と頼子が二人きりにならないように動いた。

そしてこの夜、吸血鬼退治のため三人で出掛け、頃合いを見計らって最後の手駒、鬼蜘蛛の少女を動かす、霧江がひとりで退治に行くよう仕向けた後は、頼子と二人っきりになったところで、周囲に忍ばせていた人と共に彼女を襲った。

反撃を受け、傷を受けることも想定のうちだった。

なぜならその傷は、頼子の退魔刀にしか作れない傷であり、霧江が頼子に対して一瞬でも疑いを持つよう仕向けることが出来る材料になるからだ。

先に作っておいた溝が疑いを強め、それを否定する思考が、心に隙を生む。

その間に、彼女の血を出来るだけ多く啜り、それで力をつけたあとは、力づくで奪えばよかった。

こうして、様々な偶然に助けられたものの、計画は完遂し、彼は真の吸血鬼となった。

目的達成まで、あと一步。

恭也は、仰向けに倒れている霧江を見下ろす。

だらりと開いた口、開ききった瞳孔。

しかしまだ死んではいなかった。

「本当は、生かしておくつもりだったんですけどね。あなたのことは嫌いじゃなかったし」

そう言って、霧江の前で片膝をつく。

ホルスターからクロス・ガンを引き出し、ポケットから二つ、霧江と鬼蜘蛛の少女のブラッディクロスを抜き取る。

霧江はわずかに手を動かしたように見えたが、それ以上の抵抗は出来ないようだ。

「でも、やっぱり駄目だ。……思ったより、面白い存在だったんですね、あなたは。

この血が全身を巡った時わかりましたよ、ただの吸血鬼じゃなかったんだ」

言って、恭也は笑みを浮かべて、霧江に見せつけるように、奪い取った彼女のブラッディクロスを翳す。

「不死者の王
ノーライフキング

……あなたに流れていたのは、全ての不死なる存在を統べることのできる王者の血……こんな風に封印しておくなんて勿体無い」

霧江の体を抱き起こし、その首筋をあらわにする恭也。

「要らないなら、僕がもらいましょう。あなたがならないのなら、僕がなってあげます。

だから、残しておいた血も貰いますよ」

そして、恭也は再び彼女の首に噛みつくこうとして――

「やめとけ。そいつはお前には荷が重い」

――ガチリ、と、彼の歯は正面から一直線に飛んできた銀のナイ

フの刃を噛んだ。

「……速いですね」

霧江を下し、噛んだナイフを吐き捨てるように放る恭也。

「シスコンなんぞでな。妹のピンチには駆け付けずにいられないんだ」

裏路地の出口から響く、乾いた靴の音。

真黒なコートを身に纏い、鬼灯零次は、落ち着いた足取りで歩いてきていた。

「彼女もいるのですか？ 贅沢な人だなあんた」

「これだから童貞は。向ける愛の性質の違いくらい理解しろ」

「……童貞は関係ねーだろ」

す、と零次の足が止まる。

対峙する両者。

《standby》という不吉な電子音声で、零次の顔をしかめさせた。

「――貴様！」

「零次さん、いくら強かろうと、あんたはただの人間だ。止められますか？ この僕を」

そう言って、クロス・ガンの銃口を真上に向ける恭也。

そこにはすでに霧江のブラッディクロスが装填されている。

「……変身」

引き金を引く恭也。

打ち上げられた赤い膜が下り、零次が霧江のために用意したそのスーツを装着する。

「……ああ、悪くないですね。さっきよりも力がみなぎってくる、この感覚」

恭也は自分の姿を見回し、酷薄な笑みを浮かべる。
そうして、改めて零次を見た。

「そいつは霧江のもんだ。返してもらうぞ」

その顔からは、不思議と感情が読めない。
もう少し慌てる様を見たかった恭也は残念に思った。

「今の僕は、ノ・ライフキング不死者の王に最も近い存在だ。
もう一度言いますが、ただの人間のあんたに何が出来るんです
？」

その言葉に、絶望的なはずの状況に、零次はむしろ強く笑った。

「確かに、今の俺じゃ無理だろうな。だが……」

そう言って、零次は空飛ぶコートを脱ぎ棄てた。
その下……腰に巻かれていたのは、霧江がつけているものと同じ
デザインの、ホルスター付きのベルト。
そこには、もう一丁のクロス・ガンがあった。

「これなら、どうだ？」

言って、零次はその銃口に、いつの間にか指にはさむように持っていたそのブラッディクロスを装填した。

《Standby Dragon form》

「……それは、まさか！」

ヘルメットの下で目を見開く恭也。

零次はクロス・ガンを空に向け、引き金を引いた。

「変……身ッ！」

第二十話 不死者は王の力を求める。(後書き)

8／6 苦しかった種明かしの一部を修正。
少しはましになっただろうか……。

第二十一話 切り札は天の力。

イメージは悪魔。

ベースとなるスーツは黒く、手足を覆う脚甲、籠手は骨を連想させる白色で、デザインも外骨格のように無骨。

胸部のアーマーも同様に、鋭い肋骨が外から覆っているようなデザイン。

胸の中心には、真っ赤な球体が嵌め込まれている。

その兜は、霧江のそのようにヘルメットではなく、竜の頭蓋骨を模したような意匠が凝らされ、側頭部からは二本の角が、後方斜め上に向け真っ直ぐ生えている。

「……驚きましたよ、ヒーロー用のスーツは、これだけじゃなかったのか」

と、恭也。

対して零次は、チツチツチ、と舌を鳴らしながら右手人差し指を振る。

「ただのヒーローじゃないさ。こいつは？スカイドラゴン？……ヒーローを守るためのヒーロー。この街の切り札だ」

言って、その人差し指を恭也に真っ直ぐ向ける。

通常の指さしではなく、腕をひねってその手は上下逆になっていた。

「恭也。悪いが地獄に落ちてもらうぜ」

「……は」

零次のその姿に、恭也は失笑する。

「決めポーズに決め台詞まであるんですか？特撮ものの見すぎでしょう？」

「どうしてあなたじゃなく霧江さんが街のヒーローやってんです？」
「だから言ったじゃねえか。俺は『ヒーローを守るヒーロー』ってな。」

それにこいつを装着するには制限やら条件があっているいろいろや
やこしい。

犯罪者ごときにホイホイ使えるような代物じゃあねえんだ」

「なるほど、特別製ってわけですか。」

だけど、いくらなんでもそんなスーツ一つで僕との差が縮まった
とも思ってる訳じゃあないでしょうね？」

「何なら試してやろうか、今すぐにでも」

そう言って、右手の指をパチンと鳴らす零次。

直後、恭也の浮かべる表情が冷笑から驚愕に変わる。

「――な、なんだって」

それは？日？だった。

吸血鬼の恭也の視界が、眩むほどのまばゆい日の光。
夜の闇に包まれていたはずの裏路地は、昼間の大通りよりも明る
くなった。

彼らを照らしていた月も、もう見えない。

「これで戦力半減だなノーライフキング。準備も整ったところで――
始めようか」

今度は零次が酷薄な笑みを浮かべる番だった。

最初の一撃。

轟音と共に、恭也の体は雷の槍に貫かれる。

「ぐああああああああっ!!?」

彼の顔から驚愕の表情が張り付いたまま消えない。

零次の攻撃のモーションを、まるで知覚できなかったのだ。

だが彼は瞬時に傷を再生させ、体勢を立て直す。

零次との距離を一気に詰め、その右拳を叩きこむ。

「!？」

彼の拳は、何の抵抗もなく体を通り抜けた。

直後、零次の体は霞のように消え去る。

——幻影!？」

「こっちだ」

背後からの声。

振り返った瞬間。

「ぐ、ぐおおおおおおお!!!!」

灼熱の業火が、彼の全身を焼く。

今度は、回復する隙も体勢を立て直す隙も与えず、零次は次の一手をうつ。

激しく熱された体を襲ったのは、容赦のない絶対零度の凍結。

「――！！！！」

もはや、悲鳴を上げることでもできなかった。

「流石だな不死者の王。普通なら最初の一撃で死んでるんだが、三発とも耐えたかい」

零次は体を凍結され、身動きの取れない恭也にゆっくりと近づく。

「――な、なんなんだ、あんた……！」

頭部を必死に再生させ、かろうじて声を出す恭也。

「何度も言ってるだろう？」

零次はその右手で、恭也の顔面を掴む。

「ヒーローを守る、ヒーローさ」

そう言った彼の右手の平が輝く。

それは、日光と同じ性質の光。

不死者を滅ぼす、生命の根源、太陽の力。

灼熱の炎も、蜃気楼による幻影も、この力の副産物でしかない。

「あ――――うわああああああああああああああああああああああああああああああ！！！！！！！！！！」

叫ぶ恭也。

構わず、零次はその頭を潰さんばかりの力を込めて握る。

掌から発せられる光は、その輝きをどんどん増してゆき、世界をあつという間に白く染め上げた。

ば、と零次がその手を離す。

恭也はもはや原形をとどめていなかった。

彼の全身は灰になり、文字通り粉々に崩れ落ちた。

同時に、霧江のブラッディクロスがカランと音を立てて地面に落ちる。

零次は身をかがめ、それを拾い上げた。

「この力は龍族の王、天候を操る天龍の力。

同じ？王？の力であろうが、地を這う浅ましき不死者が、天を統べる支配者に敵うものか」

フン、と零次は鼻を鳴らしながら地面に散らばった灰の塊を踏みつけにする。

「死んだフリなら無駄だぜ。

さっさと体を再構成しろ。お前が……ノーライフキング不死者の王がこんな程度では死ねないことは、よく知ってる」

不死者の王、ノーライフキング、その力の最たるものが、その不死性。

例えば、その体は分子単位で微塵に碎かれようが、その瞬間から既に再生が始まってしまうほど、生命力と言う言葉では形容しきれない異常な回復力を持つ。

殺すには、次代のノーライフキングが血液を吸い、力を継承する以外には、ない。

個を殺すことが出来ても、不死王の血を、その存在自体を完全に

消滅させることは、絶対に出来ないのだ。

「——はは、は」

数秒待って、乾いた笑い声。

散らばった灰が一点に集まり、骨格、循環系、筋組織、表皮と、順番に、ゆっくりした手順で再構成される。

表皮の後、服をも再生させ、しかしダメージは響いているのか、壁にもたれかかるように座り込む恭也。

「なんだよ、そのチート……反則、ですよ……そんなの」

「文句を言うな。貴様の生命力も十二分にチートだ。」

お前が霧江の血を全て吸ってしまっていたら、あるいはこうはならなかったかも知れんが」

「——なんですって？」

探るように、目を細める恭也。

「王の血はその最後の一滴に最も強い力が残るもの。お前はそれを飲んでいない。」

要するに中途半端なんだよ。お前の力は、ノーライフキングとしてはな」

「なる……ほど……それは」

がっくり、と恭也は項垂れる。

「——いいことを聞いた」

ば、と、狂笑と同時に顔を上げる恭也。

零次が反応するが、もう遅い。

「……動かないでくださいね」

恭也の言葉と共に、ふわり、とその影は、上から降りてきた。

「――ッ！」

息をのむ零時。それは彼にとっては、全く想定外の事態だった。降りてきた影は、全身に傷を負い、虫の息になっている頼子と、その喉元に彼女自身の小太刀の刃を押し当てている、恭也の人形だった。



背中を預けたはずの相手からの、想定外の攻撃。

それは松居頼子の心に大きな動揺を生んだ。

まだ出会って間もないが、長い付き合いになりそうだからと、これからしつかりとした信頼関係を築いてゆこうと思った、その矢先のことだった。

(三号……どうして……)

だからだろうか。

その裏切りは、とても酷く彼女の心に響いた。

彼女の意識はもはや風前の灯火だった。

辛うじて残るのは、恭也に対する失望と、疑念。

意識を保っておくため、本能がそうさせているのか、同じ疑問が何度も脳内を駆け巡る。

その中で、自分の体が動かされてゆくを感じた。

何かに掴まれ、持ち上げられる。

そのたびに走る痛みが、彼女の意識を刺激する。

「……動かないでくださいね」

「――ッ！」

恭也の声。

そして、誰かが息をのむ音。

――寒気が、した。

（だめ……だめ……起きろ、頼子！はやく、でないと……取り返しのつかない……大事な）

視力を振り絞り、頼子は薄目を開ける。

夜のはずなのに、飛び込んできたのは白い光だった。

まぶしさに眩む、場合ではない。

光の中に見えたのは、仰向けに倒れている、もはや生きているのか死んでいるのかも定かではない、最愛の友の姿。

その現実が、彼女の意識を強力に引き付けた。

「――きりえ、さん……霧江さん……！！！」

頭は痛み、体は軋む。

だが寝てなどいられなかった。

その危機を前にして、体の異常など些事だ。

自分の存在する意義が消滅するかどうか、その瀬戸際だったのだから。

「おっと。すごいな、まだ意識があったのか」

恭也は頼子を見上げ、素直に感心したような声を漏らす。

「だがまあ、意識があつたところで何もできはしませんがね」

その言葉に、頼子は必死に身をよじらせようとするが、駄目だった。

動かない。

その体は細い糸で何重にも縛られていた。

それでも、と、頼子は必死に身じろぎ、抵抗する。傷が広がり、彼女の体からさらなる出血がおこるが、そんなものは気にならなかった。

「――やめろ、頼子！」

それを静止したのは、恭也ではなく、零次の声。

「やめてくれ、頼むから」

俯く零次。その姿に、頼子は戸惑い、おもわず体の動きを止める。

「何を、言ってるんですか！！」

「……霧江は生きてる。だからじつとしてろ」

「生きてるからって！ あんな状態で置いておけません！！ 零次さん
……！！」

出血が止まらず、自身の血にまみれながら頼子は叫ぶ。

対して、零次は俯いたままだ。

その様子を見て、恭也は笑う。

「やはり、出来ませんか。いや、わかりますよ零次さん。

あなたは僕と同じ『創る』人間だ。自分の最高傑作を、壊すことなんてできない。そうですね」

「……」

やはり俯いたまま、零次は押し黙る。

「なぜ……どうして!!!!？霧江さんが！霧江さんは——！

あなたが、あなたがくれた、私の存在意義じゃないですか！それを失ったら私、私は！——ッ!？」

糸による拘束が強まり、思わず声を詰まらせる頼子。

その胸と、首が、強く圧迫される。

「やはり効果観面のようだ。さて、まずは、変身を解いてもらいましょうか」

「——れいじ、さ」

締め上げられる中、必死に声を上げようとする頼子。

零次は彼女を一瞥し、自嘲するように笑い、クロス・ガンを引き抜いた。

「よくもまあ、そこまで見抜いたものだ」

「あなたと松居刑事の話を聞いたんですよ。

あなたは霧江さんに聞かれまいと警戒しすぎて、そこに潜んでいた一匹の蠅にも気付かなかったんだ」

「成程、人のミスを突くのがうまいんだな、君は」

皮肉と共に、零次はまるで拳銃自殺でもするかのように、クロス・ガンをこめかみに押し当てて、引鉄を引いた。

あの日、松居刑事に、頼子の正体を話した。

それを聞いた松居刑事は、最初は驚いていたが、話をすべて終えた後、

『なんだ。もう知ってますよ』

そう言って、笑った。

その笑顔は、零次が頼子に抱いていた疑念を吹き飛ばすとともに、彼女がもう、自分や霧江なしでも、一人でも生きていける立派な人間であると教えてくれた。

だからこそ、零時には出来なかった。

彼女を壊してでも、霧江を助ける。

恭也を倒し、霧江の血を取り戻す。

そんなことは、出来なかった。

彼女のためにも、松居刑事のためにも。

変身が解けると、裏路地はその夜の暗さを取り戻した。

零次はブラッディクロスを後ろへ、クロス・ガンを前へ、それぞれ投げ捨てる。

「これでいいか？」

そう言って、両手を軽く上げる。

恭也は目を細めてながらその様子をしばらく眺めていた。

「そうですね……あとは」

そう言って、ちらりと倒れている霧江を見やる。
しかし、視線を戻して首を横にゆっくりと振った。

「まア、ここまでにしておきましょう。引き際は肝心ですし、あなたはまだ隠し玉を持っていそうだ」

そう言って口の端を釣りあげながら、彼はその手を上へ向けた。
別の人形が現れ、その手を掴む。

「言わなくてもわかると思いますが、もし追ってきた場合は……」

ふわり、と手をひかれながら浮き上がった恭也。

彼が一瞥した先には、同じように人形に抱えられながら浮かぶ頼子の姿があった。

「それでは。霧江さんに、よろしく言うておいてください。『後で持ってきてもらいます』ってね」

言い終わると、二人と人形二体の体は一気に上昇し、再び月の照らす夜空へと消えていった。

「――クソっ！」

右手で、壁を殴る零次。

殴った手に血がにじんだ。

こうして裏路地には、零次と、気を失った二人の少女だけが残された。

第二十二話 フランケンシュタインが作ったのは怪物だったか。

零次は最初に投げた銀のナイフを拾い上げ、それで右手の人差し指を深く切りつけた。

ナイフを仕舞い、霧江の側に寄り、左手で抱き起こし、その口に右手の人差し指を差し込む。

霧江はゆっくり舐めとるように、零次の血を啜り始めた。

「……霧江、起きてるか？」

「………に、き」

蚊の鳴くような声。

かろうじて意識は保てているようだが、零次が思ったより多く血液を吸われてしまっているようだ。

その顔はすっかり青ざめ、体はひどく冷たかった。

魔力も切れているようで、首筋の咬み傷でさえも回復できていない。

恭也が最初から全部吸うつもりでなかったのは幸運だったが、これでは零次の血を全て吸わせても回復は見込めないだろう。

もっと、大量の血が必要だった。

「とにかく病院に……そこの女の子も……」

零次は倒れているもう一人の少女に目を向ける。

彼女の体は蜘蛛の糸にくるまれ、かろうじて顔だけが出ている状態だった。死んではいないようだが、このまま放置するのは良くないだろう。

（さっき頼子を縛っていたのとは違う性質の糸だな……蜘蛛の糸

……蜘蛛の妖魔にでも襲われたか。なら毒をもらっている可能性がある。

どちらにせよ、早く病院へ……)

その時、慌ただしいサイレンの音が聞こえてきた。

音が裏路地のすぐ外で止まったかと思うと、パタパタパタ、とあわただしい足音が、零次の耳に飛び込んでくる。

「せ、せんせえー!!」

聞きなれた声に、零次は思わず笑みをこぼした。

大きな段ボール箱を抱えた真琴が、水溜りの水を跳ね飛ばしながら裏路地の中へ駆けてくる。

「マコ……どうしてここが？」

「魔力逆探知システム、警察の人に話したら褒められちゃいました」

そういつて、真琴は段ボールを地面に置きながらにつこり笑った。重かっただろう、置いた瞬間ズシリと音がする。

零次は彼女の頭を撫でてやりたかったが、霧江を抱えていて手が離せず「良かったな」と、満面の笑みでこたえる。

「せんせ、これ。妹さんに」

真琴は段ボールの箱を開けた。

中には、大量の血液パックが詰め込まれていた。

「警察の人に霧江ちゃんが危ないかもっていったら、これ、必要だろうって」

感激に、零次の瞳が涙でうるんだ。

「マコ、お前っ……大好き！」

がば、と思わず真琴の体を抱きしめる零次。

「えへへ……って先生っ！」

零次が手を離れたことで、支えを失いそのまま地面に頭をぶつける霧江。

「……あーにーきいー」

恨めしげな声を上げる霧江。

「うおおごめん！すぐ飲ませる！！」

言って、零次はパックを一つ取り、ストローを刺すともう一度霧江を抱き起こしてその口元へ運ぶ。じゅるるる、と、一気に吸われ空になるパック。

零次がもう箱から一つ取ろうとすると、その手に真琴がストローを指した新しいパックを手渡してきた。

思わずまた真琴を抱きしめてしまう零次。

ゴーンと地面に頭をぶつける霧江。

ごめんと謝る零次。

こんな調子でパックを三、四個空にすると、霧江は「もういい」と声を上げた。

「いいのか？……っておい」

零次の声を聞きつつ、霧江はのそりと体を動かし、血液パックが詰め込まれた段ボールに頭を突っ込み、そのまま髪の毛を動かし、パック一つ一つに突き刺して、一気に全ての血液パックの中身をその髪から吸い上げた。

「――っはー、生き返った」

全ての血液パックを空にして、霧江は大きく息を吐いた。

完全回復、とまではいかないが、顔色がある程度戻り首の傷も消えている。

「……つか、兄貴」

顔を上げ、ジト目になって零次に視線を向ける霧江。

「圧倒してたくせに油断して情報しゃべって人質まで取られて逃げられたってどういうことよこのボケー！！」

「げふっ！」

復活早々ながら元気な右ストレートを顔面に受け、痛みを感じながらも安心する零次であった。



その後、すぐに救急車が到着。

鬼蜘蛛に襲われた女の子は病院へ搬送された。

零次たちは裏路地の外で待機していたパトカーに乗り、天壤署へ。零次は霧江を病院に連れて行きたがったが、霧江は「血さえあれ

ば大丈夫」と、救急車から半ば強引に輸血パックを二つほど譲り受け、一緒に警察署へ向かった。

そして、天壤所内、小会議室。

霧江、零次、真琴。

そして松居刑事の姿がそこにはあった。

中心に大きめの机があり、席は六つ。

真琴が一番窓側にある席につき、霧江はその前で机に腰掛けている。

松居刑事は窓際で壁に背を預けながら煙草を吸い、零次は机と窓の間に立っていた。

「……正直、まいったな」

松居刑事が口を開く。

「すみません、俺がいながら……」

零次は彼に向かって頭を不覚下げた。

「いや、あんたが悪いんじゃないよ。頼子の奴、簡単に人質に取られるなんてなあ。帰ってきたら母さんに鍛えなおしてもらわんと」

そう言って目を閉じ、煙草の煙を吐く松居刑事。

本当は誰よりも心配しているはずなのだが、気を使わせてしまったようだ。

強い男だ。零次はそう思って、余計に申し訳なくなった。

本当のことを言うと、零次はあの場で恭也を倒す手段を、実は持っていなかった。

量産型のブラッディクロスではAランク以上の妖魔を封印できな

い。

今や恭也はA以上の危険な妖魔となってしまう、その上ノーライフキングの力のために殺すことも出来なかった。

零次に出来たのは、圧倒的な力で彼を屈服させ、その血液を彼の意味で霧江に返させることだけ。

その為に、零次は実は相当な無茶をしていた。

圧倒的な力を見せるために、魔力消費量の激しい攻撃を連発していたのである。

言うなれば必殺技を無理やり何回も撃っていたようなもので、あのまま戦っていても、同様の攻撃はせいぜいあと1、2発が限度だっただろう。

「……ねえ、兄貴」

と、机の上に座りながら俯いていた霧江が、その顔を上げた。

「あんたに聞きたいことはいっぱいあるんだけど……頼子を助けにいく前に、一つだけ聞かせて」

霧江はその真っ直ぐな視線を零次に向け、問う。

「私と頼子……10年前に会ったことあるの？」

「……」

零次は一度、霧江の視線から逃げるように俯いたが、頭を小さく横に振ると、顔を上げた。

「お前、ほんとに忘れちゃってんだな……昔からあんなに中が良かったじゃないか。お前たちは」

「え……？」

零次の言葉に、霧江は目を丸くした。

「あの、私、出てましようか……?」

なんとなく自分が場違いな話が始まる気がして、真琴は恐る恐る声を上げた。

「……いや、マコも聞いていてくれ」

そう言って、零次は軽く深呼吸をする。

「これは、俺の……? 罪? の話だ」

——10年と、少し前。

霧江たち兄妹が暮らしていた星影村は、当時はまだ多かったスフィア外の魔術師の集落だった。

村は閉鎖的で、外との関わりがほとんどない代わりに、静かで平和だった。

ところがある時、村では疫病がはやり、子供たちが大勢死んだ。霧江が仲良くしていた友達も、大勢死んでしまった。

「——疫、病?」

怪訝な顔をする霧江。

「ホントに忘れてんだな……まあ、それだけショックだったんだろう。」

あの村を滅ぼしたのは立て続けに起きた二度の災害なのさ。一度目がその流行り病……」

零次は話を続ける。

零次は友達の死に悲しんでいる妹を見て、何とかしてあげたいと心から思った。

10歳も年が離れているのだ。

当時高校生だった零次にとって、霧江は妹であり娘のようでもあった。

そんな時、零次たちの父、鬼灯震理^{シシリ}が、零次にある話を持ちかけてきたのだ。

「俺と親父は同じことを考えていた。

……まあオヤジの場合、やってみたいという好奇心と言うか、探究心もあつたのだろうな……」

零次の言葉に、真琴が返す。

「一体、何を……?」

「オヤジはこう言ったよ……『霧江のために友達を作ろう』ってな」
「作る……って」

霧江は何かを察し口元を手で覆った。

「そう……だがお前が今想像したのは少し違う……俺と親父はやりおぞましいことをやった。

あの村、風習で遺体は焼かずに棺桶に入れて土葬していたのを覚えてるか……?」

目を見開いたまま、ふるふる、と黙ってゆっくり首を横に振る霧江。

「俺と親父はな……死体を材料にしたんだよ」

零次は、むしろ笑みを浮かべていた。

「夜中にこっそり村の子供たちの墓を暴き、健康な部分を切断し、繋ぎ合わせた。

様々な魔法薬を投薬して肉体の整合性を取り、体中に電極を埋め込み、最後に落雷と同等の電流を流した。

すると、動いた。動いたんだ。俺と親父の実験は成功し、その命は生まれた」

零次の顔は、今や狂気じみていた。

己への嘲笑、侮蔑を込め、その顔は醜く歪む。

「？フランケンシュタインの怪物？しかし、物語のように醜くはない。

むしろ誰よりも美しく――そうなるように作ったからな。俺はその娘に、名前を付けた。霧江、お前が『頼れる子』になるように――
――『頼子』と」

言い終わる頃には、零次の顔からは狂気が抜けていた。

今は年をとり疲れ果てた男のように、影が差している。

「最高だったよ、その完成度は。

別々の人間のパーツをつなぎ合わせたにもかかわらず、その肉体は完ぺきなバランスを誇り、知力、体力にも優れ、おまけにちゃんと成長もするんだ。

唯一つの欠点は、肉体に繋ぎ目が、僅かに残ってしまったくらいか……」

軽く、息継ぎをする零次。

「……あの娘が俺に最初に向けた感情は、殺意だった」

『頼子』を、初めて動かした時のこと。

彼女に流す電流のスイッチを入れたのは、零次だった。

実験の成功に、喜ぶ震理と零次。しかし、生まれたばかりのその少女は、零次に向かって飛びかかり、両手でその首を絞めたのだ。

「その眼が言ってたよ。『どうしてこんな化け物に産んだんだ』ってな……」

見た目にこだわったのは、霧江の友達にするため、っていうのもあったが、本人が自分のことを化け物だと思わないように、そういう配慮のつもりでもあったんだ……

でも、俺はどうやら見事に勘違いをしていたらしい。姿は関係なかった。化け物に生まれた彼女は、生みの親である俺を呪った」

震理は一度頼子に流した電流を狂わせ、停止させ、脳組織への『再調整』を行った。

「オヤジには最初反対されていたんだが、俺は頼子の脳に、『霧江への強い愛情』を刷り込みたかった。

今思えば自分勝手な考えだが、そうすることでより霧江と仲良くなりやすいと思っていたからだ。

しかし、あくまで脳の状態は自然に保つことにこだわっていたオヤジはそうはしなかった。」

だが、それも『再調整』の際に実行された。

何よりも、彼女が霧江を襲わないようにするためだった。

そうして、『再調整』された頼子は霧江に紹介され、二人はすっかり仲良しになった。

まだ弱かった霧江を、頼子はよく守り、助けた。霧江も頼子を頼るようになった。

零次が込めた名前の、彼の願いの通りになった。

しかし、零次は、頼子が時折あの眼で零次をじっと見ていることに気付いた。

「いつか殺される。俺はそう思った……怖かった。あの子の眼が……だから、俺は逃げたんだ。あの子の前から」

零次は急に、村の学校ではなくスフィアのちゃんとした学校で学びたいと言い出すようになり、やがて、それは現実のものとなった。彼は第三スフィア市にあった叔父の家に預けられ、そこにある高校に通う様になった。

「例の吸血鬼事件があったのは、そのすぐ後だ……俺はその時、頼子と一緒に死んでしまったものと思い込んでいた」

「――あ」

その言葉に、霧江はようやく一つ思い出した。

それは、つい最近見た夢の光景。

『友達』と遊んでいた霧江は、かくれんぼの途中、吸血鬼に襲われる『友達』の姿を見ていたのだ。

「だから、あの日、あの時の夢を見たんだ……」

その夢を見たのは、頼子と、この島で初めて会った日の夜のことだった。

「だが、頼子は生きていて、事件の後、身元不明の孤児として、私が引き取った」

零次に変わり、言葉を紡いだのは松居刑事だった。

「最初は手を焼きましたよ。『キリエさんキリエさん』って、友達の名前を呼びながらよく一人で泣いていた。

おまけに力がやたら強いもんだから、暴れられると手がつけられなかった。彼女が普通の人間ではないってことも、その時から感づいていました」

言って、昔を懐かしむように松居刑事は笑う。

「でも、本当の娘のように接しているうち、彼女はだんだんと心を開いてくれるようになりました。私は彼女に勉強を教え、妻は彼女の体を鍛えました。

古武術の達人なんですよ、うちの妻。妻は頼子に剣を教えました。人を傷つけるためのものではない、自分の身を守るための剣を。そうやってるうちに、いつの間にか本物の家族のようになっていました」

「だが、そんな経緯も知らなかった俺は、彼女と再会した時、恐怖を覚えた。『またあの眼で見られるんじゃないか』そう思って、恭也に彼女を見張るよう依頼した。

怖かったんだ……自分自身が作り出した？フランケンシュタインの怪物？が、自分に復讐しに来るんじゃないかって……」

松居刑事に続き、再び零次。

「……ま、それも杞憂に終わったがね。

彼女は松居刑事の元、れっきとした一人の人間として生活していた。俺が怖がってるような？怪物？は、もうどこにもいなかった」

しばらくの沈黙。

霧江も、真琴も、松居刑事も、皆一様に押し黙っていた。

「……だから、あの子……」

霧江は俯いた。

「『私の相棒になりたい』なんて言ったのね……それなのに、私――」

俯いて、その両手で頭を掴むように抱える。

「疑っちゃった……あの子のこと、恭也の刀傷を見て……一瞬だけだけど……あの子を……あの子は、ずっと、私に好意しか向けていなかったのに」

霧江の脳裏にフラッシュバックする、幼き日の光景。

『ヨリコ』、『キリエさん』そう呼び合って、短い間だったけど、一緒にたくさん遊んで、二人は間違いなく友達で、親友で、相棒だった。

腕で顔が隠れ、零時には、霧江の表情はわからない。

「――助けないと」

決意と共に、霧江は顔を上げる。

「あの子だけは、私の手で、絶対に、助ける――！」



「全く、本当に素晴らしい出来だよ」

恭也は、その肢体を前にしてため息を漏らした。

第十二学区。

そこには、人工的に植えられた森がある。

その森の奥、打ち捨てられた場所に、その孤児院はあった。

『ひまわり園』と書かれたその孤児院は、廃業して長く、未だ取り壊されていない廃屋はかびた臭いを漂わせている。

かつて、ここでたくさんの子供たちが笑っていたその面影はない。

ここは、志木恭也の故郷だった。

その中の一室、遊技場。

広い部屋で、ここだけは掃除がしっかりなされていた。

その中で、頼子は下着だけというあられもない恰好で、部屋の最奥に立てられた十字架に磔にされていた。

「あれだけの傷がもう治ったか。生命力も強化されているんだね。吸血鬼ほどじゃあないが」

「……」

その目にありったけの侮蔑をこめ、頼子は恭也を睨みつけた。

「はは、そんなに怖い顔をしてくれるなよ。褒めてるんじゃないか」

言って、恭也は改めてその体を見る。

美しい体だ。

それが彼の素直な感想だった。

よくもまあ死体の合成でこれだけのものを作れたものだ。

首、両手両足、それから胴体の中心に、それじれ継ぎ目が残っているのは残念だが、それを置いてもいい出来だった。

いや、むしろ継ぎ接ぎの体でこれだけ美しいからこそ、その素晴らしいさが際立つのかもしれない。

「……ただ、左腕だけは、最初につなげられたものじゃあないね。例の事件で切り落とされでもしたか。ここだけ、よく見ると人工のものだ」

恭也の目が彼女の左腕に注目する。

そこだけ継ぎ目が微妙に新しく、皮膚の質感が若干違った。

普通なら絶対に気付かないような違いだが、恭也の目はそれを見抜いていた。

恭也の体が地面から少しだけ、ふわ、と浮き上がり、頼子と同じ目線に立つと、その左手に触れた。

「これだけの義手……だれが作ったんだい」

「……」

頼子は答えず、顔をそらす。

「……まあ、いいか。自分で材質や製法を調べてやるとしよう。きみは思ったより、僕の目的に役立ちそうだ」

「目的……?」

怪訝な顔をし、再び恭也の方を向く頼子。

「ああ、君には教えてもいいかもしれないね……見せてあげるよ」

恭也は頼子から離れ、床に着地すると、大げさに右手を振りあげた。

すると、恭也の背後、遊技場の大きな出入口が開き、人間の半分くらいの大きさしかない人形が七体、棺のようなものを持ち上げながら、ゆっくりと室内へ運んできた。

恭也は人形たちに道を譲り、棺は頼子の足元に置かれた。

「紹介しよう」

棺が、ひとりでに開く。

中に入っていたのは美しい女性だった。

金髪でウェーブがかった髪。肌は透き通るように白く、純白のドレスに身を包んでいる。

彼女の周りには、色とりどりの花が敷き詰められていた。

「僕の、母さんだ」

第二十二話 フランケンシュタインが作ったのは怪物だったか。(後書き)

吸血鬼とフランケンシュタイン揃い踏み。
狼男はそのうち出るかもしれません。

第二十三話 約束は満月の日に。

「……じゃあ、始めます」

真琴は席に着いたまま、テーブルの上にPDAを乗せ操作を始める。

零次たちは、その周りに立って視線を画面に集中させた。画面には『探索中』の文字が点滅している。

魔力逆探知システムには二つの機能がある。

一つ目は最初に使った『その魔法が使用された場所を示す』機能。もう一つは零次を探すのに使った『その魔法を使用した人物を追跡する』機能である。

真琴は今、後者の機能を使い頼子の位置を探りだそうとしていた。直接恭也を探らないのは、彼による何らかの妨害行為があることを懸念してのことだ。

しかし、その行為をあざ笑うかのように、四人が注視しているその画面が乱れる。

「何だ？」

と、零次。

画面はそのまま砂嵐のようになり、5秒ほどその画面が続き、最後には真っ暗になった。

「壊れたのか？」

と、松居刑事が言った、次の瞬間。画面は明るさを取り戻す。画面に表示されたのは映像だった。映ったのは、何処かの薄暗い室内。そして襟を立てた長いマントを着こんだ恭也の姿。

「―――!」

真琴は息をのんだ。

魔力逆探知システムはその位置を地図上に示すもので、こんな映像を映し出す機能はない。

となれば、この画面が意味するものは一つ。

何らかの魔法を用いたハッキング。

このシステムは、既に相手に乗っ取られてしまっている。

『やあ、皆さんお揃いで』

画面の中、恭也が嗤う。

どうやら、向こうからもこちらが見えているらしい。

「……お前、なんだその格好……」

と、呆れたように零次。

『……吸血鬼って言ったら、襟のバカでかいマントでしょう？ まずは形からと思ひまして』

「似あってねーよ。それより、頼子は無事なんだろうな？」

零次の声に、画面の中の恭也はククク、と笑い声を上げる。

『そんなに心配しなくても……ちゃんと無事ですよ。そうだ、丁度零次さんに聞きたいことがあったんです』

「……なんだ？」

『いやあ、彼女の左腕のことなんですけどね』

言葉と共に、画面が切り替わった。

新たに映し出されたのは、白い一対の下着だけを身に付けた頼子が、十字架に架けられている姿だった。

「頼子！」

身を乗り出すようにして、声を張り上げる松居刑事。

「貴様……うちの娘に何をッ！」

『何って？ ああ、美味しく頂かせていただきましたよ松居刑事。作りものでも此処まで美味な女はなかない』

「なんだと、貴様っ……貴様！！」

齒を食いしぼり、画面を睨みつける松居刑事。

その顔色は烈火のごとく赤く染まってゆく。それを見て、恭也は大声で笑った。

『ハハハハハ！ 今のは吸血的な意味で、ですよ。ちょっと魔力を補充させてもらっただけです。』

そもそも僕は女性の体にはそんなに興味はありません。興味があったのは彼女の構造。

こんな恰好をさせているのも、ちょっと観察しやすかったから、というだけです』

画面には頼子が映し出されたまま、恭也の声は響く。

『それで、零次さん。これなんですがね』

画面が頼子の全身から上半身、左腕と段階的にズームしてゆく。

『この左腕、あなたが作ったんですか？』

それを見て、零次は眉を顰めた。

「なんだ、これは……いや、俺じゃあない。そうか、左手は義手に換装されていたのか」

『あなたも知らないんですか？多分、例の星影村事件の時に千切れたんだと思いますが』

「俺は知らない。だが、それを頼子に付けられるような人間は一人しかない」

『誰です？』

「……俺のオヤジだ」

「兄貴!？」

霧江は画面から視線を外し、目を見開きながら零次の顔を見た。

「どういうこと!？父さんはあの時死んだんじゃない……」

「ああ、そのはず……なんだが」

零次も戸惑っているようだ。

「だが、俺が知る限りでは、そんな精巧な、しかも頼子の体に合わせた義手が作れるのはこの世でオヤジ一人だ」

『つまり、あなた達の父親が生きていて、この子に義手をつけた可能性がある、ということですか？』

「……ああ、その可能性は、ある」

恭也の問いに、零次は肯定を返す。

画面が切り替わり、何かを考えるようなポーズをとる恭也が映し出される。

しばらくの沈黙ののち、恭也は呟くように口を開いた。

『となると、もうこんな島にこだわる必要もない、か』

恭也は納得したように頷くと、画面に向き直った。

『霧江さん、聞いてますか？』

「……なによ」

画面に視線を戻し、霧江は答える。

『僕と決闘しません？頼子と、あなたの血をかけて』

「なんですって？」

突然の申し出に、霧江は眉を顰めた。

『だから、決闘ですよ。あなたが勝てば頼子は返してあげます。しかし負ければ、その血をもらいます。悪くない条件でしょう？』

「……何をたくらんでいるの」

悪くないどころか、人質を取っているというアドバンテージを自ら捨てるような行為だ。

こちらにかなり優位に働くと言ってもいい。

恭也はこれまでさんざん手を尽くして霧江の血液を奪い取った相手だ。

何か裏がある。そう感じずにはいられなかった。

『人質を取るってやり方が好きじゃあないだけですよ』

「……どの口が言うんだよ」

と、零次が呟くように言う。

『やだな、さっきのはあなたが強すぎたのが悪いんですよ。僕も逃げざるを得なかったですし』

画面の中の恭也は、大げさに手を振った。

「……私の血を吸ったところで、ブラッディクロスの封印がある。完全なノーライフキングにはなれないわよ」

『ならばそのブラッディクロスを破壊すれば済む話だ。知ってますよ零次さん、アレは封印対象が死ねば効力を失うんですよ。読みましたよ、資料』

「……！」

零次は唇を噛んだ。

ブラッディクロス開発に関する資料は研究室の金庫に厳重に保管してあるが、何度か金庫を開け、資料を確認したことがあった。その時に使い魔にでも覗かれたらしい。

『僕は島を出て、あなた達の父親を探します。そして頼子の左手の作り方を教えてもらいますよ。』

ああ、その前に、色々と遺恨もあることですし、用済みになったこの島を海の底に沈めてしまいたいか

しれっと言ったのけた恭也に、真っ先に反応したのは松居刑事だ。

「何だと！？君、そんなことをして許されると思っているのか！？」「ユルサレル？ははは！誰が僕に裁きを下せると言うんです……あ

あ、零次さんがいましたか。じゃあその前に零次さんとも決闘してあげますよ。

いくら龍の王の力とはいえ王の力を着ているだけのあなたに、真の意味で王なった僕が本当になわなないか確かめておきたいですし」
「……嘗めるなよ小僧」

と、腹の底から吐き出すような声で、零次。

「もし貴様が霧江を殺したら、俺は心中してでもお前を殺しつくす。たとえ不死であってもだ」

『ははは。それはそれで面白そうだ。いずれにせよ全ては霧江さんとの決闘の結果次第。どうです？ 受けますか霧江さん』

「……わかった。場所を指定しなさい」

「――霧江！」

考え直せ、と言わんばかりに零次は霧江の肩を掴む。

だが霧江はブンブンと首を真横に振った。

「このほうがいいわ、兄貴。人質を盾にされて好き放題されるよりはよっぽどいい」

結局のところ、裏があろうが無かろうが、人質を取られている以上は従うしかない。

霧江はそう判断した。

『それじゃ、霧江さん。流石に今日は疲れてるでしょう？ 日時は明日にしましょう。明日、夜の11時。』

場所は……直前に教えますよ。決闘前に踏み込まれたりするのは嫌なんで。

ちなみにその間、警察も捜しに来ないようにお願いしますよ。使

い魔をばら撒くのですぐわかります。もしそんな動きがあれば……
わかりますね？」

「……わかった」

霧江はゆつくりと頷く。

『それじゃ、また連絡しますね……尚、この通信は自動的に爆発する。なんちって』

その言葉を最後に、画面が切り替わる。

元の画面、ではなかった。オドロオドロしい雰囲気、壁紙を背景に表示されたのは『爆発マデアト5秒』の文字。

「伏せろ！」

零次は叫びながら、真琴の体を椅子ごと抱くようにして引き倒す。松居刑事も頭を抱えて床へ。

霧江だけは、減ってゆくカウントをただじっと見守っていた。

そして5秒後、パンという乾いた破裂音と共に、PDAの液晶が砕け散った。

爆発は小規模で、目の前で見ていた霧江にもかすり傷一つ負わせなかった。

「あ……私の卒研……」

しかし被害は大きかったようで、体を起こし、その惨状を目にした真琴はがっくりと項垂れた。



「さあ、面白くなって来た。そう思わないかい？」

通信を終え、恭也は踵を返し、背後の頼子に向き直った。

「……どういふつもりです、急に決闘なんて」

頼子は疑いの眼差しで恭也を見る。

対して恭也はひじを曲げたまま両手を肩の横、同じ高さまで上げて大げさに首を振った。

「別に深い意味はないよ。」

あの時の零次さんはあなたを守ろうとしたけど、結局あなたか霧江さんか天秤に架けることになれば当然霧江さんを選ぶんだ。

こっちが無理な要求して、向こうがあなたを助けるのをあきらめて強行してくる、なんてことになったら厄介だろう？」

人質は助かる余地が残されていてこそ成立する。

その見込みのないものは、すでに死んでいるもの同然。
死んだ人質には何の価値もない。

その価値も、要求するものと等価なものでないと取引を成立させるのは難しいだろう。

例えば頼子を解放する代わりに霧江の血を吸わせろ、と要求した場合、霧江は応じるかもしれないが、零次は黙って見ていてはくれない。

「それに、僕は別にあなたたちが嫌いだとか憎い訳じゃない。
むしろ今まで良くしてもらったと思ってるよ。」

僕自身、友達とか仲間だとか、そういう存在を初めて持てたような気がしていたからね。

満足させてもらった。実はあなたが平気で背中をまかせてくれた時、すごく嬉しかったんだ」

言って、恭也はほほ笑む。

それは今までの笑いとは質の違う、純粹で、心の底から喜んでい
るような笑顔だった。

「だったら、何故――!?」

「天秤にかけたんだよ。母さんか君たちか。それで母さんを取った
まで。」

……本当はね……怖かったんだ」

恭也は視線を落とす。

「君たちのことを、僕はだんだん好きになり始めてたんだ。」

僕にとっては、目的を果たすための駒にすぎなかった君たちを。

そして……一瞬だけ思ってしまったんだ」

恭也は口をつぐみ、目を閉じた。

「このまま、何もなかったことにして、君たちと一緒にいられたら
……母さんのことを忘れて……。」

それが、怖かった。母さんは僕にとって世界のすべてだ。なのに、
僕は知らず知らずのうち、蔑にしておもうとしていた。それを自
覚した時、僕は僕を許せなくなった」

「……」

頼子は、何も言えなかった。

自分が、彼に対するくだらない嫉妬心を持たずに、仲間として、

友として、もっと、仲よくしていれば、あるいは今のこの状況は、なかったのだろうか。

胸に抱く後悔の念。

彼女だって、恭也のことを仲間だと思っていたから、彼に無防備な背中を晒した。

彼の裏切りに最初に抱いたものも、怒りではなく『どうして』という疑問の念だった。

「……今なら、まだ間に合います」

必死に、絞り出すような声で頼子は言葉を紡ぐ。

「全てを、なかったことにしませんか。貴方が迷惑をかけた人たちには、霧江さんも、私も、一緒に謝ります。だから、三人でもう一度、やり直しませんか」

「……」

それでも、恭也は首を振った。

彼にだって葛藤はあった。

計画をやめるタイミングはいくらでもあった。

それでも、彼は突き進んでしまったから。

それほどにまで、彼の母に対する思いは巨大だったから。

霧江を騙し打ちし、その血液を奪いとった時の高揚感、もはや欠片も残されてはいなかった。

「もう、決断したことだ。僕は、こう見えて意地っ張りでね……。君は、優しいんだな頼子。僕なんかの仲間には、友達にするには、勿体無いよ」

目を開ける。

恭也は、真っ直ぐに見据えた。

その先には、棺桶の中の美しい女性。

彼女は、既に亡くなっている。

ここにあるのはその死体……いや正確には、死体ですらない。

ここにあるのはその皮だけだ。

魔術的な防腐処理の施された人の皮が、人形にかぶせてある。

「……脳は別の場所に保管してある。それだけは、どうしたって代用が効かないからね」

恭也は彼女の枕元に両膝をつき、顔をそっと撫でた。

「……その人を、生き返らせるつもりですか？」

十字架に磔にされたまま、頼子は恭也とその人形を見下ろしながら問うた。

「そうだよ。血を集めていたのも、生体部品を動かす実験のためだね。……君の左腕、ちょうどそんな感じの、人体に限りなく近いものが作りたかった」

恭也は頼子を見上げ、改めてその左腕を注視する。

フランケンシュタインの怪物である彼女が持っていた驚異的な身体能力を、さらに上回る速さ、強さ、精密さを持っているその義手。それを応用すれば、人間の体のほとんどを代用させることが出来るはずだ。

「それから、脳を覚醒させる技術も欲しいな。これは零次さんに聞いても良かったが、やっぱり彼らの父親を探し出して一緒に聞いたほうがいいか」

「……私の脳にはあの村の子供のものが使われていますが……私にその子の記憶は全くありません」

その人を母親としてよみがえらせるのは無理だ。そう頼子は告げる。

「問題ないよ。君は霧江さんへの愛情を刷り込まれているんだろう？感情が刷り込めるなら記憶も刷り込める……出来なくとも、僕への愛情があれば十分だ」

「でも、それじゃあ、自分に都合のいい人形を作るだけじゃあないですか！」

「そうだよ」

恭也は母の顔から手を離し、嗤いながら立ち上がり、頼子の言葉をあっさりと肯定した。

「だって僕は、人形師だからね。完全な死者蘇生なんてできないのは知ってる。」

僕は僕で、僕のやり方で母さんを取り戻す。それだけだ」

「そんなモノのために！！」

頼子は絶叫する。

「私たちを裏切るんですか！貴方の自己満足にすぎないもののために！？志木恭也！私は……私は……ッ！」

「悪いね。僕はこういうヤツなんだ。」

恨みなよ頼子、僕は悪党さ。僕が悪で君らが正義で。そういう単純な構造だったんだよ。始めっからね」

涙ぐむ頼子と、自嘲気味に笑みを浮かべる恭也。

二人は、それ以上言葉を紡ぐことはなく。

棺桶の蓋が、恭也の操る人形によって閉じられる。
人形たちはそのまま、それをいずこかへ運び去った。
窓からは、月の光がいつまでも射し込んでいた。



「……とりあえず、今日のところは帰って寝ろ、霧江」

と、零次はショックで机に突っ伏している真琴の頭を撫でながら言った。

「俺はマコを寮に送ったあと、警察の会議に参加する」
「会議？」

と、霧江は目を細める。

「まさか、決闘の邪魔する気じゃあないでしょうね？」
「その辺は心配するな。人質取られている以上は下手に動けんからな……お前がもし負けそうになった場合、どう対処するか決める」
「負けそうに……ですって？」

怪訝なまなざしを強める霧江。

「みすみす奴をノーライフキングにするわけにはいかん。奴の言葉が本気なら、この島全体が危機に陥る」

島を沈める。

恭也の言葉が本気なら、たとえ不完全とはいえ、ノーライフキン

グの力をもってすれば、それはたやすく実行されるだろう。

「……ようするに、勝てばいい訳ね」

「ああ、その通りだ。……それからな、霧江」

零次は真琴の頭を撫で続ける手を止め、霧江をまっすぐに見据えた。

「何よ」

「躊躇うな」

「……！」

零次の言葉に、霧江は目を見開く。

「奴は危険だ。不死王の力を残しておくな」

そして理解する。

その言葉の意味。

「……恭也を、殺せっていうの？」

「そうだ。Sランク以上になると妖魔は市民権を喪失する。もはや街の住民ではない妖魔を、殺しても罪には問われん」

霧江の血を吸った恭也が霧江のブラッディクロスを装着した時点で、その妖力ランクはS相等へ跳ね上がった。

彼は霧江のヒーロー活動に協力していたが、霧江のようにヒーロー活動を条件にランクの偽装を認められていたわけではない。

もはや街の住民としての権利は、彼には存在しない。

「奴を吸いつくせ。生かしておいたところで、島外追放は免れん。そうなれば奴に残ったノーライフキングの血に、世界中の吸血鬼が殺到するだろう。もっと厄介なことが起きる」

「……」

「霧江、いいな」

「……」

肯定は、出来なかった。

なぜなら恭也は霧江にとって始めての血族であり、島に居る限り認められている唯一の眷族だった。

その事実と、今したばかりの頼子を助けるという決意が衝突し、揺らぐ。

しかし――

「……わかった」

霧江は俯いて、そう答えた。

恭也か頼子か、どちらかを選べと言われれば、その答えは一つしか出ようがない。

しかし彼女のその様子は、零次の心に僅かな不安を残していた。

警察署の窓からも、月は同じように見えていた。

第二十三話 約束は満月の日に。
(後書き)

話進まねーな

第二十四話 ヒーローは決意する。

松居刑事の部下が車を出してくれると言うので、霧江、零次、真琴はパトカーではない車に乗っていた。

霧江が自分の女子寮で降り、車内には運転手の警官と、零次と真琴が残される。

「……あの、せんせ？」

真琴は零次に向け、そのまなざしを向ける。

「なんだい？」

零次は視線を合わせないまま答えた。

「私、知ってますから……先生がちゃんとやさしい人だって」

言って、真琴は零次の手を取る。

「うまく、言えないですけど……今日の話を聞いても、私の気持ちは変わりません」

「……ありがとう。マコ」

真琴の手を握り返すには、それだけで十分だった。

「それで、その……私は先生が何を話しても絶対についていきます。そういう前提で、聞かせてほしいんですけど」

ようは本音で答えてくれ、と言っているのか。零次は真琴と眼を

合わせた。

「吸血鬼にとって、眷族は自分の子供のようなものだと言いました。
……それを殺せて言うのは、少し酷すぎるんじゃないか、って」
「……そうだな」

零次はゆっくりと頷く。

「だが、誰かが言わなきゃならなかったことだ。それほどノーライ
フキングの力は特別で——危険なんだ」

零次は埋まりそうなほどに座席にもたれかかった。

「……ま、ぶっちゃけるとそれさえ自覚してくれてさえいればいい、
ってことでもある」

「……え？」

零次は少しだけ笑って、首を振った。

「あいつなら、うまくやるだろう」



そこには、身寄りもなく、引き取り手もない子供たちがたくさん
いた。

多かったのは、妖魔と人間のハーフ。

この街が生んだ、一つの闇。

この街で出会い、結婚し、子供を作った方がいいが、結局お互いの
価値観の違いを受け入れられず、離婚してしまうというケースは、

今でも多い。

その際、子供はどちらかの親に引き取られることになるのだが、二つの種族、その中間の性質を持った子供たちを親は育てきれず、殆どの場合、捨てられてしまう。

そういった子供を譲り受けるための公的な孤児院が、この島には実は多い。

もともと人間と妖魔の調和を図るための実験都市。

そういった弊害が起こるのは当初から予想されている。

だがその予想よりも、捨てられる子供たちの数は遥かに多かった。

10年前、市長がまだ今の市長ではなかった頃のこと。

増える一方の捨て子をなんとかしようと。市営孤児院で子供を引き取るのを有料化するという政策が打ち出されたのだ。

子ども一人捨てるのに、親は市から10万円要求された。

子供の値段にしては安いくらいだし、自分の子を捨てるような親、それ以上の制裁を受けてしかるべきだと思う。

しかし、それでうまく回るわけもなかった。

子供を市の施設に預けずに捨てることは条例違反となるが、その政策以降違反者は続出し、街に捨て子があふれた。

数年後、市長はリコールされ、今の市長が立って、孤児院の有料化は廃止された。

その間に捨てられた子供たちは、有志により建てられた私営の孤児院で育てられた。この『ひまわり園』もその一つだ。

志木恭也は、その中で最下層の存在だった。

彼は、彼だけが、その孤児院で唯一ただの人間だった。

なんの妖魔の血も引いていない、弱い人間でしかなかった彼は、他の子供たちによるいじめの標的にされた。

子供は時に残酷で、力加減を知らない。

妖魔の血を引いているともなれば、身体能力の差も大きい。孤児院に拾われたその日から、苦しい日々が続いた。

それから救ってくれたのが、彼が『母』と呼ぶ美しい女性。

この孤児院の、管理人だった。

人形師だった彼女は、恭也に人形作りと、それを操る方法を教えた。

もともと手先が器用だった恭也は、あっという間にそれを覚え、やがてほかの子供たちの前で人形劇を披露するまでになっていた。彼の劇は人気を博し、気付けばいじめは無くなっていた。

そうして月日は流れ、新しい市長に変わって政策が変化し、市の孤児院が再び無償化。

ひまわり園の子供たちも、ほかの孤児院へ移ったり、あるいは新しい親に拾われ、一人また一人とここを去って行った。

「僕、お母さんの本当の子供になりたい」

その孤児院で、最後まで残っていた恭也は、ある時こんなことを口にした。

いじめから救ってもらった恩もあつてか、彼は孤児院の子供たちの中でも一番彼女を慕っていた。

「ふふ、ありがとう。恭也」

そう言って、彼女はにっこり笑って、抱きしめてくれた。

その笑顔を、恭也は今まで忘れたことはない。

彼女にとっても、恭也は誰よりも手間をかけて育て、自分の技術

まで伝授した、本当の子供のようだった。

みんながいなくなった孤児院で、二人だけの新しい生活が始まるうとしていた。

その、矢先。

二人が本当の親子になった、その翌日。

「……お母さん？」

恭也は、台所で倒れている母を見つけた
駆け寄って、呼びかけても、母は二度と返事をくれなかった。

彼女はもう二度と笑うことも、恭也を抱きしめてくれることもなかった。

死因は、過労だった。

彼女は日々増える子供たちを、たった一人で育てていた。

自分の人形を操って家事の手伝い等をさせていたが、操るのは結局彼女の魔力であり、その負担はすべて彼女のもとへ帰ってきていたのだ。

それでも、彼女は最後まで頑張った。

頑張って、去ってゆく子供たち一人一人の背中を見送った。

慌ただしい生活が終わりを迎え、最愛の子と新たな生活を迎える。そのことが、彼女の緊張の糸を切ったのだろう。

彼女は、最後の一人をそのそばに置いたまま、永久に帰らぬ人となった。

「うわあああああああああああああああああああああああああああああああ
あああああ!!!!!!!!!!!!!!」

最も大切な人の死。

恭也にとって彼女は、自身の唯一の支え。

支えを失い、彼は絶望の底へ、一気に落ちていった。

落ちて、その衝撃で、壊れてしまった。

「……おかあ、さん」

仰向けの母の死体を前に、志木恭也はナイフを持って立っていた。
彼はそれを使って彼女の服をやさしく切り裂き、うつ伏せに転がした。

「……ッ！」

そのきれいな体に、刃を入れることは、躊躇われた。
でも、もう一度、彼女に抱きしめられたいという欲望が、彼を突き動かした。

どうしてその方法を取ったのか、彼にもわからない。

母はいくつか動物のはく製を持っていたので、その真似をしようとしたのかもしれない。

恭也は、齒を食いしばり、必死に悲鳴を噛み殺しながら、その体に刃をつきたてた。

「……ッ！」

遊技場の中に持ち込んだベッドの上で、恭也は目を覚ました。

「……そうか、どうせなら、棺桶の一つくらい、要求しておくんだっただな」

上体を起こし、手の平で顔を拭くと、血涙で真っ赤に染まった。棺桶の中でないと、吸血鬼は安らかに眠れない。

それはノーライフキングに近づいても同じだった。

『棺桶は最後の領地』だと、霧江がそう言っていたのを思い出す。自分はそれすら持たずに、こんなところに来てしまったのか。

最初の領地も最後の領地もない王。

おまけに王の力そのものも中途半端ときている。

なんとも滑稽で、彼は思わず笑みをこぼした。

「……ずいぶん余裕ですね」

頼子の声。

まだ起きていたらしい。

彼女だって、疲れているだろう。

おとなしく寝ていればいいのに。

恭也はそう思って、彼女を張り付けた十字架を見る。

「寝ている間に私が逃げたら、なんて考えもしないんですね」

「だって、逃げられないもの。君は」

そう言って、恭也は流した血を皮膚から再吸収する。

「その糸、最初に君を縛ったものより随分軽いだろう？でも頑丈さはその数倍なんだ」

頼子は十字架に、糸で腕や足を縛られて磔にされていた。

その糸は彼女を最初に縛ったものよりも細く、頼子はこれなら千切れるのではないかと必死に身をよじらせたが、無駄な結果に終わった。

「ああ、もしかしてこれなら切れると思って無駄な努力させちゃったかな」

「……！」

凶星をつかれ、頼子は押し黙る。

「ハハ、まあ無理もないかな……それはね、僕が手に入れた新しい力なんだ」

「新しい力……？」

「そうとも。さて、君も観念して寝たらどうだい？」

そう言って、恭也は改めて体を横たえる。

「疲れてるだろう？それとも、その状態じゃあ寝にくいかな？」

「縦向きで寝る趣味はありませんわ」

「そっか。じゃあ、おとなしくして体力を消耗させないことだね。じゃ、おやすみ」

言って、恭也は軽く手を振り、瞼を閉じた。



翌日。

午前十時

鬼灯霧江は不機嫌だった。

本当なら今すぐにでも頼子を助けに行きたいのに、できない。そんな状況に、苛立っていた。

人質をとられている以上、警察も下手には動けない。

最も、この島の警察は、犯人に『探すな』と言われておとなしく待っているほどやわな組織ではない。

犯罪率の増加に悩まされながらも、それでも幾つもの妖魔犯罪を解決に導いてきた組織だ。

その上、不死者の王がかかわっている事件でもある。

妖魔の王達……SSSランクに指定される彼らは、災害に等しい、いや、それ以上の脅威とみなされている。

彼らがその気になれば、人質や、霧江の都合など無視した強行作戦が取られるだろう。

そうならないのは、おそらく零次のお陰だ。

彼は今頃走り回って、警察側の行動を必死に足止めしているに違いない。

それは零次自身のためだけではない。

頼子のため、松井刑事のため、そして何より、霧江のために。

霧江の親友を、死なせないために。

霧江が、そんな彼に報いるには、結果を出すしかなかった。

恭也を、自分の眷属を、殺してでも止めると言う、結果を。

「……」

恭也が指定した時間まで、まだ十時間以上ある。

それまでは待機している、と零次に言われていたが、おとなしく待つてなどいられるわけがなかった。

霧江は棺桶の蓋の上に座り、いらいらと右足を貧乏ゆすりしていた。

ふと、テーブルの上に大きな袋が置いてある事に気づく。

レンタルビデオショップの袋だった。

あのカマイタチ事件のあった日に借りたものだ。

事件の後、頼子が持ってきてくれたはいいが、結局一本も見えていなかった。

ふと、霧江の足が、止まる。

あの日。

霧江たち三人は、お互いが似た境遇で育ってきたことを知った。

霧江はこの二人と、本当に、家族のように仲良くなれたらと、心から思っていた。

友達なんて、これまで一人も出来なかった彼女がはじめて得た仲間。

その絆さえ、偽りだったのか。

志木恭也は、本気で自分を殺し、頼子をも殺すのか。

本気で島を沈めよう、と考えているのか。

——だとしたら私に出来ることは、なんだ。

その答えがそこにあるような気がして、霧江は手を伸ばした。

こんなときにこんなものを見ている場合ではないのは、十分承知している。

それでも霧江は立ち上がった。

立って、その袋をつかみあげた。



午後九時。

「……何よ、随分早いじゃない」

約束の時間の二時間前。霧江は携帯を耳に押し当てた。

『指定の時間通りだと邪魔が入りそうだったので。問題あります?』

電話の先からは、恭也の声。

どうやら零次の考えも見透かされていたようだ。

だが霧江としても、この決闘で邪魔が入るのは好ましくなかった。

「無いわ。それで、どこに行けばいい?」

『第十二区……人工森林の中に孤児院の廃屋があります。そこまで来てください』

「わかった、首洗って待ってなさい」

言って、霧江は携帯を切った。

零次に連絡は——必要ないだろう。

そう判断した。

自分と兄とでは、考え方が違う。

霧江は、自分の助けたいものを助ける。

そう、改めて決意する。

十五本もある映像ソフトは、まだその半分も見れていなかった。

しかしその内訳は、様々なヒーローシリーズの、そのシリーズ毎に作られた劇場版が多くあり、霧江は様々なヒーローの生き様を見ることが出来た。

そして、それぞれ違った正義を掲げる彼らに、ある共通点を見つけた。

それは皆、誰かを守るために戦っている、ということ。

『悪が許せない』

霧江は、そう考えて、これまで戦ってきた。

頼子は彼女を『ダークヒーローみたい』と評したが、もともとそんなことにこだわっていたわけではない。

こだわりの、何もないまま。

ただ状況に流されるがままに、彼女は戦ってきた。
しかし。

ここにきてようやく、鬼灯霧江は初めて、悪を討つためではなく、誰かを守るため、救うため、その為に力を振るうことを決意した。

窓を開け、夜空へ飛び出す。

空には、真円を描く月。

ヒーローの背を、押すように輝く。



「――きたか」

第十二区。

人工森林の奥、廃孤児院『ひまわり園』遊技場。

最奥に、十字架に架けられたままの少女、松居頼子。

その前に、待ち構える吸血鬼、志木恭也。

両開きの扉を両手で押し開け、もう一人の吸血鬼、鬼灯霧江が姿を現す。

「霧江さん！」

囚われの少女は、彼女の名を呼ぶ。

「頼子……助けに来たわよ」

入って数歩進み、立ち止まった霧江は、頼子に向かって強くほほ笑んだ。

「霧江さん」

その様子を見て、相変わらず例の似あわない襟立てマントを着た恭也は、ニヤリと笑って、彼女の名を呼ぶ。

「恭也……一つだけ、聞いていい？」

一転、真剣なまなざしで恭也を見据える霧江。

「何です？」

顔に笑みを張りつかせたまま、恭也は促す。

「……これまでのこと、なかったことにして、帰ってくる気、ない？」

それを聞いて、驚いたように目を丸くする恭也。

「でないと、私はあんたを殺さなきゃならない」

「それは、物騒ですね」

恭也の顔が、再び笑みに戻った。

「でも駄目です。僕は僕の望みをかなえる。僕自身の手で……そのためなら何だってします。

あなたを殺すことも、殺されることも厭いません」

「そう……わかった」

霧江は腰のホルスターから、クロス・ガンを引き抜く。

昨日のうちに兄から借り受けたものだ。

「だったら力づくで、頼子も、私の血も全部返してもらおう」

「どうぞ。出来るものなら」

恭也もマントの内側から、昨日霧江から奪ったクロス・ガンを取り出した。

お互いに、ブラッディクロスをセットし、銃口を真上に向ける。

《Standby》

《Standby Vampire form》

「「変身！」」

二人の声が重なり、同時に引き金も引かれる。

最後の戦い、その幕が切って落とされた。

第二十四話 ヒーローは決意する。 (後書き)

次回、いよいよラストバトル

第二十五話 母の愛は。

ブラッディクロスのベースとなるのはあくまでそのスーツである。要所を覆う装甲はクロス・ガンに装填されている魔装弾という特殊弾が十字架状態のブラッディクロスを打ち抜く過程でスーツと融合し、装着時に具現化されるものだ。

霧江のクロス・ガンは昨日のうちに零次から借り受けたものだったが、魔装弾は零次が使っていたものとは別のものが使われていた。

霧江用魔装弾バージョン2。

霧江がこれまで使ってきた装甲の、その発展型。

ベースとなるスーツは当然ながら、ヘルメットのデザインも以前のまま。

籠手、脚甲のカラーは赤から黒へ変更され、右籠手には最初から封印用の白いブラッディクロスが装着済み。

左籠手の同じ位置にはもうひとつブラッディクロスをセット出来そうな十字架型の窪みがあった。

一番の変更点は胸部アーマー。

以前は弓道部の胸当てのようなデザインだったものが、フェンシングの女性用チェストプロテクターのような、乳房の形に合わせて打ち出された金属製の胸当てに変更されている。

対して恭也のスーツ、その装甲は霧江用魔装弾バージョン1のデザインそのまま。

その代わり、こちらはスーツの色が全く違い、鬼蜘蛛のような黒褐色。

彼のスーツ、その元になったブラッディクロスは、鬼蜘蛛の少女が封印されたそれをそのまま使用していた。

ちなみにブラッディクロスを装着すると、元着ていた服は、下着以外は装甲の代わりに魔装弾に収納されるようになっていたが、な

ぜか恭也のマントはそのままである。

「……」

「……」

ヘルメットの下、交錯する両者の視線。

二人は、一歩ずつゆっくりと前へ。

彼らの距離は18メートル。

じわじわとそれが詰まってゆき、あと7、8メートルとなったところで、二人は同時に駆けだした。

「はあああああああああああああ！！！」

「でやあああああああああああああ！！！」

その距離が詰まる。

同時に突き出される拳。

霧江と恭也、両者の右拳が互いの胸に突き刺さる。

「――ッ」

「……！」

衝撃で互いに数メートル後ずさり、仰向けに倒れる。

二人はすぐに、ほぼ同時に起き上がり、今度は左の拳を振るう。

「オオッ！」

「らあッ！」

先手を取ったのは恭也だった。

衝撃に後退し、片膝をついた霧江。

しかしすぐさま立ち上がり、追撃に來た恭也の胸に左足でミドルキックを食らわせる。

しかし踏み込みが足りず、恭也に踏みとどまられてしまう。

互いに、握った拳をその顔面めがけて叩きこむ。

衝撃で、ヘルメットのシールドが碎けた。

再び倒れる両者。霧江は立ちあがりながらヘルメットを脱ぎ棄てる。

それを見て、自らもヘルメットを捨てる恭也。

互いに素顔を晒し、相手の顔面に容赦なく拳を叩きこむ。

鼻や口から血を噴きながら仰け反る二人。

霧江が先んじ、左手で恭也の肩を掴み、右拳を顔面へ連続で叩きこむ。

恭也は仰け反りながらも、霧江の顎に向けて、下から突き上げるかのように、左拳でアッパーカット。

霧江の左手は恭也の肩から離れるが、右手はそれと同時に彼の顔面へ叩きこまれ、二人はまた床へ倒れ込む。

「は、ハハハ……」

「フ、ふふふ……」

笑う恭也に、霧江もつられて笑う。

霧江から力を奪い、鬼蜘蛛の力を上乗せしている恭也。

恭也に力を奪われたものの、あらかじめ封印していた力を取り戻した霧江。

両者の力は、完全に拮抗していた。

立ちあがった瞬間には、二人とも顔の傷は治っている。
再び、殴りあう両者。

常人が受ければ、当たった部分が粉々に砕けかねないパンチの応酬に、だが二人とも防御は考えない。

己の再生力に任せ、相手の再生力を与えたダメージが上回るように、ただ攻撃あるのみ。

それが吸血鬼の、吸血鬼同士の戦いだった。

流れる血は、もはやどれがどちらのものであるかなどわからない。
二人の噴き出す鮮血が、泥のように交じり合い周囲の床を染めあげてゆく。

（——っ、血を流しすぎたか）

少しずつ、自分の体が重くなってゆくを感じる霧江。

僅かに、ほんの僅かにだが、その動きが鈍る。

完全に互角で行われている拳の応酬、恭也も同じ条件のはずだが、その隙を、彼は見逃さなかった。

先手を取り、その胸に強烈なブローを叩きこむ。

「ぐ……っ！」

衝撃で飛ばされ、床を転がる霧江。

恭也はすかさず、床に流れた血を回収する。

床を染めていた血は浮き上がり、脚甲を逆に流れるようにして彼のスーツへ、そしてその下の皮膚へ沁み込み、吸収される。

「勝負ありましたよ、霧江さん」

恭也は、そう宣言する。

「……この段階で言うの、負けフラグじゃないの」

そういつて、立ち上がる霧江に、しかし恭也は首を振る。

「今吸った血で、僕はあなたの妖力を上回りました。あとは少しずつ残りを回収して終わりです！」

恭也はマントを翻し、右腕を振りあげる。

第二幕が始まった。

霧江がそこに来るのを待っていたかのように、彼女の周囲六ヶ所。闇が渦を巻く。

渦が消え、中から現れたのは6体の人形。

どれも女性型で、等身大。

「は、こんなもんで私が倒せるとでも？」

霧江の強気の言葉に、恭也はニヤリと笑みを返す。

「気づきませんか？自分の体の異常」

「なに……？」

霧江が立ち上がる前に、正面に立っていた人形が、その顔面めがけてローキック。

人形の、恭也よりも遅いはずのそれを受け、仰向けに倒れ込んだところで、霧江は初めて自分の体の異常に気付く。

「こ、これは……！」

それは、糸だった。眼に見えぬほどの細い糸が、霧江の全身に絡みついている。

本来ならば、吸血鬼の感覚をもってすればすぐに気付けた筈だったその糸は、しかし極度の興奮状態の殴り合いのさなか、恭也が糸を隠すための偽装魔術をあらかじめ使っていたこともあって、霧江は自身の動きが制限されるほどになるまで気付けなかった。

即ち、霧江との互角の殴り合いの中でも、恭也は魔法を使い、さらにブラッディクロスが持っていた鬼蜘蛛の能力を発揮し、霧江の

体を少しずつ絡め取っていたのだ。

今や、部屋中は三次元的に糸が張り巡らされた蜘蛛の巣となっていた。

「霧江さん!!」

頼子が叫ぶ。

「大丈夫よ……こんなの、すぐに引きちぎ——ッ！」

立ちあがりながら、しかし言い終わる前に、霧江の腹に真っ白な光の槍が突きたてられる。

皮肉にも、背後から、最初に奇襲を受けた時と、全く同じ個所だった。

よろめく霧江の体を、人形三体が、その足で蹴り上げる。

「ぐッ——！」

宙を舞う霧江。その腹の傷へ向け、六体の人形は同時に足を振りあげた。

「——が、は!!」

口と、傷口から、大量の血を吐き出す霧江。

その血は糸を伝い、恭也に吸収される。

力なく、沈み込むように倒れる霧江。

「そんな……」

頼子の顔は、すっかり青ざめていた。

「だから言ったじゃあないですか、僕の勝ちだと。おとなしくしていた方が楽ですよ」

恭也は霧江を見下ろしながらそう言った。

だが、霧江は両腕をつき、必死に起き上がろうとする。

「……やれやれ」

恭也は呆れたように首を振り、左手を振るった。それに合わせて、霧江の手の近くに立っていた人形が、足払いで腕を払う。

正面の人形が、霧江の首の後ろを掴んで持ち上げ、顔面に拳を叩きこんだ。

仰向けに倒れるのも、もう、何度目かわからない。

霧江の視界に、遊技場の薄汚い天井が映る。

「……ねえ、恭也」

霧江は、観念したように、ゆっくりと上体を起こした。

「……何です？」

「本当に、戻ってくる気、ないのね……？」

俯いている霧江。彼女の眼に涙は見えない。

それでいて、泣いているような声だった。

「くどいですよ」

冷静に、突き放すように、恭也。

「僕は、僕の目的を果たす。早く楽になってください、霧江さん。あなたのことを嫌ってる訳じゃあない。なるべくならあなたをそれ以上苦しめたくはない」

「……はは、は」

霧江からこぼれる、乾いた笑み。

「私も、あんたのこと嫌いじゃない。……ホント、なんのために戦ってるのかしらね、私たち」

顔を上げる。

それは本当に、今にも泣き出しそうな笑顔だった。

彼女の右手には、いつの間にかもう一つのブラッディクロスが握られていた。

「二段、変身……ッ！」

「それは……！」

恭也がそれに気付き、行動を起こすよりも早く、霧江はそれを左籠手の窪みにセットした。

《Complete... change Weasel for
m》



『ねえ、出られないの？私の無実、晴れたんじゃないの？』

天壤署内、取調室。

スピーカーに繋がれた四角い台座に、セットされたブラッディクロス。

そこから聞こえるのは今にも泣き出しそうな少女の声。

「無実が晴れたら有罪だよ。正確には容疑が晴れる、だ」

冷静に訂正するのは、刑事ではなく、同席している霧江の兄、零次だった。

「君の容疑は、完全に晴れたわけじゃあない。解放するのは、君を洗脳してたやつを捕まえて、その証言を聞いてからだ。もし解放しても、まだ洗脳が完全に溶けていなかったら厄介だろう？」

『だったら！さっさと捕まえてよお！いやだよ私こんな、いつまでもこんな中に居るなんてえ！！』

少女の声は、もう泣き叫ぶ声へと変わっていた。

「まあ、落ちつきなよ。実は、君にいい話を持ってきた」

と、零次は子供をあやすような声で、少女に言う。

『え……？』

「今すぐに、とはいかないけれど、君があることを手伝ってくれば、より早くそこから出られるようになるだろう」

と、零次はくると踵を返しながら言った。

咆哮。

彼女からあふれる力の奔流に、絡めていた蜘蛛の糸が断ち切れる。

「な……そんなバカな!!」

驚愕の表情を浮かべながら、両手を指揮者のように振るい、人形を操作する恭也。

しかし、無意味に終わる。

宙を滑るように、霧江は飛んだ。

斬撃、斬撃、斬撃。

断ち切られる恭也の糸、人形たち。

鎌鼬の力を得た霧江のスピードは、恭也の、吸血鬼の視覚をもつてしても、捕え切れない。

彼の人形全と、部屋中の糸を粉々になるまで断ち切った霧江。

彼女はそのまま、頼子を磔にしていた糸も断ち、切る。

「霧江さん!」

解放され、床に落ちながらも、満面の笑みを浮かべる頼子。

「そのまま伏せてなさい!」

「はいっ!」

霧江の声に従って、彼女は伏せたまま自分の頭を押さえる。

「くそ、バカな……バカなバカなバカなバカな!!」

恭也は反撃の機会を窺おうとするも、しかしそのスピードに対応できない。

繰り返される斬撃、そのたびに飛ぶ血液は、そのまま霧江に回収される。

しだいに逆転する妖力。

逆転する形成。

もはや、勝負は決した。

いや、あるいは最初から決していたのかもしれない。

霧江が鎌鼬の少女のブラッディクロスを使うのを、躊躇っていないければ。

彼女は、恭也が自分から戻ってくる、僅か0.1パーセントにも満たない可能性を、信じたかったのかもしれない。

霧江は一瞬のうちに、背後から恭也の体をその尻尾で巻き取り、急上昇。

天井を突き破り、満月輝く空へ。

「うらあああああああああああああああああああッ！

！！！！！！！！」

「畜生……ちくしょおおおおおおおおおおオオオオオオオ！

！！！！！！！！」

霧江は尻尾を振るい、恭也の体を、真下へとたたき落とした。

恭也の体は再び天井を貫き、その床を砕き、さらにその下にあった空間に大きなクレーターを作る。

すぐさま急降下し、追いかける霧江。

床に出来た穴に入ると、遊技場の下には、そこよりももっと広い空間が広がっていた。

「……なに、ここ……?」

周囲を見回す。

真っ暗で、何もない部屋だった。

霧江は、もはや変身も解け、クレーターの真ん中で倒れている恭也の、全身から流れ出す血でできた、その血だまりを踏む。

脚甲を伝い、スーツにしみ込む血。

そうしているうちに、部屋の中心に大きなシリンダーがあることに気付いた。

青い液体で満たされたその中には、人間の脳が浮かんでいる。

「あれは……？」

霧江が目細め、それに注視すると、シリンダーには先程の衝撃のせいか、大きなひびが入っていた。

「……あ、あ……！」

いつの間にか、恭也は目を覚ましていた。

しかし彼は血を回収している霧江には目もくれず、倒れたままシリンダーに向け必死に手を伸ばす。

「だ、駄目……駄目だ……！」

その声は震えていた。

シリンダーのヒビはどんどん大きくなり、やがて中の水が漏れだしたかと思うと、それは音を立てて碎けた。

「――あ……あ……あ……」

歪む、恭也の顔。

「かあさん……かあさん！母さん！！――うわあああああああ

あああああああ

あああああああああああああああああああああああ

あああああああ

あああああああああああああああああああああああ

あああああああ」

闇の奔流。

恭也の全身から放たれたその真黒な衝撃は、霧江の全身を強く打ちつけ、彼女を弾き飛ばした。

その衝撃で、左腕のクロスドライバーから鎌鼬のブラッディクロ

スが外れる。

恭也は倒れた霧江に馬乗りになり、その顔を殴りつけた。

「よくも！よくも！！お前のせいだ！！お前のせいで、母さんがっ
！！

母さんがああああああああああああああああ！！！！
」

泣きながら、必死になって、恭也は何度も霧江の顔を殴りつける。

（そうか……それがあんたの目的か……）

彼の顔を見て、霧江は全てを悟った。

顔じゅうから血を流しながら、彼女はもはや抵抗しなかった。

（だったら、言ってよ……何か、力になれたかも、しれないのに……
…）

そう思った霧江の目からも、血と一緒に、涙がこぼれていた。

左手で、恭也は霧江の首を掴んで押さえつけ、右手を思いっきり
振りあげる。

「これでとどめだ！死——」

しかし、その腕が、振り下ろされることはなかった。
代わりに振り下ろされたのは、白き刃。

恭也は血を吐きながら、霧江の上に覆いかぶさるように、倒れる。

「……恭也、さん」

霧江の視線の先には、振るえる左手で退魔小太刀『月影』を握った、頼子の姿。

「……本当に、馬鹿な奴」

そう言って、霧江は恭也の体を力いっぱい抱きしめた。

「……あ」

退魔刀によってその妖力を奪われ、もはや傷を再生させることも出来なくなった恭也。

次第に、その意識も薄れていった。
薄れてゆく、その中で。

（……あったかい、な）

彼は全身に、そのぬくもりを感じていた。

『でも、それじゃあ、自分に都合のいい人形を作るだけじゃあないですか！』

『完全な死者蘇生なんてできないのは知ってる。僕は僕で、僕のやり方で母さんを取り戻す。それだけだ』

（……そうか）

走馬灯のように流れる言葉。

その中で、彼は真実を見つけた。

（別に、人形でも、何でもよくて、僕はただ、母さんにもう一度だ

けでいいから、抱きしめてほしくて……)

『……そう言うわけだから……あんた、恭也っていったっけ？両親
いないなら丁度いいでしょう。私が今日からあんたのママってこと
で』

初めて、彼女と話した日。

彼女がくれた言葉。

(この人も、？母さん？だったんだ……)

最後に、彼は心の底からの安堵の笑みを浮かべて、その意識を手
放した。

エピローグ

午前零時。

第零区、天壤島魔導大学医学部付属病院、第五手術室。
手術室のランプは赤く灯り、中には二人の人間がいた。

シーツをかけられ、手術台の上に寝ている少女、松居頼子。
その前に立ち、手術着を着ている男、鬼灯零次。

「……じゃあ、君も親父のことについては知らないのか」

「はい、残念ながら」

あの後、頼子は病院に運ばれたが、『フランケンシュタインの怪物』である彼女の検査や治療は、その制作者である零次にしか出来ない。

彼はそれを理由に、知り合いの教授のコネを使って手術室を借り、彼女の身を引き受けたのだ。

しかし、もともとある程度の再生力を持っている彼女に検査や治療は必要ない。

そもそも運び込まれた時点で、すでに怪我は治っていた。

にも拘らず、零次が彼女を引き受けた理由は二つある。

その一つが、彼らの父親の所在について、彼女に確認するためだった。

しかし、頼子は、気付いた時にはその義手を取りつけられた状態でこの島の孤児院に居たのだと言う。

彼らの父親の所在については、結局わからなかった。

「ならしかたない、か。もう一つの方を手早く始めてしまおう」

零次は手術用の手袋をはめ、頼子に掛けられていたシーツを剥がす。

その下には一糸纏わぬ彼女の裸体があった。

彼女は、本物の人間のように成長する。それほどにまで精巧に作られているとはいえ、その体は、やはり作りものだ。

10年も放ったらかしではあちこちにガタがくる。

「こうして君のメンテナンスをするのも10年ぶりか……」

「あなたはいつもお父さんの手伝いばかりでしたけどね」

言って、頼子はくすくすと笑う。

「なんだ、覚えてないのか？一度だけ、俺が一人でやったこともあるんだぜ」

「あら、そうでしたか？」

「そうさ……俺も、つい最近思い出したんだがね」

彼女を作った当初は、その性能にもいろいろ問題も多く、頻繁なメンテナンスを要した。

零次はそのたびに父を手伝い、その手順を覚えていった。

そして、彼が第三スフィアの叔父の家に行くことになった日の前日。

最後のメンテナンスを、彼は一人でやるよう父親から言われたのだ。

「なんで忘れてたんだろうな。あのときは、君がちゃんと俺に身を任せてくれて、少し安心したんだ」

「私は……今の私になってからは、あなたのことを殺そう、なんて思った日はなかったですよ」

「そうなんだろうな。きつと、俺が無意味に怖がっていただけなんだろう」

言いながら、零次は麻酔用の注射やメスなど、メンテナンス用の道具の準備を進めた。

「私があんな目をしたのは、ドSでシスコンでロリコン野郎のあなたを霧江さんに近づけておくのが危険だと思っていたからです」

「――ッ！――！」

痛烈なカミングアウトに、零次は思わずメスを取り落とした。

「お前、なあ！」

「ふ、ふふ……」

その様子に、頼子は声をあげて笑った。

「……ロリコンでシスコンはともかく、Sなのをいつ知った。これでも普段は全然余裕で押さえてんだぞ」

「言ってあげましようか？昔のあなたの部屋の、机の上から三段目の引き出しの中身」

「見たのかこいつ！……なんてこったい」

と、零次は頭を抱えた。

「……でも結局、それも焼けてしまったんですよね」

頼子の顔からフツ、と笑みが消える。

「……そうだな」

零次は神妙な顔をしつつ、実はあの本は未だ健在で自分の研究室にこっそり置いてある、ということは絶対に言わないでおこうと心に決めた。

「あの頃よりは、だいぶ腕を上げたよ。明日の入学式に間に合う様に、最高の状態に仕上げてやる」

「期待してますよ……もう一人の、お父様」

頼子は穏やかに笑って、その目を閉じた。



翌朝、午前九時。

第三区、グリーンフォレストマンション、803号室。

『ちわー、お荷物です。判子おねがいします』

インターホンの向こうからの声を聞き、零次は判子を手に玄関へ。

「はいはい……ってうわ」

ドアを開けてそれを見、口をあぐりと開けてしまった。
届いたのは恭也のために用意された大きな木製の棺桶だった。

「まいったな、彼はもう……」

突き返すわけにもいかず、受け取って、とりあえずリビングに置

く零次。

どう処分したのかと思案する彼に、また玄関のチャイムの音が聞こえてきた。

「霧江か、どうしたんだ？」

「いやー、そろそろ来てる頃かと思ってね」

玄関を開けると、今日入学式にもかかわらず、またいつものＴシヤツとジャージ姿の霧江が入ってきた。

「お前、入学式の準備ちゃんとしてんだろうな」

「昼からでしょ？ 余裕余裕」

言いながら、霧江は彼の部屋のリビングまで上がり込んでくる。

「おお、来てる来てる」

霧江は零次のリビングに置いてあった棺桶を見つけると、それを軽くヒョイっと持ち上げた。

「どうするんだ？ それ」

零次は怪訝な顔で尋ねた。

「貰ってくわよ。？ 思い出の品？ としてね」

言って、霧江はベランダに通じるサッシを開けた。

「……お前、ちゃんと彼は始末したんだろうな」

「当たり前でしょ。だから思い出があるんじゃない」

しれっと言ったのける霧江に、零次はため息をついた。

「……まア、うまくやんなさいよ」

「なんのこと？じゃ、もう帰るから……あ、そうそう。入学式にはちゃんと羽月さん連れてきてよ？」

「なに？」

と、零次は眉を顰めた。

「だって、私のお姉さんになる人でしょ？」

「お前……俺らがどういう関係かわかって――」

「じゃ、絶対連れてきてよー」

生徒との関係を公にしたくないという零次の反論をあっさり聞き流し、霧江はベランダから棺桶を抱えて飛び降り、8階の高さにもかかわらず猫のように華麗に着地して、走り去っていった。

「……ったく」

その背を見送って、零次は軽く、もう一度ため息をつくのだった。



午前九時五分。

第三区、天壤魔導学院高校女子寮。301号室。

霧江は持ってきた棺桶を、自分の棺桶の隣に置いた。

彼女の足元には、一匹の黒ネコがいて、彼女を不思議そうに見上げていた。

「はい、これがあなたのおうちよー」

霧江は棺桶の蓋を開け、ネコの体をやさしく持ち上げ、その中に入れた。

「……」

きよろきよろ、と周囲を見回すネコ。

「ん？ やっぱでっかいか。仕方ない。こんど作りなおしてあげるわ」

そう言って、霧江は猫の頭をやさしくなでた。

「……いや、そういうことではなくて」

と、黒猫は声をあげた。

「僕を殺すんじゃないかったですか？ マスター」

「なーにバカ言ってるのよ」

ぺちん、と霧江はネコの頭を、殆どその右手を乗せるような軽さで叩いた。

「……私は言ったわよ。あんたを立派な吸血鬼に育てる、ってね」

言いながら、彼女はそのままの手でネコの頭をふわふわと撫でた。

「私があんたのママだ、とも言った。兄貴がその力を危険視してるとか、あんたが誘拐犯で島外追放ものの犯罪者だとか、

そういうのは関係ないの。あんたは私の大事な『子』で、一回くらい間違ったことしたからって簡単に殺したりするわけないでしょうが」

その言葉にネコは、恭也は、もし猫にそういう表情があるならだが、少しだけ、笑った。

「たーだーし」

がち、と霧江はネコの頭を掴んだ。

「悪いことしたんだから罰は受けないとねー」

ネコ恭也はじたばたと抵抗する。

「とりあえずあんたは『眷族』からただの『使い魔』に格下げ。あと二百年くらいその姿でいてもらうから」

「に、にひゃ」

抵抗を強めるネコ恭也に、霧江も掴む力を強める。

「私の親友に傷付けたんだから当然でしょ。

あと鎌鼬の女の子とか、鬼蜘蛛の女の子とか。火鼠のハーフとか。いろんな人に迷惑掛けまくったんだから反省しなさい」

「は、はい——いたたたたた！わかりましたって」

パ、と霧江は手を離し、彼を解放してやった。

「よろしい。どうせ吸血鬼なんだから、二百年くらいすぐよ。その間、あんたの性根を叩きなおしてやるからね」

言って、霧江は腕を組み、恭也を見下ろした。
恭也は背骨を丸め、項垂れる。

「それじゃ、私は頼子とご飯食べてそのまま入学式に行くから。帰るのは夕方くらいになると思うけど、おとなしくしてなさいよ」

言って、霧江はネコの目の前で、学校の制服姿へと着替え始めた。

(……)

恭也はその様子を、ただじっとつめ見ていた。
別に劣情を催したわけでもない。

彼が女の体に興味がないのは、今でも変わっていない。

彼女は正義の味方だ。

正義の味方で、悪を許さないヒーローだった。

それでも、彼女は自分を警察には突き出さず、殺しもせず、自分で罰を与えるという。

まるで、子供が外でやった悪戯を他人からかばいつつも、自分では激しく叱る、母親のように。

(なんだ。結局、僕がずっと欲しがっていたものは、もうとつくに……)

この姿では、以前のように満足に人形を作ったり動かしたりすることは出来ないだろう。

でも、それでもいいと彼は思った。

彼は、母を取り戻したのだ。

それだけで、十分だった。

「じゃ、行ってくるわね」

玄関に立ち、霧江は恭也を振り返った。

「……いつてらっしゃい、母さん」

呟くような声に、霧江は満足したように笑って、部屋を出て行った。



「霧江さん」

部屋の外にはもう、同じ制服に身を包んだ頼子が待っていた。

「おはよう頼子。じゃ、いこっか」

「はい」

頼子にはこやかに笑って、二人は並んで歩きだした。

「あ、そういえば霧江さん」

女子寮を出たところで、頼子が立ち止まる。

「どしたの、頼子」

霧江は振り返って、不思議そうに首をかしげた。

「私、助けてもらったお礼をしたいんですが」
「お礼？」

霧江は眉をハの字に曲げて、

「要らないでしょ。そんなの。相棒なんだから」

と、さらりと言ってのけた。

その言葉に、頼子は顔を輝かせたが、は、と何かに気付いた後ぶんぶん首を横に振った。

「今回の私は、全然相棒っぽくなかったというか、むしろヒロインみたいな立ち位置だったので。

ケジメとして、何でもいいので何か一つ言ってください」

「ケジメねえ……」

なんだかんだでこの子も変な子だ、と苦笑する霧江。
しばらく考え込んで、あ、と手を打った。

「名前！名前考えてなかった！」

「名前？」

頼子は首をかしげる。

「そうよ、ヒーローの名前。ずっと保留にしてたからさ。ねえ、頼子考えてよ」

「むむむ……そうですね……」

口元に手を当て、真剣な表情で悩む頼子。
しばらく考え込んで、それじゃあ、と口を開いた。

「では、少々安直ですが、吸血鬼の少女のヒーローと言うことで『ブラッドガール』というのはどうでしょう」

「よし、じゃあそれで」

パン、ともう一度手を打つ霧江。

「え、ちょ、そんなにすんなり決めちゃうんですか？」

あっさり決定したことに、少し慌ててしまう頼子。

「だって、相棒のあなたが悩んで決めてくれたものだもの。無碍にはできないじゃない」

そう言った霧江の顔は満面の笑みを浮かべていた。

「で、でも……」

「いいからいいから。ほら行こ、頼子」

霧江は頼子の手をとり、桜並木の道を走りだした。

今日は入学式だ。

これから、学園生活が始まり、彼女のヒーロー生活も本格的に始まってゆく。

波乱の日々が幕を開けることになるだろう。

これまで出会ってきたすべてと、これから出会うすべて。

妖魔と人間の、その間に立つ者として。

彼女は、多くのことを為し、多くを為し得ないだろう。

本当の始まりは、まだこれからなのだ。

〔第零章 完〕

エピローグ（後書き）

第一章完結

今までありがとうございました！

プロローグ この世で最も面白きもの。

ふわふわふわ。

一匹の真っ白な蛾が、静寂に包まれた月の夜空を、浮かぶように飛んでいる。

ふわふわふわ、ふわふわふわ。

蛾は赤い屋根の建物にたどり着くと、力尽きたように、そこへ静かにおちた。

——何故、我がこのような手段を用いなければならぬのか。

それは彼女、あるいは彼にとって、屈辱以外の何物でもなかった。羅生門の赤き屋根に降り立ったもの。

それは、一人の老婆だった。白い着物に身を包んだ、長い髪の老婆。

しかしてその形相は、まるで鬼のようであった。

老婆は息を吐き、無造作に座り込む。

そして、その左腕に抱いたもの——今し方取り返した自身の右腕を——しげしげと眺めた。

切断面を見やる。

それは、まだ生きているようだった。かの名刀、髭切の切れ味、その凄まじいことを思い知る。

——ええい、忌々しい。

老女はかぶりを振った。

否、これは髭切りの太刀のみの力によってなせる業ではない。
あの男の腕あればこそであった。

老女は右腕を、あるべき場所へと戻す。

切り口はたちまちに結びついて、老女の腕は元の通りとなる。

老女は右腕を持ち上げるように動かし、しっかりと繋がったのを確認すると、それで顔面を隠す。

しばらくしてその手が退くと、その下からは鬼の形相がすっかり消え失せ、その顔はもはや皺もなく、男とも女ともとれるような、若く美しいものへと変わっていた。

「なぜ、思いどおりにゆかぬのだ――」

この鬼にとって全ての凶事は、あの山の、宴の席で始まった。

かの源頼光と、その四天王共、卑怯にも酒に毒を盛り、鬼たちの首領であった酒吞童子、そして山の同胞達を打ち取ったあの夜から。

唯一生き残った鬼は、復讐を遂げんがため、頼光とその四天王を皆殺しにするつもりで、この京に舞い戻ったのである。

その結果が、このざまであった。

腕を奪われ、それを取り返すために人間に化けるなど、鬼神たる我のすることではないと、鬼は自身の行いを恥じた。

「何故だ」

鬼は、その憤りに震えながら声を発した。

「何故、我等が人間などに後れを取らねばならぬのか！」

鬼の中に浮かぶのは、怒りと、そして疑問だった。

——我等は鬼神。人間など、取るに足らぬ存在のはず。

決して侮りではない。

鬼と人間の間にある力の差。

どうして覆ることがあろうか。

神をも恐れぬ力を振るう鬼。この世、あの世においても敵はなし。思い通りに行かぬ事などないはずであった。

しかし、それでも、鬼は勝てなかったのである。

鬼は敗北し、腕を斬られ、それを取り返す為に人間の女に化けねばならなかった。

圧倒的な存在であるはずの鬼が、なぜ人間に負けねばならぬのか。

彼は問うた。

かつて同胞はらからと共にあったあの山へ籠り、何度も考えを巡らせた。

しかし、答えは得られなかった。

そうして一年ひととし唸って、鬼は、一つのことに気付いた。

——総てを我がものに出来るこの世にあって、其れは我が手の自由にならぬ、ただ一つのもの。

それに気付いた時、鬼の口は歪んだ。

鬼と比して、圧倒的に劣っているはずの人間共。

しかし、何度戦おうと鬼は、最後には破れてしまった。

それはこの世でただ一つ、思い通りにならない存在。

「人——これほど面白きものがあるうか」

鬼は山を降りた。

そうして、何処いずこかへと去って行った。

……

「……それで？」

鬼灯霧江は眉を顰めながら、男とも女とも取れる顔をした、その一匹の鬼へ問う。

「つまり——」

鬼は答えた。

「——我は気付いたのだよ、娘。これはあの頃から変わらぬ我の間への評価なのだ」

鬼は笑った。それを悟った、あの時と同じように。

「其は、この世で最も面白きもの」

第一話 お別れの儀式。

吸血鬼事件、解決から三日後。

日曜日で、学校は休みだ。

その、午前十時。

「……本当にいいのね」

「ええ、構いません」

天壤島第五スフィア市。第十二区、人工森林『子の森』^ねの奥深く。打ち捨てられた場所に、かつての孤児院『ひまわり園』がある。痛み切っていた廃屋は、先日あった、ヒーローと人形師との戦いの衝撃で、今や倒壊寸前となっていた。

建屋は、取り壊しが決定されている。その跡地には、子供たちのために野外活動用の施設が建設される予定だ。

ひまわり園の庭、決して広くはないそこに、二人と一匹の人影があった。

鬼灯霧江、松居頼子。

そして、かつて志木恭也だったモノ、今はキョウと呼ばれている、一匹の黒い猫。

低い柵に囲まれたその小さな庭は、孤児院が潰れて以来手入れが全くなされておらず、雑草が伸び放題だった。

端には、錆ついた小さなブランコがあった。ブランコは風に小さく揺れて、キイキイと泣くような声をあげている。

そして庭の中心、二人と一匹の目の前には、雑草を踏み潰しながら、棺桶が一つ置かれている。

「……」

霧江は棺桶に向かって手を翳した。

その中には、キヨウの、志木恭也の母――を、模して造られた人形――が入っている。

「炎よ其を焼きつくせ
発火・強化・対象指定」

霧江、眩くように詠唱。

炎は瞬時に棺桶を包み込んだ。

棺が、その中の人形が、ごうごうと音を立てて燃えてゆく。

霧江はキヨウの、黒猫の横顔を見た。

猫に表情はない。あつたとしても、それは猫にしか分からないだろう。

彼は今どんな顔をしているのか、どんな思いでそれを見つめているのか、霧江にはわからない。

火葬は、長くはかからなかった。憂いを断ち切るように、炎は僅かな時間で、棺とその中身を灰へと変えた。

残った灰も、風に吹かれてぱらぱらと散って行った。

対象指定の補助魔術のおかげで、雑草に炎は燃えうつらなかった。お陰で森林火災の心配はないが、焼け跡もなく、その後には本当に、何も残ってはいない。

全ての憂いを、無理やりに断ち切ったようだった。

「……さあ」

黙って見届けていた三人だったが、やがてキヨウが声をあげた。

「帰りましようか」

彼はそう言った。

人間の姿ならきつと、泣きながら笑っているだろうと霧江は思った。

「そうですね」

頼子が静かに応じ、二人と一匹は庭に背を向け、歩き始めた。揃って、新しい一步を踏み出すように。

不意に、電子音が鳴り響いた。

終わるのを待っていてくれたかのようなタイミングに、霧江は苦笑する。

ポケットから取り出した携帯を耳に押し当てる。

それは『ヒーローコール』

正式なヒーローと認められた彼女に、市や警察が出動を要請するためのものだった。

何度か言葉を交わし、霧江は携帯から耳を離して、一人と一匹を振り返った。

「事件よ、行きましようか」



午前十時二十分。

『犯人は魔術師一人に火車一台、ループラインを第九区に向かって

爆走中』

「検問は？」

『五分前に突破——というより粉碎されました』

「……あらら」

蝙蝠羽の飾りのついたヘルメット、全身を包む赤いスーツ、チェストプロテクターとクロス・ガンの収まったホルスターを吊っているベルト。両手両足は黒い籠手、脚甲に覆われている。

ヒーロー、ブラッドガール。鬼灯霧江は住宅街を駆けていた。

第十二区は日本風の一軒家が多く、田舎の町のような印象が強い場所だ。

ヘルメットに備え付けられた通信機で警官と会話しながら、電柱や屋根の上を飛び継いで、現場へと向かう。

『犯人はおそらく第九地区の港から島外への逃走を企てているものと思われます』

「なるほど、火車が船にでも取り憑いたら厄介ね、私じゃ追えなくなる」

事件の概要はこうだ。

30分前、妖魔火車と、魔術師一人が共謀して、第三区にて現金輸送車を襲撃。警備会社の妖魔数名を殺傷し、そのまま現金輸送車で逃走。

火車は現金輸送車に憑依し、島の外周に建設されている高速道路『ループライン』に強行侵入し、港へ向けて逃走中。それが30分前。

警察は、島外逃走を企てているものと予想している。

『現在、天壤署CMATが西ノ港へ急行中……しかし——』
「間に合わない、か」

『はい。犯人の速度が速すぎるのです。西の港へ到着するまでおよそ三分三十秒、部隊を展開完了するまではとても間に合いません』

「でもそれじゃ、私だって間に合わないわよ」

『心配するな、霧江』

通信機に、別の声が割り込んだ。

彼女の兄、鬼灯零次の声だ。

『アイテムボックスに新しいのを追加しておいた。キーは819…』

「え？なに、バイク？」

『……む、よくわかったな』

意外そうな声で、零次。

「819でバイクでしょ、パスが安直すぎんのだよ！」

言いながら、ベルトに取り付けられた、小さな電卓のような箱——アイテムボックスに8、1、9とキーを入力、霧江は赤い屋根の上で踏み込んで、一気に跳躍。

空中でエンターキーを押す。

閃光。

アイテムボックスから何本もの赤い光のラインが飛びだし、霧江の飛び降りる先へ向かう。

赤いラインが立体的なイラストを描くように^{はし}迸り、像をかたどる。それに合わせて形が現れた。

真っ赤なカウルに覆われた、シャープなデザインのバイク。

しかし本来あるべき場所にはタイヤではなく、タイヤを横向きに設置したような形のバーニアが二基、後部には大きな推進用スラスターが一基取り付けられていた。

『いいものだろう、名前は『アクセラレイター』だ。起動と操作方は単純にしてある。右グリップを引きながらから魔力を通せ』
「了解」

着地と同時に飛び乗った霧江は、ハンドルを握りしめる。
言われた通り右グリップを手前に引き、手から魔力を伝えるイメージ。

左右のグリップに設置されたミスリル製魔力回路から魔力が通じ、バーニア内に描かれていた術式が起動。スラスターの術式が起動準備に入る。

バーニアが火を噴き、車体が浮き上がった。

「うお……つと」

急に浮き上がったため、バランスを崩し落ちそうになる霧江。
しかしなんとか体勢を立て直し、グリップを握りなおした。

『スラスターとバーニアは風と炎の複合魔法をベースにした術式で起動している。お前の意思で自在に調整できる筈だ。空飛ぶコートよりトップスピードは劣るが、小回りは効くようになってる』

「了解……ところで兄貴」

『なんだ？』

「私、バイクの免許ないんだけど」

『大丈夫だ。現代法では空を飛ぶ機械をバイクとは呼ばん』

「……そういうものなの？ま、いいか。行くわよ!!」

疑問を残しつつ、霧江は魔力を全力で注ぎ込み、空へ駆けあがった。



「……事件が事件ですし、今回は役に立ちそうにないですね」
「うるさいですわよ三号」

頼子は肩にキョウを乗せて走っていた。
霧江の後を追っているつもりだが、とっくに見失ってしまっているため、本当に追えているのかすら定かではなかった。

「今回は待ってればいいじゃないですか。無理に追ったところで、辿りついたところには終わってますよ」
「……」

頼子は、答えない。
むしろその速度を速めていた。

「頼子？」
「終わってれば事後処理のお手伝いをするだけです。嫌なら貴方だけ残ってればいいじゃないですか！」

そう言っつて、頼子はキョウの首をひつつかんで文字通り放り投げた。

「うわ……っと！」

キョウは猫の身軽さでもって空中でくると回転。着地するとそのまま駆け出し、頼子に並走した。

「頼子、どうしたんだい？君らしくない」

「貴方にわかるもんですか！」

頼子はキヨウを一顧だにせず走り続けた。

彼女の脳裏には、燃えてゆく棺と人形、そしてそれをじっと眺めていたキヨウの背中がちらついていた。

（――黙っていられますか。あんなものを見せられて）

頼子は、何かを振りきるように、さらに足を速めた。

第二話 火の車。

「のおおおおわっはあああああああああああ！！」

まるで限界の壁を何度も突破したようなありえない疾走感に、霧江は悲鳴に近い声を上げる。

体で風を切るどころではなかった。

『アクセラレイター』は、『加速装置』の意味そのままに、霧江を超高速の世界へと誘ってゆく。

彼女は一般市民への影響を極力避けるため、地上から三十メートルほどの高さを保ちつつ、第十二区から第九区に向かって、最短距離を一直線で飛んでいた。

『霧江、右グリップ内側にあるボタンを押してみろ』

「話しかけないでよ舌噛みそう！——なに、これおすの？」

ポチ、つと霧江は何のためらいもなくスイッチを押す。

「ってうおわああっはあああああああああああ！！！！！！」

アクセラレイター、さらに加速。

スイッチにより、バイクで言えばエンジンに当たる部分に備え付けられた、魔力増幅装置マジックパワー・ブースターが起動。

併せて後部、スラスタ内部の魔法陣に増幅魔術ブーストスベルが接続され、より爆発的な推進力を得たのである。

衝撃波で、下にあった住宅街の窓がカタカタと揺れた。

速度が上がったのはほんの数秒だったが、霧江は目的地までのその距離を一気に詰めていた。

彼女は視界の端に第九区を通るループラインをとらえる。

「な、なにがトップスピードはコートのに劣る、よ、くそ兄貴……」

少しずつスピードがゆるんだのを感じて——といっても相変わらず早さは相当なものだが——霧江は息を吐いた。

『三回までしか使えないんだけどな。ちなみに左のグリップ内側のボタンはなー』

「もうっ！聞きたくないわよ！！」

子供のようにはしゃぎながら解説をする兄にうんざりする霧江であつた。



高速道路『ループライン』は文字通り島を一周するように建設されている片側三車線の高速道路だ。

条例によってスピード制限がなく、無料で走行することが出来るが、構造上それほど利便性が高いとはいえないため、利用者はそれほど多くはない。

その外回り、第二車線上を、ごうごうと燃え上がる車が爆走している。

元は現金輸送車だが、火車の憑依の影響でその形は大きく変化し、その炎はまるで大きめのレーシングカーのような形状を為している。その運転席内部に、一人の男が平然と乗って運転していた。

「うまくいったな火車の兄貴！」
ひぐるま

男が声を上げると、運転席内部、燃えているが、ラジオがあったであろう部分から、雑音混じりの声が聞こえてくる。

『この程度楽勝だ。俺たちにとってはな。なあ金山』

「そうだな。警察の連中もまるで相手にならなかったもんな！島の外に出たら奪った金で遊びまくらうぜ」

『俺には……ポルシェを買ってくれればいい……！』

「勿論だぜ兄貴！10台くらいでいいか？」

『上等だ……！外でも走り回ってやろうぜ』

静かだが、内の秘めきれない欲望がにじみ出ているかのような声。それに呼応するかのように、車を覆う炎の勢いが一層強まる。

その時、金山はバックミラーに一台のバイク、のようなものが映り込んでくるのに気づいた。

「お、ちよつとは骨のありそうな奴が追いかけてきたか」

金山はバックミラーを注視する。

真っ赤なそのバイクには、タイヤのようなものが横向きについていて、道路すれすれを滑るように飛んでいた。

霧江の乗る、アクセラレイターだった。

『こうでなくては面白くない……いくぞ、全速だ……！』

さらに加速する火車。
かしや

霧江は少しずつ離されてゆく。

「遊んでるわね連中」

霧江は右グリップ内側のボタンに指をかけた。

「……付き合ってやろうじゃない！」

魔力増幅器が、補助呪文器が唸り、背部スラスターが吠える。
アクセラレーター、加速。

二台の放つ衝撃波に、高速道路のフェンスが振動する。
アクセラレーターはあつという間に火車かしゃに追いつき、外側に回り
並走する。

『ふ……やるな！』

火車はひるるま楽しそうな声をあげた。

そして車体を右側に寄せ、側面から衝突を図る。

「——っ」

霧江はバーニアを吹かせ、急上昇。衝突を回避するが、速度が落ちる。

降りたところで加速時間が終わり、距離が一気に開いてゆく。

「やっべ……」

しかし、焦ったような声を上げたのは霧江ではなく金山の方だった。

『どうした』

「下り口通り過ぎちゃった」

今の一瞬の攻防に夢中になりすぎて、第九地区の一般道路へ至る下り坂をすっかり通り過ぎてしまっていたのだ。

『なら戻ればいい』

「――へへ、それもそうだ」

金山はにやりと笑みを浮かべ、ブレーキを踏みつつハンドルを勢いよく回す。

火車は横転しかけるが、片輪で一気にUターン。元に戻り、霧江のアクセラレータに対し、真正面から向かってきた。

「――!!」

霧江は一瞬息をのむが、次の瞬間その口元には強気な笑みを浮かべた。

（上等じゃない！）

互いの距離は200メートルもない。

その状況で、霧江は最後の加速スイッチを入れる。そして左グリップの内側のスイッチに指をかけた。対する火車も、全速力^{かしや}で突っ込んでくる。

普通の人間にとってはお互いに狂喜の沙汰だろう。

『うおおおおおおおおおおおおお!!!!』

「あああああああああああああああつ!!!!」

炎の勢いを増し、真っ直ぐに突っ込んでくる火車。

コンマ以下、超神速の世界での対峙。

衝突の直前、金山は、勝利を確信する。

自信の命も危険な状況。活性化した脳、研ぎ澄まされた感覚が、相手のバイクが傾き、操縦者が飛び上がるのが見えていた。

勝った。後は逃げるだけだ。

そう確信した、次の瞬間。

（—————違っ！！！？）

「セイっ——」

相手は逃げたわけではない。

車体から飛び降りるなら、出来るだけ外側へ向かうのが普通だが、違った。

相手は——鬼灯霧江は、左グリップのボタンを押した後、斜めに倒したバイクを蹴って前へ跳かしゃんだのだ。

正確には斜め前方、火車とすれ違うようにして。

「やああああああああああああああああああああああああああああああ！！！！！！」

すれ違いざまに、霧江の右フックが、車体に叩きこまれた。

『なん、だとおおおおおおおお！！！！！？？』

「うおおおおおおお！！！！！！」

火車は爆散、はしなかった。

車体は消滅。霧江の右籠手に装着されていた、ブラッディクロスに爆縮、封印される。

その十字架は衝撃で高速道路の路面を削りながら滑って行った。

車体がなくなったことで、中に乗っていた金山と、積まれていた現金入りのバッグが慣性で吹き飛ぶ。

ずっとスローモーション状態が続いていた金山は、このまま道路かフェンスに激突し、死ぬことを確信した。

しかし、そうはならなかった。

彼は見た。霧江が乗り捨てたバイク、それが、形を変え始めたのだ。

アクセラレータ、変形。

後部スラスタが外れる。

車体の上半分が真ん中から前後に割れ、伸びる。シート部分と、ハンドル部分を含めた前部が、それぞれ左右非対称の脚部に変形。

下半分、魔力増幅器部分が90度回転。増幅器内部から腕が展開し、体の側面へ。

両手はそのまま地面に手を突き、バーニア部分を残したまま腕力のみで跳躍。

空中で回転して脚部を下へ。同時に、放りだされた金山を受け止める。

そしてバーニアの上に両足を、着地と同時に接続。

ボディからモノアイの頭部が出てきて、彼の顔を覗き込んできたとき、金山は失神した。



「いやー、兄貴もたまにはいいもの作るじゃない」

小太刀を高速道路の柱をやフェンスに突き刺しつつ、必死によじ登って、松居頼子がようやく現場にたどり着いた時、聞こえてきた

のは鬼灯霧江の、楽しそうな声だった。

頼子はフェンスの内番上に体を預けるようにして、彼女を見る。

霧江は、見たこともない人型のロボットとハイタッチを交わしていた。

事件はもう終わり、警察の到着を待っているようで、犯人らしき男は手足を縄で縛られた上で道路の上に寝転がされている。

「いいねいいね。こういうの大好きだわ私」

霧江の言葉に、人型のロボは照れたように頭を掻いた。

「なによーなによー照れてんの？はは、こいつうー」

コツンコツンとロボの頭部を小突く霧江。

それはとても楽しそうで――

「……」

頼子は名状しがたい、複雑な感情を胸に抱いた。

その後警察が到着し、事後処理が進められ、頼子とキヨウは霧江と合流したが、頼子の中に生まれた複雑な感情は、消えることはなかった。

第三話 零次の危機。

「零次さん！！！！」

松居頼子が鬼灯零時の研究室の扉を勢いよく開いたのは、その日の夜。零次が夜学部の授業を終えてさっさと帰ろうと支度をしていた時だった。

「おや、頼子か。珍しいなこんなところに、しかも一人で。どうしたのか」

「どうかしたのかじゃありませんよ！」

頼子は語気を荒げつつ、零次のデスクにのしのしと近づいてくる。

「一体何なんですかあの機械は！」

「どの機械だ？」

「アレですよ！あの変なバイクみたいな！」

「ああ、あれな」

零次は鞆から手を離し、椅子に腰を落ち着けて、笑みを浮かべた。

「良いだろうアレ。俺の魔法工学の粋を集めた最高……とはいかないまでも、最近作った中では大傑作だ。

フレームに浮遊金属オリハルコンを使用して極限まで軽くかつ頑丈に。

魔導率の高いミスリル銀の回路で使用者から直接動力を得るから完全魔法力制御が効く上に燃料も不要。

バーニア、スラスターに直接術式を刻んで起動させることでエンジン等余分な機械も排除。

エンジンの代わりに魔力増幅器とスラスタ―用の増幅呪文盤搭載
でさらに爆発的な加速力も得られる。

人型モード^{ビークル}への変形機能も有し、人工精霊搭載で自律行動まで可能。

ただ搭乗者の魔力を馬鹿食いするから霧江みたいに魔力の容量が
でかい奴しか使えないし、余計な魔力を貯蔵する場所がなかったせ
いで人型を維持できるのも10分しかない、というのは改善の余地
ありだな。

ゆくゆくは量産して警察にも――」

「そういうことではなく!」

熱く語りだした零次を遮り、頼子が大声をあげた。

「じゃあ、どういうことなんだよ」

「だからですね! あんなもの作ったら私いらなくなるじゃないです
か!」

「そんなことないだろう? 君はバイクじゃないじゃないんだから」
「ですからそういうことではなくて!」

バシーン、と、頼子は零次のデスクを叩いた。

「私はもつと霧江さんの役に立ちたいんです!」

「それとこれとは関係ないだろう」

「大アリですよ! バイクはともかく人型に変形する機能要らないじ
やないですか!」

「ロマンだからな」

「これだから殿方は! なんでもかんでもロマンロマンロマンロマン
って!」

「男はロマンを求める生き物だからな」

「じゃあ私に霧江さんへの愛情を植え付けたのもロマンですか」

「おま……それはいいつこなしだろうよ」

痛いところを突かれ、零次は苦い顔をして視線を僅かに下げた。

「そのおかげで私は今苦しんでいます！」

「……悪かったと思ってるよ。今からでも刷り込みを消せるか実験してみるから」

「だからそういうことじゃなくて！っていうかなんでそんな話になるんですかこのノータリン！」

「の、のーた……」

流石にショックだったのか、引き攣った顔で咂然とする零次。

「いいですか！私は元々継ぎ接ぎな体ですし、今更感情が自分のものじゃないだの何だの言う気はありません！

私が霧江さんを好きじゃなくなったらそんなの世界が終わるのと一緒にです！

ですけど、せめて私をこんな風に作った責任を取るべきだと思っ
んです！もう一人のお父様として！！」

「責任……ね」

零次は椅子をクルリと回転させ、頼子に背を向けた。

「……しかしなんでまた。お前は霧江の友達として十分に――」

「私を『頼子』と名付けたのはどこのどいつです？もっと霧江さんに頼りたいんですよ私は！」

「……そんな。名前に縛られなくても」

「貴方が言いますか！とにかくですね！」

霧江さんが正式にヒーローになって以来サポートはだいたい警察の人がやってしまいますし、直接戦闘に参加するにしても霧江さん

が強すぎて足手まとい必至。

私は何も役に立ってないですよ！こんなんじや相棒なんて胸を張って言えないです！それに――」

それに、と、続きを言いかけた頼子は押し黙って俯いた。

志木恭也がキョウとして生きている、というのは零次には秘密にしなければならぬことなのだ。

（……あれは、キョウが、志木恭也が、一時は自分たちとの関係性を捨ててまで得ようとしたもの。

それを、過去の清算のため、跡形もなく焼きつくす事を望んだ。どれほどの未練があったか。

かつては近い境遇にいた私には、痛いほどわかるんですよ。

そんな覚悟を見せられて、黙っていられますか……！）

頼子は顔を挙げて、椅子にもたれかかっている零次の背中を真っ直ぐ見据えた。

「……とにかくお願いしますお父様！私をヒーローにして下さい」

「……ヒーローか。簡単にはいかないぞ」

「覚悟は出来ています」

零次は暫く考えるように目を閉じたが、やがて座ったまま椅子を再び回転させた。

「わかった……娘のために何か与えてやるのも、生みの親の義務だろう」

そう言って、頼子に向き直った。



「……なんですかこれ」

「何って、召喚陣だよ」

鬼灯零次は研究室に敷かれているカーペットを裏返す。

裏には、六芒星を内側に描いた円を基にした、内部に様々な記号が描かれた魔法陣が刺しゅうされていた。

「召喚？どうしてまた」

「お前にはコレと同じことをしてもらおう」

言って、零次は胸ポケットから一つのブラッディクロスを取り出した。

「これは俺が変身に使うブラッディクロスだ。天龍の力を封じたものだが、別に天龍を倒して封印したわけじゃあない。使役契約を結んで、借りた力だ」

「借りた……？」

「そう。ちなみに強すぎて天龍から使用制限をかけられてる。お陰で災害級の魔物から街を守るためだけにしか使えないわけだが……まあそっちは重要じゃないな。とにかく、何か召喚して、契約してもらわなければならん」

「それはわかりましたが……なんでまたそんな面倒な。霧江さんがフォルムチェンジするみたいに犯罪者のを使えばいいじゃないですか」

人形師戦での決め手になった鎌鼬のブラッディクロスをはじめ、

霧江の着ているスーツには、犯罪を犯した妖魔を封印したブラッディクロスを使用して、その妖魔の能力を得るという機能がある。

現場で確保したものをそのまま使う場合もありうるだろうが、基本的には警察、検察と司法取引によって刑期を軽くするために登録した妖魔のそれを持ちだして使用するようになっている。

「ところがどっこい、そうもいかない。あれは持ちだすのに制限がある。手続きにも時間がかかってな……いつもは俺が書類を書いて霧江のアイテムボックスに転送するんだが、変身に使うとなるとやはり臨機応変に対応できるよう、いつでも持ち歩けるものでないと」「なるほど……一応犯罪者ですし、個人で管理するわけにはいきません、か」

「そういうわけだ。さ、わかったらお前の血を供物として一滴、陣の中心へ垂らせ。その後の術式起動は呪文でもなんでも好きにしろ。ただし、対象は選ぶな」

「選ぶなって……どうしてまた？」

首をかしげる頼子に、零次は教師らしく、教え子に講義でもするかのように、解説を加える。

「一時的な使役ではなく長期的な契約となると、相性が重要な要素になる。術に任せて喚んだ方が相性いいのが出てくる公算が高い」

「なるほど……わかりました」

頼子が頷くと、零次は部屋の端に下がり、壁に背を預けた。

頼子はそれを見たあと、術式を真っ直ぐ見据えて、自分の右手の親指の腹を噛んだ。

指の皮が噛み切れ、血が一筋流れ出す。

頼子は右手を前に突き出し、言われた通り一滴、陣の中心に落とした。

「――開け三界六道の門。我が魔力を持って鍵と成す」

落ちた血液の雫に呼応するかのように、白い糸で刺しゅうされていた魔法陣は白金色の光を帯び始める。

「我は友の剣と成ることを望む者也。我が力を持って対価と成す我が意に従うものあらば私の呼びかけに応え、我が元へ来たれ――！」

白金の輝きが増し、閃光。

頼子、零次とも、まぶしさに目を閉じる。

数秒後。

召喚の成否を確認しようと、頼子はゆっくりと目を開いた。

光を失った召喚陣、その中心には……。

「くあー」

一匹のカラスが立っていた。

「え……」

頼子は何かの間違いだと思って、目をこする。
しかし。

「くあー」

どう見ても、何度見返しても。
それはまごう事なきカラスだった。

「これは……」

零次は口をポカンと開きながら頼子とカラスを見比べ、声をあげた。

「信じられんな」

「な、何ですかその言い草！」

零次の態度に怒り、つかかかる頼子だが、零次はそんな彼女の目の前に平手を突き出して制止する。

「よく見ろ。足が三本ある」

「……え？」

カラスに向き直り、もう一度よく見直すと、間違いなかった。そのカラスには、足が三本ある。

「……いや驚いた、まさか幻獣通り越して神獣を呼ぶとは。まだ若いヤタガラスだよ、それ」

ヤタガラス。

八咫鳥と書き、日本古来より伝わる、太陽の化身ともされる神獣。無論力は強大で、頼子にとっては願ってもない、大当たりともいえる結果だった。

「す、すぐに契約を——！」

慌ててヤタガラスのもとへ駆け寄ろうとする頼子。
しかし鳥は翼を広げ、身をかわす。

「わっ……!」

勢い余って、頼子はカーペットの上に突っ伏した。

「くぁー!」

倒れた頼子の背中の上に降り立ち、ヤタガラスはひと声上げる。

「……なにになに」

と、零次は身をかがめ、烏へ顔を近づけた

「くぁーくぁー!」

「来てはやったが」

「くぁー!」

「俺は」

「くぁー!くぁー」

「弱い奴に」

「くぁーっ!」

「従う気はない」

零次は姿勢をただし、頼子の方を向く。

「……だってさ」

「なんですかそれ」

うつ伏せになったまま首だけを動かし、何とか背中の上を見ようとする頼子。

ヤタガラスは再び羽ばたき、今度は零次の頭の上に飛び乗った。

「くあつくあー！」

何故その言葉がわかるのか、頼子には定かではないが、零次はヤタガラスの声を聞き、頼子に伝える。

「とりあえず俺を捕まえてみる……だそうだ」

「捕まえればいいんですね」

頼子はカーペットに手を突き、腕立て伏せのように伸ばしてゆっくりと立ちあがる――振りをして、足をばねのように曲げ、跳ねるようにして、一気に零次の頭の上に向けて左手を伸ばす。

（捕えた――！）

頼子は確信したが、しかし次の瞬間気付いてみれば捕えたのは零次の顔面だった。

「おい痛いんだが」

「なっ――！？」

頼子は手を離し、背後を振りむく。

ヤタガラスはいつのまにやら零次のデスクの上にちよこんと止まっていた。

さらに、頼子はズルリ、という嫌な音を自分の体の上に聞く。

「……え？」

目を落とすと、自分が来ている制服――ブレザーとシャツが、胸の上のあたりで真一文字に避けて、なかから白いブラが顔をのぞかせていた。

キラリ、とヤタガラスの三本目の足の爪が怪しく光る。

「なあっ！」

慌てて両腕で胸を隠す頼子。

「くあっくあっ」

「意外に良い胸だ」

「何翻訳してんですか！」

「ぐふっ」

背後の零次に向け、頼子は肘鉄をくらわせた。

「ええい、もう一度！」

頼子はもう一度床を強く蹴って、ヤタガラスに飛びかかる。

しかし彼女の神速を誇るはずの左義手は、その体を捕え切れず、また勢い余った頼子は零次のデスクに頭を強くぶつけてしまった。

「……うう……もう」

ぶつけた部分を撫でながら、頼子は起き上がる。

ふと、胸に寒いような違和感。

「――ツ！！？」

頼子は見た。

頼子の肘鉄にうずくまっていた零次の頭に再び乗った烏。

その嘴には、見慣れた白いブラ。

当然、頼子から奪い取ったもので、彼女の胸、服の裂け目からは形のよい大きな乳房が二つ垣間見えていた。

頼子は、この日ほど、フロントホックにしたことを激しく後悔した日はなかったという。

「な、なんなんですかこのエロカラス！」

「くあつくあつく」

「うむ、思った通りの良い胸だ」

「零次さん！」

また余計な翻訳をする零次に語気を荒げながら、頼子は再び胸を、両腕で覆い隠す。

「そう隠すこともないだろう。相手は神獣とはいえ烏だし」

「貴方もいるじゃないですか……」

「俺？お前のおっぱいなんかもう飽きるほど見たし今更……」

「飽きるほど、なんですか」

「「!」？」

部屋の入り口から唐突に割り込んできた第三者の声に、零次と頼子は驚いて顔をそちらへ向けた。

そこには猫耳の生えた赤い髪の少女が、髪と同じくらい真っ赤な顔をして、零次を睨みつけながら立っていた。

最悪だ、と零次は思った。

そこにいたのは零次の教え子であり、教師と生徒でありながら恋愛関係にある少女。

羽月真琴だった。

「一緒に帰ろうと思って……待ってたのになかなか出てこないから、何してるのかと思った啦——」

「ま、待てマコ！誤解だ！彼女は――」

言いきる前に、真琴から投げつけられてきた鞆が、零次の顔面に命中する。

鞆が当たる前に、ヤタガラスは部屋の上に移動していた。

「先生のバカ！信じてたのに！！」

真琴は泣きながら走り去る。

[illegible]

零次は真琴の鞆を持って、涙目になりながら慌ててその後を追う。「あ、ちょっと！このまま置いてく気ですか！」と頼子が声を上げるも、零次の頭の中からもう頼子のこともヤタガラスのことも吹っ飛んでしまっていた。

一人――正確にはブラを加えたままのヤタガラスと共に部屋に残された頼子。

彼女はため息をついて、がつくりと項垂れた。

その頭の上に烏が飛び乗って、くあー、と一声鳴いた。

第三話 零次の危機。(後書き)

おっぱい解禁

第四話 猫と鳥の邂逅

「へー、まさか神獣を喚んじやうなんてねえ」

朝。大極館学園、女子寮から学校への通学路。

鬼灯霧江と松井頼子の二人は、それぞれ学生鞆を提げながら肩を並べて歩いていた。

霧江のすぐ右側、即ち頼子のいる反対側には、一匹の黒猫、キヨウがてくてくと歩いていて、さらに頼子の左肩の上には三本足のカラスが止まっている。

対象を選ばない召喚魔法は、召喚者と相性が良いもの、性質が似通ったものが召喚される。

当然、召喚者の手に余るようなものが呼ばれることはない。つまり、神獣を呼び出すことができたということは、召喚者にはそれを使役するだけの力、資格があるということになる。

霧江は首を傾げるようにして、頼子の左肩に止まっているヤタガラスを見た。

八咫鳥の『八咫』には『大きい』という意味があるが、普通の鳥と変わりない大きさであるところを見るとまだ若いのだろう。

全身は艶のある黒い羽毛で覆われ、嘴は鋭く、堂々とした眼。スラリと綺麗に並んだ三本の足は、三本もあることによる異質さ、つまり異形特有の違和感をまるで感じさせない。

姿勢よく止まっているところを見ても、なかなか品があることが伺える。なんというか、羨ましくなるくらい、いい使い魔だ。

「まだ契約すらまともにできてはいないんですが……」

「呼べたってことはそのうち出来るってことよ。ふふ、楽しみね、頼子と一緒にヒーローできるようになるなんて」

「き、霧江さん」

霧江の言葉に感激したように目を輝かせ、頼子は霧江の手を取った。

「私、頑張ります!!」

二人がそれで立ち止まった拍子に、カラスが頼子の肩を離れ、バサバサと羽音をたてながら霧江の頼子に取られて上がった右腕に止まる。

「わ、と。なあに？」

急に来られて驚きはしたものの神獣になつかれるのも悪くないと思っただけで霧江はカラスに笑いかける。

カラスはまん丸な目で霧江を見つめ返した。その表情はとてもカラスと呼ばれるような鳥とは思えないような愛くるしさを秘めている。

「あっ、気をつけてください霧江さん! そいつは」

頼子は霧江の手をぱっと離すと、即座に一步下がり、鞆の中に右手を突っ込んだ。

「そいつ、そう見えて結構ー」

「なによ頼子。可愛いじゃないこの子」

頼子の言葉を聞き流しつつ、腕を持ち上げ、顔を近づける霧江。その後。

もにゅ。

という音とともに、霧江の頭は思いがけない不意打ちで真っ白になる。

ヤタガラス、その一番右側の足が、霧江の胸を掴んで二、三度揉みしだいた。

「……!？」

「くっ!やはりこいつエロスの塊!!」

頼子は鞆の中に忍ばせていた短刀をカラスの背に向けて振るう。しかしそれをあざ笑いながら、カラスは飛び上がってショックのせいか硬直している霧江の頭の上に乗った。

「控えめだがかーつくあつくあつくあつくあ」

「このエロカラス!私だけでなく霧江さんの乳まで汚すとは!昨日のうちに叩き斬っておくべきでしたね……!」

頼子は短刀を左手に持ち変え、カラスに対し、体を横向きに。防御重視の彼女独特の構えを取る。

残念ながら彼女の主装備である小太刀『月影』は、校則で刀剣類の持ち込みが禁止されているために全力とはいかないまでも、本格的な戦闘態勢だった。

「ふん 面白いかっ、くあーっ!」

対するカラスも、威嚇する猛禽のように翼を広げ、いつでも飛びかけられる体制に入る。

通学路のど真ん中なので、この異様な光景に同じ制服着た学生たちがひそひそ話をしながら避けるように脇を通り過ぎてゆくが、二人ーいや一人と一匹の眼や耳には入ってこない。

両者を包む一瞬の静寂。そして。

不意に、カラスの立っていた位置がストンと下がり、そのまま地面に落ちた。

「ーえ？」

「……くあ？」

張りつめた空気が歪んだ方向にほどけ、妙な声を上げる一人と一匹。

なにが起こったのか、頼子は見下ろし、カラスは見上げて、彼女を見た。

「……っ」

なんてことはない。ただ霧江がそのばに屈み込んだだけである。しかし、彼女は両手で顔を覆い、小さな声を漏らしていた。

「ふえ……えん」

しかもその声は嗚咽だった。

「ええええええええっ！？ちょ、霧江さん！？」

それは普段の彼女からすればおおそ考えつかない事だった。

普段は街を飛び回って悪党を退治して回るあのブラッドガール、鬼灯霧江がまるで普通の少女のように泣いているのだ。しかも胸を揉まれたくらいで。

「く……くあうくあう」
う やりすぎたか

さすがのエロカラスも女の子を泣かせるつもりはなかったらしい。
申し訳なさそうにしている。

「き、霧江さん大丈夫ですか！？どこか痛いですか！？ど、どうしまししょう……どうすればいいの！？カラス殺せばいいですか殺しますね！？」

「何っ 勘弁してくれっかっ！かーかーかーあー！！悪気はなかったんだくわっくわっくわ！」

泣き続ける霧江と、それを前におたおたと狼狽する頼子とヤタガラス。

登校中の同じ学校の生徒たちが、何人かが野次馬のように、ひそひそ話をしながらその周りで立ち止まっていた。

「やれやれ……」

そこから少し離れた場所で、黒猫のキョウはため息をついた。

「何やってんだか」



「……霧江さんって」

教室。

落ち着いた霧江に、頼子が恐る恐る話しかける。

早めに出ていたため遅刻するなどという事はなかったが、他の生徒からかなりの注目を浴びてしまっていたためクラスメイトたちの

うち、彼女らをちらりと見て何かコソコソ喋っているグループが若干だが存在する。

「その、胸に何かトラウマでも？」

と、頼子は他に聞こえないような小さな声でそう問いかけた。

「……さあね、自分でも、よくわかんないわ」

本当は……。

と、霧江は頼子から目を逸らしつつ、心のなかで呟く。

（本当はあの時のアレを思い出しそうになったからなんだろうけど……）

あの時不意にフラッシュバックした記憶。炎の中で、人間ではないモノに造り替えられた幼い頃の自分。

その時、？あの男？が、幼い自分に対し何をしようとしたか――。

霧江は首をぶんぶんと振った。

意味のないことだ。結果的にそれは失敗し、あの男は死んだ。

頼子が不思議そうに顔を覗き込んでくる。

ふう、と霧江は視線を逸したまま、頼子がそれがそうだと判別できなか度い程度に小さく、ため息をついた。

この島に来てからというものの、？あの出来事？に関して思い起こさせるような出来事が多くなって困る。

それはとうに完結していて、今更もう思い出す必要もない事件の筈だった。

少なくとも、外で暮らしていたときはそう思っていたのだが、同じようにあの村の生き残りである頼子と再開したことで、止まって

いた時間が動き出したようだ。

もちろん、それで頼子と友人になったことを後悔しているだとかいうのではない。

ただちよつとした不安があるのだ。

もしかしたらあの事件はどこかで続いている、自分を待っているのではないかという、漠然とした不安が。

「……霧江さん」

頼子は意を決したように口を開いた。

「なにか、話せないような理由があるようですが……安心して下さい！理由など要りません！霧江さんのおっぱいは私が守ります！！」
「ちよつ」

高らかに宣言し、クラス内から白い視線を向けられる頼子。

あのカラスに触れさせないという意味だろうが、事の顛末を知らないクラスメイトが聞けばそれはとんでもない発言だった。そのことに言ってから気づいたのか、彼女はハツとして、あわてて「違います！違います！！」とおたおたしながら周囲に向かって弁解を始めた。

霧江はそんな彼女に頭を抱え——抱えながら、つまらない事に悩んでいた自分が馬鹿らしく思えてきて、ふっ、と笑をこぼした。



太極館学園の校舎の裏には、ちよつとした自然公園のような施設がある。

校舎内への使い魔立ち入りが特定の場合を除いて禁止されているため、使い魔を持っている学生たちは授業中、『使い魔預かり所』と呼ばれるそこに自分たちの使い魔を遊ばせているのだ。

公園内には監視所である小さな小屋を中心に、周囲に森、湖、草原果ては砂を盛った砂丘まであり、なるべく多くの生き物が快適に過ごせるように環境を整えるといった努力が見受けられた。

その草原エリアと森エリアの境界に、一匹の黒猫と三本足のカラスがいた。

カラスは草原エリアに面した木の上の枝に止まり、黒猫はその下で俗に言う箱座りをしている。

無論、キョウと、頼子の召喚したヤタガラスである。

「あの娘……」

不意に、ヤタガラスは声を上げた。

「胸に触れられることに関して何か過去に忌まわしい出来事でもあったか」

以外にも、女の声だった。しかもかなり若い。というか、幼いような声。

「……っていか喋れたんだ」

キョウは木の上を見上げ、若干呆れたように言った。

「『喋れた』とは無礼だな小僧。言語レベルを貴様らと同格に落としてやったのだ」

「言語レベル、ね」

かーかー言うのが高度な言語なのか、とキヨウは馬鹿馬鹿しくなったが、言わないでおく。

もとは吸血鬼とはいえ、今は猫の形に押し込められたただの使い魔。一方相手は神獣で、数段格上だ。媚びることはないと思うが、要らぬ発言で怒らせることもない。

ちなみに霧江に対して何故猫なのか、と聞いてみたところ、好きだから、という回答が返ってきた。

兄妹で猫好きらしい。とキヨウは彼女の兄が手を付けた猫耳の女生徒を思い出す。

カラスはカラスで、勝手に話を続け始めた。

「しかし勿体無い。あれほどの良い乳房、もう触れられぬか……」
「こいつ本当に神獣なのかよ」

思考を中断し、思わずツツコミを入れてしまうキヨウ。

「……何か言ったか？」
「別に」

思わず口が滑ったが、キヨウは知らぬふりをして、見上げていた首をおろす。

ヤタガラスはしかし気にした様子もなく、再び嘴を開いた。

「だがいきなりあんな良い乳に巡り合えるとは。召喚者も素晴らしい乳であったしやはりこの人間界に来て正解であった……」

「おっぱいのために来たのかよあんな」

「むしろ他に此処に来る理由があるのかと聞きたい。ときにお主、あの娘の使い魔……いや眷族だな」

「それが何か？」

「主の胸を見たくないか」

「アホだろお前」

言ってから、キョウはしまったと前足で口をふさぐ。

「アホとはなんだ。俺はおっぱい求道者である」

「アホだろお前」

二回目の言葉に躊躇いはなかった。

アホと言われたくらいで怒る性格ではないと感じたというのもあるが、彼は心の底からその存在があまりに思えてきたのだ。

こんなものを召喚した頼子は災難だったろう。と、キョウは彼女に深く同情する。

「ふむ……こういうのは連れ合いがいてこそだと思うのだが。まあ良い。一人で行くでしょう」

そう言って、カラスは木の枝から地面へ飛び降りた。

「行くなって——ええっ!？」

降りてきた背中を見て、キョウは素っ頓狂な声を上げる。

そこに立っていたのは、先程までの三本足の鳥ではない。

彼女はキョウに向かって振り返り、笑った。

それは女の子だった。

黒衣着流しを着こなす、くりくりとした目のおかっぱ頭の少女。

髪の毛には黒い羽で飾られた簪かんざしを刺している。

どこからどう見ても人間に、五、六歳の子供しか見えない、小さな女の子だった。

「キョウといったなお主。俺は昨日召喚者の家で時間割というヤツを見たんだ。それによると今日の二時限目は体育だという。早く行かねば、着替えに間に合わんぞ。本当に一緒に行かぬか？」

そしてその発言から、キョウは間違はなく、その女の子が先程まで話していたヤタガラスと同一だと知った。

第五話 ヤタガラスの華麗なる覗き。

太極館学園の校舎は、およそ学校とは思えない形をしている。外から見れば円柱状、六階建てのその校舎は、東と西、半月形をした建物二つを向い合せにして建てられている。

エレベーターと階段は東館西館それぞれ一つずつあり、東館の北側、西館の南側にそれぞれ設置されている。この校舎を上空から見れば、学校の名の通り太極図に見えなくもなく、太極図に当てはめるとエレベーターと階段のある場所はそれぞれ陰中の陽、陽中の陰の位置にあたる部分になる。

余談だが、当初の予定では半月形ではなく勾玉のような形の建物を二つ向い合せに建て、上空から見れば完全な太極図になるはずだった。しかしこれは予算の都合で断念される。

校舎以外の施設は、校舎の北側に使い魔預り所を兼ねた自然公園。校舎の南側に運動場と体育館がある。校舎と体育館は屋根つきの渡り廊下でつながっていて、三階建て。

一階には講堂も兼ねている広いメインアリーナ、二階はその半分の大きさで、それぞれクラブや体育の授業の科目別で使用されるサブアリーナが二つ。三階は武道場、屋上にはプールが設置されている。一階のメインアリーナは緊急時の避難所にも指定されている場所だ。

そして霧江と頼子のクラスは一年B組。東館の一階にある。

北の自然公園から東館校舎へ向かって真っ直ぐに、ヤタガラスが変化した少女が、それにつき添うように、黒猫、キョウが歩いていた。

「一つ聞いていいかい？」

ヤタガラスの少女の背中に向かって、キョウが話しかける。

「なんじゃい」

「何故そんなにおっぱいにこだわるんだ」

「……ふん」

少女は立ち止り、踵を返して今日に向かい合い、そして胸を張るように体を反らした。

「見ろ俺のこの断崖絶壁。胸、おっぱい、バスト、全ての言葉がまるで当てはまらない貧しさを」

「……それはでも君がまだ子供だからだろ？」

「そう、俺は子供だ。この『人間化の術』で化けられる姿は元の性別と年齢に左右される。女に生まれたのはいいが、ヤタガラスは人間より成長スピードが激しく遅い……少なくとも俺は、あと100年はこのちっぱいのままなのだ。百年だぞ百年！どうして耐えることが出来ようか！」

「僕は後二百年は猫のままだって主に言われたんだけど」

「知る kann もん。とにかく今すぐにも俺はおっぱいが欲しいんだ！その為にとにかく揉む。覗く。人間共の持つ素晴らしい乳を悉く堪能する！」

「なんでそんな……」

「貴様人間界の住人のくせに知らんのか。おっぱいはな！揉めば大きくなるんだ！」

「それ自分のじゃね」

「当然自分のも揉む！しかし他人の乳に触れた手ならばさらに有効な気がする！」

「気がするだけかよっ！」

「まあそんなこと関係なしにおっぱい好きなんだけどね俺」

「しらねえよもう」

キヨウははあっ、とため息をついて項垂れた。

ヤタガラスの少女は再び前を向き、歩を進める。

そして歩きながら、相変わらずついてくるキヨウに問いかけた。

「貴様こそ、ついてきたということは期待しておるのであろう？ 貴様の主のおっぱいを！」

「いや別に……一緒に風呂入った時見たしなあ」

「なん……だと」

愕然とした表情を浮かべながら、ヤタガラスは振り返った。

「いや昨日『洗ってない猫臭い！』って言われて無理やり一緒に――」

「昨日だと！？ 昨日だと！？ 何だ貴様ふざけてんのかこの助平猫！ 通りで石鹸の良い匂いする猫だと思った！ この畜生！！」

ヤタガラスは憤然としながら、荒い歩調で再び歩を進めはじめる。

「畜生には間違いないけど、別に興味ないし、僕猫だし」

「何が『僕猫だし』だ！ ふざけんなお前だけいい思いしやがって！ 今度俺も呼べよ！」

「絶対に断る。男湯にでも入ってろよ淫獣」

「神獣だっ！ くそうこんな奴誘うんじゃないかった……ああもう俺も召喚者にこびへつらって風呂入れてもらうか」

「その前に密告チクつときますね」

「やめろ！ っていうか、じゃあなんでついてきたんだお前！ そうか、さては狙いは貴様の主ではなく俺の召喚者だな！ なるほど巨乳好きだな！ 主のじゃ小さくて満足できなかったんだろう！」

「そっちも下着越しだけど前見たし……」

「な、ん、だ、と!?!」

「おっぱいとか全身だけど、ジョブ的に興味があったからこう、縛りあげてひん剥いて――」

「変態だった!こいつの方が断然変態だった!」

「なんだよ。僕は芸術品を見るような気持ちで見てたんだ。お前のような淫靡な気持ちは持ち合わせてない」

「おっぱいは全部芸術だバーカ!っていうかそんな言い訳が通用すると思ってるのか!貴様の主に通報してやる!」

「いや知ってるし」

「知った上で一緒に風呂入ったの!?!なんなの貴様の主!っていうか貴様は何なの!?!どれだけ恵まれたら気が済むの!?!お願いですからちょっとその優遇されすぎな環境を分けてください!?!」

「神獣としてのプライドとかないのかよ」

「うるせえやつ!……くそう。使い魔おっぱいの会とか結成して色々なおっぱい情報を掴んでおっぱいを掴むつもりだったのに……」

ヤタガラスの少女は大きく溜息をつく。

しかし、かぶりを振って、気合を入れなおした。

喋りながら歩いているうちに、目的の場所はすぐそこに迫っていたからだ。

太極館学園校舎、東館。此処まで近づけば召喚者の気配で正確な場所を察知できる。

彼女は空を見上げ、太陽を視認。その位置から正確な時刻を知る。太陽の化身たるヤタガラスだからこそその芸当。

「よし、丁度いい時間だ。召喚者の気配は……あちらだな。このまま真っ直ぐ行けば……」

「そうそう」

校舎の外側を屈みながら歩き、こっそり窓の下を、中から見えない

いように、まるでスパイか泥棒のように進むヤタガラスに、キョウが声をかける。

「そういえばなんで人に化けたまま来たんだい？」

「簡単な話だ。見つかった後逃げる際、物陰に隠れてカラスに戻れば誰も犯人を追えなくなるであろうが」

「なるほど」

一昔前に、逃げる最中に変装して逮捕を免れた銀行強盗がいた、という話を聞いたことがある。

途中で姿を変える、というのは逃走手段として相当有効だ。

「貴様の主も召喚者もこの姿は知らないからな。……貴様、なんだかんだ此処まで来たからには同罪だ。チクるんじゃないぞ」

「まあ、チクリはしないけどさ」

そうこうしているうち、目的の教室の窓のもとに辿りつくヤタガラスとキョウ。

同時に、チャイムの音が校舎中に響く。

「ここだな。よし、都合よく一時限目も終わったようだ……もう少し待てば着替え始めるぞ……！」

「そうそう、一つ言っておくことがあってさ」

「……なんだ、貴様あまり声を立てるでない」

「いや、僕と一緒に来た目的の話なんだけど、僕は主と感覚を共有できるんだよ」

「なんだ、また自慢か！？……いや、その能力で覗かずとも中の様子が分かるという訳か！よし、ならば教えろ！俺に！中の様子を！そして絶好の覗きタイミングを……！」

「いや、そういうんじゃない……つまり、僕が見てる光景は主に

も見えるんだよ」

瞬間、ヤタガラスの顔が引きつる。

「……なんだと？」

「話も聞こえるし、臭いも。その気になれば五感すべてを共有できる」

「……ま、まさか」

ヤタガラスの少女の顔が真っ青に染まると、頭上の窓が開くのは、殆ど同時だった。

「こういうことよ」

窓を開けたのは、鬼灯霧江だった。

その右手には、クロス・ガン——バージョンアップされ、攻撃モードが追加された——が、握られていた。

「くっ……キョウ！ 貴様裏切ったな！？」

「裏切るも何も、僕は最初から母さんの命令を実行してたんだよ。

『あんたを見張れて』」

「——！！！！」

真っ青を通り越して真っ白になったヤタガラスの少女、その頭に、窓の上から銃口が突き付けられる。

見上げると、冷たい眼差しを向けてくる霧江の姿が目に入ってきた。

既に着替え終わっていたようで、白い体操服に身を包んでいる。

「最期に言い残すことは？」

「……体操着越しでも、良いおっぱいだ」

バチン！

と、魔力式ショックガンの引鉄を引く音が響き渡った。

第六話 万能のパズル。

「全く、なんで僕がこんなことしなくちゃならないんだ」

再び、使い魔預り所。

ショックガンのダメージで変化の術も解け、元の姿のまま寝込んでしまったヤタガラスの頭に、キョウが濡れたタオルを乗せる。

あの銃は魔力によって威力を調節できるのだが、神獣相手だからか、本気で怒っていたせいか、あの至近距離からかなりの高出力で打ちこんだらしい。

犯罪者逮捕用の銃で、体内の魔力の流れを乱し、動きを封じるものであるため殺傷能力はないが、まともに食らえばしばらくは動けない。まして、霧江の持つ馬鹿みたいにい巨大な魔力を銃が耐える限度いっぱいまで使用して撃ちこまれたのだからなおさらだ。

それでもブラッディクロスに封印されなかっただけかもしれない。

「うう……おっぱい」

まるで懲りていないのか、そんなうわごとを呟くヤタガラス。

キョウはそんな彼女を見て大きく溜息をついた。

今カラスが寝ているのは木の葉を集めてできたベッドだが、使われている木の葉は彼がせっせと運んできたものである。

どうやら学校のある日、平日の昼間はこいつの相手をする……というか、面倒をみることになりそうだ。

残念すぎる神獣の前に、キョウはもう本日何度目かもわからないため息を突くのであった。



三時限目は魔法学の授業だった。

意外にも、魔法関連の授業はこれだけで、時間割も週に三回分しかない。そして今日が、その最初の授業の日であった。

というのも、高校一年生の段階で学ぶのは魔法の基礎的な要素、中学で学ぶ基礎中の基礎の発展のみで、専門的な分野を学ぶのは早くても高三から。本格的には大学で学ぶのが現代の主流となっている。

というのも魔法の組み立てには応用先の分野ごとに向き不向きがあり、それが完成度にも大きく関わってくるため。魔法を教え始める中学と高校の合わせて六年間は自分がどういう分野の魔術に向いているか見極めるための期間なのである。

「さて、初回なので魔法に関する基本事項についてさらう。基礎だからと言って甘く見るなよ、よく聞いておくように」

魔法学教師、秋月良平が教壇に立ち、生徒たちをも見渡ししながら言う。

年はまだ若く30前後。眼鏡をかけて、ヒョロっと背の高い、いかにもひ弱そうな体格の男だが、どうにも厳格な雰囲気が漂っており、半数は妖魔かその血をひく生徒たちを前に、彼は一切物怖じせず見た目に似合わない堂々とした口調で話を進める。

「自分の体の中にある魔力を、自然、あるいは超自然的な現象に変換するのが魔法だ。しかし基本的には、ごく単純なことしかできない。例えば火の魔法は火をつける。風の魔法は風を起こす。といった具合だ。こういう、単純に魔力を消費して発動するものは基礎魔法と呼ばれる」

ボツ、と、秋月の持ちあげた右手、人差し指の先に火が灯った。

「そして『魔術』とは、そうした単純な魔法を組み合わせる技術のことだ。例えばこの炎の魔法に風を組み合わせれば――」

人差し指の炎がごう、っと燃え上がった。

「――酸素を送り込み、火を強くすることが出来る。これを、複合魔法という。複合魔法を作れるのは基礎魔法同士の組み合わせだけではない。基礎魔法そのものに作用する補助魔法というものもある」

そう言った秋月の人差し指の上で、燃え上がっていた炎が急に小さくなり、やがてそれは微小の太陽のような小さな炎の塊に集約されていった。

「これが炎の魔法と、集中の魔法による複合魔法。勿論組み合わせは二つに限らない。この魔法に、方向指定、推進、加速の補助魔法を重ねがけすれば……」

「うわぁっ！」

ビュン、と風を切る音と共に、炎の塊が打ち出される。

弾丸と化した炎は、霧江の斜め前の席、その机の端を掠めた。

その衝撃に、机に突っ伏して寝ていた少年は思わず飛び上がる。

「黒田、ちゃんと話聞いてたか？基礎中の基礎で退屈だろうが初日から居眠りとはいい度胸だ」

「す、すみません……」

黒田と呼ばれた少年は真っ赤にした顔を伏せた。クラス内に笑い声が響く。

「さて、続けるぞ。つまり魔法は組み合わせ次第でどんなこともできる。しかし、望み通りの現象を起こすには考えて組み合わせなくてはならない。一つでも余計な魔法を混ぜれば全く違うものが出てくる場合だってある」

秋月は右手を下した。

「魔法は万能ではあるが、しかし全能ではない。才能に左右されたり、限界もある。更に、当然ながら持っている魔力を消費する、無論それを組み合わせる複合魔法は、使われた基礎魔法や補助魔法の分だけ消費することになる。つまり魔法が大げさであればある程、魔力の消費量も増大する。魔力は体力と同じく生命力に直結しているから、過剰に消費しすぎると命に関わる場合もあり得る。

……最も、このクラスの約半数は命の心配をする必要はないかな」

冗談めいた口調で、秋月は言った。

妖魔の魔力保有量は人間とは段違いだ。

よって、命の心配などせずに人間以上の大魔法を扱うことが出来る。

「さて、ついでだから妖術についても解説しておこう。人間が魔力を用いて魔法を扱うのに対して、妖魔は妖力を用いて妖術を使う。

妖術とは、妖魔が先天的に有している特殊能力、魔法と同様、不可解な現象を引き起こす力、妖力とはその源だ。

……というのが、大昔の説だな。この二つは別物であると考えられてきた。だが近年、この島での妖魔研究で、妖力と魔力が同一であり、妖術と魔法も、ほとんど同じものであるということがわかってきた。これは妖魔が魔法を使える、という事実が発見された当初から仮説があった」

秋月は言ったん言葉を区切り、反応を窺う。
生徒たちがしっかり聞きいつていることに満足すると、彼はまた口を開いた。

「妖魔が魔法を使うようになったのはこの島が出来てからだ。人間から魔法を学べる、というのがこの島で妖魔が暮らす一つのメリットになったわけだな。そして、『妖魔は妖力と魔力の両方を持っているのか?』という疑問が生まれ、妖力と魔力、妖術と魔法はほとんど同じものである、という証明が15年ほど前になされた」

秋月はまた言葉を区切り、教室中を見渡す。
そして、ある一人の生徒を見て、持っていた短い指し棒を向けた。

「さて、ではそのキミ。『ほとんど同じ』といったが、妖術と魔法の最大の違いはなんだろう」

指されたのは霧江だった。
驚いて、目をぱちくりとさせる。

「え!?! え……っ」と

霧江は答えに窮する。

小学校、中学校と学校に行けなかった彼女が、授業で当てられたのはこれが初めてだった。

(落ち着け私——!)

こういうシーンは学校モノのアニメや漫画で研究していた。
落ち着いて、とりあえず、聞かれて、何か思ったことを回答すれ

ばいいのだ、確か黙ってるのが一番ダメなはずだ。とにかく何か。何か。何でもいいから。

「は、はやしゃっ……速さが違うと思います。……術が発動するまでの……」

消え入るような声を出した後、赤面して顔を伏せる霧江。

今日はなんだか自分とキャラが違うことが起きる。

(うう……噛んだ)

一方の秋月教諭は彼女の答えに満足したようで、うんうんと頷いた。

霧江にとって幸いなことに、生徒をいじるような人種ではなかったらしい。

「そう、確かに速さが違うな。では妖術の起動は何故早いと思う？」

秋月の視線は霧江を向いたままだ。

これは想定外だった。一度答えれば終わりだと思っていた彼女の頭は、その不意打ちに真っ白になる。

「え……えっ……と」

答えが浮かばない。まずい……まずい。

周囲の視線が自信に集中してくるのを霧江は感じる。

とにかく、何か。何か答えないと。

「えっと――」

「フムン。例えば君、吸血鬼だね？再生能力は妖術だが、それを使

うときはどうやってる？ いちいち術式を組み立てたりするだろうか」

教師の性格によっては怒られたり回答者を他の生徒に変えられたりする場面だが、秋月は優しい笑みを浮かべながら、答えを導くように質問を変えた。

「ええと、しない、です。 なんとか能力として……手を動かすのと同じように」

「そう、それが最大の違いだ」

秋月は強く頷いた。

「人間が魔法を使用するのに、あらかじめ基礎魔法や魔法構築理論を学び、習得した上で、呪文の詠唱や魔法陣を描く必要があるのに対し、妖魔は先天的にもっているそれを、一つの能力として使用できる。もちろん、魔法が万能のパズルである限り、妖術と同じ効果を発揮する魔法を作り出すことはできるが、いちいち複雑な術式を組み必要があるわけだ。

つまり？ ある一定の魔法を先天的な能力として扱うことが出来る？ のが妖魔なわけだな。言うなれば、決まった複合魔法を、基礎魔法のような単純な工程で扱うことができるのだ」

秋月はいったん話を区切る。そして「その他気になる点があれば授業終了後に聞こう」と言って、本来の話に戻った。

「さて、これからの授業では呪文短縮や魔力を節約する方法、複合魔法構築に必要な理論と、比較的ポピュラーな複合魔法を紹介、解説してゆく。君らには三年までに自分がどの分野の魔法が得意か、是非見極めてもらいたい」

第七話 それぞれのピンチ。

「一体全体何をやっているんです貴方は!!」

同日夕方。

天壤魔導学院女子寮、301号室。

鬼灯霧江の部屋から、松居頼子の悲鳴に近い叫びが響いてくる。

「何って、洗濯ですけど」

「せ、洗濯ですって……!!? 貴方のような文字通り獣が霧江さんの神聖な衣に触れるなど!」

「触れたのは人形の手ですよ」

突っかかってくる頼子に、キョウは呆れたような声で答えた。

「な悪いですわ! 霧江さんの聖なる服を貴方の悪趣味なお人形の手に洗わせるなど!!」

「洗ったのは洗濯機ですが」

「屁理屈コネない! 貴方のような変態人形フェチ野郎が霧江さんのおパンティを洗濯するなどあってはならないことです!!」

「なんだよおパンティって……」

キョウは使い魔に格落ちしてから、その僅かに残された人形操作スキルで霧江の部屋における家事全般を任されていた。

乾燥機で乾燥させた衣服を今、彼の操る等身大の人形、^{ドール}黒い髪をした女性型のその手が、丁寧に畳んでいる。

「知っての通り僕は人形フェチだ。今更母さんのパンツくらい見ても何とも思わないよ」

「な、何ともですって……!? 霧江さんのおパンティは私たちのような下々の者など近づくことすらおこがましい! 超絶神聖にして絶対神秘的な聖なるおパンティなのですよ!」

「……君は、なんていうかアレだな、あいつを召喚しちゃった理由がわかった気がする」

キョウの言うあいつ、とは例の残念なヤタガラスのことだ。

そういえば、とキョウは部屋中を見回すが、今はその姿は見えない。

「そういえばあのヤタガラスは?」

「放っておくと何しでかすかわからないので部屋の風呂場に閉じ込めておきました」

「風呂場に?」

「ええ、『一緒に入りましょう先に入っててください』と言ったらホイホイ入って行ったのでそのままドアを魔法で鉄の壁にしておきました」

「……」

今頃風呂場で幼女かカラスの姿で『騙されたー』と喚きながら暴れているのが、キョウには簡単に想像できた。

別段同情する気はないが、なんというかつくづく残念な神獣である。

頼子はそれでカラスの話は終わりだ、とばかりに、改めてキョウを見据える。

「と言う訳で霧江さんの下着はこれから私が洗います! っていうか今すぐそのおパンティを私に畳ませなさい!」

「下着限定!? いや、駄目だ! っていうか近づいちゃ駄目なんじゃなかったのかよ! 君には絶対に任せてはいけないって僕の中の何か

が言ってる！」

「なんですってこのアホ猫！ええい！いいから私にやらせなさい！私を誰だと思っているのです！？」

「意味が分かんないですよ！とにかく駄目！だめー！」

必死に霧江の下着に手を伸ばす頼子。

人形を操り、先方から遮るようにしてその手を抑えるキヨウ。

「ぐぬぬ……いいから寄越しなさい！！」

「おい結局触ることが目的なんじゃねえか！！」

その言葉に頼子の目つきが変わる。

それは何か、一つ大きな覚悟を決めた女が目だった。

「いいでしょうアホ猫、貴方が私と霧江さんとの間に立ちはだかる障害になるというのなら……たとえ霧江さんの大事な使い魔であろうと、私は全力で貴方を叩きつぶします！！」

「何が障害だよ！下着に手を出して何する気なんだよこの変態！」

「いいから寄越せってんだよおおおおおお！！！！！！」

「やめろこの馬鹿ああああああああああ！！！！！！」

さらに必死に霧江のパンツに手を伸ばす頼子。

一方恭也は、もう一体別の、小型の人形を操ってその手からさらに遠ざけた。

「あああああっ！なんて卑劣な！！それでも誇り高き吸血鬼ですか！？」

「吸血鬼ってだいたい卑劣じゃん」

「なんですか！人形フェチのド変態のくせに！！」

「……ド変態だと！？君に僕の高尚な趣味がわかってたまるか！！」

っていうか変態は君だ!! やっぱり君とは決着をつけなければなら
ないみたいだな……!!」

「あんな人形のなにが高尚なものですか!! そんなものより霧江さ
んの方が何千倍も愛らしいというのに!! もはやノーライフキング
の力のない貴方などに後れを取るものですか」

ば、と頼子と人形は、それぞれ後方に跳躍し、構えをとる。

バチリバチリ、と交錯する視線と、飛び散る火花。

息を飲む二人。

その呼吸が、重なる一瞬。

「勝負!!」

「すみません、いいかげんにしてくれませんか」

激突の瞬間。割り込む声。

バーン、と霧江の部屋の扉が開く。

女子寮寮監、柳原梅子が真っ赤な顔をしながら部屋に上がり込ん
できた。

「隣の部屋から騒音でクレームが来ています」

「す、すみません寮監様……」

硬直し、真っ青な顔をして頼子。

「にゃ、にゃーん」

恭也は泣き声をあげながら寮監に背を向けて去ろうとする。

ただの猫のふりをしてやり過ごすつもりだ。

「あ、ひ、卑怯ですよこの……!!」

頼子が手を伸ばす、前に、寮監の手がその首筋をむんずと掴んだ。

「ど、動物虐待反対！にや、にやー！」

「プ、ざまあみろですわ」

と、笑う頼子の肩にも、寮監はポンと手を置いた。

「あう……」

真っ青を通り越して真っ白になる頼子の顔色。

「「あー！！！」」

寮監にドナドナと引きずられながら、二人は霧江の部屋からゲツトアウトさせられるのであった。



一方その頃。

霧江は兄、零次の住む同区、グリーンフォレストマンション、803号室を訪れていた。

彼は今日授業があるはずなのに学校に来ていない、と、つい先程彼の勤める大学から連絡が入ったのだ。

零次は大学内では准教授にすぎないが、ヒーロー計画の発案者であり警察とも協力している、この街の中では結構な重要人物である。それが今朝から行方不明と聞いて、もしかしたら事件に巻き込まれたかもしれない、とこうして慌ててやってきたのだ。

霧江は部屋の前で、インターホンを一度押し、暫く待つが、出ない。

「……まさか、ね」

霧江は何度もインターホンを鳴らす、反応なし。

「兄貴？おーい！」

強めに扉をドンドンと叩いて、呼びかけてみるも、やはり反応は帰ってこなかった。

「……」

単に留守にしているだけなのだが、あの兄が大学にも連絡を入れずに何処かへ行くのだろうか。

まして自分が何度も電話やメールをしているのに一切出ず、返事もないのはおかしい。

吸血鬼であり、恋愛感情の希薄な彼女にとって、家族の、兄の存在は大きい。

吸血鬼は恋人よりも眷族、血縁を大切にする種族だ。

それを抜きにしても、彼女は零次が心配だった。

唇を噛みながら、管理人に合いカギでも借りてくるべきかと思案する霧江。

考えながら、彼女はそのドアノブに手をかける。

「――！？」

すると、ドアは驚くほど簡単に開いた。

鍵が、あいている。

「兄貴っ！」

どう考えたってこの状況はおかしい。

最悪の状況が脳裏をよぎり、彼女は間髪いれずに部屋の中へ駆けこんだ。

部屋に入った瞬間、アルコールのような異臭が鼻につく。

廊下が、異様に長く感じた。

霧江はそのまま、臭いのもととなっているリビングへ、文字取り飛び込む。

そこには――。

「……なにこれ」

転がる酒の瓶、瓶、瓶。そしてビールの空き缶。

するめいかやカルパス等、散乱するつまみの袋。

こぼれている水。割れたコップ。

そしてその中心に――

「うううう……」

毛布にくるまって唸っている兄の姿があった。

「わ……私の心配を返せエエエエエエエエエエ……！！！！！！」

「ぐへらっ！」

霧江は叫びながら、その頭にかかと落としを食らわせた。



「……で、どうしたのよ」

数分後、ゴミだらけの部屋で、霧江は毛布にくるまって飲んだくれて、相変わず毛布にもぐりこんだまま出てこない兄の背中に向かって話しかける。

「……」

「兄貴？」

零次は毛布の中で、やはりじっとしたまま動かない。
霧江は小さくため息を突く。

「あのさ、いきなり蹴りいれたのは謝るから……っていうか本当に心配したんだから大目に見てよ。何度もメールやら電話やらしたんだから、ちよっとくらい反応くれたって……」

「……ごめん」

毛布の中から、消え入りそうな声が聞こえてきて、霧江は口をきいてくれたことに少しだけ安心したような、それでもやっぱり心配なような、複雑な感情を抱いた。

「……それで、何があったの？」

「……れた」

「何って？聞こえないわよ」

またも消え入りそうな声。

霧江は近づいて、屈む。

毛布の中、兄の頭があるであろう部分に耳を寄せる。

「マコにきらわれた……」

「……オオウ……」

帰ってきた言葉に、霧江は息を漏らす。

女に振られた程度でここまで落ち込む、というのは霧江には理解しがたい感情だったが、しかし兄と真琴の関係、というか、どれほどのバカップルっぷりを発揮していたかは間近である程度は見ていたので、何となく同情は出来た。

「それは……でもどうしてまた」

「実は昨日……」

零次はゆっくりと昨日の出来事について話し始める。

話は単純なもので、零次は昨日、頼子があのエロカラスを召喚するのを手伝ったが、その際呼び出されたエロカラスが頼子の服を切り裂いた。

そしてその場面を真琴に見られ、誤解を受けたのだという。

確かにあのカラスを知らず、狭い部屋でおっぱい丸出しの少女と二人っきり、という状況だけを見れば零次が頼子を襲ったように見えなくもないだろう。

それにしても、と霧江は相変わらず毛布の中の零次の背中に視線を落とす。

確か零次の方がSだったはずだが、精神的には彼の方が依存しまくっていたらしい。

身内ながら情けない姿だと思うが、さすがに可哀想になってきた。霧江はため息をついて、兄の背をポンと軽く叩く。

「わかった。私から羽月さんに話してみるから」

「……すまん」

「いいのよ」

苦笑して、彼女は立ち上がった。

何よりも、彼女には零次と真琴にはうまくいってほしい理由があるのだ。

第八話 不穩の影。

「まったく、使い魔でも人語が分かるとなれば容赦なくお説教ときた……物凄いですね此処の寮監」

「嗚呼、入学早々ドナられるなんて思ってもみませんでした……」

小一時間にわたる説教からようやく解放され、キヨウと頼子は疲労感たつぷりに、半ベソをかきながら女子寮三階の廊下をトボトボと歩いている。

「なんですかドナられるって」

「あの方、寮則違反者は必ず一階の寮監室に連れ込んでからお説教なさるんだとか。それで寮監室まで引きずられてゆく生徒の姿が、かの歌の子牛に被るので、そう呼ばれているのだそうで」

つまりは攫われてゆく様子と、その後の説教で怒鳴られるのをかけて、ドナられるという意味だということらしい。

キヨウはくだらないなと思いつつ、ふとした疑問を口にする。

「っていうか上下の防音は完ぺきなのに左右はそうでもないんですねこの女子寮」

「そうですね……防音が完璧すぎても逆に問題あるのかもしれないかもしれません。例えば何か事件で悲鳴が上がっても誰も気づかない状況ではまずいでしょうし」

「ううん……そういうものなのかな」

話しているうちに霧江の部屋にたどり着く。

ふと、キヨウが首を振りあげ、頼子を見上げた。

「……っていうか、君は自分の部屋に帰らないのかい？」

「まだ日が落ちてから間もないのに自分の部屋で何するっていうんです。私は一秒でも長く霧江さんと一緒にいたいんですよ」

そう言って、ドアノブを回す頼子。

「学生だろ。宿題とか予習とかあるだろうに」

「当然のごとく霧江さんと一緒にやるつもりですが何か」

ドアを開け、部屋の中に入る一人と一匹。

「なんだそれ……まったく、君はどこまで彼女のことを好きなんだい？」

「好き？そんな無粋な言葉で表現してほしくなどないですわね」

彼女はドアと鍵をゆっくり閉めると、キョウに向き直る。

「いいですか、この世の何よりも誰よりも貴い場所^{たか}に君臨しているのが霧江さんです。私にとって霧江さんは『好き』だの『愛してる』だの陳腐な言葉で表すことのできない絶対的な存在なのです。

ちなみに霧江さんよりもかなり下の方に私の家族がいます。それからさらにズズと下がって零次さんが。ああ、零次さんの彼女さんも同じ位置にいますね。それ以外は私にとってただのゴミでしかありません」

「……色々と突っ込みたいけど、とりあえずナチュラルにゴミに加えてくれやがってこのクソアマ」

「ああ、いけません、忘れてました。人の裸見てニヤニヤしてくれた人形フェチのド変態はゴミよりもさらに下です」

「……ま、根に持たれても仕方ないことしたとは思ってるよ」

キョウはふう、とため息をつく、尻尾を垂らしながら部屋の中央へトコトコと歩いて行った。

その様子に、「……ふん」と、そっぽを向く頼子。

部屋の中央まで歩いてゆき、キョウはくるくると周囲を見回す。

「……なんだ、まだ帰ってきてないのか」

「零次さんの様子を見に行くと行ってましたが……何かあったんでしょうか」

玄関で靴を脱いだ頼子が、少し遅れて入ってくる。

その時、ピリリリ、と頼子の携帯が着信した。



「……こよね……」

霧江は門の前に備え付けられているプレートを確認する。

そこには『国立天壤島魔導大学女子寮』と書かれていた。

単なる寮、というよりはちょっとした高級マンションといった趣だ。

霧江は郵便受けから羽月真琴の部屋番号を確認し、インターホンの番号を押す。

彼女の部屋は405号室のようだ。4、0……と押したところで、霧江はカメラ付きのインターホンであると気づいて、あわてて手櫛で前髪をいじる。

兄との仲を取り持ちにきたのだ。走ってきたお陰で髪は少し乱れている。そのまま会うのは若干の抵抗があった。

ある程度整えた後、あらためてカメラの方をしっかりと向き、部屋番号を押す。

チャイムが鳴る。霧江はそのまま待つが、出ない。

「……」

当然の反応だろう。恋人と喧嘩した次の日にその妹が訪ねてきたのだから。はいはい、と気軽に出来はしまい。

考えてみれば妹に仲を取り持ってもらうなんて情けない話だ。彼女は零次の情けなさに怒ってこのまま居留守を決め込むつもりだろう。

でなければどうしたものか迷っているか、あるいは本当に居ないかのどちらかだ。

零次によれば、彼女は今日は授業は一限だけ、バイトもない日なので早く帰ってきているはず、とのことだったが、妖魔の世界は夜が本番。街で遊んでいる可能性も十分にある。

これで出なければ出直そう、と霧江はもう一度、呼び鈴をならすボタンを押しこんだ。

しかし数秒して、受話器を取る音が聞こえた。

『……はい』

そして返事があったのは、そのさらに数秒後のことだった。

「えーっと、羽月さん？ 私です。霧江ー」

『あがって』

遮るような言葉とともに、玄関の自動ドアが開く。

声の感じがいつもと違って、暗い。というか、黒い。

霧江は若干の緊張を感じ、すこし深呼吸して、

「おじゃまします」

と正面玄関のドアをくぐった。



エレベーターで四階へ登り、部屋を見つける。

チャイムを鳴らすと、今度はすぐに扉が開いた。

霧江は真琴に中のリビングまで案内され、勧められるままにソファへ。

そのまま真琴は「お茶を入れてくるから」と台所へ。

彼女は終始顔を伏せていたため、どんな表情をしていたのかはわからなかった。

部屋は霧江のそれと同じワンルームの個室ながら、霧江のそれよりも広い。

というか台所なんて設備も彼女の女子寮にはなかったものだ。

いわゆる1LDKというやつか。と霧江は室内を見回す。

室内はぬいぐるみや小物がきれいに並べられている棚があって、その隣の机の上で教科書などの様々な書物や書類が幾つも乱雑に積みまれている。

そして乱雑な書類や本のタワーの中から、ちょこんとモニタが顔を出し、そこにパソコンがあることがかろうじてわかる。

女の子らしさと学生の忙しさが同居する奇妙な空間。それが羽月真琴の部屋だった。

しばらくすると、真琴はトレーに花柄の可愛いデザインの急須と、

氷の入った涼しげなグラスを二つ乗せて持ってきた。

それをソファ前のテーブルに置き、急須を持ちあげて、氷の入ったグラスに回しながら入れる。

グラスの中が春の森のような綺麗なグリーンで満たされてゆき、氷が少しずつ溶け、カラン、と小気味よい音を立てた。

「どうぞ」

と、真琴はグラスを一つ、霧江の前に置く。

「へえ。冷茶ね」

霧江は両手でグラスを持ちあげ、一口。

冷たいながら、温かい緑茶と変わらないまろやかで、深みのある味わい。

「……おいしい」

「そう、よかった」

霧江はその時ようやく少女の顔を見る。

穏やかな笑みを浮かべていたが、どこが影が差しているような、そんな印象。

「お湯で淹れて、氷とかで急に冷やすと、甘みの成分が壊れずに残るんだって。最初から水で淹れて、冷たいまま長い時間置いておくともっと美味しくできるんだけど」

「お茶、詳しいんですね」

霧江はもう一口飲んで、笑みを浮かべた。

「ううん、私猫舌だから……冷たくておいしいお茶、先生に淹れる方法教わって……」

そう言って、俯く真琴。

そのまま暫く、思いつめるように唇を噛んでいたが、やがて意を決したように、それでもおずおずとしながら、口を開いた。

「あの、霧江、ちゃん？」

「……はい？」

「先生のことで、きたんだよね？」

霧江は口では答えず、ゆっくりと頷く。

彼女は恐る恐る、といった様子で顔を上げ、霧江に視線を向ける。

「……あの、先生。どんな感じだった」

「どんな感じ、って？」

彼女の問いに、霧江は首をかしげる。

兄から聞いていた話から想像したのと少し状況が違うようだ。もっとうとう、彼女が浮気に怒っているのを想像していたが、どうも違うようだった。

「私のこと、怒ってなかったかな、って」

「怒る？どうして」

霧江は目を瞬^{しばた}く。

「だって、その、冷静になって考えたら先生がそんなことするはずないし、なにか誤解があったはずなのに……、先生に酷いこと言っちゃって……私、何があっても先生をについていくって誓ったのに

……あんなことで誤解しちゃって……」

話しているうちに昨夜の出来事を思い出しているのか、トーンの下がってゆく後悔の言葉と共に、その背中もどんどん曲がって、表情も暗くなつてゆく真琴。

対して霧江は、そんな彼女を見て安心したような、少し気の抜けたような笑みを浮かべた。

「なんだ。来るまでもなかったか」

「え……？」

霧江の言葉に、真琴は眉を顰めた。

「兄貴なら、あなたを傷つけたこと、今死ぬほど後悔してるわよ」

もう少し厄介なことになるかもしれないと思っていた霧江は、拍子抜けしたように言った。

結局のところ、歯車がほんの少しだけずれただけのことのようなのだ。ならばズレたぶんを押し込んでやればいい。それで、あつという間に元通りだ。

早めに来てよかった、と霧江は思う。

「それって――」

「大丈夫。問題の女の子は前に話してた兄貴と父さん作の人造人間フランケンシュタインだし、兄貴は貴方にフラれたと思って飲んだくれてボロ雑巾みたいになってる。誤解が解けたら一瞬で元通りよ。そうね――三人でご飯でも行きましょうこれから」

霧江の言葉を聞いて、真琴はその顔をぱあっと輝かせた。

「ありがとう、霧江ちゃん」

「いいのよ。私自信、兄貴と貴方には上手くいってほしいから」

霧江は恥ずかしそうに頬を人差し指で掻きながら笑って言う。

「兄貴さ、ずっと私にばっか構って、あとは研究研究でさ……彼女なんてできたの貴方が初めてだから。今まで迷惑かけた分、まあ、幸せになってほしいわけですよ」

霧江は頬を赤らめながら、真琴の手を取った。

「だからさ、貴方さえよければ——」

言葉を遮るように、真琴は霧江の手を握り返した。

「わかった。霧江ちゃん。私が先生を幸せにする」

「はは……なんだかこっ恥ずかしいわ。ね、お姉ちゃん」

霧江は満足して、相変わらず赤面したまま笑った。



女子寮から二人の少女が出てくる。

その男は、じいっと二人の姿を、茂みの陰から窺っていた。

「ホホウ……あれが、のう」

男は顎に手を当て、満足したように頷いた。

「鬼灯のガキめ……今に見ておれよ。思い知らせてやる。貴様の発
明がいかに無力で——取るに足らぬものか」

第九話 天壤島のSOS! 【前編】 一 悪魔の樹一

「霧江さんに頼られるのはいいんですけどね、どうして貴方のお世話なんかしなくちゃならないんですか」

霧江の部屋。

生臭いような鉄錆びたようなにおいが充満する。

松居頼子がぶつぶつと文句をこぼしながら、輸血パックの口を開け、中身を深皿に移しているのだ。

キヨウはその足元で、尻尾を振りながらその様子を見ていた。

「嫌ならやらなければいいじゃないですか。そのくらい人形使えば自分でできますし」

「そうはいきません、霧江さんをお願いしてしまった以上いくら嫌でもやらなくては……!」

霧江から届いたメールには『時間かかりそうだからキヨウの世話よろしく』と書かれていた。

「律儀というかなんというか。本当に霧江さん第一主義なんだな君は」

「私にとってはそれで当然なのです。……と。はい、どうぞ」

と、頼子は輸血用の血がなみなみと入った皿を持ちあげ、キヨウの前へ差し出した。

「ありが……って指はいつてるうううううう!」

嫌がらせのごとく、血の中に思いつきり自分の右手親指を突っ込

むような持ち方をしていた頼子。

ギャグ漫画で、嫌がらせにスープや茶に親指を突っ込みながら渡すというのをキョウは見たことがあったが、まさか実際にされるとは思ってもみなかった。

「君ね……まあ、別にいいんだけど、でもそれ君のがダメージでないじゃないの？」

「……はっ！」

しまった、という表情で、あわてて皿から手を離し、屈んで、血まみれになった親指を見つめる頼子。

スープや茶だったら適当に舐めれば済むが、ここまで血がべとり付いたとなれば、よく洗わなければ臭いが取れないだろう。

「前々から思ってたんだけど、君って結構バカだよね」

「な！失礼な！」

流石に恥じたのか、頼子は僅かに顔を赤らめながら反論した。

「何て言うか、本当に相性ピッタリなんじゃないかな、あのカラスと」

「あんなのと一緒にしないでください！」

そう言いながら、頼子は洗面所に駆け込んだ。

蛇口から勢いよく水の流れる音が響き、次第にそれがじゃぶじゃぶと手を洗う音に変わる。

やれやれ、とキョウはため息を突きながら、ぴちゃぴちゃと深皿に溜められた血を飲み始めた。



とりあえず零次のマンションへ向かおう、と、霧江と真琴の二人はすっかり日が落ちて、暗くなった夜の道を並んで歩いていた。人と妖魔の共存するこの島では、夜でもその喧噪が静まることはない。

日が落ちれば街の主役は人から妖へと変わり、街は人でなし共の活気に満ちる。

本来なら、霧江の世界もこちら側のはずだった。

人間と同じように昼間に生活する妖魔が少ないわけではないが、吸血鬼である霧江にとってはやはり夜の空気はしっくりくる。

「なんだか涼しいね」

「そうですね」

真琴のつぶやきに、首を縦に振って応じる霧江。

海が近いせいだろう、冷たい潮風が吹きつけてくる。

何気ない会話をしながら歩く二つの影。

しかし不意に、鬼灯霧江は立ち止まった。

「……霧江ちゃん？」

真琴はどうしたの、と霧江の顔を不思議そうにのぞき込む。

場所は住宅街にさしかかったあたり。大きな公園の、すぐ脇の道。

「いや、何か妙な気配が……」

そういつて、公園の中を凝視する霧江。

視線の先には公園を囲う柵のすぐ内側に配置された植木がある。

霧江は眉をひそめながら、公園の低い柵を飛び越え、中へ。
そのまままっすぐ、ある一本の木に近づいていった。

真琴も、おそろおそろその後が続く。

見れば、それはどこか不自然だった。

種類や配置にある程度の整合性がある公園内の樹木だが、その一本だけ異質だった。

銀杏や桜、柵や櫨の植えられた中で、異様な雰囲気放っているその真っ黒で大きな樹。

その樹は、吹きつける風に枝を靡かせて――

「危ない!!」

それに気づいた霧江は慌てて体を反転、後ろにいた真琴に飛びついた。

「――!？」

「……ッ!!」

飛びついた勢いで真琴を地面に押し倒す霧江。その衝撃で真琴が苦しそうに息を詰まらせるが、構ってはいられなかった。自身が背に受けた、強烈な痛みの奔流よりはましだろう。

「霧江ちゃ――」

「逃げて!!」

真琴の言葉を遮り、霧江は左腕を背に回し、右腕を地面について、片腕の力だけで体を起こしながら霧江が叫ぶ。

回した左腕で、背中、右の肺のすぐ下辺りに深ぶかと突き刺さったソレを掴む。

荒縄のような、ごわごわとした感触。霧江はそれを、立ち上がりながら一気に引き抜いた。

「——ッ!!」

それは触手だった。

緑色と茶色の交じった、太く、長い一本の触手。

「霧江ちゃん——!？」

真琴が後ずさりながら、それを見て悲鳴に近い声を上げた。

「はやく、逃げてったら!」

「ご、ごめん!」

叫び、真琴が逃げていく足音を背後に聞きながら、霧江は正面の敵を見据える。

みちりみちりみちり、と水気のある気持ちの悪い破裂音が響く。普通の樹に擬態していたそれは、今やその姿を顕わにしていた。その醜惡な姿に、まるで樹で創られた悪趣味なオブジェのようだと、鬼灯霧江はそう思った。

——トリフィドだ。

近年確認された魔法生物。

あるSF小説に登場するクリーチャーに世態が似ているため、その名付けられたそれは、妖力ランクこそCクラスだが、その極まらない凶暴性と毒性から、危険度はAクラスの妖怪に匹敵するといわれている。知能はあるようだが、危険性から共存は不可能と判断された種。この島には本来いないはずの魔法生物。歩行性の肉食植物

だ。

その体はドス黒く、植物だが葉らしきものはない。変わりに、体のあちこちに苔のような体毛が生えている。体毛は深緑色だが、ところどころ枯れたような黄色をしていた。

下には丈夫な根が三本、うねるように波打っている。これを蛇のように動かして歩行するのだ。

上部は幹の途中で三股にわかれており、左右に別れた太い枝はそれぞれ非対称な腕のようなものを形成していた。

左腕先端には、色合いからはとてもそうは思えないが、花のような形状の器官がついており、花の中心からは細長い触手が垂れ下がっている。

中央の幹の上には、細長い棘が髪のように生えた頭。

馬のように細長い頭には白い目のような器官と口しかない。顔の先についた口は上顎下顎の区別のない円形で、三角形の歯が均等に並んでいる。サンドワームの口のように、と聞くと想像しやすいだろう。

そしてその口の中から、やはり細長い触手が伸びていて——これが霧江の背中に突き刺さったものだった。

（なんでこんなのが此处にいるのよ！？）

霧江は心の中で叫びながら、ベルト、ホルスターに収まっているクロスガンを引き抜——。

「……え」

抜こうとしたそれは、あっさりと霧江の手から滑り落ちた。

勿論、単にドジを踏んだというわけではない。

（指が——！）

震えた。

指先に、力が入らない。

否、それは指先だけではなかった。

全身から、力が抜け落ちる感覚――！

（しまっ――毒！）

ミスがあつたとすれば、それは最初のあの時。

真琴を庇うのではなく、突き飛ばすなりして、自分も触手を回避しておかなければならなかった。

しかし吸血鬼の再生能力を持つ彼女は、咄嗟に自信を捨て、より確実な方を選んでしまったのだ。

それが仇となった。

触手から打ち込まれた毒が、彼女の全身を蝕む。

「――っ！」

痺れは全身に及んでいる。舌すら満足に動かせず、声をあげることも出来なかった。

力が完全に抜け、膝を突く。すかさず、トリフィドは左腕と口から伸ばした二本の触手で、霧江の体を絡め取った。

（――まずい！）

触手はまず彼女の足を狙う。地面についた膝の上、太腿の辺りから、片足ずつそれぞれ蛇のように巻きつき、下腹部で二本の触手が合流、それぞれ絡み合いながら霧江の胴を、腕を、首を締め付け、そして空中に持ち上げた。

首をきつく締められ、霧江の呼吸が止められる。

「――！！！！」

必死に声を張り上げようとするが、うまく音が出ない。

それをあざ笑うかのように、トリフィドはカラカラカラカラと空洞の木を叩くような鳴き声を上げた。

視界が白に支配され、意識が遠のきかける。

彼女は不死王だ。
ノーフライキング

何をされても、どんな目にあっても、絶対に死ぬことはない。

たとえ全身を粉々にされても、残った破片から再生する事が出来る。それは、髪の毛一本さえ残っていれば、という次元ではない。

例えば素粒子レベルで粉々になった場合でも、彼女は再生してしまう。鬼灯霧江という個体を構成する原子一つ一つが破壊されたところで、その破壊された原子ごと復元してしまう。

それが不死王だ。不死王が死ぬ絶対条件は唯一無二。他の吸血鬼に血を吸われ、その座を奪われること、この一点のみ。

しかし、逆に言ってしまうえば、死なないだけ、なのだ。

例えば食われた場合、相手の消化力にもよるが、その体は繰り返して胃袋の中で消化され続け、そして再生し続けることになる。

勿論痛覚はあるので、耐え難い苦痛を、助けが来るか、異物として吐き出されるまで、延々と繰り返すことになる。

無論、力を封印してさえないなければこの限りではない。当然再生力が相手の消化力を上回り、容易に脱出できるだろう。

だが、今の彼女は、変身していない状態ではBランクの、ごく一般的な妖魔にすぎない。死ななくても、再生力そのものはガタ落ちしている。

つまり彼女にとって、生きるか死ぬかではなく、助かるか発狂するかかの二択だった。

トリフィドが、触手を引き寄せながら、その口をあける。

消化力が弱ければさほど苦痛を繰り返す前に脱出もできるだろう。それに賭けるしかないが……。

丸い口は、彼女を一呑みにするには、まるで足りない。

勿論、その為の歯なのだろう。

霧江は残った意識で抵抗を試みるが、駄目だった。全身の筋肉が呆けているように、まるで言うことを聞かない。

彼女は意識が完全に飛んでいないことを恨んだ。

あの口に咀嚼される痛みはどれほどのものか、想像もしたくない。

トリフィドは頭から齧ろうと、その丸い口を更に大きく開けた。

第十話 天壤島のSOS!【中編】

—猫少女の奮闘—

ばちん——。

薄れた意識の中、霧江を呼び覚ますように、鋭い音が轟く。

「霧江ちゃんから離れろ——化物!」

ばちん、ばちん。

この声と、繰り返される破裂音には聞きおぼえがある。

声は紛れもなく、先程逃げた筈の羽月真琴のもの。そしてこの軽い銃声は、彼女の持つクロス・ガンのものだ。それも、最近つけられたばかりの攻撃モード、魔力式ショックガン。

逃げずに戻ってきた羽月真琴が、先程落とした霧江の銃を拾って、トリフィドを撃っているのだ。

(はづき——さ)

銃撃のお陰で触手が緩み、彼女の体は地に落ちる。

しかし、そこまでだった。霧江の視界はいまだ白いまま、体も動かない。

(私はいいいから——どうせ死なないから——はやく逃げて!)

僅かに残った意識の中で叫ぶ。

しかし声には出ない。声に出せない。

それでもこの願いは届いてほしい、そう思ったが、それも裏切られる。

「さあ、今のうちよ!」

体が持ち上がる。

彼女はその小さな体に力を込めて霧江を持ちあげようとしているのだ。

トリフィドも魔法生物だ。魔力式ショックガンを何発も撃ちこまれば活動は鈍る。

しかし、それだけだ。ショックガンに殺傷力はない。ショックガンに出来るのは魔力的な衝撃を与え、体内の魔力の流れを乱すだけで、確かにそれで相手の動きは鈍るが、それだけで倒せはしない。霧江ほどの魔力があれば別だが、あくまで補助武装なのだ。

どの程度鈍ったかは分からないが、それでもこの状況で接近し、彼女を助けるなんていう行為は危険すぎる。

しかし彼女は、羽月真琴は、どうやらやってのけた。

小さな体のどこにそんな力があったのか、いやここは、流石半獣人、と言うべきか。

霧江を抱えて逃げ去る程度の体力は持っていたらしい。彼女らは公園を離れ、街の中を進み、狭い路地裏の中へ身を隠した。

「ここまでくれば――」

真琴はそつと外の様子を窺っているようだ。

どうやら、追ってくる様子はないと判断したようで、霧江の側へ戻ってくる。

「……どう……して……」

何処かの家の外壁にもたれる様にして座らされている霧江。

少しずつ毒が抜けてきているのか、ようやく声を出せた。

「逃げてって……言った……のに」

そう言って、言った後で、霧江は自嘲的な気分になった。

かすれて、何とも頼りない、情けない声なんだろう。

身内がこんなに弱っているというのに、助けようとしらない人間な
ど兄が選ぶはずはなかった。

本当に、情けない話だと霧江は思う。

結局彼女を危険な目にあわせたのは、己の弱さなのだ。

「大丈夫よ、私、結構やるんだから」

そんな霧江の心を察したのかは分からないが、彼女はそう言った。
慢心ともとれる発言は、彼女の行動についての責任、その所在へ
の明確な宣言だ。

危険に飛び込んだのは、霧江を助けなければならなかったからで
はなく、霧江を助けられる自信があったから。そう言つてのけたの
だ。この女性^{ヒト}は。

未だ視力の回復しない霧江には見えなかったが、きっと、彼女は
強く笑っているに違いなかった。

「警察には連絡してあるわ。とにかく隠れて、彼らの到着を待つて
――」

真琴はもう一度、外の様子を窺う。窺って、息をのむ。

みちりみちりみちり。

水気を含んだ足音。

カラカラカラカラ。

気味の悪い鳴き声。

それは、霧江の耳にもはっきりと聞こえた。
しかも、だんだんと近づいてくる。

吸血鬼の霧江も、猫の半獣人の真琴も、普通の人間にはない聴覚を持っている。

此処からでは見えなくとも、二人とも、その音ははっきりと聞き取れた。

「羽月さん……これ」

霧江は、ゆっくりと真琴に向かって腕を上げる。
少しずつ言うことを聞いてくれるようになった体。
彼女のその手には、真っ赤な十字架があった。

「警察が来るまで……隠れられるかわからない……また、滑っちゃったらやだから、つけて」

真琴は頷いて、クロスガンの銃口に、そのブラッディクロスをセツトする。

銃身のカバーを前にスライド。十字架は、そのカバーにすっきり覆われる。

《Standby》

電子音。クロス・ガンは攻撃モードから封印解除モードへ。
後は上に掲げ、引き金を引くだけだ。

霧江はもう一度彼女に向かって手を伸ばす。

「ありがとう、あとは、任せて」

真琴はそんな彼女に、クロス・ガンを――

「……だめよ」

――渡さなかった。

「え……?」

見上げる霧江。

視界は徐々に戻ってきている。

映るのは、濁ったレンズ越しに見るような、真琴のぼやけた輪郭。

――笑っている。

良く見えないが、そうだと確信できた。

「無茶はダメよ、霧江ちゃん。貴方はまだ戦える状態じゃない」

「でも――!」

「霧江ちゃん」

遮るように、しかし優しく、彼女は言葉を紡ぐ。

「先生は、貴方をそんな風にボロボロにするために、ヒーローにしたんじゃないと思うの。貴方ばかりが無理をする必要はない」

「じゃあ、誰が――」

――誰が私の代わりをするのか。

「……」

彼女が裏路地の出口に向かって振り返る。

その背中とは、とても小さくて、しかしとても心強かった。

ついさっきまで、部屋でその弱さを見せていた人と同一人物とは、とても思えなかった。

「私に、任せて」



使い方はわかっている。

羽月真琴は路地裏から飛び出し、音のする方へ一直線に駆けつけた。そして、車通りのない道路の真ん中を堂々と歩くソレを、見つめる。

公園から出たトリフィドは、緩慢な動きでこそあるものの、どうやらまっすぐに、彼女たちを追いかけてきたようだ。

すぐさま右手を、そこに握り締めたクロス・ガンを振りあげる真琴。

実を言えば、変身するのはこれが初めてではない。

クロス・ガン製作途中、零次に一度だけ、昼の研究室に招かれたことがある。

そこで行われた汎用性のテストで、一度同じものを装着した。

これを使用しての戦闘経験こそないが、怪我人や、そこらのド素人が扱うよりはいくらかましだろう。

「変身！」

気合の入った声と共に、引き金を引く。
空中に形成された赤い膜の円盤が降り、彼女の小さな体に纏わりついていた。

変身完了までは、数秒もかからない。

彼女の体は真っ赤なスーツと、ヘルメット、胸アーマー、籠手、脚甲等、要所の装甲に包まれる。

唯一、猫の半獣人である彼女が持つ特徴の一つである尻尾だけがお尻の、その付け根の部分に丸い穴があき、外に出ていた。

更に言えば、もともと考慮されていない部分であるため、ヘルメット内でその猫耳は押しつぶされてしまっている。

しかし、その程度気になっている余裕もなかった。

敵はもう、眼前まで迫っている。

「はああああああっ！！」

裂帛の気合と共に、真琴は駆ける。

体の軽さに、改めてこのスーツの性能を思い知った。

（凄いの作ったな……昼間の子も、先生も）

伸ばされてくる触手は、矢弓の如き勢いだったが、今の彼女には止まって見えた。

霧江のブラッディクロスを装着したことにより、身体能力、感覚機能、魔力がすべて吸血鬼並みに向上している。

最も、元の能力が霧江と比べて今ひとつなので、本来のヒーロー、ブラッドガール並みの力が出せるわけでもないが、今はそれで十分だった。

伸びてくる二本の触手を避け、あるいは掴み、引き裂く。

瞬く間に至近距離まで接近。

その首に向け手刀を叩きこんだ。

「■■■■——！！」

人の言語では意味を読み取れぬ叫びを上げるトリフィド。
攻撃は効いている。

しかし真琴は地面を蹴り、背後に跳躍して距離を離れた。

（打撃は短期決着には向かない……霧江ちゃんほど怪力を発揮できるわけじゃないから仕方ないとはいえ……）

叫びを上げたが、トリフィドは絶命には至らなかった。

このまま同じことを繰り返せば倒せるだろうが——真琴は衰弱した霧江のを思い浮かべる。

不意をつかれ、毒針を突きたてられた瞬間こちらの敗北が確定する。

戦闘を長引かせるのは得策ではない。少しでも早く、決着をつけないければならなかった。

（そういえば、魔力も向上してるのよね）

ある考えがよぎり、真琴は口元にふっ、と笑みを浮かべた。

「やってみますか……！」

再び高速で伸びてくる触手を、今度は二本ともその手で、しっかりと掴む。

逃がさないために。

「いでよ炎神！ 我が敵を その力を以って 灰と散るまで火炎魔法・対象指定・術式終点…対象殲滅・燃やせ威力増加・燃やせ威力増加・燃やせ威力増加・燃やせ威力増加・燃やせ威力増加・燃やせ威力増加——『灼熱の紅炎』！！」

轟音。

同時、巨大な火柱が上がり、トリフィドを一瞬のうちに飲み込む。炎の魔法に、補助魔法『威力増加』六つを重ねがけ——通常の魔法使いならば使った瞬間自らの魔力が枯渇しかねないその呪文。発現した威力は凄まじく、トリフィドは一瞬にして灰と化した。

「————っし」

肺腑に溜まった息を一気に吐き出す真琴。

終わった。

警察を待つまでもなかった。

——否、霧江が万全な状態であればもっと早くに決着をつけられたはずだ。そう、霧江は自分を庇って怪我をしたのだから、その代わりを買って出るのは当然。

勿論これでチャラとはいかない。後で霧江ちゃんに何かしてあげないと——

「……え？」

瞬間、彼女の思考は停止した。

研ぎ澄まされた感覚で、察知したそれを、振り返る。

「う、そ……？」

信じられないが——信じたくはないが——。
まだ、終わってはいなかった。

むしろ、始まったばかりだった。
それに、否応なく気付かされた。

トリフィドは、一匹ではなかったのだ。
二匹、三匹でも済まない。

彼女の感覚は——視覚は、聴覚は、嗅覚は。
そのあたり一帯を埋め尽くしかねないほどの、迫りくる膨大な数の
トリフィドの、臭いを、音を、姿を。
捉えてしまったのだから。

果として大失策だった。

真琴は悔やむ。

相手が一匹ではないとわかっていればもっと別の策をとっていたはずだ。

早く、戻らなければならない。この群れの中を突っ切っても。

——いや、違う。

違う。そうではない。そんなことをすれば霧江は背負ってしまう。彼女は死なない。少なくとも死ぬことはないのだから、この場で優先すべきことは彼女よりも市民だ。

これは自分のミスだ。

最初のトリフィドから自分を庇わしてしまったことがそもそもの失敗。

しかし、彼女はそう思わないだろう。

あくまでも自分の所為だと、きっと背負い込む。

背負ってしまう。

なんたって、あの人の妹なのだから。

だから、この場で優先すべきは一つ。彼女を助けることではない。ヒーローとして、成すべきことを為さなくては。

それが、彼女を庇わしてしまった自分が取らなければならない責任だ。

「おおおおおおおおおっ！」

咆哮。

羽月真琴は獣のように叫び、正面から群れへ。

突っ切るためではない。倒すため。

倒して倒して、一人でも多くの人間を救わなければ。

「いでよ火炎魔法・炎神広域・破軍の力を此処に対象指定…敵全体・我は殲滅を望む者威力増加九連——『フレア炎神の
ブラスト鉄槌』——」

こういう戦闘で、『対象指定』の補助魔法は非常に便利だ。

複数を相手にし、広域に呪文を放ちたいときでも、こうして対象を絞ることで関係ないものを巻き込まずに済む。

勿論デメリットもあり、これを使った場合威力は若干下がる為、その底上げのための補助呪文の併用がほぼ必須であり、そのおかげで場合によっては余計に魔力を消費することもある。

迸る爆炎。

余裕があつた魔力を一期に消費するほどの、掛け値なしの大魔法。巨大な炎はトリフィドの群れを飲み込み、焼きつくす。

（やった、かな？）

否。

駄目だ。

眼前の群れは確かに消滅したが、それだけでは終わらなかった。地面に広がるトリフィドの灰。それを踏みつけるようにして、新たな群れが押し寄せてくる。

「嘘でしょ——！？」

スーツで底上げされたとはいえ、彼女の本来の魔力容量はそう多くない。

これ以上の乱発は危険。

ならば、あとに残るすべてを、素手で引き裂く以外にはない。

絶望的な状況だった。

それでも、諦めるわけにはいかない。

街のヒーローの代役を、自分で買って出たのだから。

真琴は拳を握る。

その時。

「どるあああああああああああああああああああああ
！！！！！！」

野太い声での咆哮。

エンジン音と、タイヤが地面の上で高速回転し疾走する音。

それはトリフィドの群れの向こう側から聞こえてきた。

群の後方、なぎ倒され、つぶされてゆく悪魔の木々。

それは、群のなかほどで、停止する。

それは、一見すると巨大な鉄の塊だった。

マイクロバスをそのまま真黒な鉄板で覆ったような、無骨な車両。

警察の装甲車——特型警備車だった。

それも、特殊部隊。

対犯罪妖魔特殊急襲部隊——通称A・C・S・A・T

「撃て撃て撃てエーッ！！！！」

左右に三つずつ開いた銃眼から、銃身がつきだされ、発砲を開始する。

ただの銃ではない。水撃銃だ。

圧縮した水を打ち出す銃。超強力な水鉄砲と言えはわかりやすいか。

打ち出された水撃は、車周囲のトリフィドをあつという間に蹴散らしてゆく。

「よし！出る！急げ！まずは市民の安全を確保する！」
「了解！！」

ドアが開き、水撃銃を抱えたまま、特殊装甲に身を包んだACSA Tの隊員たちが飛び出してくる。

「ヒーロー！遅くなった！」

その中の一人、黒いヘルメットを被った隊員たちの中、唯一白いヘルメットをかぶった男が、真琴に向かって声をかけ、近づいてくる。

年は40代半ばといったところか。かなりの大男であり顎鬚をたくわえたその無骨な顔は、警察官というよりも軍人のようだった。

「む……君は、誰だ？」

数歩近づいて、男はすぐに怪訝な表情を浮かべた。

当然だろう。ACSA Tといえば霧江と一緒に仕事をするのが一番多い組織だ。

真琴と霧江では、まず身長が違いすぎる。

真琴は、よく見ても中学生ほどの身長しかない、かなり小柄な少女だった。

「そんな尻尾なんか生えていたか？」

しかし、引っかったのは別のところらしい。
考えてみれば二メートルはありそうなこの大男。彼にとって霧江

も真琴も大きさの印象はそう変わりないのかもしれない。

「私は代理です。本来の装着者は連中の毒で――今、危険な状況にあります」

「わかった」

男は一切の疑いも持たず、すぐに頷いた。

そして、自分の持っていた銃を真琴に差し出す。

「トリフィドは海水に弱い。水撃銃が有効だ。持って行け！市民は任せろ！」

「は、はいっ！」

助けに行け、ということらしい。

気押されながらも、真琴は水撃銃を受け取り、霧江を置いて来た路地裏へ向かって、走り出した。



「なんでこんなに霧が……」

霧江を残してきた場所に近づけば近づくほど、真琴の視界は白い靄で覆われた。

この白い闇は濃く、吸血鬼の視覚をもってしても、そのほとんどを遮られてしまった。

真琴は他の感覚を総動員し、探る。トリフィドの位置は、あの独特な音でわかるのだ。

「――そこっ！」

真琴は走る速度そのままに、引き金を引く。

水撃銃はちよつとしたマシンガンほどの大きさがある。

しかしスーツにより筋力が強化されている今、さしたる重さは感じなかった。

真琴は水撃銃を振りまわすように、行く手を阻むトリフィドへ向け撃ちまくる。

その効果は絶大で、トリフィドはいとも簡単に倒れていった。

いちいち大げさな魔法を使っていた自分が馬鹿らしくなるほどだ。

霧江を置いてきた路地へ向かう途中、最初にトリフィドと遭遇した公園を横切る。

そこで――。

「……な！」

彼女は見た。

その周囲だけ、ぽっかりと穴があいているように霧が晴れている。まるで、神話に出てくる世界樹のようだった。

巨大な樹だ。しかし、見てくれは酷く醜悪だ。

トリフィド同様、葉はなく、全身を覆った黄色い苔。

上部に生える職種はうねうねと蠢いて、まるで巨大なイソギンチャクを想起させた。

同じように根も無数にあり、一本一本がぐねる。

ふと見ると、その足元から、ボコ、ボコツと樹の枝のようなものが生えはじめる。

それらはあの気持ちの悪い音と、鳴き声を発しながら、地面から這い出てきた。

——トリフィドだった。

「まさか、これが親玉!？」

そして大量発生の原因か。

これはもはや魔法生物や、妖怪などといった類ではない。

それと呼ぶには怪物、という言葉が適切だろう。

全長30メートルはあろうかという巨体が、真っ白な闇の結界の中で蠢く。

「これを倒せば——！」

真琴は水撃銃を構える。

これ一つでどうにかなる相手ではないのはわかっている。

しかし、どうにかしなくてはこのまま無数のトリフィドが生まれ続けるだろう。

「やあっ!!！」

真琴は引き金を引いた。

生まれてくる新たなトリフィドと、巨大植物の根に向けて。

植物に弱点があるとするならまず根^コだ。

撃つ、撃つ、兎に角撃ちまくる。うねる根に向けて。

当たった部分が縮こまっているのが見える。

しかし、勿論簡単に倒させてはくれない。

「——!!！」

巨大樹の上部から、無数の触手。

その狙いは正確だ。

一本一本が明確な殺意を持って驟雨のごとく打ち付けてくる。

真琴は、とにかく走って避けるしかない。

降り注ぐ触手を躲す。躲す。躲しきれずに、水撃銃を撃ち落とされる。

「く——！」

彼女は公園の端まで追い込まれる。しかし、触手による攻撃の手は止んだ。

水撃銃を落としたことで、攻撃手段を失ったと判断されたのか。ならば、相手は相当に知能が高いのかもしれない。

水撃銃を落とした方向へ視線を向ける。落ちた銃は、無数の触手によって貫かれ破壊されているようだ。あれでは拾いに行っても無駄だろう。

真琴は心の中で、あの銃を託してくれた特殊部隊の隊長に謝った。

「……手詰まり、かな？」

真琴は唇を噛んだ。

ここは霧江の救出をやはり優先し、いったん退いて、ACSATと協力しながらアレを倒すのが確実な方法だろう。

しかし、そうは問屋がよろしくれそうにない。

あの気持ちの悪い足音が周囲から、響いてくる。

「まだ、こんなにいたなんて」

なぜあの巨大樹が追い詰めておきながら自分にとどめを刺さなかったのか。その理由がこれだろう。

つまりは、子供に狩りをさせたいのだ。

公園の内側から、外側から。霧の中から多数のトリフィドが現れ、彼女を取り囲む。

その数、およそ二十。

「……困ったな、死ぬわけにはいかないのに」

ここで自分が死んでも、やはり鬼灯霧江は傷つく。

背負わせたくはなかった。それには、何としてもこの状況を打開し、生き残る必要があった。

けれども、囲みを突き破って逃げるにせよ、跳躍して頭上を抜けていくにせよ、これだけの数のトリフィドを捨て置けない。

倒さなければ。この数を相手取るには魔法を使うしかない。自分の打撃が同じにくいのはわかっていし、手持ちのショットガンでも威力不足だろう。何より、この数の触手と毒針をいなしながら戦える自信は全く無い。

それに、出来るだけ派手な魔法を使えば、AC SATは気付くかもしれない。

（……これを見つけた瞬間に教えるべきだったな）

それをしなかったのは、彼女の判断ミスだ。その責任も、取らなければ。

しかし、先程までの大魔法の連発で、彼女の魔力は枯渇しつつある。この状態で魔法を使っても、おそらく死ぬだろう。

何をして待っているのは死。八方塞ならば。

「少しでも生き残る確率が高いほうに――！」

身をかがめ、10メートルほどの高さまで、一気に跳躍。

眼下の群れに向けて、右手を翳す。

「炎よ——！」

ラストスベル
最期の呪文、詠唱開始。

その刹那。

顕れよ 水神の
「召喚…対象指定…海水^{切り札！ その力を持って}形状指定…三叉槍・圧縮・硬質化・終点^{我が}に
敵を 全て滅せ
て爆散・高速落下——『水神の戦槍』！！！！！！！！」

真琴のすぐ下に、突如として巨大な水の槍が形成される。

それは落雷のごとき速さで落下し、眼下のトリフィドを全て撃ち滅ぼした。

「マコ———ッ！」

真横から、真琴の体に何かが飛びついてくる。

それも、吸血鬼の反射神経でも反応しきれない速度で。

しかし、それは危険なものではないと、彼女にはわかっていた。

見た目のイメージは悪魔。

ベースとなるスーツは黒く、手足を覆う脚甲、籠手は骨を連想させる白色で、デザインも外骨格のよう。

胸部のアーマーは、鋭い肋骨が外から覆っているようなデザイン。胸の中心には、真っ赤な球体が嵌め込まれている。

背中からは、真っ赤な、蝙蝠のような形をした翼。

その兜は、竜の頭蓋骨を模したような意匠が凝らされ、側頭部からは二本の角が、後方斜め上に向け真っ直ぐ生えている。

ヒーローを守るヒーロー。

スカイドラゴン。

またの名を

「――先生！」

鬼灯零次。

「ばかやろう」

零次は真琴を抱きかかえたまま、公園の地面に着地する。

「無茶すぎだ、ばか。心配したぞこの」

「ごめんなさい、先生。でも――」

「わかってるよ。よくやった」

そう言って、零次は真琴の体を下ろした。

「待ってろ。すぐに片付ける」

眼前には圧倒的な巨体。

しかし、彼は一切意に介さない。

「消えろ」

その一言だけで、全てが終わった。

天から降り注ぐ光。

もう一つの太陽。

浄化の光は、巨大樹をたちまちに溶かしていった。



「ち、失敗か」

白い霧が晴れてゆく中、男は、二人のヒーローの姿と、消えてゆく巨大樹を影から見ていた。

「仕方ないのう……次の手を考えるか」

ふう、と男は息を漏らす。

それは老人だった。

ナスのような頭をして、白衣に身を包んだ、奇妙な老人。
ドクター・エッグプラント。

「……次が、あると思ってんの？」

その後頭部に、銃口が突き付けられた。

「……見つけたか。成程中身も馬鹿にしたものではない」

突きつけられたのはクロス・ガンの銃口。

鬼灯霧江が、予備として渡されていたもう一つ。

「じゃが、このままみすみす捕まると――」

ばちん。

乾いた銃声と共に、男は崩れるようにして、うつ伏せに倒れた。

「悪党の話を聞いて逃げられるバカはいないわ。どうせ非殺傷。死なないんだから撃つにきまってんでしょ。おしゃべりは取調室で」

そう言っ、鬼灯霧江は白衣の老人の体を持ち上げた。

毒はもう、体からすっかり抜けている。

周囲には、いや、この島には、トリフィドの脅威はもうなかった。母体である巨大樹が死んだことで子であるトリフィドも力を失ったのだ。

「それにしても――」

霧江はふう、とため息をついた。

視線の先には、一組の男女――真琴と、零次がいた。

「すっかり仲直りしちゃってまあ……っていうか、公衆の面前でいちゃいちゃしすぎ」

呆れるように呟いて、霧江は気絶した男を抱えたまま、ゆっくりと彼らに近づいて行った。

第十二話 ある感情の芽生え。

「随分とまあ、無茶してくれたもんだ」

「ごめんね、先生」

第零区、天壤島魔導大学医学部付属病院。

清潔な白で統一された病室。その真ん中に置かれたベッドに、羽月真琴は体を横たえていた。

鬼灯零次はベッドの傍らに置かれた丸い椅子に座り、右手をのばして彼女のその愛らしい頬をそっと撫でおろす。

霧江のブラッディクロスは強力だが、その分使用した際の反動も大きい。霧江本人や恭也は、吸血鬼として回復力の高い頑丈な肉体を持つているので問題はないが、そうでなければ使用後、その全身は強い疲労感に襲われる。勿論真琴も半獣であるし、並みの人間以上には丈夫な体を持っていて、テストとしてこのスーツを装着したこともあったのだが、今日のように長時間の戦闘には——限界に近いほど魔力を消費していたこともあって——耐えられなかったようだ。

変身を解いた直後倒れてしまった彼女を、零次たちは慌てて病院まで運んできた。

「全く。間に合ったからよかったようなものの……巨大樹を見つけたとき、どうして一人で戦おうとしたんだ？」

撫でる手を顎の下に滑り込ませた後、零次はすつ、と彼女の顔から手を離した。

「それは……早くあれを何とかしないと、と思って……」

真琴はしゅんとして、彼女の猫耳はしな垂れる。

零次は小さく笑って、離れた手を今度は、彼女のその真っ赤な髪の毛の上に置いた。

「やっぱり君は、戦いにはそれほど向いてないのかもしれないな。そこで普段の君が出せていたらもっと冷静に対処できたはずだろうに」

「それは……」

首を僅かに振りあげ、反論したげな顔で零次を見据える真琴。

「できてたさ。君は俺の生徒の中でも特に優秀だから。でも戦いの場では一瞬の判断ミスが命取りになる。霧江のように不死身でないなら無茶も無理もすべきではない」

「……はい」

「ま、君の活躍のお陰で街の被害も最小限ですんだ。こんな大騒動なのに死人が出ていないのは驚くべきことだし、霧江も無事で、犯人も捕まえられた。減点対象は一人で巨大樹と戦おうとしたことだけか。お手柄だったぞ」

「あっ……」

零次は頭に置いた手を耳へ、耳の後ろをくすぐるように撫でながら頬へと手を滑らせ、猫をあやすようにあごの下へ。

そして気持ちよさそうに目を閉じた真琴の、あごの先を曲げた人差し指と親指でくいと持ち上げる。

「マコ……」

「せんせ……」

「あの、私もいるんですが」

どんどんピンク色に染まってゆく空気にいたたまれなくなった霧江は、とうとう声を上げた。

「……っ」

「おっと、すまん」

身がかがめ、真琴の顔へ顔を近づけつつあった零次は、すっと背筋を伸ばすようにして離れる。

対して真琴は顔をその赤毛のように真っ赤にして、体にかけられていた毛布を引っ張って顔を隠した。

「いや、まあ、いいんだけどね……外出てようか？」

瞼を半分とじた目で彼らをじとりと見据えながら、部屋の端に置いてあったその椅子から立ち上がる霧江。

「いや、その必要は……と、とにかくマコ。今日はゆっくり休め、な」

そう言って、零次も立ち上がった。

「え？ なに、帰るの？」

「ああ。長居しすぎてマコの体に障るとまずいし、色々やることもある」

「あ、せんせ。まって」

真琴は毛布の中から、手を伸ばし、零次の手を、正確には服の袖を掴む。

「ん？ どした」

「あの……松居さんのこと、勘違いしてごめんなさい」

そのことか、と零次は苦笑を浮かべ、もう一度彼女の頬へ手を伸ばした。

「いや、俺も悪かった。あいつのこと君にもっと早く紹介すべきだったんだ。考えてみれば連れ子みたいなものだし」

「じゃ、私の娘にもなるんですね」

「君よりデカイ娘だがね」

「ちっちゃい方が好きなんですよ？」

「君なら別にデカくてもよかったかな」

「もう、先生ったら」

笑い合う二人。再び広がる甘ったるい桃色の空気に、霧江はため息をついた。

「あのさ、そろそろ砂糖吐きそうなんだけど」

「おっと。悪い悪い。じゃあマコ、また明日な」

「……はい」

ちよつと残念そうな表情を浮かべる真琴に、黙って出ていくべきだったかな、と霧江はわずかな罪悪感を覚える。

それにしても、と椅子の横に置いた鞆を持ちあげる零次とベッドの上の真琴を交互に見て、霧江は思う。

吸血鬼である彼女は、異性に対する恋愛感情が希薄だ。

しかし、自分の兄と、将来姉になるかもしれない少女のやりとりを見ているうち、そのバカップルぶりに辟易する一方で、何か胸の中に込み上げてくるような不思議な感情の奔流があった。

それは嫉妬や、そういった負の方面の感情ではない。どこかあたたかくて、それでいて少しさびしいような、そんな感覚だった。

彼女に恋愛はわからない。わからないはずだが……

（もしかして今、『いいな』って思った？）

もし、今抱いた感情の正体が、？憧れ？なら――。

「まさか、ね」

霧江は二人に気付かれないように、小さくかぶりを振った。



病院を出て、そのすぐ前にあるバス停に腰を下ろしてから、霧江はおもむろに会話を切りだした。

「で、兄貴。例のナス頭博士なんだけど」

「ああ……ドクター・エッグプラントな。ちよつと昔、ずいぶんと恨みを買わせちゃった男だ」

零次は遠い目をしながら、病院を出る前に自販機で買ったコーヒのプルタブを開けた。

「俺がブラッディクロスによる変身システムを提案する前に、ここ
の警察相手に装甲幻獣アーマードというシステムを売り込もうとしていた男だ」
「アーマード？」

「簡単にいえば、召喚した幻獣と合体する特殊な魔法術式のことだな」

その言葉に、霧江は怪訝な表情を浮かべた。

何ともいえない、酷く荒唐無稽な話が聞こえた気がしたからだ。

「合体？　なにそれ生身でってこと？　危なくない？」

零次は頷いて答える。

「相当に危ない。人間向きのシステムだしな。肉体が極限まで鍛え上げられていて、かつ強靱な精神力を持った者でなければ扱えない。たとえ扱えても、幻獣との合体なんてものはそれだけでその体に危険が及ぶ。だが、それでも正式採用される一歩手前まで行った」

「……まじ？」

口をあんぐり開けて、眼をぱちくりとさせる霧江。

「大マジ。それくらいこの街の治安は危なくなりかけてるってことだ」

もしヒーローが、霧江が現れなければ警察官が文字通り命を削って戦うシステムが正式に採用されていたという。

もともと警官は死と隣り合わせともいえる職業だが――いや、だからこそ採用されそうになったのかもしれないが――霧江は何とも言えない複雑な感想を抱いた。

しかし、ふと気付いたようにコーヒ―を飲む零次を視る。

「……じゃあその危ないシステムが採用されなかった原因ってというのは」

霧江は両目を半分とし、呆れたような視線を零次に向けた。

「……お察しの通りだ」

目をそらしながら言う零次に、霧江ははーっ、と大きく溜息をついた。

「なんだよ！ ……いや多少やりすぎたとは思ってるけど。元々あれは欠陥だらけのシステムだったんだ！ それに、まさかこんな復讐してくるとは思わなかったし」

「本当。こんな街中を巻き込むようなやり方で復讐されるなんて、どんな酷いことしたのよ」

確かにブラッディクロスシステムの方が、装着者である霧江が絶対に死なない分安全といえる。しかし、決定寸前だったそのシステムを一気に追い込むほどに優秀かと問われれば、絶対にイエスとも言えない側面があるだろう。

例えば今夜のように、霧江が変身する前に無力化されればどうにもならなくなるというデメリットがある。勿論他の妖魔がいれば変わりに装着させることが出来るが、その妖魔に負担をかけてしまう上、いつも隣に誰かがいるとも限らないのだ。

装甲幻獣を蹴落すため、零次は裏で相当に手をまわしたに違いない。

「いや、そんなにたいしたことは……それに、あの博士の狙いはあくまでブラッディクロスを着た人間だった筈だ。現に街の人間は直接は襲われなかったようだし」

証言によればトリフィドは塀や壁を破壊し、家屋への侵入なども行ったが、その行動は基本的にずっと何かを探すように歩き回っていただけで、直接攻撃を加えたのは霧江と真琴。そして発砲してきた警官たちだけであったという。

「パニックによるけが人とか家壊された人は出たけどね」

「うっ……」

「私ら以外襲わなかったのにトリフィドは母体もろとも皆殺しだし」

「むっ……」

ばつが悪そうに、零次は舌唇を噛む。

その様子に、霧江はふっ、と小さく笑って彼の背中を軽く叩いた。

「冗談よ、悪いのはあの博士だし、トリフィドもともと人食いのクリーチャーだから、博士がある程度コントロールしてたにせよ、何かの拍子に街を埋め尽くして人を食いまくってたかもしれないし。まあ、いいんじゃない」

「そう、だな」

「それに――」

ふと、霧江はあることを思い出した。

この街に来た当初、霧江のヒーローとしての実力を疑問視する声が警察内から上がり、ヒーロー認定試験として、その時街を騒がせていた吸血鬼――志木恭也を倒すことを要求された。おそらく、霧江の実力を疑問視していたその時の警官とは、装甲幻獣を支持していた者達だろう。

つまり、装甲幻獣に最期のとどめを刺したのは霧江自身かもしれないのだ。

「――ま、欠陥だらけのシステムだって言うのなら、自業自得よ」

自分も相当に恨まれていると気付いた霧江はうんうん、と頷きながらそう言った。

それからしばらくするとバスが来て、二人は乗り込んだ。

彼らがドクター・エッグプラントの脱獄の報を聞くのは、この数日後のことであった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6592u/>

装着変身ブラッディクロス！

2011年11月13日16時24分発行